
カンピオーネ！
Campione XV
女神の息子
丈月 城
Illustration シコルスキー
スーパーダッシュ

スーパーダッシュ文庫
SUPER DASH

集英社

カンピオーネ！

XV 女神の息子

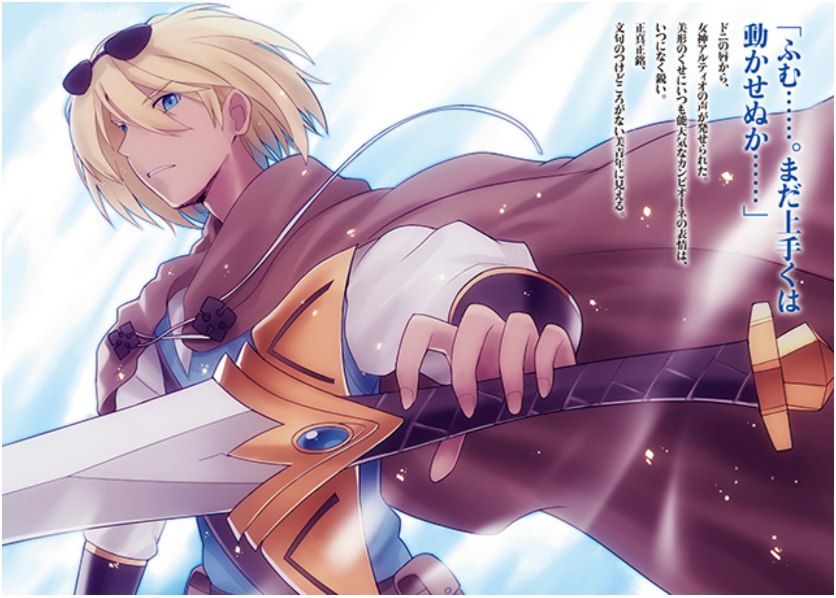
丈月　城

この本は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になる機種により、表示の差が認められることがあります。


丈月 城
Illustration
シコルスキー
カンピオーネ!
女神の息子
Campione
XV


アリス
ドニ
エリカ
アルティオ
アイーシャ
護堂
祐理


「ふむ……。まだ上手くは
動かせぬか……」
ドニの柄から、
女神アルティオの声が発せられた。
美形のくせにいつも能天気なカンピオーネの表情は、
いつになく鋭い。
正真正銘、
文句のつけどころがない美青年に見える。


「ふひゃあああああっ!?」
まず基本的に、アイーシャ夫人は裸だった。
一糸まとわぬ姿である。
すばらしい胸のふくらみも、
その桃色の先端もむき出しになっている。
そして、とっさに身につけたのだろう、
さっき護堂が木の枝にかけた生乾きのシャツを、
肩にひっかけていた。
そういう美しくも扇情的な格好なのである。

主要登場人物

草くさ薙なぎ護ご堂どう

　高校１年生。軍神ウルスラグナの権能を有するカンピオーネ。

エリカ・ブランデッリ

　《赤銅黒十字》の魔術師。自称、護堂の「愛人」。

万ま里り谷や祐ゆ理り

　霊視の力を持つ媛巫女。護堂の「正妻」と称される。

リリアナ・クラニチャール

　《青銅黒十字》の魔術師。護堂の「騎士」を自任する。

清せい秋しゅう院いん恵え那な

　当代随一とされる「太刀の媛巫女」。護堂の「剣」として侍る。

サルバトーレ・ドニ

　イタリア最強の騎士たる「剣の王」。

アイーシャ夫人

　妖しき洞穴の女王とうたわれる謎多きカンピオーネ。

アリス・ルイーズ・オブ・ナヴァール

　グリニッジ賢人議会前議長。白き姫。

ジョン・プルートー・スミス

　仮面の怪人にして『ロサンゼルスの守護聖人』。

ウルディン

　古代ガリアのカンピオーネ。

Contents

第１章　古代ガリアの神殺したち
第２章　コロニア・アグリッピナへの旅路
第３章　ガリアの地の女神
第４章　軍神アルトスと救世の神刀
第５章　千年の時を越えて
第６章　騒乱の女王
第７章　ありうべからざる戦い
終　章

イラスト / シコルスキー


丈月 城
Illustration
シコルスキー
カンピオーネ!
女神の息子
Campione XV

第１章　古代ガリアの神殺したち

1

「要するに、アイーシャ姐ねえさんの通つう廊ろうをもう一度開くのはむずかしいってことかい。あいかわらず手間をかけさせてくれる人だねえ……」

　慨がい嘆たんしたのは、聖ラファエロだった。

　その芸術的な剣さばきをルネッサンスの画聖ラファエロに喩たとえられる女騎士は、英文で綴つづられた書類の束をにらんでいる。ついさっき英国はグリニッジの賢人議会本部が『投とう函かん』の魔術で送ってきたものだ。

　そこには、アイーシャ夫人の恐るべき権けん能のうについて記してあった。

「月の満ち具合によっては、わたしたち魔女や妖精博士フエアリードクターの術で通廊の扉を開けられそうな予感もするのですが……それなり以上の実力者を何十人か集める必要があるでしょうね」

　相づちを打ってから、リリアナは憂うれい顔で夜空を見あげた。

　真冬の夜空にはほとんど雲もなく、三日月の光がよく冴さえている。

　草くさ薙なぎ護ご堂どう、エリカ・ブランデッリ、清せい秋しゅう院いん恵え那な、そしてサルバトーレ・ドニが『アイーシャ夫人の通廊』に呑のみ込まれ、行方ゆくえ不明となった日の夜である。

「だとしたら、準備にだいぶ時間がかかりそうですね……」

　日本の媛ひめ巫み女こ・万ま里り谷や祐ゆ理りも憂いで美しい面おも差ざしを曇くもらせる。

　彼女たちがいるのはイタリア・トスカーナ州はカゼンティーノ地方の古城ホテル、その庭園である。昼間、神獣デイノニクスとの戦場となった場所だ。

　仲間の言葉にリリアナはうなずき、ため息をついた。

「成功の見込みも決して高くはないだろう。あまり当てにできる対応策ではないと思う」

　彼女たちはホテルの庭先でウッドチェアにすわり、丸い卓をかこんでいた。

　全員の手元に賢人議会からの書類がある。事の元げん凶きようはアイーシャ夫人の権能であろうと聞いて、リリアナがグリニッジに連絡を入れたのだ。

「議会のことだから、アイーシャ夫人についても公開している以上の情報を握っているはずだと踏んで、要請してみたら……正解だったな」

　つぶやきながら、リリアナは書類に目を落とす。

　過去と異界への扉を開く『妖精境の通廊Beyond the Timeless Horizon』。癒いやしと死をもたらす『生か死かLive or Die』。魅了の権能『女王の呪縛Charm and Curse』。さらに『幸いなる聖者への恩寵Grand Luck』、『不思議の国の剣Jabberwock Slayer』……。

　賢人議会が把握しているだけでも、恐るべき権能の数々だった。

「にしても、あの辛しん気きくさい連中がよく虎の子の研究報告を見せてくれたもんだ。これ、準一等会員以上のじじいどもじゃないと閲えつ覧らんできない文書だろ？」

「あちらの元議長と御縁があったおかげです」

　感心した体ていの聖ラファエロに答えてから、リリアナは気づい

た。

　隣にすわる祐理も同じ書類を読んでいたのだが、なぜかそわそわしている。気になることでもあるのか、ときどき顔をあげて、きょろきょろしていた。

「どうした万里谷祐理？　何か気になることでも？」

「あ、いえ。こちらを見ていたら、不思議な気分になってきたもので……」

　声をかけたら、祐理がハッとして答えた。

「この書類がきっかけで、思いがけないことが起こりそうな気がしたんです。理由はちっともわからないのですが」

　異様なほどの霊視力を誇る媛巫女の〝なんとなく〟。これを無視できないことは、リリアナも承知している。何が起きるのか――身がまえた瞬間、すぐにわかった。

　声が聞こえたからだ。ふたりの人物が庭園にやってきたらしい。

「ねえパオロ。あなたってば、わたしとの再会をよろこんでないように見えるわ。気のせいならよいのだけど、もしかして正解かしら？」

「まさか。とんでもないことです、プリンセス」

　やや憮ぶ然ぜんとした貴婦人の声に、男らしい実直な美声がうやうやしく答える。

「あなたとの再会が私に――あなたの騎士、パオロ・ブランデッリに幸福以外の何かをもたらすことなど、あるわけがない。しかし、私はこうも思うのです」

　エリカの叔お父じにふさわしい凝こった言いまわしを流麗に紡つむぎながらも、〝騎士のなかの騎士〟はやや苦い口ぶりで意見した。

「高貴なる姫君に、より慎重かつ節度ある行動を期待する……。それは決して、騎士にあるまじき行為ではなかろうと」

「まあ。わたしをはしたない暴れん坊のように言うのね、パオロは」

「では単刀直入に。姫、あなたが自みずからいらっしゃる必要はなかったのでは？」

「それこそ世よ迷まい言ごとだわ！　この危機的状況、毎度おなじみ世界の危機に際して、座して見すごすことなんて、わたしにはできません。無関心こそが人の世にはびこる最大の悪徳であると、あなたは認識し直すべきね」

「無用な好奇心もまた、人の世をかき乱す元凶のひとつと言えるでしょう」

「……パオロってば、あいかわらず頭が硬いわ」

「お誉ほめの言葉と受け取らせていただきます、プリンセス・アリス」

　麗うるわしきプラチナブロンドの姫君と、ダヴィデ像のように逞たくましいナイトがやってくる。

　プリンセス・アリスはライトグレーの毛皮のコートに黒のスキニーパンツ、青いブーツという装よそおいで、パオロ・ブランデッリはダークグレーの背広姿だった。ただし上着は脱いで左手に持ち、襟えり元もとのネクタイはゆるめていたが。

　声を聞いた時点で、来訪者の高貴な素す性じようはとっくに察していた。

　リリアナはもちろん、祐理もすでにイスから立ちあがり、一礼して挨あい拶さつする。

「おひさしぶりね、ふたりとも。うちの議会にリリアナから問い合わせがあったと聞いて、びっくりしたわ。しかもアイーシャ夫人について！」

　その呼びかけは気さくだが、貴婦人らしい優美さに満ちている。

　リリアナは自分たちのうかつさを悟った。賢人議会に連絡を取った時点で、彼女の登場を予測して然しかるべきだったのだ。

「今、三人ものカンピオーネが過去の時代を旅していて、いつ歴史の改変が起きてもおかしくない……。かなりゆゆしき事態よね」

　まさに『世界存亡の危機を憂える、高貴かつ聡そう明めいな姫君』の顔でつぶやいている。

　もっとも、だからといってプリンセス・アリスが事件の最前線に赴おもむくべき理由は何ひとつない。にもかかわらず顔を出すあたりが、この姫の真しん骨こつ頂ちようであった。

「話には聞いてたけど、うわさどおりのお転てん婆ばだねえ」

　聖ラファエロがあきれたようにつぶやいた。

　古参のカンピオーネたちと肩を並べて戦い、時に敵対することさえあった武ぶ勲くんの持ち主だからこそ、許される振る舞いであった。

　そんな女じよ傑けつの反応に、プリンセス・アリスはくすりと微笑ほほえむ。

「わたしも聖ラファエロさまの御高名はかねてよりうかがっておりますわ。そのうわさ、そちらのナイトさまが吹ふい聴ちようしたのかもしれませんが……わたし、これでもきちんとした理由があって、こちらに参ったのです」

　多くの美質といくつかの困った面を持つ姫君は、リリアナと祐理に目を向けた。

「あなたたち、草薙さまがいる時代の様子を視みることができたのですって？」

「は、はい、一応は」

　プリンセスからの問いかけに、祐理があわてて答えた。

「ただ、通廊の向こう側がどういった様子かを視ることができただけで……いつの時代のどこの国かまではさっぱりわかりません」

「中世よりもさらに前の時代だとは思うのですが……」

　リリアナも口添えする。あのとき草薙護堂は砦とりでのような場

所で戦っていた。あれはおそらく、中世以前の築城技術によって建造された施設のはずだ。

「姫様。私、なんとしても護堂さんたちのあとを追いかけるつもりです」

　祐理が凜りんと表情を引き締め、プリンセスに訴えた。

「もしアイーシャ夫人の通廊を開ける方法をご存じでしたら、是非ご教示いただきたいと思います。どうか——」

「うーん……あの方の通廊を第三者が強引に開けた例、実はあるのだけど」

　日本の媛巫女に深々と頭を下げられて、アリスは困り顔になった。

「あれをくぐって過去に旅しても、好きな時間に出られないから意味がないのよね。たとえば、通廊の先が西暦一〇〇〇年のロンドンにつながっていたとするでしょう？　でも、その年の何月に出るかはまったくの運らしいから……」

「そうだったのですか⁉」

「それにそういう不用意な時渡りを重ねて、その時代に何度も歴史の改変が生じたら……修正がかなりややこしくなるそうなの。試さない方がいいと思うわ」

「歴史の改変……それに修正、ですか？」

　リリアナが聞きとがめると、姫君はくすりと微笑した。

「実はそのあたりの問題にくわしい御方が、あなたたちとお会いになりたいそうよ」

　いきなり言われて、リリアナは祐理と共にとまどいを隠せなかったのだが。

　続く姫君の言葉がそれを忘れさせてくれた。

「その方が待っている先では、いろいろむずかしい事態が待っているはずだけど……草薙さまたちを救い出すつもりなら、いちばんの

近道になるかもしれないのよね」

　リリアナは即座に決心をかためた。祐理ともうなずき合う。

　控えめな日本の媛巫女も、躊ちゆう躇ちよなく旅立ちを決意したことが容易に見て取れた。

2

　西暦でいえば四一〇年の手前頃、五世紀初頭ではないか——。

　草くさ薙なぎ護ご堂どうは今、そのあたりの年代にいるらしい。場所は西ローマ帝国領のガリア管区、しかも東の果てだった。

「思えば遠くに来たもんだ、なんてレベルじゃないよなあ……」

　しみじみとつぶやきながら眺めるのは、雄ゆう渾こんな大河である。

　護堂はライン川の岸辺に立っていた。二〇〇メートルもの川幅を越えて対岸に進めば、東の蛮ばん地ちゲルマニア。剽ひよう悍かんな騎馬の民たみ・フン族の勢力範囲だ。

　向こう岸は開けた草地で、その遥はるか先に鬱うつ蒼そうと茂る森を見ることができた。

「二一世紀だと、このあたりはドイツ・フランスとの国境近くなのか……」

　護堂たちが住まいとする都市は、アウグスタ・ラウリカ市。

　二一世紀ではスイス領で、バーゼルという都市の近郊だとエリカ・ブランデッリは語っていた。北へと流れるライン川に沿って進めば、ドイツとフランスの境目に位置する都市として有名なストラスブール。さらに北上すればケルン——いや。

　それらは現代ヨーロッパでの都市名だった。

　五世紀ガリアではストラスブールはアルゲントラテ、ケルンはコ

ロニア・アグリッピナだという。ローマ式の舌を噛かみそうな名前なのだ。

　そして、コロニア・アグリッピナには〝あの男〟がいる……。

「ここにいたのね、護堂！」

「探したよ、王様！」

　砦とりでの方から、ふたりの仲間がやってくる。

　エリカと清せい秋しゅう院いん恵え那なだった。どちらも馬に乗り、この時代の服装をしている。

　上はトゥニカというＴシャツに似た簡素な衣ころも。下は細身のズボンで、腰のあたりには短いスカート風の布を巻いて、女子らしさを演出していた。

「よう」

　護堂は手を上げて、エリカと恵那に応こたえた。

　アウグスタ・ラウリカ市街から二キロほど離れた位置に、ローマ軍の砦はある。

　今、護堂がいるのはその中間点くらいだ。移動手段はふたりの女子と同じ、すぐそばで川岸の草を食はんでいる馬だった。古代ガリアで暮らすうちに、ひとりで乗りまわせるようになってきたのだ。

「何かあったのか？　ウルディンのやつがまた来たとか？」

　フン族の神殺しと死闘を繰りひろげたのは、四日前のことだった。

　そして、激戦の末に手打ちとなった直後、あの報しらせが届いたのだ。フランク族をひきいる戦士サルバトーレ・ドニがコロニア・アグリッピナを占せん拠きよしたという……。

「それとも、ドニのことで新しいニュースでも？」

「うーん……。それに関係することではあるのかなあ」

「この件を解決しなくちゃいけないって、アイーシャ夫人がおっ

しゃっていたらしいの」

　恵那がぼやくようにつぶやき、エリカは肩をすくめてみせる。

　ふたりを乗せた馬が近づいてくるのを眺めながら、護堂はため息をついた。

　アイーシャ夫人がやる気を出しているらしい。彼女には悪いが、暗あん澹たんたる未来予想が次々とわき上がってくる。

「何をするつもりか、あの人に訊きかなきゃダメそうだな……。砦の方にいるのか？」

「いいえ。一時間くらい前にお帰りになられたわ」

「兵士のおっちゃんたちが馬車を出して、うちに送っていったよ」

　そうかと護堂はうなずき、愛馬へ歩みよった。

　現代のサラブレッドと比べたら、古代の馬は総じて小こ柄がらである。護堂は首の根元あたりに手をかけ、さっと跳びあがって鞍くらの上にまたがった。

　はじめは苦労した動作にも、だんだんと慣れつつあった。

「じゃあ、とりあえず教会の方に顔を出してみるか」

　これが二一世紀なら、携帯電話ひとつで連絡を取り合える。

　が、古代ガリアで同じ真ま似ねはできない。アイーシャ夫人の住まいである市内の教会を訪ねることにして、護堂は馬をぱかぱかと歩かせはじめた。

　うしろにエリカと恵那の馬が続く。時速にすれば七～八キロ程度だろう。

　馬といえども、駆け足ばかりさせてはすぐに疲れてしまう。実のところ、移動手段としては自転車の方が遥はるかに簡便で高速なのだ。

　もっとも、古代世界においても文明の恩恵は多々ある。

　護堂たちの馬が踏みしめる道はその代表だ。砂じゃ利りや石を敷

きつめて、きちんと整備されている街道だった。

　ローマ帝国の領内には、血管のごとく街道網が張りめぐらされている。

　そして、アウグスタ・ラウリカ市は典型的な帝国の植民市。上下水道、公衆浴場、円形闘技場などを完備する。数千世帯の家々が立ちならぶ市街はなかなかの壮観で、『未開の地』というにはあまりに発展しすぎている。

　そんな市内の大通りを、護堂たちは馬でゆっくりと進んでいった。

「……ん？」

　護堂は首をかしげた。視線を感じたのだ。それも大勢の人々の。

　馬上から周囲を見まわせば、大通りはラウリカの市民たちでにぎわっていた。

　もちろん二一世紀の都心などとくらべれば、せいぜい〝商店街の人だかり〟程度のにぎわいである。が、それでも一〇〇人近い人々がいた。

　しかも、彼らはひとりの例外もなく、草薙護堂に注目していた。

　その瞳ひとみに宿るのは好奇心ではなく、むしろ『畏い怖ふないし恐怖』であった。

「…………」

　奇妙に思いながらも、護堂は馬を進ませる。

　この大通りは現代の車道とはちがう。馬・馬車・牛・人などがゆったりしたペースで歩を進める共同スペースだ。だというのに人々は黙然と歩みを止め、草薙護堂に畏怖のまなざしを向けながら、二一世紀の日本人が通りすぎるのを待っていた。

　行く手をさえぎるものは何もない。

　護堂はエリカと恵那をひきつれて、悠ゆう々ゆうと通りを進んでいく。

「……どういうことだよ、これ？」

「そりゃ王様、ウルディンさん相手にあれだけ派手に戦ったもん」

「みんな、とっくに承知しているのよ。魔王ウルディンとならぶ強大な戦士がこの街にいて、いずれ彼こそが自分たちの支配者になることを」

「支配者!?」

　うしろについてくる恵那とエリカが口々に言ったので、馬上の護堂は仰ぎよう天てんした。

「そんなものになるつもり、俺にはひとかけらもないぞ！」

「最も力のある軍人が権力を握り、国を奪う。それがこの時代のローマ帝国だもの。もちろん例外もいたけど、そういう人は猜さい疑ぎ心しんをつのらせた皇帝に死を賜たまわったりもするわね」

「いかにも乱世って感じだよねえ」

　エリカは脱力気味に語り、恵那はうんうんとうなずいている。

　後味の悪い歴史語りに護堂は渋しぶい顔をした。もっとも、厄やつ介かいな風評のおかげで馬での移動は大いにはかどった。日本人である護堂と恵那は東洋系のフン族とよく似ており、白人ばかりのラウリカ市では目立つのだ。

　程なくキリスト教の教会前に到着した。

　この当時、異教として弾圧される〝冬の時代〟はすでに終わり、キリスト教はローマ帝国の国教となっていた。ガリアのような属州の植民市にも教会があるほどだった。

　三人は教会の外に馬をつなぐと、礼拝堂へ入った。

「まあ、草薙さん。それにエリカさんと恵那さんも。よくいらしてくださいました」

　出迎えてくれたのは、ほんわかした笑顔の美少女だった。

　きめ細かな褐かつ色しよくの肌につややかな黒髪。身にまとうの

はこの時代の白いワンピース。その上にやはり白の一枚布を肩に羽織ってから、腰に巻きつけている。

　一七歳前後にしか見えない彼女こそがアイーシャ夫人。

　なんと一九世紀から齢よわいを重ねているという女カンピオーネであった。

「いらっしゃるとわかっていたら、お昼の用意でもしてお待ちしていたのに」

「どうかおかまいなく。ところでアイーシャさん」

　そういえば昼食時だったと気づいて、護堂は訊たずねた。

　義姉でもある旧世代のカンピオーネ・羅ら濠ごう教主はあれで料理の達人だ。もしかして、アイーシャ夫人にも同じ特技があるのだろうか？

「料理とかするの、お好きなんですか？」

「ふふっ、一応ひととおりはこなせるんですよ。ときどき火を入れすぎて焦こがしたり、野菜が切れていなかったりしますけど、全然ふつうに食べられますし。たくさん作ることに関してはちょっと自信もあるんです。今度、機会があったらごちそうしますね♪」

「……なるほど」

　つまり『下へ手た』と評すべき腕前であり、単に食材を多めに用意すれば誰でもたくさん作れるだろう、などと護堂は口にせず、慎重にうなずくにとどめた。

　夫人のつっこみどころの多さにも慣れてきたのだ。

「ねえアイーシャさん。軍団のおじさんたちに聞いたんだけどさ」

　なれなれしく声をかけたのは、もちろん恵那だった。気さくなアイーシャとは相性がいいのか、すっかり友人のような態度である。

「北の街を陥おとした王様に会いたがっていたって話、本当？　このことは自分が解決しなくちゃ——みたいに言ってたんだって？」

この市に駐ちゆう屯とんするローマ軍団兵から、恵那はうわさを聞いたという。

彼らはアイーシャ夫人への崇すう拝はいと賛さん美びを顔にも言葉にもあらわにして、興奮気味に語っていたはずだ。魅了の権けん能のうによって、夫人の虜とりこになっているからだ。

「あ、はい。たしかにそういうことを言いましたね」

「夫人。僭せん越えつながら申し上げますと……かなりむずかしいと思われます」

あっさり認めたアイーシャに、うやうやしくエリカが告げる。

いかに相手が〝いい人〟でも、魔王カンピオーネとの越えてはならない一線を堅けん持じするつもりなのだ。まあ、護堂に対しては奔ほん放ぽうもいいところだが……。

「サルバトーレ卿きようは剣と戦いのみを生きがいとされる強大な御方。しかも、あの方は今、フランク族をひきいる『王』でもいらっしゃいますから」

サルバトーレ・ドニ、コロニア・アグリッピナを陥かん落らくさせる。

四日前にもたらされた凶報だ。この古代ガリアで、ドニは勇猛なゲルマン人の一派・フランク族の大族長となっていた。しかも、何を思ったかローマ帝国の植民市をいきなり奪い取ってしまったのだとか。

今、コロニア・アグリッピナにはドニを慕したうフランク族が続々と集結中らしい。

「そこは覚悟の上です。でも、誰かがやらなければいけないことですから」

エリカの訴えにアイーシャ夫人は決然と答えた。

凜り々りしく顔を引きしめ、拳こぶしをぐっと握りしめて、さらに宣言する。

「わたくしも彼と同じ、未来から来たカンピオーネのひとり。この

時代をいたずらにかき乱すドニさんの横暴、見過ごすわけにはいきません！」

「「「…………」」」

　このとき、エリカと恵那は生あたたかな瞳ひとみで夫人を見つめていた。

　たぶん護堂と同じ感想を抱いたからだろう。義ぎ憤ふんに燃えるアイーシャ夫人に対して『この人はどうして、自分めがけてブーメランを投げているんだろう？』と。

　護堂はつい言ってしまった。

「過去をかき乱すことに関しては、アイーシャさんも割と同じ穴の住人ですよね？」

「え、ええと……まあ、そういう見解も成り立つだろうとは自覚しております……」

　夫人が急にしどろもどろになる。護堂は驚いた。

「自覚、あったんですか!?」

「それはまあ、さすがに……。ですから、そこが重要なんですっ」

「というと？」

「わたくしはほら、過去を旅することに慣れていますからっ。うっかり歴史の流れを変えそうなときもありますけど、そこは帳ちよう尻じりが合うようになっていますし。人助け以外では、できるだけ歴史に干かん渉しようしないようにしていますし！」

「例外事項がある時点で、もうダメだと思うんですよね……」

「そんなことはありません。この世界は草薙さんが考えている以上にやさしくできているんです。それに、愛と平和を尊とうとぶ乙女おとめの心はいつだって最強の武器ですから♪」

　夫人のご都合主義なコメントに、護堂はそっけなく相づちを打った。

「そうでしょうか？」

「はい。わたくしは何度もそういう場面に立ち会ってきましたから」

「つまり、それだけ歴史を改変してきた実績があると……」

「な、何のことでしょうっ。それよりですね、わたくしや草薙さんのような異分子が過去にまぎれているうえに、ドニさんのような好き放題やられる方がいらっしゃる現状は、あまり好ましくないとわたくしには思えます」

　アイーシャ夫人の考えが読めてきて、護堂はうなずいた。

　歴史の修正力について、教えてくれたのは夫人だった。だが、その力にも限界があることを彼女はひそかに承知しているのではないか。だから、修正力が限界を迎える前にドニの暴走を自みずから止めようとしている——。

　そう考えれば、つじつまが合う。護堂は訊きいてみた。

「でも、ドニのバカをどうやって止めるつもりなんですか？」

「そこは誠心誠意、真心を持ってお話しいたします。おまかせください、ふふっ」

　にっこり微笑ほほえむアイーシャ夫人の顔を、護堂は「……」と見つめた。

　今、目の前にあるのは人間の愛と善意を信じ切った笑顔なのかもしれない。そして、妙にパワフルな彼女なら、その非常識な人徳で無茶を通してしまうかもしれない。

　しかし今回、相手は超弩ど級のバカだ。

　本当なら、護堂こそが現地へ向かいたいところだった。そして、あの大バカ者の首根っこを押さえ、『バカもほどほどにしておけ、このバカ！』と怒鳴りつけてやるのだ。

　だが、即座に旅立てない理由もあった。

「とりあえず、すこし待ってもらえませんか？　ウルディンのとこ

ろに顔を出して、この街についての話をまとめてきますから」

　四日前の決闘のあと、ウルディンは本拠地の森へ帰っていったのだが。

　このアウグスタ・ラウリカ市を巡る抗争については、棚たな上あげとなったままだった。護堂が留守にしたところをあの男に襲われたら——。ありえない話ではない。

　講和か再戦か。前回うやむやのまま終わった点だ。

　そこをはっきりさせてから、ドニの件に向き合いたかった。

「それが終わったら、いっしょにコロニアなんとかへ行きましょう」

「はあ、草薙さんがそうおっしゃるのでしたら……」

　ひとまずアイーシャ夫人は納得してくれたのだが。

「でも、そこは別行動でもいいような気も……。わたくしがドニさん、草薙さんはウルディンさんのお相手をする感じで……」

　物騒なことをつぶやいている。護堂はこっそり目配せした。心得たもので、そばにいたエリカと恵那はかすかなうなずきを返してくれる。

　心配なのは、とにかくアイーシャ夫人の暴走だった。

　夫人から目を離さないようにしよう。エリカ・恵那も同じ気持ちのはずだ。一方、そんな思いも露つゆ知しらず、問題の女性は話題を急に変えた。

「あ、そうそう。ドニさんといえば、面白いお話があるんですよ」

「あのバカのことで？」

「はい。輝ける剣を持つ勇者が近々現れて、北方の魔王サルバトーレ某なにがしを打ち倒すであろうという——予言です」

　予言。意外な言葉に、護堂は目をみはった。

　すると、アイーシャ夫人はいたずらっぽく微笑んで補足する。

「ここ何日か、街で流は行やっているうわさなんです。誰が言い出したのかはわかりませんが、急に広まったらしいですよ。お耳に入ってはいませんか？」

「初耳です」

「仕方ないわ。四日前の戦い以来、わたしたちはほとんど砦にこもっているか、戦後処理で飛びまわっていたもの。でも面白いわね」

　コメントする護堂の横で、エリカがくすりと微笑んだ。

「フランク族をひきいる謎なぞの戦士としか聞いてないでしょうに、サルバトーレ卿を魔王と言い当てるなんて。うわさもバカにできないということかしら」

「あ、そういえば。恵那はべつのうわさ話をさっき聞いたよ」

　街中では『フン族の危険な女戦士』として畏怖される恵那だが、気さくで遠慮のない性格のおかげもあって、ローマ軍団の兵たちとは親しく話しこんだりもしている。

　そちらの方面から情報を仕入れたのだろう。護堂は訊ねた。

「どんな話なんだ？」

「アイーシャさんにまとわりつく悪い虫の草薙護堂は、そのうち天てん誅ちゆうを喰くらって死ねばいいとか、死ぬべきだとか、死ねとか。あと、何が『お兄さま』だとか」

「……それ、やっぱり軍団の人たちが言ってたのか？」

「うん。王様がアイーシャさんと仲いいの、うらやましい人も多いみたい」

　恵那が苦笑しながら教えてくれる。

　無理もない話だった。魅了の権能のせいで、軍団の兵たちはアイーシャ夫人をほとんど偶像崇拝しているのだ。しかし、護堂は首をかしげた。

「でも、最後のは何なんだよ？　お兄さまって？」

「あ。この間、わたくしの話したことが広まったのだと思います」

　恵那に訊いていたら、アイーシャ夫人が割り込んできた。

「草薙さんとの関係を訊かれて、『わたくしのお兄さまのような人です』と」

「……ええと。芸能人同士のスキャンダルをごまかす女の子のアイドルみたいなこと、言わないでくださいよとかは脇わきに置くとして」

　兄のような人コメントで沈静化した醜しゆう聞ぶんを、寡か聞ぶんにして知らない護堂である。

　もっと上う手まい逃げ方もあるだろうにとため息をつきながら、べつの問題を提起した。

「いくらなんでも、俺がアイーシャさんより歳上ってのは無理があるんじゃ――」

「そんなことありません！　わたくし、何も言わなければ一〇代にまちがわれることはしょっちゅうですし、お肌だってぴっちぴちです！」

「見た目年齢の話じゃなくて、中身と実年齢の問題です」

「だ、大体、この間はわたくしを守るために戦ってくださったじゃありませんか！　あれを兄心と言わなくて、なんと言うんです！」

「いや、あれは形式上たまたまそうなっただけで……」

　初期キリスト教の教会で言い合いする、新旧のカンピオーネふたり。神殺しの魔王という肩書きの割に、牧歌的な光景である。

　しかし、この平穏がそう長続きしない予感を、ひしひしと感じる護堂であった。

　アウグスタ・ラウリカ市（現代のスイス北部）からコロニア・アグリッピナ市（ドイツ中西部）まで、ローマ軍の歩兵部隊は二〇日かけて行軍するという。

　一日のうち約六時間を移動に当てたあと、野営地を築き、休養する。

　武装した歩兵部隊の行軍速度としては、これは最上レベルであるらしいのだが。

「でも、車——馬車じゃなくて自動車だと、半日もあれば余裕で着いたはずよ」

「距離にすると、四～五〇〇キロってところか？」

　馬に揺られながら、エリカと護ご堂どうは雑談を交かわしていた。

　ふたりが進む街道と寄りそうようにして、大河が流れている。ライン川だった。

　アウグスタ・ラウリカとコロニア・アグリッピナはライン河か畔はんに建造されたローマ植民市なので、下流方向にひたすら歩けば自然と到達できる。

　しかし、護堂とエリカの馬がめざすのは、上流方面だった。

　旅立ちは昨日、アイーシャ夫人の教会を訪ねた直後。野営を一回して、今朝早くに旅を再開し、今は昼前くらいだろうか。

「こういう旅にもだんだん慣れてきたな……」

「そう？　街とか村になかなかたどり着けないのって、すこし退屈だわ」

「おまえ、前に『どうせ旅行に行くなら、移動に丸一日かけるような離れ小島にある別荘とかがいい』みたいに言ってなかったか？」

「だって、ああいうのは殺人事件でも起きそうでわくわくするじゃない」

　尚なお、エリカと恵え那なは馬に騎乗せずとも、尋じん常じよう

でない速さで疾しつ走そうできる。

　魔術と武芸を組み合わせた走術なのだという。しかし、体力もそれなりに消しよう耗もうするため、何日も続く旅に使うべきではないらしい。古代ガリアでは馬に頼ることが多かった。

　ともあれ、ふたりは馬と共に街道を往ゆく。

　ライン川に沿うようにして敷ふ設せつされた街道である。基本的に行けども行けども開けた平原ばかり。ときどき森を見かけるくらいで、地形の変化はとぼしい。

　そのなかをエリカと護堂は小こ柄がらな古代馬にまたがり、地道に進んでいく。

　古代ガリアに来てから、半月ほどだろうか。その間、折にふれて馬と接するうちに、習うより慣れろで護堂は一応『馬に乗る』程度はできるようになっていた。

（もちろん、急な坂を駆け足で一気に駆けおりる——などの高度な技は無理だったが）

　乗馬の才能があったというより、単に〝慣れた〟だけだろう。

　幸いなことに、護堂にはそれを可能とする体力と、何より頑丈すぎる肉体があった。乗馬初心者がよく言う『おしりや腰が痛い』『膝ひざや股また下したの皮がむける』などの苦痛とはまったく縁がないまま、今に至っている。

「早くこっちの用を片づけて、清せい秋しゆう院いんのところに帰らなきゃなあ。ドニのバカだって早めに対処しなきゃダメだろうし……」

　護堂はつぶやいた。恵那には〝要注意人物の監視〟をまかせているのだ。

「ねえ護堂。この隙すきに抜け駆け——なんて考えは淑しゆく女じよとしてあるまじき出来心かしら？　でも、時にはふたりで悪の道に堕おちる覚悟も男と女には必要だと思わない？」

「断じて思わないから、おとなしく旅をつづけようぜ……」

なんとなく見覚えのある森が見えてきた。

これで三度目の訪問となるウルディンの森、竜たちの棲すみ処かである。

森に入るとエリカが『進むべき方角を占う』魔術を使ってくれた。鎖くさりでぶらさげた懐中時計の示す方角へ進んでいくと、途中で何度かデイノニクス——二足走行する俊しゆん敏びんな肉食恐竜型の神獣と遭遇した。

やがて到着したのは川辺のローマ軍駐ちゆう屯とん地ち跡、今はウルディンの砦とりでであった。

「いよう兄弟、意外と早く再会できたな」

護堂の到来をすでに見張りが報告していたらしい。

フン族の神殺しは陽気な微笑を浮かべ、砦の入り口で待ちかまえていた。

「とりあえず、歓迎の宴うたげでも開いてやろう。ゆっくりしていくといい」

「今日は話だけしにきたんだ。宴会はいいから、さっさとはじめさせてくれ」

自分と似た面おも差ざしの神殺しへ、護堂は訴えた。

ウルディンはにやりと笑い、以前はローマ軍の司令部だった館やかたへ向かう。その背中を追って、護堂とエリカは馬に乗ったままついていく。

十数分後、司令部の広間で護堂とウルディンは向き合う形となった。

こちらはエリカ、向こうはふたりの妻ルスカとクロティルドをしたがえている。

「今日ここに来たのは……」

「ちょっと待って、草くさ薙なぎ護堂。すこし、いい？」

　護堂が口を開きかけたら、ルスカが割って入った。ウルディンと同じ東洋系のフン族出身で、つややかな黒髪を肩のあたりで切りそろえた美女だった。

「最近……なんかイヤな感じがする」

「はあ」

　おしゃべりが億おつ劫くうなのか、ルスカにはすこし言葉足らずなところがある。

　相づちを打ってから、護堂はすこし身がまえた。ルスカはすばらしい霊視力の持ち主で、この時代の魔女。ただの雑談ではないのかも——と思ったのだ。

　残念なことに、予感は当たりだった。

「たぶん……いいや、まちがいなく原因はあなたたち。草薙護堂、あの白い服の女、そしてサルバトーレなんとか——遠い遠い彼方かなたから来た神殺したち」

「こいつらがいると何かまずいのか？」

　面白そうにウルディンが口をはさむ。ルスカはわずかにうなずいた。

「まずい。なんていうか……多すぎる気がする。そして、早すぎる」

　護堂は隣のエリカと目を見合わせた。

　多すぎるというのはわかる。ウルディンもふくめると、この地には四人ものカンピオーネが集結している。たしかに多すぎだろう。しかし——

「早すぎるとはどういう意味なのですか、ルスカ？」

　訊たずねたのはクロティルドだった。長身の女戦士で古代のルーン魔術使いである。

　いつもかぶっている羽根付きの兜かぶとを、室内だからか今は脱いでいた。そのため、みごとな長さの金髪があらわになっている。

「ごめん、あたしにも上う手まく説明できない……。ただ、これだけそろうのは本当なら何十年も先だったんじゃないかって感じる。なんとなくだけど」

　傑けつ出しゆつした霊視力者の〝なんとなく〟を無視してはならない。

　護堂と仲間たちはそのことをよく知っている。思わず隣にいるイタリア人少女を見たら、彼女は思慮深げに考えこんでいた。

「カンピオーネが多すぎる……本当なら何十年も先……」

「なんだかね。今のまま事が進んでいくと、すごくまずい気がする。起きちゃいけないことが起きちゃうような、そんな感じ」

　エリカのつぶやきをよそに、ルスカは不吉な託たく宣せんで話を締めくくる。

　やはりドニの件を迅じん速そくに収しゆう拾しゆうし、全員そろって現代に帰るべきなのだろう。護堂はうなずいて、きっちりと頭を下げた。

「ありがとうございます、ルスカさん。参考にさせていただきます」

「礼は必要ない。これはたぶん、あたしたちにも降りかかってくる災難だから」

「オレたちにもか？」

　妻の言葉を聞いて、ウルディンがにやりと微笑した。

「だとしたら、オレと兄弟が手を組んで迎え撃てばいいだけに思えるがな。オレたちが同盟すれば、無敵の軍団ができあがるかもしれんぞ」

「そうだといいんだけどね……」

　ウルディンはあいかわらず、草薙護堂に未練があるらしい。

　オレの代わりに王となれ。以前の誘いを思い出し、護堂は『勝手に同盟とか決めるなよ』と口をはさみかけたのだが。

隣にいるエリカが考えこむのをやめて、すっと顔を上げている。

ここに来た目的を果たすつもりなのだろう。護堂は口をつぐむことにした。

「でしたらウルディン王。その同盟を前向きに実現させるつもりで、草薙護堂と新たな関係を築くおつもりはございませんか？」

「ほう」

エリカの聡そう明めいな話しぶりを前にして、ウルディンはつぶやいた。

「新たな関係というと？」

「以前のお申し出は、草薙護堂に御おん身みの傘さん下かに入れと迫るもの。しかし、先日の戦いで痛み分けとなった一事からも、ふたりの神殺しが対等であることは明らか。ここは対等の立場で同盟を結び、共にガリアの地を治める王として並び立つ——というのはいかがでしょう？」

さすがエリカというべき、流麗な語り出しだった。

ドニのもとへ向かう前にウルディンとの休戦をはっきりさせて、アウグスタ・ラウリカ周辺の安全保障をしっかりと行う。それが今回の目的だった。

恵那ではなくエリカに同行してもらった理由のひとつ目は、この交渉なのだ。

一方、エリカの申し出を聞いて、ウルディンは鷹おう揚ように笑う。

「なるほど。北方にはフランクの戦士どもを焚たきつけるサルバトーレ某なにがしあり。また、ルスカが言う得え体たいの知れない危機もあり。まあ、オレの名みよう代だい云うん々ぬんを抜きにしても、兄弟と友ゆう誼ぎを結ぶ利はあるわけか」

「おっしゃるとおりですわ」

「しかしだな、同盟には保障が要いるものだぞ」

　そのとおりだった。口約束など、いくらでも破れる。

　不安なのは護堂たちがコロニア・アグリッピナへ旅立ったあと、同盟者であるはずのウルディンがアウグスタ・ラウリカに攻め込んでくることだった。

　エリカもそれを危き惧ぐして、

『わたしか恵那さんを人質としてウルディンのそばに、逆にルスカとクロティルドのどちらかを護堂のそばに置く――その辺が落としどころになるかもしれないわね』

　と言ったほどである。

　同じ問題を口にしたウルディンは、エリカではなく護堂へ目を向けた。

「そこでだ兄弟。ひとつ質問させてくれ」

「なんだよ？」

「おまえに娘はいるか？」

「い、いるわけないだろうっ！」

　即答してから、護堂は気づいた。古代世界では高一の年齢・一六歳で子供を持っていても不思議ではない。しかし、ウルディンはなぜこんな質問を？

　こちらの疑問にも気づかず、フン族の神殺しは飄ひよう々ひようとつづける。

「じゃあ、姉か妹は？」

「妹ならひとりいるな。でも、それが何だって言うんだよ？」

「おいおい、察しが悪いぞ兄弟。オレの妻か妾めかけに迎えるためだろう」

「つま!?」

　仰ぎよう天てんしたが護堂はすぐに気づいた。つまり政略結婚なのだ。一四歳の草薙静しず花かを妻か妾にしたいと言った男は、痛

快そうに笑う。

「おまえの妹が見み目め麗うるわしくて気の強い、オレ好みの娘なら申し分ないが、肝かん心じんなのはオレたちの同盟だからな。そのあたりはとやかく言わんことに――」

　こほん。話の途中でせき払いしたのは、ウルディンではなかった。

　後ろに立つクロティルドである。彼女はいつも生き真ま面じ目めで、表情も硬い。しかし、今は珍しく花のような笑顔で怜れい悧りな美び貌ぼうをいろどっていた。

　ただし、目は笑っていない。ウルディンの金髪妻はにこやかに口を開く。

「ウルディンさまは少々おたわむれが過ぎるようですね。ここは私が妻として代わりに話を詰めましょう。草薙さま、エリカ殿、こちらへ」

「うん。ウルディンはすこし、あたしと話をしようか」

「何を言う、ふたりとも。それは僭せん越えつというものだ――ぞ……」

　クロティルドが広間の出入り口へと向かえば、ルスカも奔ほん放ぽうすぎる夫に冷然と告げ、当の問題人物は不満げに遺い憾かんの意を表したのだが。

　ルスカが広間の奥へ歩いていき、壁にかけていた槍やりへ手をのばした。

　それを見てウルディンが口をつぐんだ隙に、クロティルドはすかさず言う。

「さあ草薙さま、外へ参りましょうか」

「あ、はい……」

　これから夫婦間でどのような会話・やりとりがなされるのか。

　激しく気になったが、護堂はおとなしく古代の金髪美女にしたが

うことにした。

　エリカと共にあわてて広間を出ると、そこはすぐ中庭になっていた。ここの円柱が立ちならぶ通廊を歩きながら、クロティルドは語る。

「ご心配なきよう。草薙さまには恩義もございますから、同盟の件はよいようにさせていただきます。私どもの夫に制裁を加えていただかねばならない機会、今後も多いように見受けられますし……」

「は、はあ」

「私とルスカさまは、草薙さまとの御縁を大切にしたいと考えているのです」

「すばらしいわ、クロティルド。そういうことなら、草薙護堂の力が必要になったときは遠慮なく言って頂ちよう戴だいね」

　先を行く女性の背中へ、エリカが貴婦人の口調で声をかける。

「わたしか恵那さんに連絡してくれれば、最大限に便べん宜ぎを図らせてもらうから」

「感謝します、エリカ殿。では、ウルディンさまの御力が必要なときは遠慮なく私たちをお頼りください。同じ境遇の女として、できる限りのことをさせていただきます」

「ありがとう、ふふっ。わたしたち、これからもなかよくしましょうね」

「もちろんです。あなた方と出会えたことは思いがけない幸運でした」

「…………」

　同盟の保障問題、女性同士の連帯感があっさり解決してくれたようだ。

　まあ、ウルディンの気性を考えると、妻たちの怒りを無視してまで『草薙護堂の都』に攻め入る可能性は低いだろう。

　しかし、護堂は複雑な気分であった。

　女好きが病やまいの域に入っているウルディンと俺を同類みたいに語るなと声こわ高だかに主張したいのだが、それを言ったら最後、女性陣の非難が己おのれにも殺到するにちがいないと直感して、沈黙を貫つらぬくしかなかったのである。



「思ったよりも早く話が終わって、助かったわ」

「まあな……」

　護堂とエリカはふたたび馬上の人となっていた。ウルディンの砦を退去して、神獣デイノニクスがさまよう森を抜け出たところである。

　ここからは街道にもどり、帰途につく予定だ。

　まだ陽ひは高い。おそらく正午前だろう。明るい間は馬に無理をさせない程度に道を急ぎ、一刻も早くアウグスタ・ラウリカにもどりたい。そしてアイーシャ夫人の行動に目を光らせながら、ドニのいる北方をめざすのだ。

　先を急ごうと言いかけて、護堂は気づいた。

　エリカが栗くり毛げの馬に騎乗したまま、浮かない顔で考えこんでいる。

「どうかしたのか？」

「さっきルスカが言ってたでしょう？　起きてはいけないことが起こりそうだって」

「あれか。どういう意味なんだろうな？」

「素直に考えれば、起きてはいけない歴史の改変が起きる……そんな感じよね」

　ゆっくりと愛馬を歩かせながら、エリカはつぶやいた。

「多すぎるのがカンピオーネだとしたら、早すぎるのは何？　もしかして、あと数十年のうちにもう三人くらいカンピオーネが誕生するのが正しい歴史なのかしら……」

「俺たちのお仲間が三人も、この時代——古代のガリアに？」

「ええ」

　エリカのとっぴな推測に、思わず護堂はかぶりを振った。

「それはさすがにないんじゃないか」

「でも護堂。昔、言ったでしょう？　ワインの当たり年みたいに、ごく稀まれにカンピオーネが集中して誕生する年代があるって」

　たしかサルデーニャ島でウルスラグナと対決する直前に教えられた話だったか。

　思い出した護堂へ、エリカはさらに言う。

「わたしたちの二一世紀だって、七人もの『王』がそろっているのよ？」

「言われてみれば、たしかに……。そういえばウルディンのやつ、前に同族――同じ神殺しと会ったことがあるように言ってたよな」

「正確な数は不明だけど、現時点でもう複数名のカンピオーネがいるわけよね」

　うなずいてから、あらためて護堂は首をかしげた。

「でも、カンピオーネが多いとどんな災いが起きるんだ？」

「わからないわ。まあ、神殺しの魔王が五、六人いるだけで世界はいい迷惑でしょうけど」

　雑談というにはやや重い話題になったときだった。

　護堂はハッとした。右腕が急に重くなった気がしたのだ。ここには神刀・天あまの叢むら雲くもの劍つるぎが収まっている。かつてのスサノオの愛刀が何かを訴えようとしているのか。

「どうした、何かあったのか？」

『巫み女こからの報しらせがある……』

　訊ねると、右腕のなかから眠そうな〝声〟が返ってきた。

　天叢雲劍は意思すら持つ神刀だが、戦闘以外のことにはほとんど無関心だ。数少ない例外のひとつが『太た刀ちの媛ひめ巫み女こ』清秋院恵那だった。

かつての天叢雲劍の所有者である。この刀は今も彼女を庇ひ護ごしている。

その縁があるから、恵那はたびたび護堂に代わって天叢雲劍の使い手となり、遠く離れていても神刀の意思と心を通わせることができるのだ――。

「もしかして緊急事態か⁉」

『見張りの対象に逃げられたらしい……。それを告げろと念押しされた……』

めんどくさそうな神刀の報告に、護堂は愕がく然ぜんとした。

これが恵那をアウグスタ・ラウリカに残した理由のふたつ目だった。たとえ距離が隔へだたっていても、天叢雲劍に頼んで護堂と連絡を取り合えるからと。

しかし、見張りの対象――アイーシャ夫人に逃げられるとは。

清秋院恵那は勘かんが異様に鋭いうえに身軽である。山中を逃げる野獣でさえ恵那は着実に追いかけ、狩り立てることができるはず。

アイーシャ夫人はどうやって恵那の監視を振り切ったのだろう？

いぶかしむ護堂の横で、エリカがため息をついた。

「どうやら、わたしたちは夫人のことを侮あなどりすぎていたみたいね。これから本当にどうなるのかしら？」

北方に盤ばん踞きよするサルバトーレ・ドニとフランク族。そこをめざしてアイーシャ夫人が旅立ち、草薙護堂はひとり出遅れた格好になっている。

ライン川の流域を舞台に、現代と古代のカンピオーネが集つどう狂きよう宴えん。

いよいよ本番を迎えつつあるようだった。

第２章　コロニア・アグリッピナへの旅路

1

　二一世紀から来た神殺し、アイーシャ夫人。

　古代ガリアに来てから愛用している白い外がい套とうと、ワンピースに似たストラという衣服を今日も身につけている。

　天気は快晴。春の陽気が心地よく、アイーシャの気分も上々だった。

　しかも、水上を走る風は、都合のいいことに追い風である。

　アイーシャが便乗する商船はこの風を帆ほに受けて、ライン川下流域――ガリア属州の北方に向かっていた。平底の木造船である。積み荷は小麦粉だという。

　現代人の感覚でいえば『ヨットあたりの二倍』程度のサイズだった。

「この船の人たちがとても親切で助かったわ♪」

　同乗する船主や小麦商人たちは、みんなアイーシャによくしてくれる。四日前、アウグスタ・ラウリカ市の船着き場で〝ヒッチハイク〟を頼んだら、快こころよく受け入れてくれたのだ。

　昼間は川の流れと風にまかせて、下流へ向かう。

　夜は川沿いの街に船を泊とめて宿泊するか、毛布にくるまって船

上泊。

　そして、船旅の開始から四日目。昼すぎ頃、ローマ植民市のモグンティアクム（現代ではドイツ領のマインツだ）に到着した。

　船はここで積み荷をおろし、上流のラウリカ市へもどっていくという。

　目的地のコロニア・アグリッピナ市まではまだ遠い。さらに北をめざす必要がある。

　船乗りと商人たちに笑顔で別れを告げ、アイーシャは下船した。

　みんな、笑顔とあたたかい言葉で送り出してくれた。人間のやさしさにふれて、アイーシャは心のなかが〝ほっこり〟する想おもいだった。

（もっとも、実のところ『魅了の権けん能のう』はアイーシャが笑顔を振りまいたり、お願い事をするたびにすこしずつ発動しているらしいので、彼らの親切は純粋な善意ゆえではないのかもしれない。だが、だからといって人のやさしさを否定して厭えん世せい主義者になるつもりはアイーシャにはなかった。人と人は支え合って生きていくものなのだ）

　船を下りたアイーシャは、まず腹ごしらえをすることにした。

　どんな場所でもすやすや熟じゆく睡すい、どんな食べ物でもそれなりに美お味いしく味わえる特技が彼女にはある。どのような土地でもストレスなく過ごすことができるのは、この二大特技の恩恵と言えるだろう。

　今回選んだのは、近くにあった安食堂。すこし硬くなったパンと塩しお胡こ椒しようで味つけした野菜スープという献こん立だてで、ささやかな幸福を満まん喫きつした。

「あとは次に乗る船を見つけることよね♪」

　食堂を出たあと、アイーシャはふたたび船着き場にもどった。

　ライン川を利用した水運事業は古代の頃から盛んで、このモグンティアクムのような都市の船着き場にはいくらでも船が停泊している。

「どの人に頼みましょうか……？」

　きょろきょろ船着き場を見まわしながら、つぶやく。親切そうな船乗りを探しているのではない。逆だった。誰でもいいので、こういうときは逆に迷ってしまう。

　実際のところ、アイーシャの頼み事を断る人間は皆かい無むに近いのだから――。

「そういえば、恵え那なさんは大丈夫だったかしら？」

　船着き場に来たせいか、旅立ちのときを思い出した。

　アウグスタ・ラウリカ市でも、こうして船着き場で適当な船を物色していたのだ。親切だがちょっと口うるさい草くさ薙なぎ護ご堂どうのいない間に、旅立ってしまおうと。

　あのとき、アイーシャは恵那に尾行されていたらしい。

　乗せてもらった船がラウリカ市を出てすぐ、やや後方を進んでいた船がいきなり帆を下ろしたのだ。運悪く船底に穴が開いていたようで、船乗りたちがこぞって水をかき出したり、慌あわてている様子が見えた。

　そのなかで唖あ然ぜんとする恵那の姿を、アイーシャはしっかり目撃していた。

「見張りまでつけて、わたくしに旅をさせないようにして。草薙さんったら、そんなにわたくしのことが心配なのかしら？　すこし過保護すぎるわよね……」

　前回、ラウリカ市で起きたウルディンとの戦闘。

　あのとき、草薙護堂はアイーシャを守るために身を挺ていして戦い、命まで懸かけた。すばらしい善意と勇気である。彼はきっとよい心ばえの少年なのだろう。

　しかし見張りの件といい、親切というにはあまりに念を入れすぎではないか。

　同じカンピオーネである草薙護堂に、魅了の力は通じない。アイーシャを守るために彼が見せた侠きよう気きと自己犠ぎ牲せい

は、全てあの少年が自みずから振りしぼったものなのだ。

　ここでアイーシャはハッとした。

「もしかして、あの人ったら——わたくしを愛してしまったんじゃ!?」

　アイーシャは船着き場をうろうろしながら考えこんでいたのだが。

　電撃にも似たショックで心を揺さぶられ、よろよろと体がふらついてしまう。川辺の柵さくによりかかって、かろうじて持ちこたえた。

「わたくしを守るのは形だけと言っていたのは照れ隠し？　それとも自分の気持ちに素直になれないだけ……？　たぶん、そのどちらかなんだわ……」

　これで全てのつじつまが合う。アイーシャは真実の光を見た気分だった。

「で、でも、草薙さんはすでにふたりの女の子と愛を語らう遊び人。口ではまじめそうなことを言うくせにウルディンさんと同じ穴の狢むじな、どうしようもない浮気者……。言葉を飾らずに言えば、割とろくでなしで人間のクズっぽい殿との方がた……」

　自ら探り当てた真実にアイーシャは衝撃を覚えつつ、熱に浮かされたようにもごもごとつぶやきつづけた。

「だけど、わたくしのために命懸けで戦ってくださって……。あと、ふだんはまじめなくせに裏では何人もの女性と浮き名を流すなんて、それはそれで魅力があるというか、ちょいワルでいけない男の人という感じが——あ、ダメよダメダメ」

　アイーシャの頭のなかで、いろいろな考えが渦うずを巻きはじめた。

　否定と肯こう定ていがぶつかり合い、光と闇やみの戦いよろしくバチバチと火花を散らす。

「駄目よアイーシャ。こんな気持ちにうっかり流されて、あの人を受け入れてしまったら、きっと泣くのはわたくしの方だわ。それに

わたくしの方がだいぶ歳上なわけだし……。もちろん、わたくしはあの人の妹と言っても通じるくらい、十分ぴちぴちだけど……」

「ええと、アイーシャさん？」

「あ、いけないわ。草薙さんのことを考えていたら、目の前にあの人の顔が見えるようになってる……。すこし頭を冷やさなきゃ……」

「いや。当の本人がまさに目の前にいるわけですが——聞こえてます？」

「はい聞こえてま——ひゃうっ⁉」

　アイーシャは愕がく然ぜんとして、のけぞった。

　目の前にはいつのまにか怪け訝げんそうな草薙護堂と、エリカ・ブランデッリおよび清せい秋しゆう院いん恵那が勢せい揃ぞろいしていたのである。

「く、草薙さんっ。今の、聞いてらしたんですか⁉」

「最後のところだけ、なんとか。川のそばでぶつぶつやっているアイーシャさんを見つけたから、こうして捕まえにきたわけですけど……なんて言ってたんですか？」

「気にしないでください！　ただのひとりごと、乙女おとめのプライバシーです！」

　胸の動どう悸きを悟られまいと、大声を張りあげるアイーシャだった。

「そ、それにしても、草薙さんはどうやって追いついたんですか？」

「アイーシャさんと同じです。船を使ったんですよ」

　ライン川を下る船の上で、護堂はアイーシャ夫人に答えた。

　ついさっき船出したばかりの小型帆はん船せんである。サイズと

外観はヨットに似ている。追い風を帆に受けながら、快調に水面を進んでいた。

　推定速度は二〇ノット、法定速度を守る自動車と同程度のスピードだ。

　しかし、徒歩や馬車に慣れた身にはずいぶんと速く感じられる。船に乗るのは護堂とアイーシャ夫人、エリカと恵那であった。

「アイーシャさんを見失ったって話、ちょうどウルディンの森の近くで聞いたもので。やつのところにもどって、船を借りたんです」

「あとはいろいろ手を尽くして、夫人を追いかけさせていただきました」

　護堂が語れば、エリカも丁てい重ちような物言いで報告する。

　この間もルスカとクロティルドから船を借りて、ライン川下りを行った。

　あれと同じことをやったのである。船出の際はクロティルドに頼み、前回同様に水の加護を授けてもらった。これで並の船より格段に速くなる。

　そのうえ、護堂もエリカも夜目が利きく。

　夜も交代で見張りに立ちながら船を進め、ラウリカ市で恵那を拾い、先行するアイーシャ夫人を追いかけたのだ。念のため、夫人の髪の毛を取っておいたエリカが人捜しの魔術を使ったので、どれくらい差を詰めたかも逐ちく一いちチェックできた。

「仕方ありません……」

　アイーシャ夫人も観念したらしい。ため息をついてから言った。

「ちょっと口うるさい草薙さんは置いてけぼりにして、先にドニさんとお話ししようと考えていましたが、今回はあきらめます。こうなったら、四人でがんばりましょうね！」

「そうしましょう。ただ、俺はべつに口うるさくないですよ」

　相手のノリの軽さに巻きこまれまいと、護堂は淡々と言った。

「おおむね常識的なことしか言ってないはずですし」

「また憎まれ口をおっしゃって……。わたくし、これでもわかっているんですよ。草薙さんはわたくしのことが気になって仕方がないんだって。……ですよね？」

「それはまあ、ドニのバカをのぞけば、いちばんの要注意人物ですからね」

　一〇〇以上も歳上の女性に、つい失言する護堂であった。

　同じカンピオーネでも義姉・羅ら翠すい蓮れんとちがい、アイーシャ夫人は言動・性格ともに軽やかである。よくも悪くも。そのせいで口がすべったのだ。

　一方、夫人はなぜか「やっぱり……」と言って、うつむいてしまった。

　ついでに上うわ目め遣づかいになり、ちらちらと護堂の顔をうかがう。

「でもアイーシャさん。ちょっとわからないんだけど」

　やや不審な態度を取る夫人へ、不思議そうに恵那が言った。

「船に乗ったアイーシャさんを追いかけようとして、恵那もちょうど出発するところだった船に便乗したんだけどさ。船底に穴が開いててダメだったんだよね」

「ああ。やっぱりそうでしたか」

「次に乗せてもらった船はいきなり座ざ礁しようしちゃったし。その次は船せん頭どうのおじさんがおなか痛いって騒ぎだして、船自体を出せなくなって。偶然っていうには、ちょっとできすぎだったと思うんだけど……」

　護堂は天あまの叢むら雲くもの劍つるぎを介して、恵那からの連絡を受け取った。

　アウグスタ・ラウリカ近くの川岸で待つ媛ひめ巫み女こを船で拾ったあと、すぐに聞いた事情がこれだった。不可解なトラブルの連続で追跡は不可能になったと。

　不運も三度続けば、人じん為いの介入を疑いたくなる。

　アイーシャ夫人が何かしたのだろうか？　魔術による工作などを……。

「たしかに偶然とは言えませんね。申し訳ありません」

　はたして、アイーシャ夫人は謝罪の言葉を口にした。

　彼女はそれから胸の前で両手を組み、敬けい虔けんな尼に僧そうのごとく祈りのポーズを取る。

「実はわたくし、船に乗る前に祈ったんです。——これから多くの人を困らせるドニさんのもとを訪ね、善の道に導こうと思うので、その間わたくしをお守りくださいと」

「祈り……夫人には何か帰き依えする教えがあるのですか？」

　意外そうにエリカが口をはさむ。

　神殺しの口から出た『祈り』という言葉に驚いたのだろう。

「それとも、何処いずこかの神を信仰しておられるとか？」

「あ、いえ。実はわたくし、以前に心ならずも中国の方で善なる民衆の守護神を倒したことがあるのですが」

「「「…………」」」

　唐突な告白に、護堂・エリカ・恵那は目配せを交かわしてしまった。

　つまり『魔術で裏工作』などという生なま半はん可かなものではなく——。

「その結果、幸運の加護を得る権能が身についたのです。わたくしが善行を為なそうと誓い、その成じよう就じゆにつとめているときだけ効き目がある、ささやかな力ですが……」

「こ、幸運の加護かあ……」

　いつも泰たい然ぜん自じ若じやくとしている恵那が『参った』と言いたげにつぶやいた。

　おそらく、カンピオーネの権能という発想はなかったのだろう。

「それでアイーシャさんを妨害しようとする恵那に、おかしなことが起きたんだ……」

「はい。わたくしは神ではなく、自らの権能に祈ったのです。——善ぜん果かいまだ熟じゆくせざる間は善人さえも悪に遭あう。善果の熟する時に至れば善に遭う。善人には善果あるべし、悪人には悪果あるべし、と……」

　そのときだった。ゴロゴロと雷鳴が聞こえてきた。

　護堂は仰ぎよう天てんした。いつのまにか雷雲が広がり、真っ暗になっている！

「さっきまで、あんなに晴れていたんだぞ……」

「アイーシャ夫人、その権能のことですが！」

　エリカがハッと気づいて、恐るべき女カンピオーネに訊たずねた。

「善行の成就につとめている間は効き目がある——ということは、サルバトーレ卿きようのもとへ向かっている今も、幸運の力は夫人を守護しているのですか!?」

「……あ。言われてみれば、たしかにそのはずですね」

「「「!?」」」

　あっさり肯こう定ていする夫人の返答に、護堂たち三人は愕然とした。

　今の問答の間に、土ど砂しや降ぶりの雨が降りはじめている。ライン川の水面へ叩たたきつけるように落ちてくる雨粒は痛いほどだった。現代風に言えばゲリラ豪雨である。

　あげく横よこ殴なぐりの強風が吹きつけ、ひっきりなしに稲妻まで降ってくる。

　ほんの四、五分の間に嵐が到来したのだ。当然、ライン川は大荒れになり、帆を広げた護堂たちの小型船は大きく揺さぶられること

となる。

　船の揺れは、もちろん遊園地のアトラクションなど凌りよう駕がする激しさだった。

「早く岸に着けて、陸に上がらないと駄目だわ！」

「こ、この嵐、恵那を邪じや魔ましたときの事故とは桁けたちがいだよ！」

「それはやっぱり、草薙さんがいるからですよ。さすがに神殺しの方を追い落とすには、並大抵の試練や不運じゃ無理でしょうし」

「って、俺がアイーシャさんの邪魔をしたから、この嵐が起きたのか!?」

「アイーシャさんまで巻きこんじゃうのに!?」

「この力を使うと、たまにこうなるんです。誰かにとっての幸福は、ほかの誰かの不幸となるときもあります。禍か福ふくはあざなえる縄のごとし。幸運と不幸の双方をもたらすことで、そういう世の道理を伝えたいのかもしれませんね……」

　荒れた川面かわもの水が跳ねるのと、豪雨のせいで、みんなずぶ濡ぬれだった。

　ひとりアイーシャ夫人だけが落ち着いて、説せつ法ぽうめいたことをつぶやいている。

　幸運の権能を使った代償（？）として、唐突すぎる不幸や災さい厄やくに巻きこまれることにも慣れているのだろう。対してエリカも、恵那も、護堂も焦あせりをあらわにしつつ、どうにかして窮きゆう地ちを乗り切ろうと行動に移ろうとしていた。

　しかし、間に合わなかった。

　強風と大波にあおられて、船がいきなり横に半回転——転てん覆ぷくしてしまったのである。

　当然、護堂たち四人は大荒れのライン川に投げ出される形となった。

2

リリアナ・クラニチャールは傑けつ出しゆつした才能を持つ魔女である。

まだ一〇代なので、さすがに最高の達人という域には達していない。しかし、彼女の世代においては頭ず抜ぬけた実力者であり、この道をいずれきわめる逸いつ材ざいと期待されていることはまちがいなかった。

そして今、リリアナの前に模も範はんとすべき〝最高の達人〟がいる。

プリンセス・アリス――天の系統の魔女術をきわめた姫君だった。欧おう州しゆう最高の巫み女こにして最上位の魔女は『会わせたい人がいる』と言って、リリアナと万ま里り谷や祐ゆ理りを連れ出した。

外出するのかと思ったら、ちがった。

彼女たちがいたのは、中世イタリアの古城を改装したホテル。

長い螺ら旋せん階段をのぼって、アリスは最上階である五階の展望室へリリアナたちを案内してくれた。壁の一面がガラス張りになっていて、『外』を一望できる。

この古城があるカゼンティーノ地方は、国立森林公園にも指定されている。

地平線の先まで続く森の木々には、数日前に降ったばかりの銀ぎん雪せつがつもり、天に輝く三日月の光が下界の緑と白銀を照らす――。

幻想的な風景が、展望室から見わたすことができた。

「そういえば、リリアナはわたしの後輩でもあるのよね？」

「はい。いまだ修行中の身ではありますが」

窓から差す月明かりの下でプリンセスに訊きかれて、リリアナは簡かん潔けつに答えた。

魔女同士のつきあいは堅苦しいものではなく、師や先せん達だつを『おばさま』『お姉さま』と呼ぶことも珍しくない。しかし、リリアナは騎士でもある。高貴な姫君に対して、なれなれしく振る舞うつもりはなかった。

一方、アリスはその硬さを鷹おう揚ような微笑で受け止めつつ、言った。

「よかった。それなら、あなたに魔女の口く伝でんを聞かせても問題ないものね。リリアナも祐理もこれから見聞きすることを軽々しく語っては駄目よ？」

唇くちびるに人差し指を当てる——口止めのサインのおまけつきだった。

すると、日本の媛ひめ巫み女こである祐理が申し訳なさそうに身をすくませた。

「あの、姫様……それでしたら、私は席を外しましょうか？」

「かまわないから居て頂ちよう戴だい、祐理。あなたはわたしたち魔女の従い姉と妹このようなものだし、この秘密を知る人は魔女以外にもすこしはいるわけだし」

天の位くらいをきわめた最高位の魔女は、いたずらっぽく微笑ほほえんだ。

「賢人議会のディオゲネス・クラブでも本当にひとにぎりのおじいちゃんとか、北米でいちばんの妖精博士フエアリードクター——あの魔王陛へい下かを補佐する御老人とか」

やはり。リリアナは黙ってうなずいた。上位魔女の間でも口伝のみで授けられる秘密の知識を、プリンセスは語ろうとしているのだ。

当のアリスは召しよう喚かんの魔術を使い、右手に香水の小こ壜びんを呼び出した。

これをリリアナと祐理にさっと振りかける。さわやかな花の香り

が鼻び腔こうをくすぐる。

　覚えのある芳ほう香こうにリリアナはハッとした。祐理も驚いている。この香りをかいだのは、たしか日本の至し宝ほうである神刀を巡る事件のときだ。

「雲雀ひばりよ、わたしを雲の向こうへ連れていって。おまえの歌を空と雲とに響かせながら、わたしを連れて昇っていって──」

　驚くリリアナたちの前で、プリンセス・アリスが言こと霊だまを唱えた。

　それに応こたえて動き出す魔術の気配。リリアナにも覚えがあるものだった。

　まちがいない。プリンセスは〝あの魔女術〟を使おうとしている。確信するリリアナの前で展望室のガラスから差し込む月明かりがいっそう明るくなり、次の瞬間、視界は真っ白な光で埋め尽くされていった……。

　真っ白な光が鎮しずまると、リリアナは崖がけの上にいた。しかも、海のすぐそばだ。崖の下をのぞき込めば、岩に当たって砕けていく荒波が見えた。おまけに空が──紫色だ。

　すぐそばには、万里谷祐理とプリンセスがちゃんとそろっている。

　祐理がため息をついた。あからさまにふつうではない、空の紫色を見あげながら。

「やっぱり幽世かくりよに……。姫様は幽世渡りの術を使ったのですね？」

「ええ。わたしたちはこの世界を『アストラル界』なんていうのだけど」

　確認されて、プリンセスはウインクと共に答える。

　この世ならざる領域、アストラル界。

　物質よりも精神と霊体が重きをなす異空間である。日本の呪じゅ術じゅつ師したちは幽世、中華系統の道士たちは幽ゆう界かいないし幽ゆう冥めい界かい、ペルシア呪術では霊的世界メーノーグ、ギリシア神秘主義ではイデア界などともいう。

　まつろわぬ神々は『生と不死の境界』と呼んでいるらしい。

　さっきプリンセスが振りかけてくれた香水は、アストラル界の空気に人間の体を適応させるための秘薬だった。天あまの叢むら雲くもの劍つるぎの事件のとき、幽世へ祐理を送りこむため、リリアナも調合したことがある。

　この薬を姫が自身に使わなかったのは、必要ないからだろう。

　病弱なプリンセス・アリスは外出の際、肉体ではなく霊体を『外』に送り出す。リリアナたちの前にいる姫君はあくまで分身、幽霊のようなもの。霊体はアストラル界の環境にも問題なくなじめるのだ。

「私たちに会わせたい方というのは、やはり幽世のどなたか……」

「ちょっとちがうかしら？　実際にお目にかかる方が早いから、待ち合わせ場所に急ぐわね」

　祐理に答えてから、プリンセスは両目を閉ざした。すぐに周囲の景色が変わる。

　洞どう窟くつのなかに仏像がたちならぶ、インドの石せっ窟くつ寺院を思わせる場所だった。

　地上とちがい、アストラル界の旅行は足ではなく精神によって行う。慣れた魔術師なら、行きたい場所を念じるだけで瞬間移動できるのである。

「残念だけど直通では飛べないの。定められたルートどおりに転移していかないとたどり着けない秘密の場所だから、各駅停車でいかせてもらうわね」

　それから次々と景色は変わっていった。

　湖のほとりに建つ白はく亜あの宮殿前。見わたすかぎりの熱ねっ砂さのなかで、唯ゆい一いつの憩いこいであるオアシス。巨大な鳥

の地上絵が刻まれた広野。毒々しい色の食虫花が咲き誇る密林。一九二〇年代、禁酒法時代のアメリカを思わせる街並みなど――。

　最後に到着したのは、禿はげ山のふもとだった。

　すぐ目の前に古代ギリシア式の神殿が建っている。大理石の太い円柱が長方形状に立ちならび、その上に屋根がついている。一棟しかない小さな建物だ。

「ここで待ち合わせの約束なのに、いないわね」

　周囲には誰もいない。眉まゆをひそめる案内人の姫君へ、祐理が訊たずねる。

「こちらにお住まいの方ではないのですか？」

「ええ。あの方ったら、こういうときまで遅刻されるんだから……」

「――姫。言わせてもらうなら、私も『今来たところ』でね。遅れたのはほんの一、二分程度だ。遅刻というほどの遅れではないと思うのだが、いかがだろう？」

　聞き覚えのある声だった。

　そして、かつんかつんという響き。神殿周辺の石いし畳だたみをブーツの鉄てつ鋲びようが打つ音だ。

　この夜は驚いてばかりのリリアナだが、これがいちばんの驚きよう愕がくだった。祐理も同じだったらしく、ひかえめな大和やまと撫なで子しこが珍しく大声を出した。

「待ち合わせのお相手は、あなただったのですか⁉」

「ふふ。私などとの再会にそこまで感かん銘めいしていただけるとは光栄だ」

　格調高い青の礼装に身をつつみ、黒いケープをひるがえす。顔を覆おおいかくす仮面のバイザーは昆虫の複眼めいたデザインである。鉄鋲付きのブーツをはいている。

　アストラル界の神殿で落ち合った相手はジョン・プルートー・ス

ミスその人。

　ロサンゼルスの守護聖人とも呼ばれるカンピオーネであった。

「草くさ薙なぎ護ご堂どうやイタリアの優やさ男おとこ殿がどこで何をしていようと、べつに私が出しゃばる理由もないのだが」

　仮面越しに洩もれてくるテノールには、舞台役者のような張りがあった。

「今回、彼らの行方ゆくえ不明はあるご婦人がパスポート代わりに使う権けん能のうが原因だという。それで古くからの知り合いに泣きつかれてしまってね。どうにかしてくれと」

「カンピオーネであられる、スミスさまにわざわざ……」

「それはそうさ。神殺しに対抗できるのは、同族の神殺しか神々のみ。世の道理だ」

　リリアナのつぶやきにスミスが肩をすくめる。

「そこで私はプリンセスに連絡を取った。この件に関する情報を教えて欲しいと。そして、草薙護堂らが飛ばされた時代を〝視みた〟巫女たちのことも聞いたのだよ。まあ、古い知り合いの頼みを受けるかはまだ決めていないのだが」

　昆虫の複眼に似たバイザーが祐理とリリアナに向けられた。

「ひとまず君たちにご足労を願ったわけだ。協力を願いたいと思ったのでね」

「あの……スミスさまにそのような嘆たん願がんをされた〝古くからのお知り合い〟とは、どういう御方なのでしょう？」

　祐理が訊ねると、スミスはすっと右手をあげた。

　手袋につつまれた人差し指が示すのは、神殿の内部だった。

「あちらの住人だ。まあ、気むずかしいうえに神経質で悲観的……と、難なん儀ぎな性格でね。そして、我わが同どう朋ほうアイーシャ夫人の起こす騒動でいちばん迷惑をこうむる男でもある」

「迷惑をこうむる……？」

　スミスの不可解な言葉に、リリアナが眉まゆをひそめた瞬間だった。

　祐理がいきなり茫ぼう洋ようとした顔つきになった。しかも、媛巫女の両目は玻は璃り色いろに変わり、ひとりごとをつぶやきはじめる。

「時を刻む者の聖域……世の全てを書きしるす、虚空の記録を収める書庫……」

「もう視えたのか。さすがだな」

　霊視を得た祐理の託たく宣せんにスミスがうなずく。一方、リリアナは催眠状態に陥おちいった仲間を心配しつつも、さらに疑問をぶつけることにした。

「この場所が只ただならぬ由ゆい緒しよを持つ聖域であることは、ひとまず呑のみこめました。よろしければ、もうひとつの疑問に答えをいただきたく思います。——ここにお住まいの方とスミスさまは、いかなる御関係なのでしょう？」

「妥だ当とうな質問だな、リリアナ・クラニチャール」

　黒衣の神殺しに名前を知られていたので、リリアナは驚いた。

　自分など、草薙護堂の従者程度としか認識されていないと思っていたのだ。そんな彼女を見てスミスはふっと笑いつつ、ケープを左手ではねのける。

　その下にまとう青の衣装があらわになる。腰に下げたホルスターと〝あの銃じゆう〟も。

「私とアストラル界プレーンにはいくつか重要な縁えにしがある。そのひとつがこれだ」

　スミスは腰の拳銃を引き抜いた。

「この世界に住む闇ダークエルフの鍛冶術師ブラツクスミスが私のために鍛きたえてくれたものだ。私にとっての魔剣エクスカリバーというところだな」

　六連発の大口径リボルバー。鈍にぶい鋼はがね色いろの魔銃。

　ジョン・プルートー・スミスの武器として名高い、伝説的なハンドガンだ。女神アルテミスより簒さん奪だつした『魔弾の権能』を撃ち出すための道具だという。威力を全て解き放てば、広大なカリフォルニアすらも灼やき尽くす……とまことしやかに語られている。

　この魔銃はアストラル界で鍛たん造ぞうされた異界の武器——。

　賢人議会のレポートでも報告されている。が、所有者自身の口から聞かされて、リリアナは得えも言われぬ感動を覚えた。もしかすると、ジョン・プルートー・スミスだけが持つ『仮面の英雄としてのカリスマ』のせいかもしれない。

「そういえば、スミスさまはその権能で地上とアストラル界を自由に行き来できると、以前にうかがいましたが」

「ああ。私のささやかな特権のひとつだよ」

　さらりとリリアナに答えてから、スミスは魔銃をホルスターにもどした。

「かつて、アストラル界を統すべる妖よう精せい王おうのひとりを斃たおしたときに簒奪した力だ。そして、私は彼から王の責務も引き継いでいてね」

「責務……？」

「このプルタルコスの館をふくむ階層は、私の支配する版はん図となのだよ。まあ、王といってもほとんど留守にしてばかりのお飾りだが——今回のように切実な要請をされた場合は、さすがに放置もできかねる」

　妖精王。プルタルコスの館。

　思いがけない言葉にリリアナが目をみはった直後だった。

「私のもとには今、草薙護堂、サルバトーレ・ドニ、アイーシャ夫人……この三名を抹まつ殺さつして欲しいという嘆たん願がんが届いている。さて、どうしたものかな？」

ジョン・プルートー・スミスの口から、衝撃的な発言が出てきたのであった。

3

草くさ薙なぎ護ご堂どうは神殺し、魔王カンピオーネとやらである。

不本意ながら、ふつうの人間にはない能力をいくつも身につけている。

ただし、そのなかに空を飛ぶ力も水中で呼吸できる力もない。となれば『突然の嵐の到来で氾はん濫らん寸前のライン川』に投げ出された以上、絶体絶命の窮きゆう地ちである。

ここを切り抜けるため、護堂は最大の武器を使った。

体力である。船から投げ出された直後、荒れた濁だく水すいのなかで必死にもがき、泳ぎ、転てん覆ぷくした船体にふたたびしがみついた。

驚いたことに、同じことをしている仲間がいた。アイーシャ夫人だ。

決して体力自慢には見えない彼女も護堂と同じように、ひっくり返った船体にしがみついてきたのである。一方、残りの仲間たちは――

「わたしをつなぎとめて、クオレ・ディ・レオーネ！」

まずエリカ・ブランデッリ。川に落ちながらも獅し子しの魔剣を召しよう喚かんしている。

彼女の手に顕あらわれた細身の長剣はすぐに変形し、錨いかり付つきの鎖くさりとなった。これをエリカが投げると錨はライン川の岸部に向かって高速で飛んでいく。

岸までの距離、およそ三〇メートル。

しかし、錨の飛ひ翔しようと鎖の長さはそれも苦にせず悠ゆう々ゆうと岸に届く。

錨の鉤かぎ爪づめはガッと地面を抉えぐり、エリカと陸を結ぶ鋼鉄の命綱となってみせた。

そしてもうひとり、清せい秋しゅう院いん恵え那な。

「南な無む八はち幡まん大だい菩ぼ薩さつ！　あらゆる水難より我われを守り給たまえ！」

水難除よけのまじないを唱えていた。前に女神キルケーの島でも使った術だ。

そうやって加護を願ったうえで、恵那は必死に手をのばす。

エリカと陸地をつなぐ魔剣の鎖から、たまたま近かったのだ。いや、聡そう明めいな金髪の少女は媛ひめ巫み女この位置も考慮して、鎖を投げたのかもしれない。

恵那の右手はクオレ・ディ・レオーネの鎖をしっかりとつかむ。

これを見て護堂は安心し、かたわらの女性へ声をかけた。

「大丈夫ですか、アイーシャさん!?」

「は、はいっ、なんとか！」

しかし、この直後。落ちてきた稲妻が護堂たちの船を直撃した。

「うわあああっ！」

「きゃああああああああっ！」

天からの雷撃によって小型の帆はん船せんはあっけなく砕け散り、どうにかして船の上によじのぼろうとしていた護堂も夫人もふっとばされた。

「護堂！　アイーシャ夫人！」

「大丈夫!?　生きてたら返事して！」

エリカと恵那が懸けん命めいに声をかけてくれた。だが答える余

裕はない。

　ふたたび濁水に呑のまれ、溺でき死しする危険を護堂は自覚した。それでもあきらめないのは生来の生き汚さゆえである。必死に突破口を探す。

　大荒れのライン川を流されていくのは、護堂とアイーシャ夫人だけではない。

　すこし前まで木造船だった木材・木切れ・木こっ端ぱなどもお仲間だった。

　とっさに護堂は大きめの木片にしがみついた。これで生きのびるという保証はまったくないが、すくなくとも水に浮くことはできる。

「アイーシャさん、早くこっちに！」

「はいっ！」

　護堂はまだ近くに浮いていた夫人に手をのばす。

　夫人もまた必死に手をのばして護堂の手をつかみ――どうにか届いた。手と手がつながったので、護堂はぐいっと細い割にひどく女らしい肢し体たいを引きよせる。

　それからはふたりで木切れにつかまりながら、流されていく。

　しかし、状況はもちろん最悪だった。

　あいかわらず豪雨が降り続け、強風も吹き荒れる。

　もともと大河であるライン川。一気に水量を増し、いつ氾濫を起こしてもおかしくない。

　轟ごう々ごうと流れていく。護堂とアイーシャ夫人は何度も水中に沈み、溺おぼれかけ、そのたびに木切れの浮力で浮かびあがる。

　木切れ一枚でどこまで保もつか、かなりあやしい。また、岩や樹木、どこかの岸辺につないであった船なども濁だく流りゅうで押し流されており、それらに激突する危険もあった。

　これはもう、いよいよ死ぬかもしれない――。

　以前、マレーシア近海の『女神の島』で即そつ興きようのラフティングをしたときよりも過酷きわまりない水難事故である。護堂もさすがに覚悟をかためたのだが。

　おそらく数十分から数時間後。

「なんとか生きのびるもんですねえ、意外と……」

「たぶん、幸運の力がわたくしたちを守ってくれたんですよ！」

　時計がないので、経過した時間は正確にはわからない。

　しかし今、ライン川の水面はすっかりおだやかになっていた。唐突にやってきた嵐は唐突に沈静化したのである。木切れにつかまって流されてきた護堂とアイーシャ夫人だが、ふたりとも無傷だった。

　問題といえば、長く水につかっていたせいで体が冷え切っているくらいだ。

　木切れはいつのまにか岸辺近くに流されていたので、護堂はバタ足を行い、岸に向けて軌道修正する。アイーシャ夫人もバタ足を手伝ってくれたおかげで、ふたりは程なく上陸することができた。

「禍か福ふくはあざなえる縄のごとし、でしたっけ……」

「はい。草薙さんを追い落とそうとする不運と、わたくしを救おうとする幸運は、今のところ幸運の方が勝っているようです」

　なんとアイーシャ夫人はのんきに微笑ほほえんでいた。

　この手の波は瀾らん万ばん丈じように慣れきっているのだろう。空恐ろしいほどの生命力だった。しかし、護堂に笑う余裕はない。新たな懸け念ねんがあるからだ。

「さっきの嵐みたいなイベントがまた起きたら、今度こそダメかもしれませんよ。何か対策ができればいいんですけど……」

「そうですね。ひとまず幸運の加護を切っておきましょう」

「……って、オンオフできたんですか？」

　てっきり通つう廊ろうの権けん能のうと同じく、コントロール不能な力だと思っていたのだが。

　じろりと護堂がにらむと、夫人はごまかすように微笑んだ。

「あ、念のため説明いたしますと、一度はじまった幸運や不幸を止めることはできないんです！　だから、嵐が収まるのを待つ必要があったんですよ！」

「いや、それならいいんですけど……」

　だったら、再会直後にオフすればよかっただろうに。とは今さらなので口にせず、護堂は自みずからの右手を見つめた。そこに宿る神刀・天あまの叢むら雲くもの劍つるぎに呼びかける。

「なあ。清秋院とエリカは無事なんだろう？」

『ああ……。こちらよりも先に水から上がっていたようだ……』

　神刀の思し念ねんが面倒くさげに答える。

　護堂はうなずいた。アイーシャ夫人といっしょに流されながら、仲間たちの身が心配だったので天叢雲劍に命じたのである。恵那と交信して、状況を確認してくれと。

　さすが太た刀ちの媛巫女とエリカ・ブランデッリ。

　今回の窮地もどうにか無傷で切り抜けてくれたようだった。

「あいつらに俺たちの無事を伝えてくれ。あと、おたがいの現在位置とかもわからなくなってるし、もうコロニア・アグリッピナで落ち合うことにしようって」

『…………』

　これが人間なら、無言でうなずいた感じだろう。

　古代ガリアに来て、携帯電話代わりに使うようになってから判明したのだが、天叢雲劍は戦闘が関係しない連絡行為には明らかに不熱心だった。

　この勤勉ならざる通信機を頼りに仲間と合流をはかるのは、かなり効率が悪い。

　次善の策を取ることにした護堂は、ようやく肩の力を抜いた。

　割と時間が経たっていたらしく、夕焼けで西の空が紅あかい。今日の旅はここまでにして、休息の準備をすべきだった。

「とりあえず、濡ぬれた服をどうにかしましょうか……」

　護堂たちが上がった岸辺は、人ひと気けのない草地である。

　近くに街どころか一軒の家さえない。嵐の直後なので、ライン川を往ゆく船もない。護堂とアイーシャ夫人はずぶ濡れで、旅の荷物は船といっしょに川底へ沈み、もちろん着替えもなかった。だが、とにかく命拾いできた。

　楽天的な気分になって旅の連れを眺め——どきりとした。

　アイーシャ夫人は濡れて重くなった外がい套とうをとっくに水中で脱ぎ捨てていて、ワンピースのような白い服だけの姿だったのだが。

　ずぶ濡れなので、衣服はぴっちりと肌にはりついていた。

　おかげで、この年長すぎる女性がすばらしいスタイルの持ち主だと一目でわかる。

　全体的に細身であるくせにバストはたわわに実った果実を思わせる豊かさで、腰つきのくびれは悩ましい曲線を描いている。

　また、古代にはまだ発明されていなかったブラジャーは身につけていない。

　濡れたせいで白い布が透けてしまい、うっすらと肌が見えたため、わかったのだ。そして、長い黒髪が濡れそぼっているさまには得えも言われぬ色いろ香かと艶つやがあり——

　一瞬、視線が釘くぎ付づけになった。護堂はあわてて目をそらす。

　するとアイーシャ夫人も自分の姿に気づき、すぐにハッとして両

手で胸元を隠した。

「あああ、あの、わたくし、ひ、火をおこしますね！」

「そ、それはいい考えだと思いますっ！」

　エリカがいれば発火の魔術を使うところだ。しかし、その術の習得者はいなかった。

　護堂と同じように、アイーシャ夫人も魔術の学習に熱心ではなかったらしい。

　代わりに、彼女は準備よく火打ち石を持っていた。服の腰帯にくくりつけていた小袋のなかに、高額貨か幣へいなどといっしょに入れておいたのだという。

「こういうものを肌身離さず身につけておくと、意外に役立つんですよ♪」

　とは、たおやかな女性カンピオーネの弁である。

　こんな心得が役立つほどトラブル慣れしているのだなと、護堂は感心した。まあ、護堂自身もローマ帝国の銀貨と金貨入りの袋をしっかり身につけていたので、似たりよったりではあるのだが。おかげで重い荷物は失ったが、路銀には困らない。

　護堂が集めてきた枯れ草や枯れ枝を火種に、アイーシャ夫人が火をおこす。

　ぱちぱちと小さな焔ほのおが生まれたところで、護堂は言った。

「俺、しばらく向こうに行って、人が来ないか見張りしていますから。濡れた服とか、念入りに乾かしといてください」

「ど、どういうことでしょう――きゃあっ!?」

　訊たずねるアイーシャ夫人の前で、上に着ていたシャツを脱ぐ。あらわになった男の上半身を目まの当たりにして、夫人が目を丸くしている。

　護堂はかまわず、木の枝に濡れた上着をひっかけた。

「それじゃあ」

　とだけ言い置いて、護堂はたき火から離れていった。

　自分がいなければ、アイーシャ夫人も服を脱いで火に当たっていられるだろう。そう配慮しての行動だった。濡れた服を着たままでは冷えるし、この方が早く乾くからと。

　護堂のズボンは濡れたままだったが、そこは仕方ない。

　ついでに言うと、たき火をおこしている間に太陽は沈み、夜になっていた。

　肌寒くなってきた。季節が春なのはせめてもの救いか。ぶるっと震えた体を無視して、やせ我慢しながら護堂は河原をぶらぶら歩きはじめた。

　このあたりは草地だが、生えているのはせいぜい膝ひざ丈たけくらいまでの草花ばかり。

　割と見晴らしがいいので、火で明るい方は見ないようにしていたのだが。

「ふひゃあああああっ!?」

　アイーシャ夫人の悲鳴が聞こえてきた。

　まさか人がやってきたのか——あわてて護堂はたき火の方に走った。すると、向こうから夫人もこちらに駆けてくるところだった。

「どうかしたんですか!?」

「わわわ、わたくしの背中に何か変な感触が!?」

　そばに駆けつけると、アイーシャ夫人が護堂の胸に飛び込んできた。

　背中？　首をかしげつつ、彼女の姿をしげしげと眺めて——絶句した。あらためて注視すると、とんでもない格好だったのだ。

　まず基本的に、アイーシャ夫人は裸だった。一いつ糸しまとわぬ姿である。

すばらしい胸のふくらみも、その桃色の先端もむき出しになっている。そこから下も当然のように薄布一枚も身につけておらず、ただ編み上げのサンダルだけを足にはいていた。

そして、とっさに身につけたのだろう。

さっき護堂が木の枝にかけた生なま乾がわきのシャツを、肩にひっかけていた。

そういう美しくも扇せん情じよう的てきな格好なのである。そのうえ飛び込むように抱きついてきたものだから、柔らかいだけでなく弾はずむような乳ち房ぶさの感触も、褐かつ色しよくの肌のなめらかさもしっかりと護堂の上半身（こちらも裸だ）に密着している。

護堂は喉のど仏ぼとけが大きく動くのを自覚しながら、理性を総動員した。

夫人のなめらかな両肩をつかんで、褐色の裸ら体たいを自分の体から引きはがしつつ、できるだけ平常どおりの声を出そうとつとめた。

「背中に何があったっていうんですか？」

「はははは、は、早く取ってください～っ！」

涙目で訴えられたので、首をかしげつつ夫人の背中をのぞき込む。護堂のシャツを肩にひっかけているので、その白い生き地じしか見えない。

「へへへ、変な感触がもぞもぞしているんですっ。だだ大至急、駆除をお願いします！」

「そ、そんなことを頼まれてもですね……」

赤面しながら護堂は断ろうとした。が、アイーシャ夫人に涙目で、しかも上うわ目め遣づかいですがりつかれて、どうにも断り切れなくなる。

仕方なく夫人の肩にかかったシャツをひっぺがすと――肩けん甲こう骨こつあたりにヤモリがいた。

　適当に放り捨てる。バカバカしいことに、これで一件落着だった。

「ええと……終わりました」

「あ、ありがとうございます……」

　終わってみれば、大たい山ざん鳴めい動どうして鼠ねずみならぬヤモリ一匹。

　護堂の前には今度こそサンダル以外は何もまとっていないアイーシャ夫人の肢し体たいがしっかりと存在し、それを真正面から凝ぎよう視しする形になった。

　おまけに今夜はよく晴れていて、月が明るい。

　夫人のどんな女神にも後おくれを取らないであろう裸体が月明かりを浴びている。

　その様子はどこか幻想的ですらあった。おまけに、染しみひとつない褐色の素肌はようやく羞しゆう恥ちを覚えたのか、どんどん赤みを増していく——。

「きゃあああああああああっ！」

　ようやく悲鳴が出た。さらに、夫人は狼ろう狽ばいしながら叫ぶ。

「くく草薙さんったら、いつものうわべだけ真ま面じ目めなフリをかなぐり捨てて、わたくしのことをそんなふうに男性の顔で見つめて……っ！　や、やっぱり、わたくしのことが気になって仕方がないのですね!?」

「わけわからないこと言ってないで、早く服を着てくださいよ！」

4

　護ご堂どうとアイーシャ夫人は交代で火の番をしながら野営し、

朝を迎えた。

　毛布どころか余分な衣服もない。たき火だけが頼りの夜明かしだったが、ふたりとも風か邪ぜひとつひかなかった。幸運とカンピオーネの頑丈さのおかげだろう。

　明るくなると、さっそくライン川沿いの街道にもどった。

　下流方向に数時間歩き、小さな村に着いたところで食糧や旅の道具を買いそろえた。村人に訊きくと、ここからコロニア・アグリッピナまで徒歩で二日半だという。

「俺たちがアイーシャさんに追いついた街……モグンティアクムでしたっけ？　たしか、あそこからコロニアなんとかまで歩いて一週間って聞きましたけど」

「まあ。流されたことで、かえって近道できたようですね！」

　まさに禍か福ふくはあざなえる縄のごとし。

　幸運の加護をアイーシャ夫人に授ける権けん能のう、御ご利り益やくという点ではかなりの効能があるのだろう。不幸に巻きこまれたときの被害も甚じん大だいだが……。

　この村で夫人は新しい外がい套とうも買い直して、旅の再開となった。

　現代でも古代でも、騎乗用の馬は高価な家畜である。しかも、村には売り物にできる馬はいなかった。結局、カンピオーネふたりは徒歩での移動を選んだ。

　草くさ薙なぎ護堂は体力自慢の体育会系であり、歩きもそれほど苦にならない。

　たおやかなアイーシャ夫人も意外なほど健けん脚きやくだった。ふたり旅は拍ひよう子し抜ぬけするほど順調にはかどったのだが、少々いざこざが起きる場面もあった。

　陽ひが沈みはじめた頃、アイーシャ夫人がそわそわしながら言ったのだ。

「あ、あのっ。男と女は七歳を迎えたら、いっしょにいてはならな

いと申します。わたくしたち、今夜の宿ではべつべつの部屋に泊まるべきではないでしょうかっ！」

「たしかにそうですね。わかりました」

　当然のことを訴えられたので、もちろん即答する。

　なぜかアイーシャ夫人はびっくりして、まじまじと護堂の顔を見つめた。

「く、草薙さんはそれでいいのですか!?」

「もちろん、かまいませんよ」

「あ、あのっ。ふたり旅をいいことに適当な口実を設けて、わたくしと相部屋になろう……そういう不ふ埒らちな企たくらみはないのですか!?」

「あるはずないでしょう。ひとりでゆっくり休んでください」

　妙な心配をするアイーシャ夫人に、護堂は淡々と答える。もしかして、昨夜の『裸を見た／見られた』が彼女に余計な不安を抱かせているのだろうか？

「ええと、昨日のアレは俺たちの双方が不注意だったと思いますけど、比率で言えば責任の六割以上がアイーシャさんにあると思うんですよね……」

「ううっ……。それはまあ、大きな声では否定できませんけど……」

　しかし、その後も歩きつづけて判明したのだが、この近辺に都合よく泊まれる宿も人家もなさそうだった。ふたたび野営ということになる。

　もっとも、昨夜よりは気楽だった。

　旅の道具も買い直してあったし、美味とは言いがたい携行食だが食糧もある。もちろん盗賊などの不安はあったが、アイーシャ夫人の権能があれば人間相手のトラブルなら大たい過かなく切り抜けられるはず。というわけで、その夜――。

　街道をすこし離れた空き地で、ふたりは野営をはじめたのだが。

　たき火をはさんで護堂と向き合いながら、アイーシャ夫人は不安そうにつぶやく。

「あ、あの草薙さん。ふたりの間を隔へだてる壁がないからといって、不届きな真ま似ねをなさってはいけませんからね？」

「当たり前です」

「わ、わたくしだって女ですから、草薙さんが情熱的にわたくしを抱きよせて、いつもの慣れた調子で耳元に愛をささやいて、唇くちびるを奪おうとしたら、ちょっとだけクラッとしちゃうかもしれませんけど、そういうことをなさったら本当にダメですからね!?」

「そもそも、俺はそんな行動に慣れちゃいません」

「まあ。エリカさんと恵え那なさん相手に蜜みつ月げつの日々を過ごしておいでですのに？」

「あ、あいつらと俺の関係はそういうのじゃなくてですね！」

　この話題では分ぶが悪いことに護堂は気づいた。すぐに話題を変える。

「大体、アイーシャさんは俺より一五〇以上も歳上じゃないですか。そういう人を相手に口く説どくとか愛をささやくとか、ふつうはありえないでしょう？」

「そ、そこは『愛があれば歳の差なんて』と言うところです、草薙さん！」

「いやあ……ジェネレーションギャップとか、あると思うんですよねえ」

「もう！　わたくしをおばあさんみたいにおっしゃって！　言っておきますけど、わたくしは一五〇歳どころか、その半分だって生きておりません！」

　アイーシャ夫人はぷんぷん怒りながら、意外な反論をした。

「過去から現代に帰るとき、何十年か飛んじゃうことも多いです

し」

「……飛んじゃう？」

「過去の時代に三か月いたとしますね。それで通つう廊ろうを使って現代にもどったとき、三〇年くらい時間が経たっていることがあるんです」

「!?」

「逆に、過去に二年もいたはずなのに、現代に帰ると二日しか経ってなかったことも」

　浦うら島しま太た郎ろう、リップ・ヴァン・ウィンクル、一いつ炊すい之の夢ゆめ……。

　アイーシャ夫人の時を超える旅は、それらの物語を地じで行く不可思議さなのだ。そして、護堂は愕がく然ぜんとした。自分たちが現代に帰還したとき、もし一〇〇年の時が流れていて、『浦島太郎』をリアルに体験することになったら――。

　親しかった人たちが全て寿じゆ命みようを迎えて、死んでしまっていたら――。

　しかし、愕然とする護堂に夫人はあっさりと、

「まあ、帰ってくるときに呪じゆ力りよくをめいっぱい通廊に注ぎこめば、『何十年後』とか『何日後』みたいな時間指定はある程度できるのですけど」

　こう告げるのであった。護堂は拍ひよう子し抜ぬけした。

「……調節できるなら、どうして三〇年後とかに帰るんですか？」

「だ、だって、そういうところで工夫しないと、戸こ籍せき年齢は三〇歳なのに〝中身はおばあちゃん〟みたいになっちゃいますし！」

「自分の意思で、わざわざ浦島太郎になるわけですか……」

　一九九九年から旅立った時間旅行者が年とし増ま呼ばわりを避けるため、一〇年飛ばして二〇〇九年に〝帰還〟する。これほど壮大

なアンチエイジングがあったとは……。

　しかも、アイーシャ夫人はカンピオーネ。

　その人間離れした体質ゆえに、おそらく肉体は本当に若いままなのだろう。男の魔術師より女性魔術師の方が肉体的に加か齢れいしにくいらしい。

　これはカンピオーネにも当てはまる節ふしがある。義姉・羅ら翠すい蓮れんがいい例だった。

「だとしたら、ひとつ気になったんですけど」

「なんでしょう？」

「本当のところ、アイーシャさんって何歳なんですか？　戸籍年齢じゃなくて、実際に生きてきた時間って意味で」

　ちょっと失礼な質問かなと思いつつ、物は試しと護堂は訊たずねてみた。

　はたして、アイーシャ夫人はぐっと言葉に詰まった。

「ええと、その、あらたまって計算したことってありませんし……」

「大体でいいんです。四〇歳くらいとか五〇年は生きてないとか」

「…………」

「あ、いや。もちろん無理にはうかがいませんが」

「……一七歳です」

「へっ？」

「わたくし、心身共に今まで生きてきた年数は一七年になります！」

「待ってくださいよ。さすがにそれは無理のある数字です」

「わ、わたくしの人生を知らない草薙さんに、そんなこと言い切れるはずありませんっ。わたくしが一七歳と言ったら、そうなんで

す！」

「それじゃあ、俺と同年代ってことになります」

「な、何かご不満でも⁉」

　なんといっても、ふたりだけの旅。おしゃべりする以外に娯楽もない状況である。いつのまにか話が弾はずんでいた。しかし、護堂とアイーシャ夫人は同時に口をつぐんだ。

　夜風に乗って、独特の異い臭しゆうが流れてきたからだ。

　動物園などで嗅かぐことができる獣けものの臭気――あれをもっと強烈にしたものだ。

「牧場でも近くにあるんですかね？　豚とか牛を飼ってる」

「そうだといいんですけど……」

　アイーシャ夫人の返答はかんばしくなかった。

　しかし、実は護堂自身も自分の予想を信じていなかった。根拠はない。強しいて言えば勘かんである。この異臭、もっと不吉な事態の先ぶれでは――なんとなく、そう思ったのだ。

　護堂は無言のまま腰を上げ、風上に向かって歩き出す。

　アイーシャ夫人も黙ってうしろについてくる。

　ふたりがいる一帯は草が青々とたなびく平原だった。前方の小さな丘を登り切ったとき、護堂とアイーシャ夫人は絶句した。丘の向こう側では、五、六〇頭はいるであろう熊の群れが移動中だったのだ。

　ひとつの方角をめざして、全ての熊がのそのそと歩いていく。

　羊飼いにひきいられる羊の群れのようだった。熊たちのにおいが風に乗って、護堂たちの野営場所まで届いたのだ。

　また、驚くべき点があった。熊たちはどれも体格がよく、体長二メートル前後はあろう大型の個体ばかりなのだが、たまにもっと巨大な熊がいる。

　体長にして四、五メートルはありそうな、小山のごとき熊だった。

「アイーシャさん。あれ、この時代ではふつうの熊ってことはないですよね？」

「さすがにそれはないと思いますけど……」

　熊たちはどれも気が立っているらしく、目つきが険けわしい。しかし、まわりにいる同族とケンカをはじめる熊は一頭もいなかった。

　まるで殴なぐり込みに赴おもむくヤクザの一家だ——などと護堂が考えたとき。

　熊たちの行く手に、人間の集団が現れた。その数、こちらは八〇名ほど。全員が剣や槍やり、斧おのや楯たてなどで武装し、しかも殺気立っていた。

「あら？　これってもしかして？」

「俺の目には、抗争をはじめる寸前のヤクザ同士に見えますね」

　つぶやいた直後、この印象が正しかったと判明した。

　なんと武装した人間たちはやにわに武器を抜き、「オオオオオオオオオッ！」と鬨ときの声をあげながら、熊軍団に向かって突撃をはじめたのである！

「ええっ!?」

　無む謀ぼうもいいところではないかと、護堂は驚きよう愕がくした。

　人間側はみんな白人で、大おお柄がらな者が多い。武装はバラバラだ。総じて髪の色は明るく、そして奇妙な髪型の者がほとんどだった。頭のてっぺんの髪を〝ちょんまげ〟のように結い上げているのである。

「あれはたぶん、フランク族ですね」

「本当ですか!?」

「はい。あの髪型はフランク族の風習だったはずです」

　戦いはじめた武装集団を、アイーシャ夫人は丘の上から指さした。

　まず彼らは手斧を近くにいた熊へ投げつける。それで獣たちがひるんだところに、剣や槍で攻撃を仕掛ける。多くのフランク人戦士がまず手斧の投とう擲てきから接近戦に移っていった。奇抜な髪型と同じく、彼らの習俗なのだろう。

　フランクの戦士は、総じて無謀なほど勇ゆう敢かんだった。

　体格・パワーで人間を凌りよう駕がする熊軍団に、果か敢かんに切り込んでいくのである。

　ある熊は後ろ肢あしで竿さお立だちになると前まえ肢あしでフランク族を殴りつけ、鋭い爪つめで引き裂く。べつの熊はのこのこ近づいてきたフランク族に飛びかかり、シンプルに噛かみつく。

　獰どう猛もうな獣の攻撃は、すくなからぬ血と絶叫を戦場に生み出していく。

　しかし、それらをぎりぎりで避けたり、楯で防ぐフランク族も結構いた。生きのびた者たちは剣や戦せん斧ぷを熊たちに打ち込んで、逆襲をはじめる。また、柄えの長い槍で遠とお間まから熊を刺す者もいる。弓を射る者もいる。

　戦闘がはじまったときは、フランク族の惨ざん敗ぱいかと護堂は思ったのだが。

　意外にも互角の戦況だった。エリカや恵那ほど武芸に長たけた戦士はいない。だが、古代の戦士たちは古代の武具を駆使して、猛獣たちと立派に渡り合っていた。

「そういえば、ローマの闘技場でも剣闘士が猛獣相手に勝ってたんだっけ……」

　エリカから聞いた話を護堂は思い出した。

　格闘家が素手で熊に挑むのは自殺行為だろう。しかし、槍・楯・投と網あみなどがあれば、人間でもライオン相手に悪くない勝率を得ることはできる。古代の剣闘士が証明していた。

だが今回、熊たちのなかに規格外の大物がいる。

例の体長四、五メートルはありそうな、小山のごとき熊である。

全部で六匹いた。さすがにこの連中にはフランク族も互角以上とは言えず、大いに苦戦していた。犠ぎ牲せい者しやも次々と出る。護堂は眉まゆをひそめた。人命救助と動物愛護、どちらの点からも積極的に肯こう定ていしたくはない。

「草薙さん。わたくし、あの戦いをやめさせてきます！」

「じゃあ、俺もいっしょに行き――」

アイーシャ夫人の訴えにうなずきかけた瞬間、護堂は見た。

フランク族のなかには戦闘に参加せず、後方で荷馬車を守る男が数名いた。そのうちのひとりが戦闘の最も激しいあたりにふらふら向かっていくのを。

途中、何度か熊たちが彼を襲った。

彼はそのたびに熊たちの腕や牙きばをすり抜けて、前進していく。

花びらがひらひら舞い落ちるように、のんびりした体さばきでひらりと猛獣の体を避けるのだ。単純に見えて、深い武術への造ぞう詣けいに裏打ちされた動きだった。

彼が向かったのは、ひときわ巨大な熊たちがいるあたりだ。

そこで奮ふん戦せん中だったフランク族の面々は、彼の登場に気づくなり後方へ下がっていく。

邪魔しないつもりなのだ。『王』の戦いを。

彼は腰につるしていた長剣を無造作に抜き、大型熊の一匹に近づいていく。

体長四、五メートルの大熊。後ろ肢で立てば、一戸建ての家に匹ひつ敵てきするほどの高さと幅になる。そんな猛獣に向かって、彼はのんびりと歩み寄るのだ。

そう、知り合いの家に上がりこむような自然さで。

そして、剣の一いつ閃せん。

護堂の動体視力とカンピオーネの集中力でも、太た刀ち筋すじはよく見えなかった。だが、今の一太刀で大型熊の巨体はまっぷたつに切れた。

頭頂から股こ間かんにかけてが一直線に切れてしまい、まさに一刀両断だった。

にもかかわらず、大型熊の体からは一滴の血も流れ出ない。この世の生き物ではないからだろう。神獣たちと似たような存在なのだ。青年は同じ要領で剣をもう五回振るった。

残っていた大型熊はそのたびに一刀両断され、あっというまに全滅した。

「——!?」

護堂の隣でアイーシャ夫人が息を呑のんだ。

今の一幕に驚いたのと、彼の正体に気づいたのだろう。

「ドニのやつがいました。まず俺が行ってきます」

声をかけてから、護堂は丘を下りる。すぐうしろにアイーシャ夫人がついてくるのを知りながら、しかし、視線は向こうにいる男から外さない。

その剣技と魔剣の真しん骨こつ頂ちようを見せた、金髪の青年である。

もちろんサルバトーレ・ドニだった。数か月も古代をさまよっていただけあって、衣服はこちらのものだ。Ｔシャツに似たトゥニカという服に腰帯を締め、細身のズボンをはき、茶ちや褐かつ色しよくの外套を羽織っただけの簡素な格好だ。

ただ靴だけは、現代の革ブーツを愛用していた。

やはり、こちらの方が機能的なのだろう。腰帯に長剣をつるしている。

　古代ガリアの刀剣は多くが片手用で、柄つかが短い。しかし、ドニの剣は柄が長く、片手でも両手でもあつかえるようになっている。おそらく、これも現代から持ち込んだ品だ。

　護堂の接近に気づいて、ドニは陽気に笑った。

「やあ護堂。すごくひさしぶりに会えた気がするよ」

「当たり前だ。あんた、こっちに来て三か月になるんだろ？」

　ため息をつきながら護堂は言った。

　尚なお、大型熊たちは全滅したが、ふつうの熊がまだ数十頭も残っている。

　しかし、この連中はフランク族と戦うのを唐突にやめて、おとなしくなった。人間への敵意と興味を失ったらしい。まるで憑つき物ものが落ちたようだった。

　熊たちは各おの々おの勝手に歩き出し、のそのそと去りはじめる。

　用事は終わったから森に帰ると言わんばかりの行動だった。敵の撤てつ退たいを見て、生き残ったフランク族の戦士たちは勝かち鬨どきの歓声をあげた。

　オオオオオオオッ！　オオオオオオオッ！　オオオオオオオッ！

　夜の平原に戦士の雄お叫たけびがこだましている。

「あんたのうわさ、いろいろ聞いてるぞ。フランクって部族の親分になったとか、フン族のウルディンに戦おうと言ったとか」

「おっ。君もこの時代のカンピオーネと会ったんだね」

「それだけじゃなくて、俺たちの時代の人にもな……」

　護堂とドニのそばにアイーシャ夫人はいなかった。傷ついて横たわるフランク族の間をうろうろしている。彼らのために傷を癒いやしてまわっているのだ。

　即死さえしていなければ、どんな重傷者も快かい癒ゆさせる夫人

の権けん能のう。

　それを見て、ドニは「なるほどねえ」と笑う。こういうことには鋭いのだ。

「さすが我わが友、僕の護堂だ。アイーシャ夫人をいつのまにか見つけてきたんだね。あの人、やっぱり強いのかな？」

「あんたの言ってる意味合いでは全然強くない。あと、俺の名前に所有格をつけるな」

　ドニの戦意をあおるといけないので、きっぱりと護堂は言った。

　もっとも、彼女が『弱い』とはまったく思わない。アイーシャ夫人の恐ろしさは、おそらく剣を振るっての戦いとは完全に異なる次元のものなのだ。

　その想おもいを悟ったか、ドニは珍しく女性に興味津しん々しんのまなざしを向けたのだが。

　急ににやにやと笑って、護堂へ向き直った。

「ねえ護堂。積もる話をたっぷりしたいところだけどさ。ちょっと僕の野や暮ぼ用ようにつきあってくれないかな？」

　次いで、丘の方に視線を転じる。さっきまで護堂たちがいた場所だ。

　つられて護堂もそちらを見て、驚いた。丘の上にはいつのまにか新あら手てが集結していた。さっきドニが全滅させたのと同じ、一軒家と見まごうほど大きな熊たちである。

　しかも、今度は三〇匹近くいた。

　こいつらが丘の上にずらりと一列にならび、こちらを——より正確に言うとサルバトーレ・ドニを獰どう猛もうなまなざしで見下ろしているのである。

　しかも、大型熊たちの背後には、さらに巨大な獣が立っていた！

　全長三〇メートルはあるだろう。姿形はほぼミミズク——しかし、翼の代わりに太い前肢が生えている。ミミズクと熊を混血させ

た生き物にも見える。

　動物図鑑には絶対に載のってないミミズク熊を見て、護堂はつぶやいた。

「なんかのアニメに出てきた、森の主ぬしみたいだな……」

　ミミズク熊は後ろ肢で直立し、面つら構がまえには神こう々ごうしい威い厳げんが宿る。

　明らかに神獣だった。護堂は背筋がぞくりと震え、戦うための力が全身にみなぎるのを感じた。隣にいるドニがにやりと笑いかけてくる。

　一方、まわりのフランク族たちは巨大な神獣を見あげて、恐きよう慌こうを来きたしていた。

　恐怖の叫びをあげて、震えながら抜ばつ刀とうしたり逃げ出したりと大混乱だった。戦場で蛮ばん勇ゆうは振るえても、未知なる怪物への恐怖は抑おさえがたいのだろう。

　アイーシャ夫人もびっくりした表情で神獣を見あげている。

「あのでかいのは護堂にまかせるよ。僕は小さい連中をかたづける！」

「厄やつ介かいな方を人に押しつけるなよ！」

　文句をつけながら、護堂はきっと巨大なミミズクをにらんだ。

　ドニにつきあう義理はない。しかし、ここで戦うのを躊ちゆう躇ちよしたら、アイーシャ夫人やフランク族に危害が及んでしまう。そして、さっきの気配——。

「長き腕の一撃よ！」

　ドニはさっと横よこ一いち文もん字じに長剣を大振りした。

　すると、『全てを切り裂く魔剣』の切っ先から銀色の光が放たれる。

　この光は夜よ闇やみのなかにきれいな横一文字を描き、丘の上で

横一列になっていた大型熊の軍団をまとめて一ひと薙なぎにした。三〇匹もいた敵を全て腰のあたりで一刀両断してしまう。

　ここから丘の上まで五〇メートル近く離れている。恐るべき神かみ業わざだった。

　もっとも、隣にいた護堂も怠なまけていたわけではない。

「鋭く近寄り難がたき者よ、契約を破りし罪科に鉄てつ槌ついを下せ！」

　こちらも言こと霊だまを唱え、『猪いのしし』を呼ぶ。

　標的はもちろん、全長三〇メートルのミミズク熊だった。

　対するは漆しつ黒こくの毛皮を持つ、サイズ二〇メートル程度の大猪。体格で言えば大幅に負けている。しかし、それでひるむ草薙護堂の分身ではない。

　オオオオオォォォォォォオオオオオオオンッ！

　いつもの咆ほう哮こうと共に『猪』は全力疾しっ走そうをはじめ、地響きを立てながら緑の丘を一瞬にして駆けあがる。そして、口元の牙を槍の穂ほ先さきさながらに突き出しながら、体当たり！

　対して、ミミズク熊は己おのれの巨大さを誇こ示じするように仁に王おう立だちする。

　ガアアアアゥゥゥゥガアアアアアアアアアッ！

　こちらも咆哮しながら、大横綱のように『猪』の突進を真っ向から受け止める。巨大な神獣同士の正面衝突だった。

　結果は――『猪』の勢いとパワーが勝った。

　大猪は牙でミミズク熊の胸を深々と抉えぐり、獲え物ものを豪快に押し倒す。

　巨獣二体の重量をまとめて受け止め、大地は『ズゥゥゥゥゥゥゥン！』という重厚な轟ごう音おんとすさまじい震動に揺さぶられる。

　ミミズク熊はそのまま消滅し、『猪』が勝利の咆哮をほとばしらせた。

　オオオオオオオオォォォォォォンンッ！

　だが、護堂は眉をひそめた。もっと苦戦しなければおかしいのだ。敵の主人はかなり近くにいるはずなのだから。

　てっきり、下僕しもべの神獣に力を送りこんでくると予想していたのだが。

「手負いなんだよ。だから、慎重になってるのさ」

　ドニにウインクされて、護堂はわずかにムッとした。

　草薙護堂の内心を見み透すかしたようなタイミングで声をかけてきたのが、妙に腹立たしく思えたのだ。ともかく、あらためて丘の上を眺める。

『猪』が勝利の余よ韻いんにまかせて、月に向かって遠とお吠ぼえしていた。

　だが次の瞬間、地面から緑色の煙が立ちのぼってきた。これに取りまかれた『猪』は急にびくっとして、咳せきこみはじめる。

　緑の煙はそのまま黒き巨体をつつみこみ、『猪』の咳せきはさらにひどくなった。

「草薙さん、あれは毒の霧きりです！　あのままだと危険ですよ！」

　そばにやってきたアイーシャ夫人が声をかけてくれた。

　さすが癒やしの権能の使い手、即座に見破ったらしい。そして、敵は勝利で気が大きくなった『猪』の隙すきを突いたのだ。なかなかに狡こう猾かつだった。

「ここはもういい。早く消えろ！」

　咳きこむだけでなく悶もん絶ぜつまではじめた『猪』へ、護堂は命じた。

漆黒の神獣はすぐに姿を消した。退去指令に従順だったのは、すでに標的を撃破したあとだからだろう。フランク族の集団も戦場から撤退している。

巨大な怪獣がつづけざまに現れたので、恐怖が限界に達したようだ。

ここに残ったのは三人の神殺しと——

「そろそろ姿を見せたらどうだ？」

隠れている者へ護堂は適当に声をかける。

すると、ひとりの美女が忽こつ然ぜんと姿を顕あらわした。大柄で、その眼光は鋭く、女王のごとき尊大さと威厳を振りまいている。身にまとうのは肌着のように簡素な衣ころもだが、そのうえに毛皮を羽織っていた。

熊の頭部ごと剥はぎ取ったとおぼしき、濃い茶褐色の毛皮である。

しかも、彼女は死せる猛獣の死に顔を王おう冠かん代わりに頭へ載のせていた。

護堂は確信した。今、目の前にいるのは『獣の女王』と呼ぶべき女神なのだ。カンピオーネの心身は神と遭遇すると臨戦態勢になる。すこし前に戦うための力がみなぎってきたので、出現はとっくに予期していた。

「実を申せば、今の今まで迷っておった……」

獣の女神はぼそりとささやいた。

「口くち惜おしいことに、この世界には幾人も神殺しがおる……。そのうちのひとりに深傷ふかでまで負わされた……。傷ついた我が身では、復讐を果たすことも容易ではない……」

毛皮以外は下着まがいの格好なので、すぐにわかった。

女神の白い腹部には、縦たて長ながの裂れつ傷しようが穿うがたれている。その傷口は赤黒くただれ、見るからに痛々しい。これが深傷なのだろう。

「しかし、じゃ。だからといって、地に属する女神があの刃やいばを鍛きたえることは許されぬ。ほかの誰でもない、妾わらわの誇りがそれを許さぬのじゃ。だから迷っておった。そのための準備をすでに済ませても尚なお、な……」

　ここで女神はじろりと護堂たちを見み据すえた。



　サルバトーレ・ドニ、草薙護堂、アイーシャ夫人の三人を順々に見つめ、それから悩ましげに頭を振り、最後に諦てい念ねんをこめてつぶやいた。

「が、こうとなっては是非もない。神殺しがさらにふたりも増えた以上、妾にも汚水で傷口をそそぐ覚悟が必要じゃろう。……心せよ、神殺しども。忌いむべき羅ら刹せつの王どもよ」

　獣の女神は静かに告げてから、ふっとやわらかに微笑した。

「次にまみえるとき、そなたらに我が息子を引き合わせよう。その者はそなたらを征せい伐ばつし、抹まつ殺さつするため天から遣つかわされる者じゃ」

　護堂たちカンピオーネの死を告知するくせに、女神の口ぶりは穏おだやかだった。

　まるで、雄ゆう敵てきたちのすでに確定した死を哀あい悼とうするかのように。

「女神アルティオの息子がいずれそなたらの前に顕れる。その時を恐れるがいい……」

　謡うたうようなつぶやきを残して、女神の姿は忽こつ然ぜんと消え失せた。

　かくして、草薙護堂は古代ガリアでも『まつろわぬ神』と遭遇したのである。

　彼女の名は女神アルティオ。この邂かい逅こうは新たなる——そして、あってはならない戦いの幕開けであった。

第３章　ガリアの地の女神

1

　サルバトーレ・ドニが流れ着いたのは、三か月前の古代ガリアである。

　この時代の神殺し・ウルディンと出会ったあと、ぶらりと北へ向かった。現代から持参した長剣を適当に放り投げたら、切っ先の指す方向がたまたま北だったのだ。

　長剣以外は着の身着のまま、一いち文もん無なしでの古代旅行。

　現代とは言葉も違う。知り合いもいない。並の二一世紀人であれば三日で降参してしまうかもしれない。しかし、ドニは飄ひよう々ひようと楽しんだ。

　言葉はウルディンの砦とりでに何日か滞在したときに覚えていた。

　金はなかったが、持ち前の陽気さと図々しさでたまたま行きあった隊商に用心棒として潜もぐりこみ、堂々の無銭旅行をスタート。さらに盗賊団が襲ってきたときは生け捕りにして彼らの持ち金を没収。金品の隠し場所まで案内させて、そちらもちゃっかり押おう収しゆう……。

　悠ゆう々ゆう自じ適てきで旅するドニは、やがてフランク族が暮らす一帯にやってきた。

　フランク族はもともとライン川沿岸部に出没し、ローマ帝国の住民相手に略りやく奪だつ行為を繰りかえす蛮ばん族ぞくだった。しかし、皇帝ユリアヌスに鎮ちん圧あつされたあとは『同盟者』とい

う形で帝国に臣しん従じゆうし、現代でいうオランダ南部やベルギー北部に入にゆう植しよくした。

　そして、たまたまドニが立ちよった村——。

　まるでお通つ夜やのように静まりかえっていたという。フランク族の村人たちは運命の過酷さを呪のろい、涙し、嘆なげき悲しんでいた。

　この村はまもなく滅びると、彼らは言った。神の呪いによって。

「呪い？」

「そうそう。さっきの女神、アルティオを怒らせたとかで『おまえたちは何十日後に全員死ぬ～！』って予言されてたんだよ。そこに僕が来たわけだ」

　いぶかしむ護ご堂どうにドニは説明した。

　熊たちとの戦いのあと、護堂とアイーシャ夫人はフランク族と共に夜を明かした。

　そして翌朝、コロニア・アグリッピナへと旅立ったのである。

　三人のカンピオーネを荷台に載のせて、荷馬車は街道をゆっくり進んでいく。ドニ配下のフランク族たちも徒歩で付きしたがっているため、それほどスピードは出していない。

「それであんたは女神と戦ったのか……」

「いい戦いだったよ。おたがい深傷ふかでをあたえ合ったあげく、最後は痛み分けになって。まあ、向こうより僕の方が治りは早かったけど」

　ドニの魔剣はあらゆるものを切り裂く。しかし、それだけではない。

　切った相手を爆発させたり、容易に癒いえない刀とう創そうをあたえたりと、多彩な応用変化を見せるのだ。護堂も味わった経験がある。アルティオの傷はそれで治りが遅いのだろう。

　一方、三人目の人物は感動の面おも持もちで話に聞き入っていた。

「じゃあ、ドニさんはフランク族のみなさんを守るために命いのち懸がけで戦われたのですね……。なんて気け高だかい自じ己こ犠ぎ牲せいなのでしょう！」

　もちろん、アイーシャ夫人の言葉だった。

　素直で善良な人ひと柄がらゆえか、ドニの行動をめいっぱい好意的に解釈している。

　護堂などが『こいつ、深く考えないどころか何も考えないまま行き当たりばったりで行動していただけだろうな……。とりあえず神様と出会ったから戦っただけで』と想像しているのとは、大ちがいだった。

「す、すいませんっ。わたくし、サルバトーレ・ドニという方を周囲の迷惑を気にもしないで横暴な振る舞いをする鬼き畜ちく外げ道どうだと勘かんちがいしていました！」

「そうだったんだ？　じゃあ、誤解がとけてよかったよ」

　答えるドニは当然のようにへらへらと笑っていた。

「いや、実を言うとさ。友達のアンドレアが僕のことをよく人間のクズだとか、生きている価値もないとか、無む脊せき椎つい動物なみの考えなしとか、人に迷惑をかけるために生まれたケダモノとか言うから、ときどき自分でもそうなのかなーって思うんだけど」

「まあ、ドニさんの気け高だかい心根がわからないなんて！　その方はきっと、ひどいアンポンタンにちがいありませんっ」

「…………」

　カンピオーネふたりが意気投合しているのを見て、護堂は天を仰あおいだ。コロニア・アグリッピナを陥かん落らくさせたドニの〝悪行〟、夫人はすっかり忘れているようだ。

　まあ、変に揉もめるより楽でいいのかもしれない。

　この件はすこし棚たな上あげすることにして、護堂は話題を変え

た。

「で、あんたはどうしてフランク族のボスになってるんだ？」

「それがねえ。女神と戦ったあとフランク族の村で療養してたら、頼まれたんだ。僕にあの一帯のフランク族を治める族長になって欲しいって」

「なんでそうなるんだよ⁉」

　つっこむ護堂に、ドニはのほほんと語る。

「僕がいれば女神にも勝てるから、だってさ。で、ほかの土地のフランク族も僕のことを聞いて、仲間になりに来たり、僕の力を試しに来たりして……適当にやってたら、いつのまにか僕が〝大族長〟ってことになってた」

「何だよ、大族長って……」

「いくつかの部族に分かれているフランク族をまとめて統治する大親分って感じかねえ？　まあ、みんないっしょに戦うっていうし、べつにいいかと思って」

「まあいいかで王様になるなよ……」

　フランク族は勇ゆう猛もう果か敢かんな戦士の部族なのだろう。熊軍団との戦いぶりからも、それは明らかだった。そして、たったひとりで神と互角に戦うドニの強大さに感動し、この男を生き神さまのごとく敬うやまうようになったのではないか——。

　実際、彼らは『猪いのしし』を呼んだ護堂にも最上級のうやうやしさで接してくるのである。

　アイーシャ夫人も『奇跡の癒いやし手』として、早くも崇すう拝はいされていた。彼女は傷ついたフランク族と、おまけに熊たちまで蘇そ生せいさせて、その力をみんなに見せつけていた。

「でさ。あの女神は手下の熊軍団にときどきフランク族の集落を襲わせるんだ。みんなをその襲撃から守るためにも、城が欲しいだろ？　ライン川の方に城壁のあるローマの街がちょうどよくあったから、しばらく貸してほしいって頼みに行ったんだよね」

「コロニア・アグリッピナって街か」

「そうそう、それそれ。そしたら話がこじれて、あの街のローマ軍団と僕とで対決することになって。最後は腕ずくで街から追い出す感じになっちゃったよ」

「なっちゃったよ、じゃない！」

「で、僕が街を奪ったと聞いて、あちこちからフランク族が集まってきてね。今、アルティオとの第二ラウンドにむけて準備中なんだ。僕も退屈しのぎに部隊を連れて偵てい察さつに出たら、昨日の戦いになったわけさ」

　事情を知って、護堂はため息をついた。

「歴史が変わるようなこと、好き勝手にやるなよな」

「まあまあ。そこはノリと勢いさ！」

「どんなにいい笑顔で言っても、たわごとはたわごとだからな……。ところで、ひとつ疑問なんだけど。アルティオって女神はどうしてフランク族を呪うんだ？」

　朗ほがらかに親指を立てたドニへ文句をつけてから、護堂は話題を変えた。

　すこしでも生産的な話をしなければという義務感ゆえだった。

「何か恨うらみでもあるのか？」

「そういえば、何でだろうねえ？」

「そこがいちばん重要なところだろう、このバカ！」

「ええと、前の決闘のとき、アルティオが何か言ってたな。たしかフランク族の襲撃を受けて滅びたガリアの民たみの恨うらみ辛つらみが、彼女を地上に呼び出したとか」

「ガリアの民の——恨み？」

　しかし、フランク人もガリアの民ではないのか？

　意味がわからない護堂。意味を気にしていないドニ。しかし、三

人目のカンピオーネはちがった。アイーシャ夫人はすこし痛ましそうにつぶやく。

「アルティオという女神……たぶんケルトの神なのでしょうね」

「どういう意味ですか？」

「すごく大おお雑ざつ把ぱに説明すると、古代ガリアはローマ帝国の領土ですけど、住人であるガリア人の多くはケルト系の部族なんです」

　古代ヨーロッパの住民だったというケルト人。

　護堂もぼんやりとだが知ってはいる。固有の文字を持たず、自然を崇拝し、鉄器の使用にも長たけた民族。しかし、古代から中世へと時代が進むにつれて衰すい退たいしていったという。

「ケルト人ってたしかゲルマン人とかに負けて土地を追われるうちに、ドーバー海峡を渡ってイギリスの方に行きつくんですよね？」

「そう言われてますね。そして、ゲルマン系の部族にはゴート族、ロンバルド族、ブルグンド族、のちにフランスを建国するフランク族などがいまして……」

「ああ……」

「フランク族は長い間ガリア各地を襲って、殺さつ戮りくと略奪を繰りかえしてきたはずです」

「で、滅ぼされた側がわの呪いがあの女神様を呼び出したわけですか……」

「もしかしたら、ケルトの血を引く魔術師なり神官ドルイドの方々が『まつろわぬ神』招しよう聘へいの儀を行ったのかもしれませんね……」

　まさに諸しよ行ぎよう無む常じよう、栄えい枯こ盛せい衰すいの物語である。現代人の価値観からすれば、フランク族が女神に襲われている現状は因いん果が応おう報ほうとしか言いようのないものだ。

　とはいえ、人間世界の興亡にまつろわぬ神々がその権けん能のう

をもって介入する。

　これは、やはり筋ちがいではないか。

　結局のところ、護堂は通りすがりの現代人に過ぎない。フランク族にもローマ帝国にも肩入れするつもりはなかった。しかし、ひとまずは人間側の一員として、あの女神を追い払う程度のボランティアはすべきではないか――。

「まあ、そうするにしてもドニのやってる方法だけは〝なし〟だけどな……」

「おいおい。僕がまずいことしてるみたいに言わないでくれよ」

「みたいじゃない。あんたは現在進行形でまずいことやりまくってる。あの女神さまは俺がどうにかするから、しばらくどこかで休んでろよ」

「いやいや。そこはこう提案するところだよ」

　正論を訴えたら、ドニはのほほんと言いかえしてきた。

「草くさ薙なぎ護堂とサルバトーレ・ドニ、どちらのカンピオーネが先に女神を倒すか――二人で競争することにしようって！」

「あいかわらず無茶苦茶言うやつだな……」

　護堂はぼやきながら考えてみた。

　ドニを野放しにするのは論外。しかし、どこかに監禁するのもむずかしい。むしろ行動を共にして、この男がバカを加速させないようお目め付つけ役やくになるべきではないか？

　ここが落としどころか。心からのため息と共に護堂は言う。

「仕方ない。そのアイデアに乗ってやるから、必ず俺の目の届くところにいろよ？」

「おっ。抜け駆け禁止ってやつだね。いっそアルティオと戦う直前に、僕と君のどちらが挑戦者になるか決定戦でもやるかい？」

「うるさい。そんな疲れること、誰がやるものか」

　にべもなくドニをあしらっていた護堂だが、不意に気づいた。

　アイーシャ夫人がじーっとこちらを見ている。それもとがめるように。

「どうかしましたか、アイーシャさん？」

「あ、いえ。草薙さんったら『俺の目の届くところにいろ』なんて熱烈なセリフをおっしゃって、まるで口く説どくおつもりがあるみたい……」

「バカ言わないでください。俺はアイーシャさんにも同じお願いをしたいんですから」

「えっ？」

「必ず俺の目の届くところに――俺のそばにいてください」

　ドニとはべつの意味で、アイーシャ夫人も野放しにできない人だった。

　茶ちゃ化かされてはたまらないので、護堂はできるかぎり真しん摯しに訴える。すると、夫人はなぜかもじもじしながら、こくりとうなずいてくれた。

「し、仕方ありませんね。草薙さんがそうまでおっしゃるのでしたら、できるかぎりそうしてみます……」

　その後もフランク族にかこまれながらの旅は続く。

　翌日の午後、ライン川沿いの街道を進む護堂たちの前に大きな街が見えてきた。

　ここも大河のほとりに建造されたローマ植民市である。市の東側はライン川に面しており、残る北・西・南は城壁でかこまれている。四方の防御は盤ばん石じゃくだった。

　これがコロニア・アグリッピナ。

　一週間ほど前、サルバトーレ・ドニが我わが物とした都市であった。

2

古代ローマの植民市が原型となったヨーロッパの都市は多い。

護ご堂どうが立ちよった諸都市以外にも、ボンナ（ボン）、ルテティア（パリ）、ポルトゥス・ナムネトゥム（ナント）、ルグドゥヌム（リヨン）、ゲナウァ（ジュネーブ）、マッサリア（マルセイユ）、アクインクム（ブダペスト）。

現代名を聞けば、日本人でも「そういえば」と思い出す都市ばかりだ。

しかし、無理からぬ話だった。上下水道、街道網、公衆浴場といった生活にかかわるインフラ。闘技場、劇場といった娯楽施設。そして常じよう駐ちゆうするローマ軍団による庇ひ護ご――。

どの植民市もそれらをほとんど全て擁ようしていた。

当然、人々は快適で刺激的な都市に集まり、その発展は後世にも引き継がれたのだ。

のちにケルンとなるコロニア・アグリッピナ市もローマ様式の都市インフラを完備し、今までの住すみ処かであるアウグスタ・ラウリカ同様のすごしやすさだった。しかも、あの街とちがって都市のまわりが城壁で防御されている。

かつてローマ皇帝を僭せん称しようした軍人たちも、一時期ここを帝都に定めたらしい。

「こんな街をひとりで陥おとしたって、どんな武勇伝だよ……」

ドニがさらりと語った話を護堂は思い出した。

コロニア・アグリッピナに到着した二日後である。今はフランク族が〝大族長の盟友〟のために用意した広い邸宅、その中庭にいる。

サルバトーレ・ドニ唯ゆい一いつの得え手ては剣。

しかし、剣とは本来『一対一』の局面で振るうべき武器だ。

ここ古代のローマ軍団。彼らは長なが柄えの槍やりと楯たてを標準武装とし、戦場では陣形を組んで集団行動する。これに対抗できる武装としては弓矢があり、騎馬がある。そうした武装と戦法こそが戦場では最も効果的だからだ。

孤こ剣けんをもって戦場の覇は者しやとなるなど、人間業わざではない。

だが、サルバトーレ・ドニはそれをのほほんとやってみせたのである。

おそらく大熊たちとの戦いで見せた一いつ刀とう殲せん滅めつの秘剣などを思いつくままに駆使して、数十から数百名の敵兵をまとめて蹴け散ちらしつつ、本人が語ったとおり『気づいたら勝っていた』のだろう。本当にとんでもない。

「失礼いたします、ご主人さま」

「……昨日言ったとおり、その呼び方はやめてくれないか」

呼びかけられて、護堂は即座に答えた。

いつのまにか、隣に小間使いの少女が来ていたのだ。なかなか可愛かわいらしい顔立ちをした、一六歳前後のフランク族である。ここ『草くさ薙なぎ護堂の邸宅』に案内されたのは昨日だが、そのとき紹介された屋敷付きの使用人――のひとりだった。

「こそばゆいし、べつに使用人とか必要じゃないからさ」

「何をおっしゃいます。ご主人さまは大族長の盟友にして、『トゥールの剣』ウルディンと互角に戦った方。召使いの三〇人くらい、誰も文句は言いません。むしろ、倍に増やしたっていいくらいです」

「…………」

この小間使い少女をふくめて、護堂の屋敷には三〇人もの使用人がいた。

ありがた迷惑な話だが、フランク族が手配してくれたのだ。もと

はローマ軍将校の別宅だったという屋敷は破格に広く、住みこみの召使いが三〇人いてもまだ余裕があった。

「じゃあ、そこはひとまず置くとして」

　自分の声に苦みが加わるのを護堂は自覚した。

「その三〇人が全員、若い女の人ってのはどうしてだ!?　女ばかりの屋敷に男は俺ひとり、肩身が狭くて仕方ないぞ！　せめて男、男の人たちに替えてくれ！」

「ふふっ。またそんなことをおっしゃるのですね」

　護堂が心からの願いを口にしても、小間使い少女は微笑するばかりだった。

　彼女はフランク貴族の娘で、身分ある人間とのつきあいにも〝慣れている〟とのふれこみだった。その慣れからか、ときどき〝なれなれしい〟振る舞いをするのだ。

　わかっていると言わんばかりにうなずき、彼女は言う。

「前におられた都での暮らしぶり、聞き及んでおりますわ。おふたりの寵ちよう姫きをかこわれて、愛の巣をお築きだったとか。また、色好みとして名高いウルディン殿と意気投合、『女の好みが合う』とかで義兄弟の契ちぎりまで交かわされたとも……」

「その与よ太た話ばなし、アイーシャさんが出所か!?　ほとんどウソだからな！」

　単純に『アウグスタ・ラウリカの草薙護堂』のうわさは、このコロニア・アグリッピナまで届いていても不思議ではない。

　しかし、その人物と『大族長の盟友』を結びつける情報はすくないはず。

　だというのに、こんなことを小間使いの少女が知っている。情報源になりうる人物はいっしょにラウリカから来たアイーシャ夫人しかいなかった。

　一方、興奮する護堂に対して、小間使い少女は訳知り顔で言った。

「そのような御方のお屋敷を用意する以上、お仕つかえする者の顔ぶれも吟ぎん味みさせていただきました。我わが部族の気持ちとして、存分にお受けあそばしませ」

「だから肩身が狭いんだよ！　本当に居心地悪いんだって！」

　護堂が今いる場所は、屋敷の中庭である。

　邸内では一〇代前半から後半の少女たち（容よう姿し端たん麗れいな者が多かった）が三〇人もいて、あちこちで甲か斐い甲が斐いしく家事に励んでいる。そのなかにいると落ち着かないため、ベランダで煙草たばこを吸う父親よろしく、中庭に出たのである。

「うかがっていたとおり、お口では生き真ま面じ目めなことばかりおっしゃるのですね」

「うそ偽いつわりない、俺の正直な気持ちだっ。ところで、何か用事でも？」

「さようでございました。実はご主人さまに客人がいらしております」

　平行線をたどるばかりなので話題を変えると、小間使い少女は客を連れてくるために去っていった。そして数分後。

「やっぱりおまえたちだったか。ようやく合流できたなあ」

　小間使い少女が案内してきたのは、ふたりの仲間だった。

　もちろんエリカ・ブランデッリと清せい秋しゅう院いん恵え那なである。天あまの叢むら雲くもの劍つるぎを介して、こちらの無事やドニと遭遇した件を伝えてはいたが、やはり電話で長話するようにはいかない。

　ようやくの再会を護堂はよろこんだ。

　さすがエリカと恵那。ここまで何の問題もなく、たどり着いてくれた。

　しかし、金髪のイタリア人少女は不満げな仏ぶつ頂ちよう面づらだった。黒髪の媛ひめ巫み女こは『うーん』と苦い思いを噛かみしめている面おも持もちだった。

「おひさしぶりね、護堂……。あなたの方もあいかわらずで何よりだわ」

「何日か離れていただけで、こんなふうに女の子だらけのお屋敷かまえちゃって……。ほんと、王様って野放しにしたらいけない人だよねえ」

　召使いの少女たちがたむろする屋敷内をたっぷり見てきたらしい。

　エリカはツンと皮肉っぽく、恵那はしみじみと嘆なげき節ぶし。護堂はあわてて言った。

「ちがうっ。これはまわりの連中が勝手に用意しただけだ！」

「そういう星まわりもふくめて、草薙護堂の病気というべきよね。身のまわりから女の気配が絶えない病気」

「やっぱり、まわりにそうさせる何かが王様にもあるってことだよね、絶対」

　そして、ふたりそろってのため息。

　今回、本当にうしろめたいことは皆かい無むの護堂だが、妙に気まずい。

「そ、それより離れていた間の話をしようっ。情報交換は必要だろ？」

「話をそらすのが下へ手たね、護堂。でもいいわ。それはたしかに正論だから、今回はあなたの手に乗ってあげる」

「まあ、恵那たちは船から落ちたあと、すぐ陸に上がれたから」

「たいした苦労はしてないのよね。嵐が静まるのを待って、旅を再開して」

　怒りながらもエリカは理性的に振る舞おうとし、おおらかな恵那は必要以上に追及する姿勢を見せないでくれる。

　仲間の配慮に感謝しつつ、護堂もドニと女神アルティオの件を語った。

「……で、ドニのやつはフランク族の戦士たちといっしょに、元ローマ軍の駐ちゆう屯とん地ちだったところで暮らしているよ」

　ローマ軍の駐屯地。多くのローマ植民市がそなえる軍施設だ。

　ドニの配下となるべく、近隣各地からフランク族の戦士がコロニア・アグリッピナに集まってきている。彼らを収容するのに最も適した場所は、やはりそこだった。

「じゃあ、アイーシャさんは？　この街にいるんでしょう？」

「ああ、あの人は……」

「よろしければ、お呼びいたしますが？」

　当然の疑問を恵那が口にしたので答えかけたら、小間使い少女が先に申し出た。

　護堂はどきりとした。考えてみたら、この件こそがいちばん誤解を受けそうな気がしてきたのだ。いや、べつにやましいところはないし、大丈夫か——。

　思し案あんしている間にアイーシャ夫人を招くべく、小間使い少女は中庭を去った。

　そして、三分後に早すぎる来訪。

「まあ！　おふたりとも無事だとは聞いておりましたが、こうして何事もなく再会できて、とてもうれしいです！　うふふふっ」

「「…………」」

　やってきたアイーシャ夫人は満面の笑顔でよろこびの言葉を口にする。

　しかし、エリカはじろりと護堂に鋭いまなざしを向け、恵那は『またか』と言わんばかりに困った顔をしてから、女性カンピオーネに返事する。

「うん、恵那たちもすごくうれしいよ。でも、それはそれとしてね」

「あ、はい、何でしょう？」

「夫人がこちらにいらっしゃるまで、ずいぶんと短かったように思えます。一時間以上はかかると思っていたのですが、こんなにすぐいらしていただけるなんて……」

　恵那・エリカの問いかけに、夫人は朗ほがらかに笑った。

「ああ、それは早くて当然です。わたくしは今、草薙さんのお屋敷に居い候そうろうさせてもらってますから。呼ばれれば、すぐに来られるんですよ」

　さらにアイーシャ夫人は言う。

「もちろん男性のお住まいに間借りするのには抵抗がありましたけど、とても広いお屋敷ですし、草薙さんったら『必ず俺の目の届くところに——俺のそばにいろ』と怖い顔で強要までするし……。仕方なかったんです」

　夫人は昨日、この邸宅に居候すると自分から言い出したのだが、なぜか護堂のことをとがめるように、そして、ほんのり恥ずかしそうに見つめている。

　そのうえ恵那とエリカまで、ふたたび護堂をじろっと見み据すえてきた。

「やっぱり」

「たまたま遊びに来られていた可能性も考えたけど、やはりそうだったのね」

「ああ、もう。うちの王様はこれだから……」

　恵那の物言いにはいらだちと諦てい念ねんが複雑に混ざり合っていた。エリカの方は重要な証拠物件を発見した刑事のような口ぶりだった。

　このふたり、ウルディンとの決戦以降、妙に息が合ってきたような……。

　意外な発見に驚きつつ、護堂は身を守るために発言した。

「ええと、話が盛りあがってるところ悪いんだけどさ。俺、はずせない用事があるから、しばらく外出してくるよ」

かくして護堂は愛馬に騎乗し、コロニア・アグリッピナの街に出た。

しかし、お供が三人いる。例の小間使い少女、エリカ、恵那である。こちらもみんな、護堂邸の厩うまやから出した馬にまたがっている。

「護堂ったら本当に油断も隙すきもない人ね！」

「まさか、あの人とまで変なことになってるなんてねえ……」

「ち、ちょっと待て。いちばん見張りが必要なのはアイーシャさんだって、おまえたちも知ってるはずだろ!?」

護堂の馬のすぐうしろに仲間ふたりが続き、やや離れて小間使い少女がついてくる。

使用人らしく沈黙を堅けん持じする最後のメンバー以外は、それぞれに口うるさくしながらローマ植民市を進んでいった。

市内はそれなりに平穏を維い持じしており、住民はふだんどおりに暮らしていた。

コロニア・アグリッピナ固有の兵力として常じよう駐ちゆうしていたローマ軍団はサルバトーレ・ドニひとりに後おくれを取り、撤てつ退たいしていったという。

そこにドニ配下のフランク族がやってきて、占領の形がととのったのだ。

通常なら、そのままフランク族による略りやく奪だつ行為がはじまり、そのついでに大勢の市民が血を流し、奴ど隷れいとして捕ほ縛ばくされ、街は燃えて――と大惨事になるのだが、その手の狼ろう藉ぜきを意外にもドニが禁止したという。

「そこに気がつく勘かんのよさがあの男にあって、助かったよ……」

　にぎやかな市内を馬で見回りながら、護堂はつぶやいた。

　ドニはこの街にやってきたフランク族の戦士たちが〝うずうず〟しているのを見て、彼らの下心に気づき、最初に略奪禁止令を出したらしい。神との戦いにそなえて本拠地をせっかく用意したのに、要いらぬことに労力を使うなと。

　前に現代のミラノでも、ドニは《赤しやく銅どう黒くろ十じゆう字じ》をあごで使っていた。

　意外と手下を統率することに慣れた男なのだ。将軍というよりは山賊の親分・蛮ばん族ぞくの族長というノリではあったが……。

「ところで王様。『はずせない用事』って、この見回りのこと？」

「ああ。なんでかっていうとだな」

　恵那に訊きかれたとき、ちょうど〝理由〟が目の前で起きた。

　酒場の前を通りがかったとき、店内で髪をちょんまげのように結ったフランク族の男が三人も暴れていた。店の客相手にケンカを売ったようだった。

「止めにいってくれるか？」

「かしこまりました、ご主人さま」

　護堂の指示で、うしろに控えていた小間使い少女がすばやく馬を下りた。

　酒場に入っていって、暴れるフランク族たちにあれこれ声をかける。すると、狼藉者たちは急に動きを止め、店の外で待っている草薙護堂を見つめて、大いに恐縮する。

「つまり、護堂はフランク族の行動に目を光らせているのね？」

「まあ大族長の命令があっても、どうしたって占領した方がいい気になるしなあ。ドニのバカは、細かいところは『よきにはからえ』だし。とりあえず、俺が街を見ているってフランク族の連中に伝われば、自然とそういうことも減っていくかと思ったんだ」

　エリカに言われて、護堂はうなずいた。

　ドニとフランク族の戦士たちは今、元ローマ軍の駐屯地にいる。

　護堂たちがいる市街はライン川の西岸にある。対して駐屯地は東岸に位置する。

　橋を渡って行き来するのだ。期せずして隔かく離り状態になったため、フランク族の戦士はあまり市街に来ない。しかし、やはり少数の例外は存在した。

「ただ今もどりました、ご主人さま」

「手間をかけさせて悪いな。助かったよ」

「この程度、どうということでもありません。それより妙な話を耳にしました」

　酒場から帰還した小間使い少女がやや不快そうな顔をしている。

「さきほどの男たちですが、暴れたのは酒場にいた者たちが不届きなうわさ話をしていたからだと申しておりまして……」

「うわさだって？」

「はい。——まもなく輝ける剣を持つ勇者が到来し、フランク族の魔王サルバトーレ・ドニ、その黒髪の盟友、そして白衣の魔女を討ち果たす、と」

「…………」

　護堂は連れの少女たちに目配せした。ふたりともうなずきを返してくれる。

「それ、アウグスタ・ラウリカでも聞いたうわさよね」

「あの街のうわさがここまで流れてきたとか？　王様とアイーシャさんのこともいつのまにかセットになってるけど。……あれ、ちょっと待って」

　エリカのつぶやきに相づちを打ってから、恵那が思案顔になる。

「これと似たような話、昔どこかであった気がする」

「わたしはこのうわさもだけど、アルティオという女神について気

がかりなことがあるわ」

　エリカの方も思慮深げにつぶやく。

　護堂には奇妙な偶然としか思えない珍事も、彼女たちには何かのヒントになったらしい。頼もしく思っていると、金髪のイタリア人少女は不意に言った。

「とりあえず、これからサルバトーレ卿きようのところに行きましょう。あの方にごあいさつして、護堂がやっている巡回をほかの人にまかせられるよう手配しなくちゃ。もちろん卿におまかせじゃなくて、わたしが采配する感じで」

　街に到着して半日も経たっていないのに、いきなりの実務的な思考。

　さすがエリカ・ブランデッリというところを見せたあと、彼女は小間使い少女へにっこりと華麗に笑いかけた。

「そのあとは屋敷に帰って、使用人のみなさんとあらためて話をしましょうか。わたしと恵那さんがあなたたちの女主人になるのだけど、かまわないかしら？」

「もちろんでございます、奥様」

　小間使い少女がうやうやしく頭を下げる。

　コロニア・アグリッピナでの新生活は、こうしてはじまったのだった。

3

　エリカと恵え那なが合流した日の夜。

　護ご堂どうの邸宅ではひさしぶりに仲間たちが顔をそろえての晩ばん餐さんとなった。

　ソラマメの入ったサラダにオリーブの実、イチジクやブドウなど

の果物類、ゆでた豚肉、野ウサギのロースト、ソーセージ、穀こく物もつ粥がゆ、名前のわからない花の球根を揚あげたもの等、なかなか充実した献こん立だてだった。

　そして、ようやく再会した少女二人とのおしゃべり。

　にぎやかなひとときだったが、そこに〝居い候そうろう〟のアイーシャ夫人が加わり、しかも三〇人の侍じ女じょにかしずかれながらの食事である。

　晩餐が終わり、邸宅の主人専用執務室に逃げこむと、護堂は心から言った。

「ここまで女だらけだと、いっそドニたちがいる兵舎とかで暮らしたくなるな。あそこ、ほとんど男しかいないし……」

　川向こうにある元ローマ軍駐ちゅう屯とん地ち。今はドニ一党の仮住まい。

　コロニア・アグリッピナに集結したフランク族でも、女子供は市街で暮らしている。

　戦える男たちは大半が駐屯地にいる。炊たき出しを行う女性以外はどきっとするほど男だらけなので、とにかくむさ苦しい。しかし、今の護堂にはあの男所帯がうらやましかった。

　執務用の机の上に行儀悪く腰かけ、あぐらをかきながら言う。

「野球部とかサッカー部の部室みたいな男だけの汗くささが気楽でいいんだよなー」

「それ、わたしにはちょっと理解できない感覚だわ」

「何も恵那たちがいる前でそういう話、しなくてもいいのにねえ」

　机のそばにいたエリカがあきれ、恵那は苦笑している。

　ほかの女性陣とちがい、いっしょにいても気疲れしないふたりである。まあ、アイーシャ夫人ともある意味『気を遣つかわない』つきあいをしているが。

「いいじゃないか。俺はそういう場所の方がなじめるんだから。そ

うじゃなかったら、前みたいに三人だけで暮らす方が気楽でいいよ」

「あら。こんなに立派な後宮ハレムより、わたしと恵那さんだけの方がいいの？」

「えへへ……そう言ってもらえると照れるよね、なんか」

「あ、いや。特に変なふくみはなくてだな」

　急に女子たちが微笑ほほえんだので、あわてたときだった。

　執務室の扉がコンコンとノックされ、外から声が聞こえてくる。

「いらっしゃいますか、みなさん？　今晩はわたくしたちの無事と再会を祝して、心ゆくまでおしゃべりしましょうね！　無ぶ礼れい講こうってやつです、ふふふっ」

　アイーシャ夫人が外に来ているのだ。返事をしようとしたら、先にエリカが動いた。護堂のすわっている机の上に彼女も腰をおろしたのである。

　そして護堂にすり寄り、体をぴったり密着させてからエリカは言った。

「どうぞお入りくださいませ、夫人！」

「あ、はい。お邪じや魔ましま——す」

　突然のスキンシップに硬直した護堂にしなだれかかるエリカを見て、うきうきと入室してきた夫人は硬直した。

「え、エリカ、変な真ま似ねをするのはよせって！」

「ええ、そうね護堂。夫人もいらしてくださったことですしね。——失礼いたしました、アイーシャ夫人。はしたないところをお目にかけた非礼、お許しください」

　注意するとエリカはすこしだけ護堂から身を離し、優美に謝罪した。

　しかし、護堂のすぐそばにすわったまま。さらにさりげなく護堂

の手に自みずからの手を重ね、やや熱っぽい口調で謝罪を続ける。

「この人が――護堂が離れていた間のさびしさを埋め合わせしたいのか、早く三人だけになりたいと言いだしたもので……。つい、こんなところに隠れてしまいました」

「お、俺がいつそんなことを!?」

　うっとりと目を伏せる金髪少女に護堂は反論し、アイーシャ夫人は『あうあう』と口をぱくぱくさせている。言葉が出てこないらしい。

　そのあたりを軽やかに無視して、エリカは恋人同士の熱っぽさと共につぶやいた。

「もう……護堂ったら、照れているのね。すこしの間、我慢して頂ちよう戴だい。アイーシャ夫人との夜を楽しんだあとでも、わたしたちにはたっぷり時間があるのだから。――恵那さんだって、わかってくれるはずだわ。ね？」

「あ――うん。もちろんだよ、王様っ」

　エリカにちらりと目配せされて、唐突に恵那が言いだした。

　それから、彼女もちょこんと執務机の上に腰をおろし、護堂の隣――エリカと逆側に陣取るなり、ぎこちなくつぶやく。

「そりゃ早く王様に可愛かわいがってもらいたいけど、アイーシャさんとも仲良しだし、たくさんおしゃべりだってしたいもんね。大丈夫、恵那はちゃんと待てるから……」

　潤うるんだ瞳ひとみで護堂に寄りそいながらの、媛ひめ巫み女このささやきだった。

　恵那の可愛らしさとエリカの大だい胆たんさにはさまれて、護堂はどきっとした。一方、アイーシャ夫人の『あうあう』していた口から、ようやく言葉が吐き出される。

「ごごごめんなさい、気がつかなくて。そ、そうですよね、三人だけで積もる話とか、それ以外のこととかで今夜はいそがしいですものねっ。わわわたくし、失礼します！」

　早口で言い終えるなり、アイーシャ夫人は執務室から出ていった。



　顔を真っ赤にして、ぺこりと頭を下げて……。

「えへへへ。追い出したみたいで悪いことしちゃったね」

「でも、わたしたちだけで水入らずのひとときを過ごしたかったのは本当だもの。これくらいの悪戯いたずらなら、罰は当たらないんじゃないかしら」

　護堂の両隣で、ふたりの女子が口々に言う。

　また、エリカは不意に護堂の耳へ唇くちびるを寄せ、いきなり噛かんできた。

「痛っ。な、何なんだよエリカ？」

「いいでしょう。わたしたちふたりだけと言いたいところを、三人だけにしてあげたんだから。わたしと恵那さんの寛大さにもっと感謝すべきよ、護堂は」

「…………」

「たとえば、再会のよろこびをキスで分かち合うとかもすべきだと思うし」

　エリカの顔と唇が、今度は護堂の唇に近づいてくる。

　避けることも考えたが実行しなかったのは、慣れと、大胆なイタリア人少女の言い分にもすこし理があると思えたから、だろうか。ただし、たがいの唇を強く吸い合う口づけになったので、必ずしも一方的な受け身とは言いがたいスキンシップだったが。

「え、エリカさんだけじゃないよ、王様……」

　エリカと唇を離したら、今度は恵那が顔を寄せてきた。しかし、こういうときに怖おじ気けづくこともままある大和やまと撫なで子しこは、額ひたいと額がこすれ合うほどに顔が近づいても、なかなか唇を押しつけようとはしない。

　あとすこしというところで躊ちゆう躇ちよし、なかなか踏み切れないでいる。

　そういう彼女が愛いとおしくなり、護堂の方から軽くキス。ついばむような接触。すると恵那は幸せそうに微笑み、同じやりかたで『ちゅっ』と唇を寄せて、自分からキスしてくれた。

　そのままエリカと恵那と護堂の間に、熱っぽく甘い空気が生まれたとき——

　執務机の上にすわったまま、三人はハッとした。

「え、ええと、そろそろ真ま面じ目めな話もしておこうか……？」

「それもいいかもしれないわねっ。じ、状況の検討はやっぱり必要よ！」

「そ、そういえばエリカさん、気になることがあるんでしょう⁉」

　口々に言って、雰ふん囲い気きを変えようとする。

　ウルディンとの戦闘前、やはり三人で例の儀式を行った。

　以来、はじめてのキス。しかし、どうも前より歯止めが効かなくなっているような——。その危き惧ぐを感じたのはおそらく護堂だけではない。エリカも恵那も同じだったから、我われに返ったのではないか。ふたりだけの時とはまたちがう危うさだった。

　護堂の胸がどきどきしている。恵那はとまどいを露あらわにしている。

　そしてエリカはせき払いし、どうにか毅き然ぜんとした声で言った。

「話を聞いた印象だと、女神アルティオはおそらく大だい地ち母ぼ神しんのはずよ。熊は大地のトーテムだし、息子を連れてくるという言葉もそれを裏づけているわ」

「アテナなんかの同族なのか？」

「ええ。地じ母ぼ神しんの系けい譜ふに連なる女神は、少年ないし青年のパートナーをともなうケースがすくなくないの。このパートナーは恋人のときもあれば、兄弟、従者のときもあるわ。でも、この型の神話の古い形ではたいてい『息子』よ」

　だから大地の女神と特定できる。エリカの論ろん旨しに護堂はうなずいた。

「例を挙げるなら、ギリシア神話の女神アフロディーテに愛された美少年アドニス。護堂も知っている名前だと神王バアルを復活させる妹の女神アナト。大地の女神レトの息子アポロン……。元をたどれば、みんな大地母神とその息子という関係なの」

　ここまで語ったエリカは、不意に声を低めた。

「そして『地母神と息子』の関係には、時代が下るとべつの変化形が生まれるわ。『魔力を持つ女性と、彼女が庇ひ護ごする英雄』という形が——」

「英雄？　エリカさん、それってまさか」

「察しがいいわね、恵那さん。その英雄とは、存在そのものが『剣』の暗喩メタフアーである戦士。不死の属ぞく性せいを持つ、竜と蛇へびの征服者。剣の神々。まつろわす神。わたしたちが《鋼はがねの軍神》と呼んできた英雄たちのことよ」

　カンピオーネにとっても宿敵だという軍神の名を出して、エリカはさらに言う。

「たとえば、妖よう精せいの母テティスから不死の体を授かる英雄アキレス。湖の貴婦人に養育されるランスロット・デュ・ラックが該がい当とうするわね」

「ランスロットか……」

　なつかしい雄ゆう敵てきの名に思わず護堂はつぶやいた。

「考えてみたら、この時代にはあいつもいるんだよなあ」

「ええ。でも、ここで問題になるのはアーサー王——ランスロット卿きようと神しん祖そグィネヴィアが追い求めていた英雄の方かしらね。知ってる？　アーサーという名前は『アルトス』という名詞が変化したものなの」

「何て意味なんだ？」

「勇者。そして、もうひとつ。熊よ。ヨーロッパの森林では最強の

獣けものである『熊』から転じて、勇ゆう敢かんなる強つわ者もの『勇者』の意味を併あわせ持つようになったのでしょうね。あと、アルトスはアルティオの語源でもあるわ」

　ここでエリカは肩をすくめた。

「女神の名前アルティオには『熊』の意味があるの。彼女はたしか、ヨーロッパ中部のケルト人が崇すう拝はいした女神だったはずよ。もし女神アルティオに息子がいるのなら、名前はやっぱりアルトスかしら。のちのアーサー王の原型となる英雄——」

「あれ、待てよ？」

　護堂の記憶を刺激したのは、アルトス＝アーサーの繰り返しだった。

「アリスさんが言ってなかったか？　アーサー王の神話は、昔の魔女たちが捏ねつ造ぞうした偽いつわりの神話だって。たしかガスコインが謎なぞ解ときしたんだろ」

「そのとおりよ。そして、アレク王子はこうも考察されたわ。——神祖たちが『最後の王』と呼ぶ英雄は五世紀から六世紀のどこかで一度、アルトスの名で降こう臨りんしたはず、と……」

「…………」

「実はさ。恵那もひとつ思い出したんだよね」

　太た刀ちの媛巫女がぼそりと、彼女らしくない神妙な口ぶりで話しだす。

「最近、輝ける剣を持つ勇者が魔王を倒しにくるってうわさ、出てきたでしょう？　実は日本の房ぼう総そう半島でも似たことが起きてるんだ。英雄にまつわる神刀のうわさを吹ふい聴ちようする人がいきなり出てくるの……」

　后きさき弟おと橘たちばな比ひ売め、太刀を抱きて海に入り給たまふ。其その太刀の流れし先は陸おかにあらず、海にもあらざる処ところにて、浮うき島しまといふなり。

　房総の地で絶えず出現する伝承だと、恵那は教えてくれた。

　正せい史し編へん纂さん委員会が幾度となく闇やみに葬ほうむっても、必ず語り継つぐ者が出るという。

　護堂はハッとした。この話、以前も沙さ耶やの宮みや馨かおるから教わっていた。そして、べつの人物から教わったことがもうひとつ——。

『どうもこうもない。最後の王が眠る場所には、必ず神刀と戦士の伝承が顕あらわれる』

『だったら、東京湾のどこかに真の浮島があると考える方が自然だ』

　アレクサンドル・ガスコインの考察だった。

　東京湾のどこか、房総半島の近くで『最後の王』は休眠しているはず、と。

「もしかして女神アルティオの息子はアーサー王の原型——『最後の王』なのか？」

　アルティオ＝アルトス＝アーサーの連れん鎖さ。

　神刀と戦士の伝承が顕れる場所と『最後の王』の関係。

　それらに想像力を刺激され、護堂はつぶやいた。その男は全ての神殺しを殲せん滅めつする勇者なのだという。アテナが気をつけろと警告した存在だった。

4

　女神アルティオはたしかにこう言った。

『次にまみえるとき、そなたらに我が息子を引き合わせよう』と。

　しかし——護ご堂どうは考える。所しよ詮せんは女神によって呼び出される従属神か同盟神、きわだって強力な神格ではないはずだ。だが、もしそれが『最後の王』なら……？

「そいつと戦ったら、俺は必ず死ぬ。アテナはそう言ってたなあ」

「断言したんだ？　なんかすごいねえ」

「まあ気にしたって仕方ないことだし、いつもどおりやるしかないけどな」

「いつもどおり？　ああ、行き当たりばったりで戦うってことだね」

「そこはせめて臨りん機き応おう変へんって言おうぜ、清せい秋しゆう院いん……」

　エリカ・恵え那なの合流から二日後の早朝。

　ほとんど夜明けと同時に護堂は屋敷を出た。同行者はひとり、恵那だけだった。ふたりは馬に乗ってライン川に架かかる橋を渡り、対岸へやってきた。

　そう、市街のある西岸から、東岸の側へ——。

　こちら側には、ドニとフランク族戦士の住まいとなった軍ぐん駐ちゆう屯とん地ちがある。

　しかし、それ以外に大きな建物はない。もう街ではないのだ。というのも、ライン川の東側はゲルマニア。ローマ帝国の支配がおよばない土地だからだ。

　軍駐屯地が東岸にあるのは、ゲルマニアから来る敵を迎え撃つためだった。

（ちなみに、ローマ帝国はゲルマニアの内地に『長ちよう城じよう』を築き、前線基地を設けてゲルマン人の侵攻を食い止めようとした時期もあったらしい。しかし、防衛線はライン川までずるずると後退して、今にいたるのだという）

　都市として整備された西岸と比べて、東岸は手つかずの自然が多い。

　すこし馬を走らせれば、緑豊かな森もある。このあたりは基本的に平原である。なだらかな草地が続き、見通しもよい。そのなかに中小規模の森林が点々と散らばっている景色は、山がちな日本では

まずお目にかかれない。

　護堂と恵那はそうした森のひとつを訪れた。媛ひめ巫み女この要望だった。

「最近、街に居続けだったからさ。すこし体のなかをきれいにしないとね」

　恵那は快活に言った。鬱うつ蒼そうとしげる針葉樹、樫かし・楢なら・ブナなどの広葉樹の下を歩きながらである。森の外に馬をつなぎ、護堂とふたりで足を踏み入れたのだ。

　神々の〝気〟を我わが身に呼び込む秘術・神がかり――。

　その使い手である恵那は定期的に人里を離れ、深山の気で心身を清めるのだ。

「でも、この時代でもスサノオのじいさんから力をもらえるんだなあ」

「恵那もダメ元で試してみたんだけどさ。この時代と恵那たちがいた現代って、うっすらつながっているみたいで……できちゃったんだよね」

「うっすらつながっている？」

　ふとした護堂のつぶやきに、恵那が意外な答えを返してくれた。

「うん。アイーシャさんの通つう廊ろうは月に一度しか顕あらわれないそうだけど、その間もなくなるわけじゃないんだと思う。人の目には見えなくなったり、物を運ぶ力が弱くなるだけで」

「…………」

「たぶん霊気とか呪じゅ力りょくみたいに〝細かいもの〟なら、この時代と現代の間を行き来できるんだよ。だから、神がかりを使えたんだと思う」

「でも、俺もいていいのか？　清めの行ぎょうみたいなのなら、ひとりの方がよさそうだけど」

「なに言ってんの。ほら、ウルディンさんのところに行くとき、エ

リカさんとふたり旅だったでしょう？　これはその埋め合わせでもあるんだからね」

「そ、そうだったのか？」

「うん。だからエリカさんはいっしょじゃないんだよ。気を利きかせてくれたの。……まあ、朝早いから起きられないってのもあると思うけど」

「あいつは朝に弱いからなあ……」

　ふたりだけで森のなかを歩き、奥へと進んでいく。

　木々の間を渡る春の風には得えも言われぬ心地よさがあり、木こ洩もれ日びもまぶしい。清めの行というよりもピクニックの雰ふん囲い気きになりつつあった。

　やがて、護堂たちは泉のほとりにやってきた。

　学校のプールと同じほど大きく、感動的なほど水が澄んでいた。

「妖よう精せいのひとりやふたり、住んでいても不思議じゃない綺麗さだな」

「うん。王様の近くにはそういうのが出てきても全然おかしくないしね。――ほら見て、すごく気持ちいいよ！」

　護堂の言葉に笑ってから恵那が靴を脱ぎ、泉のなかに足を踏み入れる。

　水の冷たさが爽そう快かいなのか、さらに屈くつ託たくなく笑い――不意に「あっ」と言いだした。

「水がらみで思い出した。昨日、アイーシャさんとおしゃべりしたんだよね、エリカさんといっしょに。そのとき聞いたんだけど」

「水に関係することか？」

「うん。王様と川で漂流したあと、濡ぬれた服を乾かしていたら王様に裸を見られたって。離ればなれになったあとのことをアイーシャさんに聞いたら、すごく様子がおかしくてさ。エリカさんが上う手まいこと聞き出したんだよね」

「ちょっと待て！　その説明はたぶんいろいろ不正確だ！」

　物には言いようがある。せめて、もうすこし穏おん当とうな表現はできなかったのか。

　自みずからの名誉を守るべく、護堂は声こわ高だかに訴えた。

「そうなった原因は俺たち双方の不注意で、不幸な事故って感じだったぞ！」

「まあ、そんなことだろうとは思ったけどさ……」

　恵那は拗すねた子供のような顔で、護堂をにらむ。

　そして、いきなり紐ひもを取り出して、みごとな黒髪をポニーテールにまとめた。それから近くの木こ陰かげに入り、護堂の視界から外れ——しゅるしゅるという衣きぬ擦ずれの音。

「!?　清秋院、いったい何を!?」

「だ、だって、ここには身を清めに来たんだし……」

　ぎこちない口ぶりで、木陰から恵那が答える。直後、『ばしゃん』という水音。衣服を全て脱ぎ捨てた恵那が泉のなかへ入ったのだ。

　白く何も身につけてない背中を目撃してしまい、護堂は大いに動揺した。

「清秋院、なんてことを！　俺がすぐそばにいるんだぞ！」

「ご、ごめん。恵那が不注意だったみたい……。で、でも、王様もいけないんだよ？　こんなところにいるなんて、その、不注意ってやつだよね……？」



「…………」

「も、もっとうっかりして、ちゃんと見てくれていいんだよ……？　これでアイーシャさんのときといっしょで、事故みたいになるでしょう？」

　胸のあたりまで泉につかりながら、恵那がささやく。

　岸辺にいる護堂との距離はせいぜい五、六メートルというところ。そして、この泉の水はすばらしく透明度が高かった。

　そのおかげで、水中にある〝胸から下〟も申し分なく見て取れる。

　かつて中ちゆう禅ぜん寺じ湖この温泉でもちらりと目撃した、恵那の一いつ糸しまとわぬ姿である。

　エリカにも負けない量感と起き伏ふくをそなえているくせに、のびやかな肢し体たいをすくませ、白い素す肌はだは真っ赤に紅こう潮ちようしている。もちろん羞しゆう恥ちのためだ。

　太た刀ちの媛ひめ巫み女こは今、水中の岩に腰かけていた。

　なかなか思い切れないのか、たっぷりとした胸のふくらみは両腕で隠していた。

　また、ねだるように護堂を上うわ目め遣づかいで見あげる恵那は、みごとな黒髪をはじめて見るポニーテールの形にまとめている。いつもの快活さとはまたちがう魅力がある。

　おかげで、もじもじする彼女から視線を外すことができない。

「あ。それと最近ごめんね、王様」

「えっ？　べつにあやまられるようなことはないだろ？」

「ううん。この頃の恵那、すこし王様に口うるさいっていうか——新しい女の人が増えて、嫉しつ妬としちゃってたかなって……。ごめんね、本当はもっと落ち着いていたいんだけど」

　泉につかりながら、恵那は悄しよう然ぜんとうなだれた。

　それにつられて彼女の両腕も下がり、隠されていた乳ち房ぶさがはっきり見える。

「胸の中がちょっと〝もやっ〟てしちゃってさ。つい王様に当たっちゃった。エリカさんとか、祐ゆ理りとか、リリアナさんならいいんだけど、ほかの女の人が王様に近づいてくると、なんかイヤだなって思えてきて……」

「せ、清秋院」

　明朗快活な自然児にふさわしからぬ、嫉妬にいらつく一面。

　それを告白されて、護堂は思わず恵那を抱きしめようと一歩踏み出してしまった。

　このまま進めば泉のなかに踏み込まざるを得ないのだが、黒髪の巫女への愛いとおしさに突き動かされて、かまわず歩み寄ろうとした——その瞬間。

　まだ早朝なのに、いきなり空が真っ暗になった。

　森のなかとはいえ、今は泉のほとりにいる。十分に開けた場所だ。おだやかな陽光が降りそそぎ、清明な泉と森の空気をやさしく照らしていたというのに。

「「!?」」

　護堂と恵那は天を見あげ、そろって驚きよう愕がくした。

「太陽が——暗くなってるよ！」

「に、日につ食しよくか……？」

　早朝の太陽はいつのまにか黒く変色し、黒円と化していた。

　そのまわりに白い光輪ができている。空は暗く陰り、まるで皆かい既き日食の情景だった。大規模な天体現象が起きる気配など微み塵じんもなかったというのに！

　しかも、轟ごう、と雷鳴がとどろき、暗天より白い稲妻が大地に落ちる。

　それは護堂たちから見て黒き太陽がある方面——東の方角だった。その稲妻は強大な呪じゆ力りよくをまき散らしていた。

『——来たぞ』

　不意にささやいたのは、護堂の右腕に宿る天あまの叢むら雲くもの劍つるぎだった。

『己オレの同類、《鋼はがね》の宿しゆく星せいの下もとに生まれた刃やいばが墜おちてきた。素す性じようはわからぬが、おそろしく鋭い剣だ。王よ、巫女よ、心するがいい』

「どこに墜ちたか、天叢雲にはわかる？」

　すばらしい裸ら身しんをさらしながら、恵那が水から上がってきた。

　凜りんとひきしまった表情で護堂のそばに来て、鋼の相棒に問いかける。

『おおよそのところは』

　護堂と恵那は顔を見合わせた。そして、うなずき合う。

　あいかわらず暗い空と日食めいた太陽のもと——。

　ふたたび衣服をまとった恵那と共に、護堂は馬を走らせる。

　天叢雲劍に導かれるまま、めざすは北東の方角だった。ライン川東岸のゲルマニアはガリアとちがい、未開拓の地である。このあたりは特に森が多い。中世以降は王侯貴族の狩り場にもなる森林地帯なのだ。

　しかし、護堂たちが行くのは見通しのいい平地だった。

　おかげで乗馬初心者の護堂・恵那でもどうにか走そう破はできている。やがて、背後から馬ば蹄ていの響きが聞こえてきた。後方から三騎の人馬が駆けてくる。

　それはドニ、エリカ、アイーシャ夫人とそれぞれの愛馬だった。

「やあ。護堂たちも来てたのか！」

「そっちも雷が落ちた方に行くのか、やっぱり？」

　ついに追いついたドニに声をかけられ、護堂は答えた。

　欧おう州しゆう最高の剣士であるカンピオーネは乗馬の心こころ得えもあったらしく、堂に入いった騎乗ぶりを見せている。いっしょに駆けるエリカはもちろんだが、意外なことにアイーシャ夫人も達者に馬をあつかっていた。

「ええ。空がこんなふうになって、明らかに只ただ事ごとではないでしょう？　さっき落ちてきた強い呪力の気配をたどろうと街を出たら、おふたりといっしょになったのよ」

　魔術で進むべき方角を占ったのだろう。エリカが答える。

　先行していた護堂と恵那に追いつけたのは、まちがいなく馬術の差だ。あとから来た三人の方が上う手まい乗り手であることは、傍はた目めにも明らかだった。

「こんなタイミングですし、アルティオさんが何かしているのでしょうか……？」

　つぶやくアイーシャ夫人は、珍しく動きやすい服装だった。スカートではなく膝ひざ丈たけまでのズボンをはいて、その上にいつもの白い外がい套とうを着こんでいる。

　乗馬するためだろう。彼女はおそらく、馬での旅にも慣れているのだ。

「そういえばアイーシャさん、ラクダに乗って砂漠を越えたんでしたっけ？」

「ええ。西部開拓時代のサウスダコタを馬で走りまわったこともありますよ～」

　朗ほがらかに武勇伝を披ひ露ろうする。さすが古こ今こん東とう西ざいを股またにかける長旅の達人だった。

　五人はときどき馬を休ませながら、北東とおぼしき方角をめざして駆ける。旅の道みち標しるべはエリカの魔術と天あまの叢むら雲

くもの剣つるぎ。やがて、前方に小高い丘が見えてきた。

　そこには白い長方形の石柱が円状にならんでいた。

　イギリスのストーンヘンジと同種の、環かん状じよう列れつ石せきと呼ばれる遺跡だった。

　環状列石の丘へ近づくにつれ、護堂の心身に戦うための力がみなぎってくる。はたして、列石の奥から女神アルティオが姿を現した。

　熊の毛皮をまとう美しき女神は、丘の上から下げ界かいを見おろす。

　黒き太陽はいつのまにか中天近くに達していた。

　推定時刻はおそらく正午。丘の数百メートル前で馬を降りた護堂は、エリカと恵那に目配せする。ここからは自分たちが行く——。その意思表示だった。

　ふたりの仲間は心得たもので、馬を止めて待機の姿勢。

　逆にドニとアイーシャ夫人は地上に降り立つ。三人のカンピオーネは誰からともなく歩み出し、環状列石の丘に近づいていった。

「べつに三人いっしょに戦うつもりはないよ。この辺の様子がおかしいから、ただ三人そろって偵てい察さつに来ただけで……」

　丘のふもとからアルティオに告げたのは、もちろんドニだった。

「誰が戦うのか、ここで決定戦をしたっていいくらいだし」

「何をおっしゃるんですか、ドニさん。相手が災いを呼ぶ神だからといって、問答無用で斬きりかかっていいはずありません。まずはじっくり話し合い、譲れるところはおたがいに譲り合うべきです。血なまぐさいことは徹底的に避けないと」

「そういうお考えの割に、アイーシャさんって神様を結構倒してますよね……」

　護堂はつい夫人につっこんだ。前々から疑問に思っていたせいだろう。

「いつも戦いは苦手みたいに言いますけど、その割に倒したっていう神様は一、二……すくなくとも四体以上ですか」

「あれ護堂、知らないのかい？　アイーシャ夫人の結構えげつない戦い方」

「えっ？　うすうす予想はしてたけど、そんなにひどいのか？」

「お、おふたりとも何て言い方をするんですか!?　わたくし、自みずから望んで戦いをはじめることはありませんし、勝利のあとはいつだって心苦しく思うんですよ！」

　皆既日食にも似た異様な状況下、目の前には逆襲を期する女神。

　しかし、三人のカンピオーネは口を重くすることもなく、平常心で事に臨のぞんでいた。

　が、それは緊張感がないのとはちがう。護堂とドニは鋭く丘の上を見み据すえている。神と対たい峙じしたカンピオーネ特有の集中力と力りき感かんが心身にみなぎっていた。

　アイーシャ夫人も同じはずだ。彼女は珍しく『きりっ』とした表情だった。

　そして、三人ものカンピオーネを迎え撃つ立場の女神は——

「やはり来たか、神殺したちよ」

　美び貌ぼうを厳げん粛しゆくにひきしめ、なんと両目を閉ざしてしまう。

「そなたら三名。また、ここより遠方の地にいる者もふくめれば四、五……合わせて六名もの神殺しが今の世にはおるようじゃ。なんと嘆なげかわしきことよ」

　目をつぶったまま、アルティオはつぶやく。

　まぶたの裏に描かれた世界の情勢を読み取るようにして、カンピオーネの人数を数えあげたのだ。いかなる権けん能のうによる千せん里り眼がんなのだろう？

「じゃが、妾わらわも今は手負いの身。六人悉ことごとくを誅ちゆ

う殺さつすることはいささかむずかしい。我わが息子を呼び出したとしても、それは変わらぬであろう……」

　息子を呼び出す。従属神の召しよう喚かんという意味だろう。

　アルティオはその意義を否定してから、護堂たち三人を傲ごう然ぜんと見おろした。

「とはいえ、万ばん策さく尽きたわけではない。我が息子の名みよう代だいとして魔王殲せん滅めつの英雄を顕けん現げんさせ、そなたらにぶつければ——ふふ。勝負の行方ゆくえはわからぬと思わぬか？」

　つまり、女神が召喚しようとしているのは本当の息子ではない!?

　ハッとする護堂の前で、丘の上に立つアルティオは婉えん然ぜんと微笑してみせた。

「騎馬の民たみと竜をひきいし大王よ。陰惨な魔道に長たけし、妖術使いの王よ。人に仇あだなす流る浪ろうの魔王よ。そして、孤こ剣けんを以もつて遊ゆう興きようにふける剣王よ。嵐と災さい厄やくの運び手たる若き王よ。妖あやしき洞どう穴けつより来きたる騒そう擾じようの女王よ……」

　アルティオの両目がかっと開き、両手が高々と天にさしのべられる。

　左右の手の間に、バチバチと火花を散らす電光が顕あらわれた。白い稲妻だった。数時間前、皆既日食と同時に落ちてきた——あれと同じ光である。

「そなたら六人が集つどいし地上は、まさにこの世の終わり。末世であると言えよう」

　暗天のもと、朗々と響くアルティオの謡うたい。

　それは正義の女王が地上の荒こう廃はいを嘆いて演説する姿にも似て、凜りん然ぜんたる美しさだった。彼女の手の間で、白き稲妻がまばゆい輝きをどんどん増していく。

　そして、護堂は気づいた。

　アルティオが腰に剣をさげている。鞘さや入いりの長剣だった。

「妾は末世の闇やみを切り裂き、神殺しの魔王どもを鏖おう殺さつするため、剱つるぎの新生を願う。ああ、最も尊とうとき剣のなかの剣よ、刃やいばのなかの刃よ。汝なんじは魔王殲滅の刃。汝は白き救世の光。汝は全ての羅ら刹せつを殺さつ戮りくするため生まれるもの！」

　アルティオがついに両手を下げた。

　頭上で輝いていた白い電光は、宙に浮いたままだ。

　アルティオは自由になった右腕を一振りし、腰の長剣をさっと抜き放つ。刃渡り、実に一〇〇センチ近い。両刃の刀身はがっしりぶあつく、鉈なたにも似た造りだった。

　しかし、ボロボロに朽くち果て、錆さびついていた。

「⁉　あの剣！」

　護堂は叫んだ。前に一度、見たことがある。

　アレクサンドル・ガスコインが東京湾の浮うき島しまに用意した、朽ちた神刀。『最後の王』が使ったという佩はい刀とうの骸むくろだった。

　あれを素材とした槍やりで、仇きゆう敵てきランスロットは護堂と死闘を繰りひろげたのだ！

「鋭く近寄り難がたき者よ、契約を破りし罪科に鉄てつ槌ついを下せ！」

　護堂は言こと霊だまを叫んでいた。あの謡を最後まで続けさせたら、まずい。

　本能の警告にまかせて、護堂は『猪いのしし』を呼んだ。女神がいる丘を吹き飛ばせ。ついでに妙な儀式も中断させてしまえと念じて。しかし、同時に風が吹いた。

　はじめは一陣の旋せん風ぷう。が、すぐに勢いを増し、猛たけ々だけしい暴風へ。

　そのままアルティオの丘のまわりに円を描くように吹き荒れ、竜巻となってしまう。

　うずまく竜巻を越えて丘に突撃しようと、『猪』が全力で飛び込む。

　オオオオオォォォォォオオオオオオオオオンンッ！

　しかし、『猪』の口元に生える長大な牙きばが竜巻のなかに突き込まれた瞬間、ガキンと甲かん高だかい音が響きわたり、火花が散る。

　直後、体長二〇メートルの巨大猪は竜巻によってはじき飛ばされた。

　が、四つ足の『猪』は重心が低く、巨体の割に機敏だ。はじき飛ばされてもあっさりバランスを立て直し、竜巻めがけて再突撃——ガキン！

　牙が竜巻にぶつかると、ふたたび甲高い響き。鉄と鉄がぶつかる音に似ていた。

　そして、またもふっとばされ、バランスを立て直す『猪』……。

　自慢の猪ちよ突とつ猛もう進しんを二度も阻はばまれて、黒き護堂の分身は低くうなり、女神の丘の防壁たる竜巻を鋭くにらむ。

「……鉄の匂においがする？」

　護堂は気づいた。大気のなかに独特の鉄てつ臭くさささが満ちている。

　前方の竜巻から漂ってくる匂いだった。右腕の天あまの叢むら雲くもの劍つるぎが『む？』とうめいた。

『気をつけろ、王よ。あれは権能によって呼んだ神風にあらず。れっきとした一いつ箇この風神——それも《鋼》の系譜に連なる雑種の神ぞ！』

　事が戦闘がらみなので、ひさしぶりの饒じよう舌ぜつだった。護堂は耳を疑った。風神でありながら鋼の軍神。そんな脈みやく絡らくのないハイブリッド、一体どんな素性を持つ神様なんだと。

「へえ。僕たちだけじゃなくて、向こうも頭数をそろえていたのか」

「た、たしかにあとアルティオさんの言っていた〝息子〟が加われば、向こうも三み柱はしらそろっちゃいますっ。三対三です！」

　ドニが面白そうにつぶやき、アイーシャ夫人は心配そうに叫ぶ。

『猪』は渾こん身しんの再々突撃を繰り出すために低く身がまえ、力をたくわえる。そして、護堂は鉄てつ風ぷうの軍神に守られた丘の上をにらみつけた。

　女神アルティオは長剣を大地に突き刺していた。

　彼女の頭上で白く火花を散らしていた稲妻が、その剣に吸いこまれる。

「恐るべき魔王どもの討とう滅めつのため、地の女神たる妾も古き盟約を批ひ准じゅんしよう。その証あかしとして、我が息子アルトスへ授けるべき庇ひ護ご——我が命の一部をそなたに託たくす」

　さらに、女神の手首がひとりでに裂け、大量の鮮血がほとばしった。

　血は大地に刺さった長剣の刃に降りかかり、即座に吸収されてしまった。

「この世の最後に顕れる聖王よ、今こそ来きたれ！」

　結びの言霊と同時に、細身の少年が顕現した。

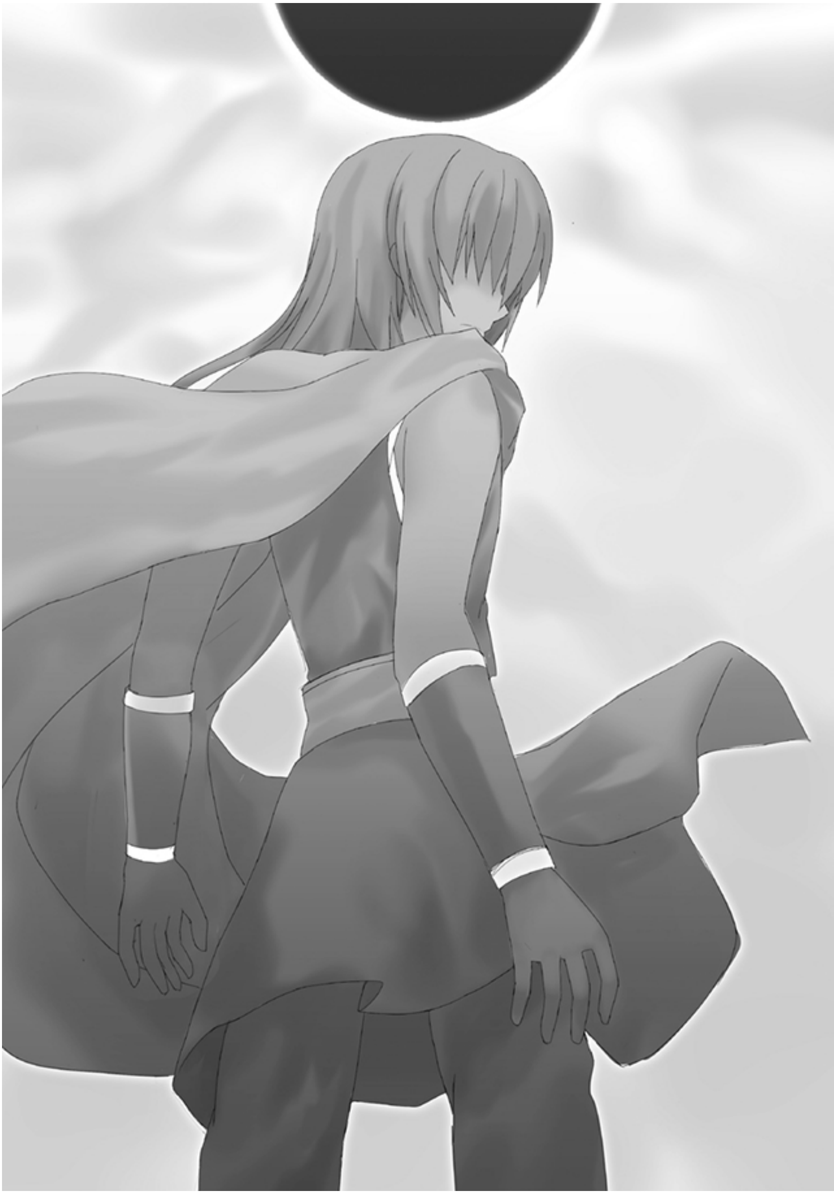
　少年は護堂たちに背中だけ見せて、召喚者たる女神と向き合う格好である。が、ゆっくりと振り返り、丘の上から三人のカンピオーネを見おろす。

　蒼あお白じろい髪の少年だった。

　やけに前髪が長いため、顔立ちはよく見えない。

　しかし鼻筋はすっきりと通り、口元もととのい、あごも細い。まちがいなく美形であろうと思われる。簡素な青い貫かん頭とう衣いと同色の細袴ズボンを身につけ、その上にマントのような白い衣こ

ろもをまとっていた。



　少年と女神の丘に『猪』が今度こそと、突っ込もうとする。

　しかし、護堂は『すこし様子を見ろ』と念じた。黒き巨獣はのどの奥で『ぐるぅぅぅ！』とうなるもどうにか踏みとどまり、指示に応こたえる。

「来たか、『最後の王』。運命の御み子こ――――よ」

　少年の背後からアルティオが呼びかけた。

　しかし、途中で雷鳴がとどろき、名を聞き取ることはかなわなかった。

「…………」

「名は伏せておきたいか。うわさどおりの気むずかしい男じゃな」

「…………」

「よい。ならば、そなたをアルトスと呼ぼう。我が息子に贈られるべき聖なる名じゃ。そなたの威い光こうとも十分に釣り合いがとれよう」

　無言かつ無表情な少年へ、アルティオが次々と言葉をかける。神々の不思議な力ゆえか、コミュニケーションは成立しているらしい。奇妙なやりとりだった。

「アルトスよ。妾の願いはただひとつ。当代の神殺しどもの殲滅じゃ」

「…………」

　召喚者の要請を聞いて、『最後の王』ないしアルトスは手をのばす。

　つかんだのは、さっきアルティオが大地に突き刺した長剣――その柄つかだった。これを即座に引き抜いてみせる。

　この瞬間、空に太陽の輝きがもどった。

　なんと皆既日食が一瞬にして終わったのだ。燦さん然ぜんたる陽光が剣に降りそそぐ。

刃渡り一〇〇センチ近く、刃は鉈に似たぶあつさである。その刀身には錆ひとつなく、まばゆい白金プラチナ色の光を放つ。

これこそ救世の神刀――。魔王殲滅の刃やいばがついによみがえったのだ！

蒼き髪の英雄はそのまま神刀を上に向け、切っ先を天に突きつける。すると、上空に白金色の光球が顕れる。第二の太陽かと見まごうほどのまぶしさだった。

そのすさまじさ、護堂は身をもって体験している。即対応しなければ確実に死ぬ。

また、隣にいるカンピオーネたちもすでにアクションを起こしていた。

「もういいから好きなだけ突っ込め！　天あまの叢むら雲くもはアテナの剣を準備だ！」

オオオオオオオォォォォォオオオオオオオンンンンンッ！

『応おう！』

「銀の腕よ、誓いとひきかえに無敵の刃やいばを！」

「善ぜん果かいまだ熟じゆくせざる間は善人さえも悪に遭あい、善果の熟する時に至れば善に遭う……。民たみに災さい禍かをもたらす女神がいます。彼女を追いはらうまで、ご加護を――！」

護堂は『猪』に全力突撃を命じ、相棒たる神刀にも攻撃準備を指示した。

ドニの右腕は銀色に変わり、手にした長剣に呪力を注ぎこんだ。

アイーシャ夫人も言霊を唱えて、加護を願っている。おそらく戦うためではなく、ここを生きて切り抜けるためだろう。

そして次の瞬間、上空から白金プラチナ色の太陽が落ちてきた。

護堂もドニもアイーシャ夫人も持てる権能と呪力を駆使して、救世の一撃を押し返そうとする。しかし――

　救世の神刀が白金色の太陽を落としてから、しばらくののち。

　すこし前まで三人のカンピオーネが立っていたあたりには、直径数十メートルの穴が穿うがたれていた。その穴は深く深く大地を抉えぐり、地の底に届いていてもおかしくないほどの深さにまで達していた。

　全力全速で丘に突っ込んだ『猪』の巨体も消え失せている。

　救世の神刀が大地をつらぬいた結果だった。

　そして、カンピオーネたちは誰も地上に残っていなかった。神刀の白き光に呑のみ込まれて、むなしく消滅を遂とげたのである。

第４章　軍神アルトスと救世の神刀

1

　魔王ジョン・プルートー・スミスは嘆たん願がんされたという。

　草くさ薙なぎ護ご堂どう、サルバトーレ・ドニ、アイーシャ夫人をことごとく抹まつ殺さつして欲しいと。

「そして、過激な依頼者の住すみ処かがここというわけさ」

　語りながら、黒衣のカンピオーネは先頭に立って歩いていく。

　古代ギリシア式神殿のなかだった。プリンセス・アリスの導きによって、リリアナと祐ゆ理りがついにたどり着いた場所だ。ただし、案内人の姫君はもういない。

　外で待つようスミスに指示されて、しぶしぶという感じでしたがったのだ。

　神殿に入ると、すぐに地下へおりる階段があった。

「時間を旅する権けん能のうは、べつにアイーシャ夫人の専売特許ではない。『旅』の権能を持つ神や妖よう精せいはそれなりにいるものだ。彼らは地上を渡り歩くように時を超え、異界を旅する」

　階段を下りながらスミスは語る。

　祐理と共にうしろへ続きながら、リリアナはうなずいた。旅人の権能を持つ神々。たとえばギリシア神話のヘルメス、日本における

八や咫た烏がらすや猿さる田た彦ひこ神しんなどがそうだった。

「そうした神々のいたずらがもとで、過去に流されてしまった人間たちも――実はそれなりにいる。だが、彼らが歴史を変えてしまうような事態は決して起きない」

「そう……なのでしょうね」

　すこし前に催眠状態からめざめた祐理が相づちを打った。

「時の流れは無む慈じ悲ひで冷酷な力を持つ……。人間ひとりが偶然と奇跡の甲か斐いあって歴史を変えたとしても、それを容よう赦しゃなく〝なかったこと〟にしてしまう……」

　霊視の啓けい示じを受けたらしい媛ひめ巫み女このささやきに、スミスはうなずいた。

「そのとおりだ。しかし、時の無慈悲さをもってしても、ごく稀まれに修正しきれない改変が生じるケースもあるらしい。そうなった場合、『番人』の出番となる」

「では、もし仮に〝歴史の修正〟が上う手まくいかなかった場合」

　リリアナは不安と好奇心にまかせて、訊たずねてみた。

「どのような事態となるのでしょう？」

「前例のない出来事だけに、私ごときにはわかりかねるな。空想科学小説よろしく並行世界とやらができあがるのかもしれない。われわれの住む時代の有り様は一変し、世界が崩壊するのと大差ない惨事になるのかもしれない。いずれにしても、あまり実験したくはないな」

　スミスがここまで語ったところで、階段が終わった。神殿の地下は回かい廊ろうになっていた。道幅が広く、八メートル近くもある。

「迷めい宮きゅう、なのか……？」

　リリアナはいぶかしんだ。この地下回廊、行き止まりが見えない。

　どこまでも続いているうえに、いくつもの分かれ道がある。迷路のように入り組んでいた。そのうえ、大量の石板がなぜか宙に浮いていた。まるで無重力の空間だ。

　数え切れないほどの石板が回廊内をふわふわと漂い、たゆたっているのである。

「もしかして、記憶の碑いしぶみ――？」

　祐理が不安そうに石板を眺める。

　宙をたゆたう石板は長方形ないし正方形だった。一辺のサイズは四、五〇センチ程度である。全ての石板に古いアルファベットで長文が綴つづられていた。びっしりと端から端まで書きこまれ、ほとんど空あきスペースがないほどだ。

　リリアナがちらりと見たところ、言語は古ラテン語のようだった。

「では、行こうか」

　スミスが歩きはじめたので、リリアナと祐理はあわてて続いた。

　仮面のカンピオーネの前には橙だいだい色いろの焔ほのおが浮いている。これが進むべき道を案内する妖精のようにゆっくりと飛んでいき、このあとをスミスは歩くのである。

　宙を漂う石板はふわふわ動いて、勝手に人間たちを避けていく。

　ジョン・プルートー・スミスが歩を進めるたび、ブーツの鉄てつ鋲びようはかつんかつんと規則的に石の床をたたく。その音を追いかけながら、リリアナは困こん惑わくした。

　頭のなかに、数々のイメージが立てつづけに浮かびあがってくる――。

　止とどまることのない時の大河。歴史。人の営いとなみ。飢うえる者。飽ほう食しよくする者。盗む者。だまし、奪い、殺す者。祈り、救い、愛する者。善を為なす者。悪を為す者。中ちゆう庸ような者。野望と希望、夢と挫ざ折せつ。価値ある生、無価値な生、死。

……これらはおそらく、『人』にまつわる記憶の積みかさねに他ならない——。

祐理もしきりに視線を左右に動かし、とまどっていた。

「万ま里り谷や祐理、あなたも——」

「は、はい。私もいろいろなものが視みえてきて……」

やはり、これらのイメージは霊視力が受け取る啓示なのだ。その発信源は——魔女の直感にまかせて、リリアナはにらんだ。

地下回廊をたゆたう、おびただしい数の石板たちを。

「スミスさま、これは一体どのような……？」

「君たちのような魔女はアストラル界にたゆたう虚空アカシアの記憶とやらを読み取って、霊視の啓示を受け取るというな」

ついに訊ねたリリアナへ、仮面の神殺しは言った。

「この館やかたに収蔵されている石板……ここに綴られた文章こそがそれだ」

「!?」

「生ある者の世界、不死なる神々の世界、生と不死の境界——この三界で過去に起きた出来事、今起きている出来事を網もう羅らした記録。それが君たちの言う《虚空の記憶》だ。その保管所に来た以上、霊感が刺激されるのも無理はない」

「やはり、そうでしたか……」

絶句するリリアナに対して、祐理はうすうす察していた様子だった。

「霊視力者は未来を予見するように認識されているがね。正確には『今起きている出来事』を霊感で読み取り、そこから『起こりうる未来』を無意識に予測する能力なのだ——と、ここをあずかる男は言っていたよ」

「その人物が時の番人、プルタルコスの館とやらの主あるじなので

すね？」

「護堂さんたちを抹殺したいとお考えの……」

「それだけ彼も大変なのさ。実際、同情に値あたいする立場だからな」

　リリアナと祐理のコメントに、英雄の仮面が苦笑で揺れる。

「人類の基準で言えば、彼は超越者だ。定じよう命みようのさだめから解き放たれ、ただの魔術師など凌りよう駕がする力を持つ。だが、それでも彼は神ではない。神殺しでもない。つまり、私や同族たちほど埒らち外がいの存在ではない」

　回廊を進みながら、ジョン・プルートー・スミスはいかにも人の悪い声で語った。

「この一五〇年ほど、彼に多大なストレスをあたえてきた女性がいる。彼女はカンピオーネであり、時を渡る旅人であり、容易に変えられないはずの歴史を軽やかに改変していく超人でもある……。まあ、会えば君たちにもわかるだろう」

　前方に金属製の扉が見えてきた。

　スミスが開ける。その先は通路ではなく部屋だった。

　ここでは、石板は空中に浮いていない。床にぶちまけられていた。大量の石板が散乱するせいで、足の踏み場を見つけるのにも苦労するほどだ。

　中央では、白はく髪はつ白はく髭しの老人が三脚式のイーゼルと向き合っていた。

　ただし、イーゼルには画布ではなく、例の石板の一枚が載のせてある。老人は古代ローマの長衣トーガをまとい、青銅のペンを握りしめていた。

「この年の大おお晦日みそか――スエビ族およびヴァンダル族はアランの騎兵をともない、モグンティアクム近郊を通過する……。ライン川の左岸にはすでにブルグント王と部民が入りこみ、ガリアへの干かん渉しようをはじめつつある……。まもなくゴートの民たみも来よう……」

老人はぶつぶつ唱えながら、石板をにらむ。

「しかし、彼かの地にはいてはならぬ蛮ばん王おうどもが三人も集つどうておる——。どうせ今回も修正、修正、修正に次ぐ修正じゃ！　嗚あ呼あ、なんたる嘆なげかわしき仕事か！」

ついに老人は激情を込めて叫んだ。

また、無断で入室したジョン・プルートー・スミスに怒りの矛ほこ先さきを向ける。

「聞いてくれ、王よ。わしはこの仕事につくづくうんざりしている。われわれ人類が連れん綿めんと紡つむいできた歴史ヒストリエは、またしても書きかえられた」

老人はスミスのあとに入室したリリアナと祐理を見ても、気にしなかった。

一いち瞥べつしただけで、すぐに石板へ視線をもどす。スミスは大げさに肩をすくめ、冗談めかして言った。

「そうは言っても、君は時を守護する番人役だ。歴史に刻まれた修正の跡を粛しゆく々しゆくと記録に残し、ときには自みずから過去へ赴いて介入を行う」

過去へ赴おもむく。その言葉にリリアナと祐理はハッとした。

「私情を持ちこまず、勤労に励んだらどうだ？　それも就労の義務というやつさ」

「たしかにそうじゃ！　しかし、歴史の修正など稀にしか起こらぬこと。まして、わし自らが過去に赴くなど——この千年で三度しかなかったこと。運命の悪戯いたずらによって過去へ飛ばされた者が歴史を変えることなど、めったに起きないはずなのじゃ！」

憤ふん怒ぬでわなわなと肩をふるわせながら、老人はつぶやいた。

「しかし、あのご婦人は単なる出来心で歴史を次々と変えていく。己おのれの行動が未来にどれだけの影響をもたらすか——考えもしないのだ！　只ただの一度も！　そのうえ、今回は三人もの神殺しが過去へ飛んでしまった！」

「ならば君もその時代に飛び、彼らの行動を妨害すればいい」

「知っているだろう。わしごときの力で神殺しの蛮人バルバロイを掣せい肘ちゆうできるわけがない！」

「だから私に殺せと頼むのか？　三人のカンピオーネを？」

「そうだ！　アレクサンドリアのアイーシャ、シエナのサルバトーレ・ドニ、日本国の草くさ薙なぎ護ご堂どう——。彼らがこれ以上、時の流れに歪ゆがみを加える前に！」

　当代の神殺し三名を名指ししての暴言。特に草薙護堂を殺せと主張した段でリリアナはかちんときたのだが、好奇心も大きく刺激された。

　この老人は何者なのか？　思った瞬間にいくつかのイメージが浮かんできた。

　——神ならざる不死者。定命のさだめから解き放たれた者。

　——かつては偉大なる歴史学者にして、神秘学に通じた賢人。今は虚空アカシアの記憶を刻んだ〝碑〟の管理者にして、あるべき歴史の編へん纂さん者しや。

　では、あるべき歴史とは？

「未来から過去へ飛んだ者の行動が歴史を大きく歪ませるとき、影響が最小限でおさまるよう修正を加えた結果……」

　リリアナの唇くちびるが勝手につぶやく。そういえば、前に草薙護堂が教えてくれた。

　幽世かくりよのスサノオ神の庵いおりで、神ではないが人間以上の霊力を持つ存在に出会ったと。たしか黒衣をまとう僧侶であったとか。長衣トーガの老人もその同類なのだ。

　そして、リリアナは気づいた。

　アストラル界では、すぐれた霊視力者は知りたい知識を即座に霊視できるという。このことだったのだ。《虚空の記憶》の集積所という、どこよりも霊視を行いやすい場所に来たおかげで、自分にも可能になったのだ！

かたわらの媛ひめ巫み女こを見ると、祐理はうなずきを返してくれた。

すでにリリアナと同じ知識を霊視したのだろう。いや、それどころか――。

「今この場所の時を刻む碑よ、ここに……」

祐理が言こと霊だまを口にすると、床に散乱していた石板の一枚が宙に浮きあがる。

そこに刻まれた大量の古ラテン語のなかに、リリアナはある一文を見み出いだした。

『ジョン・プルートー・スミス、万里谷祐理およびリリアナ・クラニチャールの両名をともない、プルタルコスの館を訪ねる』

今この場で『起きている出来事』の記録だった。それがどこにあるかを祐理は霊視し、呼び出してみせたのだ。一方、ジョン・プルートー・スミスが言う。

「しかし御老人。君が死を願う三名、どうやって殺す？　時の通つう廊ろうを開き、彼らがいる時代に私を送りこんでくれるのか？」

意地悪く笑う仮面の神殺しへ、老人は「ふん」と眉まゆをひそめた。

「すでに三人も厄やつ介かい者ものがまぎれこんだ時代に四人目を送りこむなど、愚ぐ行こうもいいところ。王よ、あなたもまたエピメテウスの落とし子。過去をさまよううちに時の流れをかき乱し、歴史を書きかえていくにちがいない！」

「慧けい眼がんだな、御老人」

失礼な決めつけに対して、魔王はかすかな笑いで仮面をふるわせる。

「これでも世の平穏をかき乱すことに関しては、ほかの同族に負けない自負も持ち合わせている。しかし困った。それでは彼らを殺せるはずがない」

「その腰の――アルテミスの矢を撃てばいい」

「ほう」

「あなたが所有する矢の権能は、時の通廊すら越えて標的を撃ち抜けよう」

　リリアナは息を呑のんだ。老人の言葉が偽いつわりではないと——霊視できたのだ。

　狩猟の女神アルテミスより簒さん奪だつした、魔弾の権能。

　月に六度しか撃てないため、攻撃回数という点ではきわめて制約が大きい。その代わりに魔弾が宿す力は多彩で絶大だ。超々遠距離の狙そ撃げきを行う場合、北米にいながらヨーロッパの敵を狙ねらい撃つことさえ可能。

　この老人の導きがあれば、アストラル界から過去の時代へ魔弾を撃ち込むことも——。

　しかし、スミスは大げさに肩をすくめた。

「できるとは思うが……殺せる保証はないし、自信もない。カンピオーネがどれほどしぶとい種族か、知らない君でもないだろう？　賭かけてもいいが、彼らは天から降ってきた銃じゆう弾だんをどうにかして免まぬかれるだろう。さもなくば、運よく弾たまがはずれるかだな」

「ぬ」

「むしろ正体不明の狙撃者がいると知って、警戒心を強めた彼らは新しい騒動を引きおこすのではないだろうか？　結果、どんな大混乱が起きるか……あまり想像したくないな。歴史のひとつやふたつ、また変わってしまうのではないか？」

　否定できないのだろう。老人が「むう」とうめいている。

　そんな彼に、ジョン・プルートー・スミスはおだやかな声で語りかける。

「それよりも私はこう考える。たとえば、三人の魔王がいる時代へ、この巫女たちを送りこんではどうかと。彼女たちは草薙護堂の直じき臣しんだ」

　祐理とリリアナをさっと手振りで示しながらの推すい薦せんである。

　スミスの動きは例によって舞台役者のように大きく、華があった。

「問題の三名のなかでは、あの男がいちばんまともだ。まあ、野放しの状態では他のふたりと大差ないだろうが、道みち標しるべとなるべき協力者がいれば、事態の収しゆう拾しゆうに貢こう献けんしてくれるはず――と、期待はできる」

「たしかにそうかもしれんが、やはり駄目だ！」

　リリアナと祐理は目を輝かせていた。

　ジョン・プルートー・スミスは自分たちを過去に送りこむつもりで、ここへ案内してくれたのかと。しかし、長衣トーガの老人が激しく拒否する。

「あの御ご仁じん、治ち世せいでは乱を起こして梟きよう雄ゆうとなり、乱らん世せでは乱に乗じて玉ぎよく座ざを奪う器うつわだぞ。そのような者にさらなる助力者をひきわたすなど、恐ろしすぎる！」

「……言われてみると、たしかにそうかもしれないな……」

「……だ、ダメですよリリアナさん。たしかに護堂さんの人となりを語るうえで、『乱』という言葉はすごくしっくりきますけど……」

　誰よりも草薙護堂を知るがゆえに、思わずリリアナはつぶやいた。たしなめる祐理の言葉に力がないのも、同じ理由からだろう。

　しかし、この老人に過去への扉を開く力があるのなら、やはり協力を得たい。

　祐理とうなずき合い、リリアナが説得をはじめようとしたときだった。

「む……？」

　老人の手から青銅のペンが勝手に離れて、宙に浮く。ひとりでに

動いて、イーゼルにかかった石板へガリガリ書きこんでいった。

「勇者殿のガリア降こう臨りん……五二年も早まった、だと？」

　自動筆記された内容を一瞥して、老人は愕がく然ぜんとした。

「嗚呼、御み子こよ。地上に落ちた聖なる御子よ。それは起きてはならない——あってはならない改変だぞ！　その後の歴史に修正を加えることも容易ではない……いや。今の段階で事態を収拾できれば、あるいは——」

　それから長い沈黙。そして数十秒後。

　老人はようやく顔を上げ、リリアナと祐理にはじめて視線を向けた。

「王の道標となりうるかもしれない娘たち。こうとなっては是非もないのか……」

　余よ程ほどの緊急事態が生じたのか、肩を落としながらの発言だった。

「しかし、言っておかねばなるまい。時の通廊を開き、おぬしらを送り出すことはできる。だが、助力してやれるのはそこまでだぞ」

「……過去に着いたあとは、全て自力でやれと？」

　リリアナは訊たずねた。仮面の魔王が口を開くよりも先に。

　ここまで彼に連れてきてもらった。しかし、ここから先へ進むのが自分たちなら——そのための準備は、やはり自分たちの才覚で進めたい。いつまでも他人の背におぶさっていては、騎士の沽こ券けんにかかわる。

「そうじゃ。しかし、おぬしらを送りこむ先には運命の御子が……魔王殲せん滅めつの勇者殿が顕けん現げんしておる。おぬしらの時代では『最後の王』とも呼ばれる御仁だ」

「——『最後の王』！」

　魔女王グィネヴィアおよび軍神ランスロットとの戦いで何度も聞いた名前。

瞠どう目もくするリリアナに、長衣トーガの老人はうなずきかけた。

「かの御子は今まで幾度も地上に降臨し、神殺しの魔王たちと戦ってきた。おぬしらの暦こよみでいう四五八年にもガリアの地に顕あらわれた。このとき御子は欧おう州しゅうの各地を転戦し、ブリタニアにも渡り、長き戦いののちに当時の魔王どもを全て滅ぼしたのじゃ」

「…………」

「しかし今、歴史の流れは大きく変わり、『最後の王』降臨は五二年も早まった。このことが引き金となって生じる歴史の改変は——とても修正しきれるものではない。じゃが、アイーシャ殿や草薙殿が御子を今しばらく眠らせてくれれば、どうにか……」

「このことを草薙護堂に伝えよとおっしゃるのですね？」

「うむ。しかし、かの御子をよみがえらせたのは、無む辜この民たみより怨えん嗟さと呪じゅ詛そを託たくされた女神アルティオ。困難な使命となるであろうな……」

老人はぐったりとうなだれながら、言った。

「過去への旅はただでさえ困難をともなう。行きて帰りし者はごく稀じゃ。そのうえ、かような使命を背負うての旅。断るのなら今のうちだぞ」

「いいえ——。私、護堂さんに約束したんです」

リリアナよりも先に答えたのは、もちろん祐理だった。

「あの人がもどってこないときは私の方から探しに参ります、と。そのお役目、是非うけたまわりたいと思います！」

2

ひたすら闇やみだけが広がる空間に草くさ薙なぎ護ご堂どうはい

た。

　しかし、ひとつだけ光源がある。遥はるか頭上で白い小さな光が一番星のようにきらめいているのだ。護堂は腕組みして考えこんだ。

「割と最近、似たような場所に来たような……」

　こんな空間にいきなり迷いこんでも落ち着いている。

　不本意ながら、カンピオーネとして積みかさねてきた経験のおかげだろう。また、すぐそばでは同族の男がきょろきょろ周囲を見まわしていた。

「なあドニ。俺たち、『最後の王』と戦っていた途中——だよな？」

「最後の……？　ああ、いきなり出てきた剣の神様か。うん。僕らはたしかに彼の一撃を押し返そうとしていたよ。『最後の王』……聞き覚えがあるな」

　隣にいた金髪の優やさ男おとこ、サルバトーレ・ドニはうなずいた。

　あのとき絶体絶命の窮きゆう地ちだった割に、護堂もドニも無傷である。火傷やけどひとつない。

「たしかアレクとかグリニッジのお姫さまが探していた神様だ。すごく強いっていう。ちょうどよかったよ。どこかで出会ったら、ちょっと決闘してみたかったんだよね」

「俺はできることなら、永久に出会いたくなかったよ……」

　意外と情報通であるドニは『最後の王』のうわさを耳にしていたらしい。

　真ま逆ぎやくの想おもいを口にしながら、護堂は三人目の同族を探した。自分たちが無事なのだから、彼女もきっと——やはりいた。

　すこし離れたところにアイーシャ夫人が横たわっている。

「大丈夫ですか、アイーシャさん⁉」

「ひゃ、ひゃい、どうにか……」

　駆けよって声をかけると、夫人は返事らしき真ま似ねをした。

　しかし、意識が混こん濁だくしているようだ。「きゅう……」と目を回している。

「命拾いできたようで、なによりでひゅ……」

　上う手まくしゃべれないアイーシャ夫人を見守りつつ、護堂はふと気づいた。

「ここって、古代に来るとき通った〝通つう廊ろう〟に似ているな……」

「ああ、そうか。言われてみると見覚えがあるよ、僕も」

　ドニもうなずいている。だとしたら、すぐ目の前でふにゃふにゃしている女性こそが命の恩人なのだ。護堂は心から礼を言った。

「アイーシャさんが俺たちを助けてくれたんですね。ありがとうございます」

「ど、どういたしまして……。わたくしを加護する幸運と、わたくしを古代ガリアにつなぎ止めようとする歴史の修正力が合わさって、妖よう精せいの通廊を開いてくれたようです……。おかげで、三人そろって命拾いできました……」

「そういえば、妖精の通廊はひとりでに開くんでしたっけ」

「ひゃい……あの出口を通れば、また古代のガリアです。もうすこししたら向こうに引きもどされると思います。それまで休んでいましょう……」

　アイーシャ夫人はぐったりしながら、頭上を指さす。

　その先では白い光が星のように瞬またたいている。護堂はあることを思いついた。恵え那なの言葉を思い出したのだ。『通廊は見えなくなるだけ』説。

それが正しいのなら——護堂は試しに言ってみた。

「ここにはもしかして、俺たちの二一世紀につながる出口もあるんじゃないですか？　そこを通れば、もとの時代に帰れるとか……？」

「おいおい護堂。戦いはこれからなのに撤てつ退たいはなしだよ」

「エリカと清せい秋しゆう院いんを残して、誰が帰るか。ちょっと思いついただけだよ」

「草薙さん、鋭いですね……。実を言うと、あるんです。ただ——」

男ふたりに見守られながら、アイーシャ夫人は祈るように胸の前で両手を組む。

すると、周囲に無数の光る点がいきなり出現した。それは、宇宙空間に無限の星々が散らばる情景と酷こく似じしていた。

「あの光のひとつひとつが通廊の出口なので、行きたい時代に出られるかはすごくむずかしいんじゃないかと……」

「ど、どこにつながる出口か、見分ける方法はないんですか？」

「時空の旅に慣れたアストラル界の上位妖精さんとか旅の守護神なら、たぶん大丈夫です。ただすいません、わたくしや草薙さんの力だと無理ではないかと……」

「ショートカットはできないわけですね。わかりました」

もともと思いつきで訊たずねた件。護堂が落らく胆たんもせずにさばさばと言うと、闇の空間に広がった星々は頭上のひとつを残して消え去る。

一方、もう一名の男は目を輝かせて、不ふ謹きん慎しんなことを口走った。

「うーん。だったら適当な出口をめざすのも面白そうだよねえ。先の見えない旅って無性にわくわくするだろ、ねえ」

「戦いはこれからだとか言ってた男がバカ言うな」

　サルバトーレ・ドニに釘くぎを刺して、護堂は眉まゆをひそめた。

　この男に過去の世界をこれ以上荒らさせるわけにはいかないのだ。しかし今、最優先で対処すべきは『最後の王』ないしアルトス。何しろ魔王殺しの軍神、うそか本当かは知らないがカンピオーネを全滅させるまで戦いつづける男だという。

　何より、あの忘れがたい警告がある……。護堂はため息をついた。

「なあサルバトーレ・ドニ。断だん腸ちようの思いでひとつ提案するぞ」

「何だい、我わが心の友よ？」

「その世よ迷まい言ごとにもしばらく文句は言わないでやるから、俺と手を組まないか？　あのアルトスだか『最後の王』との戦いを切り抜けるまで」

「へえ」

　ドニは珍しく軽薄さのない、感心した様子の笑みを浮かべた。

「珍しいというより、はじめてだな。君から僕に共同作業を要求するなんて！」

「そこは共闘とか同盟とか、緊張感のある言い方をしろよ。前、アテナに言われたんだ。『最後の王』と戦えば、俺は必ず死ぬ。七人のカンピオーネも全員あいつに殺されるって」

「アテナの忠告か……」

「おまけに、向こうには手負いだけどアルティオって女神もいる。よくわからない風の神様もいる。俺たちふたりが組んでもまだ三対二だ」

「ふふふ、なかなか厳しい状況だねえ」

「あんたが不利な勝負から逃げたいのなら、無む理り強じいはしないぞ」

「冗談を言っちゃいけないな。無謀な決闘に臨のぞもうとする友と肩をならべて戦い、友情を深めるのもいいものさ。君と僕の仲だろう？」

「…………」

「君と僕の仲だろう？」

「……まあな」

「よし、これで同盟成立だ！」

　にかっと笑うドニに対して、護堂は思い切りの渋じゅう面めん。しかし、これで準備のひとつはととのった。一方、アイーシャ夫人がそわそわしながら言いだす。

「あ、あの、草薙さん？　わたくしはどういたしましょうか⁉」

「もちろん協力していただけるなら三対三になりますし、すごく助かりますけど……体の方は大丈夫ですか？　神様たちと戦いにもなるでしょうし」

　さっきの緊急避難で、アイーシャ夫人はずいぶん消しよう耗もうしたように見える。

　また、戦闘は苦手だと何度も公言している女性なのだ。『癒いやしの権けん能のうを反転させる』ような裏技はいくつかありそうだが、この状況で役立つかどうか――。

　はたして、夫人は申し訳なさそうに目を伏せた。

「す、すいません。治ち癒ゆの権能はわたくし自身には効果がないので……すぐには回復できそうにないです……」

「気にしないでください。さっき命を助けていただきました」

　夫人の肩に手を置いて、護堂はうなずきかけた。

「俺とドニでいけるところまでやってみます。もし手伝えそうなことがあったら、そのとき何かしていただければ十分です」

「は、はいっ」

　見あげれば、遥か頭上で輝いていたはずの光——その位置がさっきよりも低い。

　護堂たちをふたたび古代に導く出口である。すこしずつ高度を落としているのだ。あれが完全に落ち切る前に、ふたつ目の準備を完了させなくては。

　精神集中をはじめたときだった。

「ねえ護堂。君の言うアテナの忠告はもちろん尊重するけどさ」

　サルバトーレ・ドニが不意に言った。

「君自身はどう思って……いや、どう感じているのさ？」

「…………」

　護堂は答えず、全身から呪じゅ力りよくをほとばしらせた。もう時間がないのだ。頭上の光は小さなビルの屋上ほどの高さに落ちてきている。謎なぞの英雄が降こう臨りんした丘への帰還は近い。

　いよいよ第二ラウンドのはじまりだった。

3

「あの光はランスロット卿きようの槍やりと同じだったわ……」

「たしか救世の神刀、だよね……」

　つぶやきはエリカ・ブランデッリと清せい秋しゆう院いん恵え那なのものだった。

　彼女たちが見つめる先は、三人のカンピオーネが向かった方角である。

　女神アルティオの儀式によって、蒼あお白じろき髪の英雄が降こう臨りんした丘。長大な神刀の切っ先が天を示した瞬間、太陽かと見まごう光球が空に顕あらわれ、地上を深々と抉えぐった——。

　その光に呑のまれて、神殺したちは姿を消したのだ。

「殺したって死ぬような方たちじゃないけど……まさか――」

「天あまの叢むら雲くもの気配も感じないよ……。この地上から消えてなくなったみたいに」

　大地に穿うがたれた穴は直径六〇メートルほどもあり、あの『猪いのしし』すら一撃で敗やぶれた。

　さすがのエリカも、冷え冷えとした想像を抑おさえ切れない。

　恵那もいつもの明朗さを忘れて、暗い言葉を吐き出してしまった。

　しかし次の瞬間、彼女たちは〝そうではない〟という兆きざしを天に見み出いだした。もう不安は口にしない。戦いの本番はこれからなのだとうなずき合う。

　英雄の降臨した丘。今、その上空に〝黒き球体〟が忽こつ然ぜんと顕けん現げんしていた。

　重力嵐を呼ぶ暗黒星――草くさ薙なぎ護ご堂どうの新たな武器だった。

「暁あかつきの秘ひ録ろくよ……」

　女神アテナとキルケーの導きで得た『黒の剱つるぎ』。

　この新たな力を準備しはじめたとき、護堂はまだ『妖よう精せいの通つう廊ろう』のなかにいた。

「俺に女神の智ち慧えを貸してくれ！」

　草薙護堂が行使できる、最大最強の攻撃である。

　しかし、威力を最大に高めるまで時間がかかる。集団を殲せん滅めつすることはたやすいが小目標を個別で狙ねらうのはむずかしいなど、ウルディン戦で明らかになった特徴もある。

　――だから、このタイミングで使うのがいちばんだった。

　異空間の通廊から地上に帰還した瞬間。

　最大威力にまで高めた暗黒星を英雄たちが待つ丘へ叩たたきつける！

「頼む、天あまの叢むら雲くも！」

『応おう！』

　右手に持つ天あまの叢むら雲くもの劍つるぎが護堂の号令に雄おゝおしく応こたえた直後。

　ふたりのカンピオーネと共に地上へもどってきた。このとき、背後には直径六〇メートルのクレーターが口を開けていた。底が見えないほど深い。

　対して、前方には蒼き髪の英雄と熊の女神が待ち受ける丘。

　丘のふもとに帰還した護堂・ドニ・アイーシャ夫人。そして、三人の頭上には背後の大穴より二倍近くも大きな暗黒星が顕現する。

『千せん鈞けん破はの剱つるぎよ、ちはやぶる神風を以もつて蹂じゆう躙りんせよ！』

　天叢雲劍が命じた瞬間、暗黒星は急降下をはじめた。

　もちろん、神々の丘めざして。しかも、轟ごう々ごうたる暴風が吹きはじめる。

　この暗黒星は地上の万物を吸いこむ超重力の具ぐ現げん。土ど砂しや・草・丘の上の環かん状じよう列れつ石せきなどと共に、風と大気が黒き球体へ呑みこまれているのだ。

　これこそが『黒の剱』の重力嵐だった。

「ははは！　こんな権けん能のうを手に入れてたのか。さすがだよ護堂！」

「こ、この間は遠くから見ただけでしたけど、こんなにすごかったなんて！」

　ドニが愉ゆ快かいそうに笑い、アイーシャ夫人が風になびく外が

い套とうを押さえる。

　カンピオーネ三人がどうにか吸引されていないのは、天叢雲剣をかかげる護堂がその許可を暗黒星に出していないからだ。

　吸引をまぬがれている者はまだいた。女神アルティオと『最後の王』だ。

「我わが分身たる大地よ！　母なるものよ！」

　言こと霊だまを唱えたのは、大だい地ち母ぼ神しんであるアルティオだった。

　その腹部にはドニのあたえたという刀傷がいまだ赤黒く刻まれている。

「妾わらわと息子をなんとしてもこの地につなぎとめよ！」

　翼なきものが大地を離れることは許されない――。

　その理ことわりにもとづく神力でも使ったのか。アルティオと『最後の王』は重力嵐の暴風になぶられながらも、両名の足は大地から浮きあがることはない。

　しかし、この抵抗がかなりの負担なのだろう。アルティオは必死の形ぎよう相そうだった。

　また、かりそめの母子おやこめがけて護堂の暗黒星は急降下していく。

　時速にして数百キロというところか。だが、このとき。蒼き髪の英雄はさっと救世の神刀を振りあげ、白金プラチナ色の切っ先を急接近する黒き球体に突きつける。

　直後、巨大な白き光球が出現し、暗黒星の前に立ちはだかった！

「…………！」

　蒼き髪の英雄はあいかわらず無言だが、膨ぼう大だいな呪じゆ力りよくを神刀に注そそぎこんでいた。

　救世の神刀が生んだ光は太陽さながらのまぶしさで、天あまの叢

むら雲くもの劍つるぎが操る暗黒星と同じほどに巨大だった。

　かくして、白き太陽と暗黒の巨星は地上の空で激突したのである。

　護堂にとってはランスロットとの決闘以来、ひさしぶりに見る光景だった。白き太陽からは幾百の電光がほとばしっている。暗黒の星のまわりでは重力嵐が荒れ狂っている。

　まさに互角の激突。これもランスロット戦と同じ——！

「……まあ、たしかにな」

　しかし、高々とかかげた天叢雲劍に呪力の大半を注ぎこみながらも、淡々と。

　低く護堂はつぶやいた。そして、かたわらのドニに目配せする。

「たしかに、ちょっとちがうかもしれないか」

「君もやっぱり同じ意見か。さすがは我が友だ」

「俺たちにはわからない事情があるんだろ、何か。だけど、それでも向こうの方が地じ力りきじゃ俺たちよりも上のはずだし」

　ドニの友情アピールを聞き流しながら、静かに言う。

「その隙につけこまないって話はないと思うぞ」

「同感だ。じゃあ、行ってくるよ！」

　ドニがにやっと笑って駆け出した。

　丘のふもとから頂いただきへと、長剣を抜き放ちながら登っていく。その背中を見送りながら、護堂は思わず舌打ちした。意外なほどドニと息が合っているからだ。

　あの男との呉ご越えつ同どう舟しゆうなど初めてだというのに！

　護堂の腹立たしさも知らず、剣の神殺しは軽やかに丘を駆けあがる。

　しかし、その前方に長身の人影が立ちはだかった。全身に白い布

をぐるぐると巻きつけ、そのうえに革かわ鎧よろいをまとった戦士である。ただし、顔には仮面をはめている。

　顔の前面を全て覆おおいかくす紅あかき面——。

　両目に相当する部分が黒く塗りこまれていた。

　巻きつけた布と仮面のせいで、素肌がまったく見えない。正体不明の人影は己おのれの背せ丈たけと同じほど大きな刀をなんと片手で構えていた。

「へえ。行かせないってわけかい？」

「————」

　にこりと笑うと同時に長剣で上段から斬きり込むドニもたいがいだが、仮面の戦士はこれを平然と防いでみせた。大刀をさっとかざして、受け止めたのだ。

　しかし、ドニの長剣は受け手の大刀を——切断。

　そう、サルバトーレ・ドニの魔剣は全てを一刀両断する権能。敵手の肉体どころか、鎧も楯たても武器さえもやすやすと切り裂いてしまう。

　ドニの剣はそのまま勢いを殺さず、敵の仮面めがけて稲妻のごとく降った。

　が、あと三センチで顔面を両断されるというタイミングで、あきれたことに仮面の戦士は軽やかに剣を避けた。さっと横に跳んだのである。

　その速さはまさに疾しっ風ぷう。『ひゅん！』と風鳴りが発生する。

　さらに仮面の戦士はとんとんとステップをはじめる。

　軽けい捷しようなアウトボクサーを思わせる動き。今、この地には『黒の剱』による重力嵐が吹き荒れているというのに、それを無視する軽やかさだった。

　このスピードスターがステップを踏むたび、彼の足あし下もとか

ら旋せん風ぷうが巻き起こる。

　彼ないし彼女は重力の軛くびきに囚とらわれない、疾風の軍神なのだろう。

「さっき出てきた風の神様、でいいみたいだねえ」

「――――」

「ご主人さまといっしょでだんまりか。ふふふ、そういう趣向も嫌いじゃないよ」

　紅き仮面の軍神。天あまの叢むら雲くもの劍つるぎが風神にして剣神と喝かつ破ぱした存在。

『最後の王』の従属神なのだろか――いや。護堂はかぶりを振った。軍神ランスロットの例がある。地上を放浪する間に『最後の王』と出会い、盟友となったのかもしれない。決めつけるのは早計だった。

　一方、微笑ほほえむドニに対して、正体不明の軍神はふたたび大刀を召しよう喚かんした。

「――――！」

　己の背丈と同じほど長大な刀を手に、真正面からドニへ突っ込む。

　その速さは疾風どころではない。電光だった。ウルスラグナの化け身しん『鳳おおとり』、アレクサンドル・ガスコインの『電光石火ブラック・ライトニング』と同等のスピード――神しん速そくである！

　仮面の軍神は神速にまかせて、恐るべき攻撃を繰り出した。

　今まで片手で振るっていた大刀。これが唐突に一二本の腕と一二振りの刀に増えて、四方八方よりドニの体に襲いかかったのである。

　神速のため、一二度もの連続攻撃が全て同時に見えた結果だろう。

　しかし、この攻撃をドニはことごとく見切った。一二振りの刀は全て金髪のカンピオーネを切り裂いたかに見えたが、ドニの体は陽炎かげろうのごとく揺らめいただけ。無傷だった。

　サルバトーレ・ドニは神速すら見切る、心しん眼がんの使い手なのだ。

　あげく、やけにゆったりと長剣を突き込んで、軍神の仮面を貫つらぬこうとする。

　戦闘中とは思えないほど悠ゆう然ぜんたる、低速の突き。対して神速の使い手はなぜかぎりぎりまでドニの剣を避けようとしない——否いな。

　ドニの太た刀ち筋すじを見切ることは、異様にむずかしいのだ。

　だから対応が遅れる。刃やいばが鼻先まで迫ったところで軍神はようやくサイドステップし、回避を成功させた。かつて護堂も実体験した、ドニの神かみ業わざだった。

「————」

「わかるだろう、速いだけなら僕の敵じゃないって」

　仮面の下でおそらく表情を鋭くしたであろう軍神にくらべて、ドニはあくまでのびやかだった。しかも、こんなことまで言う。

「もしかして君、いつもは刀じゃない武器を使ってるのかな？　悪いことは言わないからさ、本当に得意な道具で戦った方がいいよ」

　短い攻防の間に、敵の武芸をすこし見切ったらしい。

　さすが武の天才というべき慧けい眼がんを示してから、ドニは不敵に笑う。

「こういう勝負だったら、僕はたぶん君が思っている以上に強いから」

「————」

　いちばんの得え手てをあえて封じたという、仮面の軍神。

　もしかしたら、その姿と武具をさらすことは正体を明かすのと同義なのだろうか。好奇心にまかせて、護堂は軍神を注視した。

　が、そうしながらも天叢雲剣を高くかかげ、多量の呪力を送りこんでいる。

　もちろん、『黒の剱』と重力嵐を維持するためだった。頭上では白き救世の太陽と暗黒星がぶつかり合い、たがいにたがいを消滅させようと拮きつ抗こうしているのだ。

　そして、丘の上では『最後の王』も護堂と同じ行為を——していなかった。

　蒼白き髪の英雄は丘を駆けおりてくる。救世の神刀を手に、草薙護堂めがけて。

「って、向こうは俺ほど苦労してないのか！」

　暗黒星を維持するために足を止め、念を集中させていた護堂。

　対して『最後の王』は軽やかに疾しつ駆くし、ついに護堂の眼前にまで来てしまった。上空の白き恒こう星せいは燦さん然ぜんと輝いたまま。やはり、草薙護堂など凌りよう駕がするポテンシャルの持ち主！

　そして、魔王殲滅の勇者はついに愛刀を振りおろした。

　魔王・草薙護堂めがけて、袈け裟さ懸がけに。

　軍神の名に恥じない、洗練された剣技だった。護堂の動体視力と集中力は時速一〇〇マイルの剛速球すら見切るだろうに、救世の神刀を避けることはかなわなかった。

　左肩から右腰にかけてを存分に斬られた。

　鮮血が舞い、痛みというよりも熱さが護堂の体を斜ななめに走る。

　重い深傷ふかでである。しかし、それでも致ち命めい傷しようにいたらなかったのは——かわせぬまでも獣けものめいた反射神経でとっさに後方へ跳びすさったからこそ。

　そして、カンピオーネの鉄より硬い骨格と強きよう靭じんな肉体があればこそ。

『最後の王』はあいかわらずの無言でしとめそこねた神殺しと冷淡に対たい峙じし、あらためて神刀を構えなおした。

　剣の柄つかを肩ほどの高さにまで持ちあげる、上段の構えである。

「草薙さん！　今、傷を治しに参ります！」

「来なくていい！　アイーシャさんは安全なところ——エリカと清秋院のところまで退さがってください！」

　うしろから奇跡の癒いやし手が心配そうに叫んでくれた。

　しかし、語気荒く指示を出す。正直、この強敵相手に守り切れる自信はない。

　護堂の意図に気づいてくれたのか、アイーシャ夫人は意外なほど即座にうなずいて、足早に去っていく。このあたり、さすがだった。生きのびるための嗅きゆう覚かくが鋭い。

　護堂はぎろりと猛たけ々だけしく『最後の王』をにらみつけた。

　蒼き髪の英雄はなんとも涼やかな無表情で——無感動だった。

　だからだ。だから、こいつから脅威を感じないのだ！　闘争の激情と勝機を見出した興奮が護堂の唇くちびるを獰どう猛もうに微笑させた。

「全ての悪あしき者よ、我われを畏おそれよ……。雄ゆう強きようなる我がかかげしは、猛たけき駱らく駝だの印なり！」

　ウルスラグナ第四の化け身しん『駱駝』を使う。重傷を負うことが使用条件。この化身によって、草薙護堂は超人的な格闘能力とキック力、そしてタフネスを得る！

　激痛が『駱駝』の恩恵で和やわらぐ。すぐさま護堂は叫んだ。

「天あまの叢むら雲くも！　あっちはしばらくまかせていいか⁉」

『応おう！』

　力強い承しよう諾だくを聞きながら神刀を地面に突き刺す。

　短時間ならば天あまの叢むら雲くもの劍つるぎの呪力が『黒の剱』を維持してくれるだろう。武器を捨てるのと同時に、護堂は動いた。

　さっと『最後の王』の足下にスライディングですべりこんだのである。

　ついでに踵かかとを突き出し、英雄の膝ひざを蹴けり砕こうとする。自みずから倒れこみながら敵の足を狙う奇襲は、人間世界の武術・格闘技にも存在する。もっとも、神刀の英雄はわずかに後方へ退がるだけで、淡々と蹴りが届く間合いから脱出した。

　最小限のバックステップだから、一瞬の遅ち滞たいもなく反撃へ移れる。

『最後の王』は即座に剣を振りおろした。

　輝く刃の下には、スライディング失敗で地に倒れた形の護堂がいる。

　まともな格闘技の動きでは救世の神刀を避けられない。みっともなくゴロゴロ地面を転がって、護堂は輝ける神刀から逃れた。

　すかさず『駱駝』の脚力にまかせて、バネがはじけるように立ちあがる。

　そこに追撃が来た。『最後の王』が神刀の切っ先をまっすぐ突き込んできたのだ。しかも、単発ではない。一、二、三――四段突き。

　ほぼ一瞬で四つの突きを護堂の眉み間けん、喉のど笛ぶえ、心臓、みぞおちに繰り出す神業。

　護堂はつづけざまに頭を振り、胴体も左右に振って四段突きをかろうじて避けきった。しかし、『最後の王』とちがって反撃に移れない。敵は神業を見せた直後にふたたび上段の構えを取り、迎撃態勢をととのえていたからだ。

　ひとつひとつの動作に無駄がなく、体の軸じくがぶれない。

　だからこそ、一瞬の間かん断だんもなく攻防を行える。すぐさま次の動作に移れる。

　一いつ箇この剣士としても『最後の王』は傑けつ出しゆつしているのだ。

　さすが最強の軍神。サルバトーレ・ドニや義姉・羅ら翠すい蓮れんが相手でも、おそらく尋じん常じように斬り合ってみせるだろう。もしかしたら剣術だけで勝利すら得るかもしれない。

　そのうえ、神刀を構える姿がまとう威い風ふう——。

　常に端たん然ぜんと剣を操り、小さな体さばき、わずかな足さばきすらも洗練の極きよく致ちにある。

　そこには救世の剣を持つ勇者にふさわしい『位くらい』があった。まさに王者の剣、敵を上かみ座ざより見おろしながら切り捨てる。雄お々おしく堂々とした戦いぶりであった。

　野獣めいた草薙護堂の動きとは、まさに対極である。

「なあ……あんた、どうして出し惜しみをしてるんだ？」

　しかし、護堂は『最後の王』を脅きよう威いと見なせないまま言った。

「あんたは全てのカンピ——神殺しを叩きのめす勇者なんだろう？　そういう星の下もとに生まれていて、その使命を果たすときはものすごい力を出せる。そうなんだよな？」

「…………」

「前に斉せい天てん大たい聖せいって神様があんたの真ま似ねをして、魔王殺しの力を使っていたよ。そのときのあいつは今のあんたよりすごかった。あんたはどうして全力を振りしぼって、本気で俺たちをつぶしに来ないんだ？」

　そうだった。斉天大聖・孫そん悟ご空くうが三人のカンピオーネと決戦したとき。

鋼はがねの猿えん王おうは『剣神の宿しゆく星せい』とやらに祈き願がんして、魔王殲滅の力を呼び降ろし、護堂、羅翠蓮、ジョン・プルートー・スミスを圧倒したのだ。

たしかに『最後の王』は強壮だが、あのときの斉天大聖とは比べるべくもない……。

素直な疑問をぶつけてから、護堂はかすかに肩をすくめた。

敵はあいかわらずの無言。コミュニケーションの意思はないように見える。愚ぐにもつかないことを訊きいたと自じ嘲ちようしたのだ。

だが、しかし。

「……ならば逆に問おう。君はなぜ、僕にそこまで望む？」

ついに護堂は聞いた。『最後の王』が発した声を。

「この身にはたしかに魔王殲滅の運命が託たくされている。此こ度たびもかりそめの母より嘆たん願がんを受けて顕現した。しかし、だ。僕と君は今さっき出会ったばかり」

その声は涼やかで凜り々りしく、しかし、不思議と甘やかでもあった。

「順じゆん縁えんといい逆ぎやく縁えんという。人と人、人と神の交まじわりのなかで育はぐくまれていく、不可思議なる縁えにしの糸だ。そして、僕と君たちの間には——まださほどの縁もないはずだ。こうしてゆきずりに剣を交えた程度の、ごく些さ細さいな縁しか僕らにはない……」

護堂はあらためて『最後の王』を見た。

彼の目元を隠していた前髪の影がいつのまにか消えていた。護堂と意思の疎そ通つうをはじめたから、だろうか？　ともかく、予想どおりに美び麗れいな顔立ちである。

声と同様、顔立ちと立ち姿も涼やかで凜々しい。

貴き種しゆ。貴公子。高貴なる殿てん上じよう人びと。そうとしか形容できない男ぶりだった。

　だが、秀麗な顔立ちを歴戦の精せい悍かんさが錆さびのごとく彩いろどり、美男子の甘さを中和している。戦場の大将軍たるにふさわしい高貴さと威厳が彼の美び貌ぼうにはあった。

　そして今、精悍なる貴公子は憂ゆう慮りよもあらわに言う。

「古き盟約の大だい法ほうは軽けい々けいに用いてはならぬ秘儀だと、僕は考える。いまだ縁浅き君たちへの行使を躊ちゆう躇ちよする理由、わかってもらえただろうか？」

「大体のところはなんとなく……」

　護堂も困こん惑わくしながら、返答をしぼり出した。

　軍神と名のつく連中は、いずれも過か剰じようなほど好戦的だった。しかし、あの連中とは微妙にちがう『最後の王』の発言と——何より、意外なほどスムーズな言葉のやりとり。おまけに理知的だ。むしろサルバトーレ・ドニなどより、よほど真ま人にん間げんではないか？

　とはいえ、つっこみどころが多いあたりは、やはり神様だ。

「でもな。俺の方はあんたにざっくり斬られているわけで、『ごく些細な縁』って言葉にはまったく同意できないぞ」

「そうか。言われてみれば、そうかもしれぬ」

　常人なら即死する傷をあたえておいて、『ゆきずりに剣を交えた程度』という。それはさすがにないだろうと、人間世界の常識にもとづいて指摘したのだが。

　なんと『最後の王』は素直にうなずいた。

「失礼をした。我が不ふ明めいを許して欲しい。……いや、君たち神殺しはいつの世においても不死身の豪ごう傑けつぞろい。そのような刀傷、傷の内にも入るまいと勝手に決めつけていた」

　英雄が口にした謝罪は真しん摯しであり、誠実だった。

「事実、君も当たり前のように戦いを続けていたからな」

「だ、だからって痛くないわけじゃないぞ」

「成なる程ほど、了解した。僕はたしかに浅せん慮りよであった。詫わびとして、先ほどは語らなかった秘密をひとつ告げよう」

　蒼き髪の貴公子はまっすぐに護堂を見つめて、言った。

「古き盟約の大法……あれはまだ、今の僕には使えない」

「なんだって？」

「あれだけではない。その他の武具も自在に使える域には達してないな……。剣神である僕を至高の刃やいばたらしめるものが、今の僕には欠けている」

　告白してから、『最後の王』は神刀を双もろ手てで振りあげた。

　今度もまた上段。正統にして正道なる剣術を体現する構えであった。

「盟約の大法を警戒しているのなら、その必要はない。君は——勝負に打って出る機をはかっていたのだろう？　いつでもかまわない。いつでも来てくれ」

「……何でそう思う？」

「君たち神殺しはいつもそうだからだ。劣勢に追い込まれていても、勝利の絶頂にあるときでも、会談の場にいるときでも、愛を語らうときでも、常に僕の——いや、敵の喉笛を噛かみちぎる準備は怠おこたらない。そういう存在だ」

　あいかわらず『最後の王』の目はまっすぐで、言葉は真摯だった。

　ちがうと、護堂は言えなかった。涼やかな貴公子の指摘はおおむね当たっていた。今まで彼と言葉を交かわしながら、頭の隅でたしかにタイミングをうかがっていたのだ。

　それにしても不思議だ。これほど魔王殲滅の勇者と会話が成立するとは。

　だからだろう。その意外さから護堂は言った。

「俺たちとの間にたいした縁はないって、あんた言ったよな？

だったらいっそ、戦い自体をやめてもいいんじゃないか。アルティオって女神とは、今日はじめて会ったんだろ？」

「残念ながら、それは無理だ」

　ここで『最後の王』が顔に浮かべたのは——疲れだった。

　もしかしたら、彼は長き闘争に倦うみ、疲れはてているのかもしれない。しかし、その疲ひ弊へいした表情は、錆のごとき精悍さをはっきり浮き彫りにさせていた。

「僕は君たちと戦うために誕生した剣だ。今回もそのために生を受けた。この戦いをやめるという選択肢しだけは——許されない。すまないな」

　倦み疲れているがゆえに精悍な美貌で、『最後の王』は告げる。

　護堂はどきりとした。この表情、いつか夢のなかで見たような……と、バカげた考えが思い浮かんできたのだ。

「この身がたとえ十じゅう全ぜんでなくとも、君たちと決戦することは我が運命。すこしの間、勝負につきあって欲しい。君たち神殺しを満足させられる自信、今の僕にはないが——」

「避けて通れる戦いは、できれば避けていきたいんだけどな……」

　護堂は深くため息をついた。

　いつのまにか重力嵐の起こす暴風が弱まっていた。

　上空での白き太陽と暗黒星の激突が、黒き側の劣勢となっていたからだ。維持を天あまの叢むら雲くもの劍つるぎにまかせたせいでパワーが弱まり、暗黒の星は絶頂時の半分ほどに縮小していた。

　見れば、仮面の軍神とサルバトーレ・ドニは斬り合いを継続中。

　重力嵐を抑おさえる必要が減ったからか、丘の上から女神アルティオが息子の背中を見おろしている。加勢するつもりなのだろう。

　仕掛けるなら今だった。ここからはおそらく、ずるずると劣勢に追い込まれるだけ。

　己おのれの勝しよう負ぶ勘かんにうなずいて、護堂は叫んだ。

「天あまの叢むら雲くも、アテナの剣はもういい！」

「!?」

　上空から暗黒星が消えたことで、『最後の王』が今度こそ驚きよう愕がくした。

　天に残ったのは、太陽のごとき巨大な光球のみ。しかし、これでいいのだ。数十秒以内に勝利できれば、あとはどうとでもなる。

　白き神刀の英雄に向かって、護堂は全力疾走する。

　卓越した剣士でもある軍神は驚きの余よ韻いんを顔に残しながらも、神刀を上段に構えたまま。鋭い視線を護堂に向けている。万ばん全ぜんの迎撃態勢だった。

　あと十数歩で、『最後の王』の剣が届く間合いに踏み込んでしまう――。

　だから、簡潔に命じた。

「救世の神刀を――俺にもくれ！」

「なんだと!?」

　護堂の右腕に顕れたのは、天あまの叢むら雲くもの劍つるぎだった。

　刃渡り三尺三寸五分。ゆるやかに湾わん曲きよくした、漆しつ黒こくの刃を持つ剛刀。しかし今、黒くあるべき刀身は白金プラチナ色に光り輝いていた。草薙護堂の相棒は『敵の権能をコピーする能力』を所持しているのだ。ウルディンとの決戦でも役立ってくれた。

　今回はもちろん、救世の神刀が秘めた破壊力を模も倣ほうしたのである。

『夷い狄てきをまつろわす神刀、貴様だけではないぞ、英雄！』

　うそぶく天叢雲剣を、護堂は金属バットさながらに両手で振りか

ぶり——

　投げつけた。『最後の王』めがけて。

　天叢雲劍はその刀身に、救世の光と雷を宿している。

　当然、救世の神刀が太陽さながらの光球を生み出すようにはいかないが、貴公子ひとりに脅威を感じさせる程度の威力はある。輝く天叢雲劍を投げつけられて、『最後の王』は白き神刀のオリジナルで払いのけた。

　ふたつの輝ける刃が激突した瞬間、その接点より電光がほとばしる。

　雷の衝撃で救世の神刀と天叢雲劍がはじけ飛んだ。『最後の王』はほんの一瞬だけ「⁉」と目をみはり、そちらへ注意がわずかにそれた。

　そこへ護堂は猛然と跳とびかかり、空中から右の直じか蹴げり！

　蹴り足が『最後の王』の胸を抉る。刹せつ那な、護堂は右足に呪力を送りこみ、キックの威力を極大まで高めてみた。はじめての試み——しかし、手て応ごたえあり。

『最後の王』は十数メートルもふっとび、丘の中腹あたりに背中から倒れこんだ。

「さすがだ、神殺し……」

　苦痛に眉まゆをひそめながら『最後の王』が上体を起こし、立ちあがろうとする。

　護堂の蹴りで抉られた心臓の真上がほんのりと紅く輝いていた。

「今は——僕の負けだな。名を聞かせてくれないか？」

「……草薙護堂だ」

「覚えておこう。いずれ来きたる再会のために」

　対戦相手の奇妙な物言いにとまどいながら護堂が名乗ると、『最後の王』は満足げにうなずいてみせた。そして、数秒後。

心臓の上にきらめいていた紅き光がカッと輝きを増し――爆発。

護堂が蹴りで刻んだ光は爆発し、焔ほのおの渦うずを呼び、『最後の王』を呑みこんだ。轟ごうごうと燃える爆炎のなかで、貴公子の形をした人影が消滅していく。

空で燦然と輝いていた救世の太陽も、主あるじの退場に合わせて唐突に消え去った。

「俺の勝ちでいいのか、これ……？」

そして、護堂はあっけない決着に首をかしげるのであった。

4

サルバトーレ・ドニと軍神の斬きり合い。

仮面の軍神が神しん速そく無む影えいの大だい刀とう術じゆつで激しく攻め込めば、ドニは精せい妙みようを重ねた剣けん仙せんの武芸で神速をいなし、カウンターの一刀をねじ込む。

それを軍神が神速の動きでぎりぎりかわす――。

おそろしく高度な応おう酬しゆうがワンパターンで繰りかえされるという展開になっていた。

この単調さを打ち破ったのが、『最後の王』の散さん華げだった。

やや離れたところで神刀の英雄が爆炎に呑のまれ、消滅していく……。

衝撃的な情景を視界の隅で見届けて、ドニはフッと笑った。草くさ薙なぎ護ご堂どうは期待どおり、戦士として十分以上の進化を遂とげている。それがことのほかうれしい。

一方、軍神はほんの一瞬だけ主あるじの敗北に気を取られ、かすかな隙すきができていた。

　その瞬間、ドニの体は勝手に動いた。

　水が高きから低きへ流れるような自然さでスッと踏み込み、右手一本で長剣を『ぬうっ』と横よこ一いち文もん字じに振るい、軍神の頸けい部ぶを断ち切りにかかる。

　考えるよりも先に、体と腕が動く――。

　天然自然のまま剣を振るう、無む想そう剣けん。その真しん骨こつ頂ちようであった。

　疾しつ風ぷうの軍神もさすがにこれは避けられない。代わりに左手の前腕で頸くびをガードし、ドニの剣を受け止めてしまう。しかし、この剣は一刀両断の魔ま刃じんだ。

　左腕ごと軍神の頸を断ち切って、ドニの勝利となるはずだったのだが。

　ガキン！　鉄と鉄がぶつかる異音。

「へえ……僕といっしょだったんだ」

「――――」

　白布をぐるぐると巻きつけた、軍神の上腕。

　布の下に隠されている腕が鋼鉄の硬さと感触で、ドニの剣を止めたのである。

　一刀両断の魔剣は軍神の左前腕を三分の二ほど断ち切ったものの、そこで静止している。只ただの鉄てつ腕わんでなしうる芸当ではなかった。

　全身を不死身に変える『鋼鉄の肉体』でなくては不可能な業わざだった。

　この権けん能のうの所持者は限られている。斉せい天てん大たい聖せい・孫そん悟ご空くう、竜りゆう弑ごろしの英雄ジークフリート、サルバトーレ・ドニなど……。

「鉄の体で風の神様か。どんな神様か見当もつかないなあ。そういえば、護堂が倒したウルスラグナは風の神格を持つ《鋼はがね》

だって聞いたけど、君もその親戚とか？」

　疾風の軍神は返答もせず、つむじ風に変化した。

　そのまま吹き抜ける一陣の風として、丘から飛び去っていく。主たる英雄が退場し、己おのれの出番も終わったと言いたげに。ドニは肩をすくめて見送った。

　残る敵はアルティオのみ。彼女の方を見やって、「へえ」と瞠どう目もくする。

　ケルト人の復ふく讐しゆう心しんゆえに顕けん現げんした女神は、まだ勝負を投げていなかったのだ。

　すこし前にはじけ飛んだ二振りの神刀。

　天あまの叢むら雲くもの劍つるぎは護堂の右腕のなかにもどってきている。一方、救世の神刀は――女神アルティオの手で拾われていた。

　その刃やいばを見て、護堂はどきりとした。いまだ白金プラチナ色に光り輝いている。

　朽くちてもいなければ、錆さびてもいない。これまで『最後の王の骸』と呼ばれるとき、救世の神刀はいつもボロボロに朽ち果てていたというのに。

「眠りについたかアルトス……いや、魔王殲せん滅めつの戦士よ」

　アルティオは輝く神刀へ呼びかけた。

「命の一部をあたえた程度では、真の覚醒に至らぬとはな……。ならば是非もない。手負いの妾わらわの全てを――そなたにくれてやろう。これを以もつて開戦の狼煙のろしに代えるのじゃ」

　拾いあげた神刀の柄つかを逆さか手てで握り、切っ先を己おのれの胸に押し当てながらのささやき。

　そして、護堂は見た。輝ける救世の刃が女神の胸に突き刺さる光景を。

アルティオは自みずからの手で己の心臓を刺し貫つらぬいたのである。傷口から流れ出た多量の血は全て救世の神刀が吸収してしまう。

「最強の鋼を最強たらしめる鍵かぎ――女神の命をくれてやる！　救世の剣よ、そなたの主がふたたび目覚めるまで、妾をよく扶たすけよ！」

叫ぶそばから、アルティオの体は砂となって風化していく。

それとひきかえに、救世の神刀はますます輝きを増す。やがて、女神が完全に崩れ去った瞬間、切っ先を下にして落ちた。

神刀はそのまま大地に突き刺さる。直後だった。

巨大な白き光球がふたたび空に顕けん現げんした。救世の光の復活だった。

「さっきのピカピカ、復活しちゃったのか！」

「俺は黒いやつをもう使えない！　自前でどうにかしろよ！」

ドニが駆けよってきたので、護堂は言い渡した。

天あまの叢むら雲くもの劍つるぎも護堂自身も呪じゆ力りよくを使いすぎている。『黒の剱つるぎ』は打ち止めだった。その間にも救世の神刀は攻撃をはじめる。

小型太陽というべき上空の光球から、幾百もの電光が同時に放たれた。

それも一度きりではない。大量の電光放射は次から次へと間断なく行われ、地上に雷の豪雨が降りそそぐ形となった。

これをかいくぐるため、護堂は『鳳おおとり』の化け身しんを使う。

電光すら避けてみせる神速の発動である。ドニは『鋼の肉体』だった。全身を鋼鉄の堅けん牢ろうさと重さで守り、雷の直撃を受けても微動だにしない。

たしかランスロットとの戦いでも、似たような展開があっ

た……。

　思い出したところで、護堂は気づいた。

　今回の電光、槍やりの軍神が放ったものとちがう。落ちてくる電光の先端部に『武具』が見えるのである。最も多いのは矢だ。しかし、他にもいろいろ見える。

　槍、薙なぎ刀なた、斧おの、剣、刀、矛ほこ、鉄てつ輪りん、鉄製の楯たて、鋼鉄の棒、鉄の板、砲丸——。

　鉄のブロックや頭ず蓋がい骨こつを模した鉄細工など、武器とは言いがたい物まであった。

　共通しているのは、全て鋼鉄製であることだ。まるで、王の円えん卓たくに集つどう騎士たちが愛用の武器や鉄製品を持ちよったような、混こん沌とんたる状況だった。

　雷に秘められた矢や鉄の品々——。

　これらは地面やドニの体に激突し、雷がはじけると同時に消えていく。

「もしかして、前よりスピードが遅いから見えるのか……？」

　ぼそりと護堂はつぶやいた。

　右に左に『鳳』の神速で動きまわり、雷と鋼鉄の雨を避けながらである。

　同じ攻撃でもランスロットが繰り出した雷よりも遅い。余裕の回避だった。大だい地ち母ぼ神しんのアルティオは、やはり《鋼の軍神》ほど上う手まく神刀をあつかえないのだ。

『このままじゃ埒らちがあかないか……。本体をどうにかするしかないな！』

　神速の発動中、外界の音は遥はるか遠方より届くように聞こえる。

　しかし、ドニの声にまちがいなかった。金髪のカンピオーネが走っていく。雷と武器の豪雨を『鋼の肉体』ではじき飛ばしなが

ら、救世の神刀めざして。

　ややあって、ドニはついに輝く神刀の前に到達した。

　銀の腕で魔剣を振りおろす。救世の刃に小さな亀き裂れつが入った。

　このまま斬ざん撃げきを重ねれば、魔王殲滅の刃も砕けてしまうのでは——護堂が考えた瞬間、救世の神刀はまばゆい閃せん光こうを放った。

　光は超高熱をともなう極大のものであった。

　これが周囲一八〇度を灼やき尽くすべく、ドーム状に広がっていく！

「!?」

　制せい御ぎよが不安定だったところに攻撃を受けたせいで、神刀が暴走したのか。

　護堂は戦せん慄りつした。同時に神速で駆け出した。一刻も早く、閃せん熱ねつの爆発範囲から脱出するため、適当に選んだ方角へ全力疾しつ走そうする。

　もちろん、ドニは超至近距離で光に呑みこまれていった。

　助けにいく余裕はない。護堂は走る。後方から閃熱が追いかけてくる。救世の神刀を中心とする閃光と灼しやく熱ねつのドームは半径四キロ強というところだった。

　神速の足を活いかして、一瞬にして範囲外へ出る。

　しかし、そのために全力疾走したことが仇あだとなった。

　いまだ降りつづけていた幾百もの雷。途中、そのひとつに胸を撃たれたのだ。護堂を撃った雷の先端には、鉄てつ鏃ぞくの矢が入っていた。

　全身にしびれが走る。急速に体温が奪われていく。

　それでもしばらく走りつづけたが——ついに足が止まった。

そのまま倒れる。意識がうすれていく。

このままだと死が近いようにも思える。しかし、上空からはいまだ鉄器まじりの雷光が降りつづけていた。このあたりまで飛んでくる雷はすくないが、皆かい無むではない。

そして、護堂は青い光が迫り来るのを目撃した。

あれに撃たれて今度こそ死ぬのか――。次の瞬間、護堂は意識を失った。

すこし前まで、見晴らしのいい平原に緑の丘がそびえていた。

丘の上には環かん状じよう列れつ石せきが立ちならび、女神と英雄が待ち受けていた。そこをめざして三人のカンピオーネが激闘していた。

しかし今、この一帯は全てがきれいに吹き飛んでいた。

まっさらな更さら地ちである。草も木々も丘さえも消滅し、土と砂だけの平地が真っ平らに続いている。かろうじて残っているのは、救世の神刀が抉えぐった大穴だけである。

白き閃光と爆発が全てを吹き飛ばしたせいだ。

この一帯をエリカと恵え那なはひた走る。

彼女たちがめざすのは、爆心地とおぼしき方向だった。

途中で「きゅぅぅぅぅ……」と目を回しているアイーシャ夫人を見つけたが、かろうじて意識はあり、しかも無傷だった。聞けば、先に戦闘の中心から離脱していたため、さっきの閃光と爆発にも巻きこまれなかったのだという。

目を回しているのは、その前に行った〝緊急避難〟のせいであるとも。

「ただ、他のおふたりは向こうで戦っていたはずです。ご無事だといいんですけど……」

　アイーシャ夫人は悄しよう然ぜんと語ってくれた。

　しかし、さすがカンピオーネ。死ぬしかないという状況下でも、きちんと命を拾ってみせる種族なのだ。エリカと恵那は逆に勇気づけられ、夫人にはその場で待機して欲しいと頼み、爆心地への疾走を再開した。

　そうして、ついにたどりついた一角には――。

　救世の神刀がまっさらな地面に突き刺さり、燦さん然ぜんと輝きを放っていた。

　また、その近くには旧知の青年がうつぶせに倒れていた。

「卿きよう！」

「サルバトーレの王様！」

　少女ふたりは剣のカンピオーネに駆けよった。

　サルバトーレ・ドニの全身はなぜか灰色になっていた。金髪も、白はく皙せきの肌も、締まりのない笑顔ばかり見せる顔も、身につけた衣類まで全てが灰色だった。

「どういうことかな、これ？」

「たぶん……仮死状態なのだと思うわ」

　いぶかしむ恵那と共にドニの体をチェックし、エリカはうなずいた。

　ずいぶんと小さいが脈はある。しかし、呼吸は停止。体にさわっても、呼びかけても反応は皆無。まっとうに生命活動している状態ではない。

　しかし、サルバトーレ・ドニはそれでも生存していた。外傷もなかった。

「卿は以前、仮死状態となることで『白はく馬ば』を耐え抜いたそうよ。今回もきっと、同じ方法であの爆発を生きのびたんだわ。ただ――」

英雄ジークフリートより簒さん奪だつした権能『鋼鉄の肉体』。

仮死状態はその応用である。しかし今、エリカは気づいた。灰色に変じたドニの肉体は通常のやわらかさで、鋼の強度とは程ほど遠とおい。

「今ここで寝首をかかれたら、さすがのサルバトーレ卿も最さい期ごでしょうね。護堂の『雄お羊ひつじ』と同じで、生きのびたあとのケアが肝心なのだと思うわ」

「見つけたのが恵那たちでよかったわけだね」

恵那が微苦笑で応こたえる。前に『白馬』をしのいだとき、ドニは水中で一夜を明かしたという。そのおかげで誰も近づけず、不死身のカンピオーネは安全を維持できたのだろう。

ドニの悪運に感心してから、エリカはあらためて顔をひきしめた。

「わたしたちの護堂も悪運尽きずに生きのびた可能性……高いように思えるわね。あの人ったら、どこで油を売っているのかしら？」

「ほんと、早く出てきて欲し——エリカさん、危ない！」

不意に警告して恵那は跳とびすさり、エリカもそれにならった。

直後、彼女たちと横たわるサルバトーレ・ドニめがけて、電光が飛んできた。これを撃ち放ったのは、なんと救世の神刀だった。

エリカと恵那はみごと回避できたのだが——ドニの体が電光で打たれる。

「サルバトーレ卿!?」

『ふふふふ。神殺しめの体が手に入るとは、実に都合がよい』

女神アルティオの声だった。

これを発したのも救世の神刀——否いな。いつのまにか神刀のまわりにわだかまっていた、黒い靄もやである。恵那がハッとしてつぶやく。

「肉体を失ったのに、魂たましいだけで地上に残っているんだ……」

『死すべき者でありながら、それがわかるとは慧けい眼がんじゃ。誉ほめてつかわそう』

　黒い靄はアルティオの声でまたもささやいた。

　電光に撃たれたサルバトーレ・ドニの上体がむくりと起きあがる。灰色だった全身はいつもどおりの色にもどっていた。

　そして、ぎこちない動作でドニは手をのばす。救世の神刀と黒い靄に向けて。

　直後、カンピオーネの手へと神刀と靄は飛んだ。

『剣の神殺しよ、そのまま眠りつづけるがよい。そなたの体は妾わらわがいただく。我わが息子の不在を埋める、神刀の使い手としてのう！』

　愕がく然ぜんとするエリカ・恵那の前で、ドニの手が救世の神刀をつかむ。

　黒い靄はカンピオーネの口から体内に入りこむ。すると、金髪の青年は今まで閉ざしていた両目をカッと開き、ゆっくりと立ちあがった。

「ふむ……。まだ上手くは動かせぬか……」

　ドニの唇くちびるから、女神アルティオの声が発せられた。

　美形のくせにいつも能天気なカンピオーネの表情は、いつになく鋭い。正しよう真しん正しよう銘めい、文句のつけどころがない美青年に見える。

　ドニ＝アルティオはぎこちなく救世の神刀を一振り。

　ひどく遅い。神かみ業わざを誇る剣の魔王とは、かけはなれた動きである。ドニ＝アルティオはぎしぎしとかぶりを振り、不満げにつぶやいた。

「しばらく不自由しそうじゃのう。この体に慣れるまで辛しん抱ぼ

うが必要か……。まあよい、まだまだ先は長いのじゃ」

　遠くに見える森をめざして、ドニ＝アルティオはゆっくりと歩きはじめた。

「ふたりの神殺しをすでに斃たおし、ひとりは手中におさめた。しかし、神殺しどもはいまだ地上を徘はい徊かいしており、地上の民たみに神罰も加えねばならぬ……」

　唖あ然ぜんとするエリカと恵那を残して立ち去りながら、女神はさらに言う。

「さらばじゃ、魔王に仕つかえし婢女はしためどもよ。民に告げるがいい、いずれ救世の英雄が神罰をもたらすため到来すると。そのときまでに懺ざん悔げと悔かい恨こんを繰りかえすがよいとな」

　去りゆくドニ＝アルティオの背中を見つめて、恵那が逡しゅん巡じゅんする。

　このまま女神を往ゆかせていいものかと——。

　しかし、エリカはかぶりを振って、静かに仲間をたしなめた。強壮なる女神は、人間風ふ情ぜいにまったく関心を持っていない。うかつな行動は逆に彼女の気まぐれを呼びこみ、無む慈じ悲ひな死を賜たまわる危険があった。

　たとえ本調子でないとしても、神の力にあらがえるはずはないのだから。

　沈黙のまま見送るのが最良の策だった。

　それにしても——エリカは天を仰あおぎ、無言で慨がい嘆たんした。

　草薙護堂はどこに消えたのか？　ドニ＝アルティオが宣言したとおり、無惨に殺害されてしまったのかと。

第５章　千年の時を越えて

1

　まあ、今までも何度か死より生還した草くさ薙なぎ護ご堂どうである。

『今回も』というのは遺い憾かんであり、『ひさしぶりに』というのもイヤな話であったが、護堂は深き眠りのなかで今回も、そしてひさしぶりに復活中だった。

　ウルスラグナ第八の化け身しん『雄お羊ひつじ』の恩恵である。不本意ながらカンピオーネとして力が増した影響もあってか、ここ数か月は使わずに済んでいた復活の化身だ。即死でなければ、死の淵ふちからでも蘇そ生せいさせてくれる。

　だが、不安もあった。救世の雷が豪雨のごとく降るなかで数時間も眠ったまま。復活が終わるまで無事でいられるだろうかと。

　だから、どことも知れない小屋のなかで覚かく醒せいしたときは大いに安心した。

　やけに重く感じる体に鞭むち打うって、どうにか上体を起こす。

「お目覚めですか、草薙護堂！」

「護堂さん、ようやく回復されたんですね!?」

　そして、小屋のなかにはなつかしい仲間たちの顔も……。

　護堂は首をかしげた。意識を失う前は古代ガリアで戦っていた（もっとも、あの場所はライン川の東岸なので、ローマ帝国の区分

だと厳密にはゲルマニアであった）。しかし、目の前にいるのはなつかしいリリアナ・クラニチャールと万ま里り谷や祐ゆ理りの二名――。

「ふたりとも、どうしてここにいるんだ？」

　感動的であるべき再会の場で、護堂は散文的な発言をした。

　これがおかしかったのか、祐理とリリアナがくすりと微苦笑する。

「もしかして俺、いつのまにか現代にもどってきたのか？」

「いいえ。今は西暦四〇六年の春です。草薙護堂、あなたはあいかわらずガリア、ゲルマニアと呼ばれていた頃のヨーロッパにいます。現代の地名だとボーフム近郊ですね」

「誰も住んでない家をお借りしているんですよ」

　リリアナがてきぱきと状況説明し、祐理は微笑ほほえみながら補足する。

　護堂の現在位置は、厚手の布を何枚も敷いた寝ね床どこだった。体に掛けてあった毛布も女子ふたりの気配りだろう。この小屋は丸太を組んで造った、ログハウス風だ。壁かべ際ぎわである。

　ガラスもはまってない開け放しの窓から、外を眺めてみる。

　樫かしらしき広葉樹がたくさん茂っていた。緑の多いところらしい……。

　困こん惑わくする護堂に、リリアナが微笑みかける。

「実はグリニッジのプリンセス、それにロサンゼルスのやんごとなき御方が手を尽くして、わたしたちをここに送りこんでくれたのです」

「アリスさんやあの男が!?」

　ふたりの仲間は代わる代わる経いき緯さつを語ってくれた。

　時の彼方かなたへ旅立つまでの顛てん末まつ。アストラル界で出

会った老人は祐理とリリアナにしばらく目をつぶっていろと要求したという。

　目を開けると、そこは『最後の王』が顕あらわれた戦場付近だったとか。

　救世の神刀が爆裂したとき、とっさにリリアナは飛ひ翔しよう術じゅつを使って祐理と共に飛び立ち、昏こん倒とうした護堂を拾いあげてくれたのだ。

「最後に見た青い光はリリアナたちだったんだな……」

「ただ、どこに降りるかも決めないまま飛翔したので、制せい御ぎよが上う手まくできませんでした。こんなところまで飛んでくる羽目になり、エリカたちとも合流できず……申し訳ありません」

　リリアナが頭を下げる横で、祐理が言いそえる。

「でも、その後でリリアナさんがあちこち見てまわって、ここが現代だとドイツの西の方だと突き止めてくださったんです」

「そのくらい全然かまわないよ。おかげで俺は命拾いできたんだから」

　魔女の飛翔術を使うとき、リリアナは必ず目的地を決めていた。

　それができないまま飛び立つと、一種の暴走飛行になってしまうのだろう。

　護堂はうなずいてから、自分たちの事情もかいつまんで語った。そして、何気なく立ちあがろうとして——びっくりした。異様に体が重かったからだ。

　それでも踏んばって、どうにか立ちあがる。しかし、よろけた。

　リリアナがとっさに寄りそい、ふらつく護堂の体を支えてくれた。祐理もあわててそばに来て、銀髪の騎士とは逆側を支える。

「さっき起きるときも大変だったけど……『雄羊』を使ったあとなのにどうしてだ？」

　実は話をしている間も、護堂はすこし気分が悪かった。瀕ひん死

しの重傷すら全快させる化身の使用後としては、異例もいいところだ。足腰の踏んばりが明らかに利きいてない。

　すると、リリアナがじっと護堂を見つめて言った。

「救世の神刀で撃たれたとおっしゃいましたね？　草薙護堂、あなたの胸に矢が刺さっているように……わたしには視えます」

「えっ？」

　コントロールの乱れた救世の神刀が降らせた、鉄器まじりの雷。

　自分を撃った雷に〝矢〟が入っていたとは、護堂は語らなかったのだ。にもかかわらず、リリアナは淡々とつぶやいていく。

「救世の神刀……数あま多たある勇士の武具をひとつに束ねた器うつわ——。救世の力の象徴。輝ける最後の希望。一振りの剣でありながら、ありとあらゆる武器の特質を内に秘める……」

　途中で護堂は気づいた。これは霊視による託たく宣せんなのだ。

　しかし、こういう啓けい示じはむしろ媛ひめ巫み女この方が先に告げてくれそうにも思える。なんといっても、万里谷祐理こそが最高レベルの霊視力者なのだから。

　護堂が目を丸くした理由に気づいたのだろう。リリアナは恥ずかしげに目をそらす。

「三日前にプルタルコスの館やかたを訪ねて以来、霊視の力が不思議と上がっているのです……。以前よりも鋭えい敏びんになったといいますか」

「あ、はい。リリアナさん、たしかに前より鋭くなられました」

　同じ目を持つ仲間の成長がうれしいのか、祐理は朗ほがらかに言った。

「あの聖域に足を踏み入れたことで霊視の感覚が刺激されて、ひとまわり以上も力が強くなったように感じられます」

「へえ、そりゃすごいな。でも三日前だって？」

　感心しながら、護堂はまたも首をかしげる。

「『雄羊』で復活するときって、いつも半日程度で目を覚ましていたような……」

「それが——あなたは今回、三日も眠りつづけていたのです」

「運がお悪かったのだと思います。護堂さんを襲った雷は、おそらく魔王の強きよう靭じんな命すらもむしばむ毒矢の化身……」

　リリアナが深刻な面おも持もちで告げ、祐理はおごそかにつぶやく。今度は媛巫女の方が霊視を得たようだ。護堂の体内を透とう視しするような目つきでの託宣だった。

「癒いやしの王たる羊の権けん能のうをもってしても、快かい癒ゆがかなわない。それほどの劇毒です。まだしばらくは療養が必要かと存じます……」

「そんな危ない矢にたまたま撃たれていたのかよ。参ったなあ」

　ぼやきながらも、護堂は頼もしく思った。頭で考えてもわからない謎なぞでも、彼女たちなら解き明かしてくれるかもしれない。その事実を再確認できたからだった。

　その後、護堂は小屋の外に出てみた。

　試してみたら、まっすぐ歩くこともできなかった。

　右をリリアナ、左を祐理に支えられながらの外出である。窓から見たとおり、小屋のまわりには緑が多かった。樫をはじめとする木々がたくさん生おいしげっている。

「ここはもともと、森のなかの樵きこり小ご屋やなのです」

「近くの村の方にリリアナさんがお話しして、貸してもらえることになったんですよ」

「食事の準備もありますし、あとで村へ買い出しにいきましょう」

「でも、金とかどうするんだ？　よかったら俺が出せるけど」

貴族の食しよつ客かくとなる幸運。用心棒、傭よう兵へい。野や盗とうの上うわ前まえをくすねる非合法活動。

祐理とリリアナはいずれとも縁がないように見える。それゆえの提案に、生き真ま面じ目めな少女たちはかぶりを振った。

「今のところは大丈夫です。近くの町や村へリリアナさんが魔女の薬を売りにいかれて、それなりのお代金をいただけたそうですし」

「古代や中世なら『魔女』の需じゆ要ようもあるだろうと踏んだのですが、正解でした」

意外としっかり生活基盤を築いていたらしい。

護堂は感心した。古代生活の先輩である自分たちより、遥はるかにまともな稼かせぎ方だ。

そういえば、ふたりは服装も古代のものにあらためている。

祐理は裾すそが足首近くまであるワンピース状の衣服の腰を、帯できゅっと締めている。その上に麻あさのショールを羽織って、女性らしい装よそおいだ。

リリアナは例のＴシャツに似た短トウ衣ニカに長ズボン、男物とおぼしき外がい套とう。さらに革製の籠こ手てを両腕に付け、腰には鞘さや入いりのサーベルを下げている。柄つかの拵こしらえから、魔剣イル・マエストロであることは明らかだった。

「むしろ問題は……カンピオーネの御三方ですね。アイーシャ夫人の通つう廊ろうが開くタイミングを待って、すみやかに現代へ帰還していただかねばいけません」

「ただ、その前に『最後の王』の問題を解決して欲しいと頼まれています」

よりそう少女ふたりが口々に言う。

右にリリアナがいて、左に祐理がいる。護堂は訳もなく身じろぎした。

「一応、『最後の王』ってやつは消えていなくなったけどな……」

　居心地の悪さをごまかすようにつぶやく。

　しかし、蒼あお白じろき髪の貴公子が言いのこした『いずれ来きたる再会のために』。あの言葉が気にかかってならない……。

　そんな護堂によりそい——つまり密着しながら、祐理とリリアナはさらに言う。

「残念ですが、幽世かくりよの御老人がおっしゃっていました。救世の神刀が女神アルティオの手にある限り、この騒乱は鎮しずまらないだろうと。事態を収しゆう拾しゆうするためには、輝ける神刀をふたたび朽くちた骸むくろにもどして封印するか……」

「女神を倒すか。どちらかを成じよう就じゆさせてくれと頼まれましたね」

「あの……。ところで護堂さん、お疲れではありませんか？」

「たしかに、そろそろ家にもどっていただいた方がよさそうだな」

「あと、今晩は元気の出るものを食べていただかないと」

「そうだな。あとは早く寝て、ゆっくり休んでいただいて。ふたりで看病すれば、傷の治りもよくなるかもしれない」

「……ええと、ちょっといいか」

　リリアナに右から、祐理に左から密着された状態で、護堂は口をはさんだ。

「お、俺はもう大丈夫だから、すこし離れてもらった方が……」

　ふたりとも杖つえ代がわりになって、草薙護堂を支えてくれる。本当にありがたい。しかし、こうも密着されると妙な気分になるのが道理だ。

　片方は折れそうなほど華きや奢しやだが、十分に女性らしい柔らかさと起き伏ふくもそなえている。

　もう片方がひかえめに見えるのはエリカや恵え那なに比べればの話で、実は申し分ないほどに女性として成熟と充実を迎えている。

　それぞれ、そうした肢し体たいと感触の持ち主なのだから。

　口ごもる護堂を見て、現状の問題点にふたりとも気づいてくれたらしい。

　祐理もリリアナもハッとして、あわてて体を離す。護堂は安あん堵どのため息をついて、来た道をひとりで引き返そうとしたのだが。

　足がもつれてしまう。すぐに女子ふたりが支えに来て、もとどおりになった。

「だ、だから必要ないって、さっき言ったろ？」

「バカを言わないでください。どう見ても助けが必要な状態です」

「ええ。意地を張らないで、遠慮なく私たちを頼って欲しいと思います」

　リリアナが軽く突き放すように、祐理はすこし怒ったように言う。

　しかし、口ぶりに反して、彼女たちは甲か斐い甲が斐いしく草薙護堂の重い体を両側から支え、歩くのを手伝ってくれる。少女ふたりに密着される感触を気恥ずかしく思いながら、心のなかで感謝する護堂だった。

　とはいえ、べつの問題があることにも気づいていた。

「とりあえず、多すぎる心配事をかたづけるのは明日からにしましょう」

「はい。護堂さんたちがこちらでどのようにお暮らしだったのかも、くわしくおうかがいしたいと思いますし」

「今夜はゆっくり静養ということにして、わたしたちと積もる話でもしてください」

「ええと、俺もじっくり話をしたいと思うけど。夜はべつべつの場所に泊まる方がいいんじゃないかなあ。なんなら俺は野宿でも。こっちに来てから、結構慣れたし」

「「…………」」

　今度はやさしい言葉をかけてくれた女子たちへ、なるべく穏おん当とうに訴えたのだが。

　リリアナも祐理も物言いたげな視線を返してきた。

「あ、あの小屋、せまいだろ！　それに女ふたりで住んでる家に男が世話になるって、いろいろまずい気が——！」

「護堂さん。こう言っては何ですが、すごく今さらなご意見だと思います」

「あと、先ほどのかいつまんだ説明を聞いて、気になったことが。古代ガリアでの半月間、あなたとエリカ、清せい秋しゆう院いん恵那はひとつ屋根の下で仲なか睦むつまじく暮らしていた——そのような印象を受けました。もちろん、わたしの勝手な想像ですが」

「あ。実は私も同じように感じました、リリアナさん！」

「あなたもか……。そういえば、前に視みることができた古代での戦い。あのとき草薙護堂は剣の言こと霊だまを使っていたな、たしか」

「や、やっぱり、護堂さんはどなたかとあの儀式をされたのですよね……」

「お相手が誰だったかも気になるところではある……。やはり、今夜はおうかがいすることがたくさんありそうだな」

「はい。護堂さんにはじっくりおつきあい願いたいと思います」

　左右から少女ふたりに支えられる草薙護堂。

　毎回こうやって助けられ、また、導いてもらっている。ただし今、『連行』の二文字が頭に浮かんでいる事実は、注意深く申告を避ける護堂であった。

かくして、草くさ薙なぎ護ご堂どうが二名の女子と過ごした夜。

特に甘やかな事件もないまま鋭く追及を受けたり、不ふ明めい瞭りような説明に補足を求められたり、最後はため息と共に容よう赦しやしてもらったりと、あわただしいものだった。

ただし、ふたりは追及と同じレベルの熱心さで、護堂の体を案じてくれていた。

祐ゆ理りとリリアナの寛容さに感謝しつつ、眠りについたものだ。『ウルディンと戦う前、実は三人で……』の秘密を守り通せたことにも安あん堵どしながら。

そして、一夜明けた翌朝。

「『最後の王』が顕あらわれたという場所やケルン――いえ、コロニア・アグリッピナの状況を確認して参ります。とりあえず、明るいうちに帰ってくるつもりです」

朝早く、リリアナがひとりで出かけていった。

東洋人である祐理は、やはりフン族に似ているため悪目立ちする。護堂は体調がすぐれないまま。ひとりの方が何かと動きやすいのだろう。

彼女は飛ひ翔しよう術じゆつの使い手。馬などよりも遥はるかに速く、遠方と行き来できる。

だから、昼時が過ぎても護堂は特に心配せず、小屋の寝ね床どこで体を休ませていた。気がかりなのはむしろ――

「向こうがどうなってるか、だよな……」

右手を見つめながら、護堂はつぶやいた。

ここに宿る〝相棒〟天あまの叢むら雲くもの劍つるぎ。しかし、今は休眠状態だった。護堂自身の不調とリンクしているのだろう。神刀がこの状態では恵え那なと交信もできない。

エリカ・恵那・ドニ・アイーシャ夫人、そして英雄と女神はどう

なったのか？

　何もわからない。寝床のなかで護堂はあせりを感じた。ただし、布ふ団とんをかぶって寝ているわけではなく、あぐらをかいていたのだが。

「ダメですよ、護堂さん。横になっていないと、お体にさわります」

「寝たきりってのは性しように合わないんだよ、万ま里り谷や」

「もう……。いつもとちがって治りが遅いんです。すこしは気を遣つかっていただかないと」

　怪け我が人にんの自覚がうすい行動を、祐理にたしなめられた。

　それから、心やさしい大和やまと撫なでし子こは不意に微笑ほほえんで、こう言ってくれた。

「リリアナさんも私も、不吉な啓けい示じは今のところ授かっていませんし……。みなさん、たぶん大丈夫だと思います」

「そうだなあ……。エリカと清せい秋しゆう院いんが下へ手たを打つとは思えないし、他の連中は殺したって素直に死ぬ面子メンツじゃないしな」

　あえて楽観論を口にしてくれた気遣いに応こたえるため、護堂は肩の力を抜いた。

　それにしても、せまい木造の小屋で祐理とふたりきり。

　前に孤島のコテージで過ごした数日間を思い出してしまう。すこし照れくさい。そういえば、昼食は穀こく物もつを煮込んだ粥かゆで、もちろん祐理が作ってくれた。こんなところも島での暮らしといっしょだ。それに気づくと、護堂は本当にリラックスできてきた。

「布団のなかに一日中いるより、すこし体を動かした方がいいと思うんだ。ちょっとだけ外に出てきていいか？」

「また、そんな無茶をおっしゃって」

祐理への気やすさにまかせて言うと、生き真ま面じ目めな返事が待っていた。

「お怪我をされているのですから、まじめに休んでいただかないと困ります」

「いや、だって。寝こむことなんてめったにないから、休み方がよくわからないんだよ。むしろさ、軽く動きまわった方が俺の体にはいいんじゃないか？」

「もう……。本当に仕方のない人ですね、護堂さんは」

ため息をついてから、祐理は駄々っ子のわがままを受け入れる体ていでうなずいてくれた。

「ただし、私もごいっしょしますから。本当に近くへ出かけるだけですよ？」

「えっ？」

祐理とふたりで外出することになった護堂。

たおやかな大和撫子に昨日と同じく支えられながら、拾ったばかりの樫かしの枝を杖つえにして、ぎこちなく歩いていく。祐理と密着するのはあいかわらず気恥ずかしいが、自みずから言い出したことなので引き返すわけにもいかない。

微妙に赤面する護堂を連れて、祐理は近くの沢に案内してくれた。

樵きこり小ご屋やがある森は、それほど標高の高くない山の中腹あたりに位置するという。ここを流れる沢はいかにも清流という風ふ情ぜいで、水が清く澄んでいた。

「水場が近くにあって、すごく助かっています。お料理やお洗濯には欠かせませんし」

「そうか……。こんな山のなかだと、水道も大浴場もないもんな」

祐理の言葉に、護堂はしみじみと相づちを打った。

　もちろん、標準的な村や町であってもその手の施設は絶ぜつ無むだ。古代におけるローマ植民市が破格の文明地域であるという証明だった。

　祐理たちはおそらく、この沢の流れで身を清めていたのではないか？

　その推測がきっかけで、以前にかいま見た少女たちの柔やわ肌はだを一瞬だけ思い出したのだが、護堂は断固たる意思で記憶を闇やみに葬ほうむり、代わりに言う。

「俺なんかのせいでこんなところに来てもらって——」

「護堂さん、それは言わなくてもいいことですよ」

「そうか？」

「ええ、そうです」

　祐理と寄りそいながらの会話。短い言葉のやりとり。

　それなのに、不思議なほど心が通じ合っているように思える。祐理も同じことを感じてくれたのだろう。目が合うと、やさしく微笑みかけてくれた。

「あ。あと、昨日も申し上げましたが。護堂さんは同じ場所に泊まることで困っておいででしたけど、すこし往おう生じよう際ぎわが悪いと思います」

「そ、そうか？」

「はい、本当に今さらですし。特に私と護堂さんは……何日もふたりだけで暮らしたことだってありますし……」

　祐理もマレーシアでの旅を思い出していたらしい。

　ふたりの間に今度は沈黙が横たわった。しかし、気まずくはない。むしろ逆で、さっきよりもさらに心が通じ合った気さえする。やがて、おもむろに祐理が口を開いた。

「あのあとは大変でしたね。みなさんからの質問がすごくて……」

「俺たち、何も変な真ま似ねはしてないのにな……」

「も、もちろん女神との戦いに備えて、儀式はふたりでいたしましたけど、あれは本当に必要なことでしたし……いつものことでもありますし……」

「あ、ああ」

「やっぱり、私と護堂さんがふたりきりだったせい、でしょうか……」

「そうなんだろうな……。あそこまで詮せん索さくされたり文句言われると、いっそ本当に何かやっとけばよかったみたいに思うよな」

　愚ぐ痴ちめいたことをつぶやいて、護堂はハッとした。今、雰ふん囲い気きの甘さに乗せられて、余計な一言を口にしたような。リリアナもいるときではありえない軽率さだ。

　しかも、祐理がそっと恥ずかしげにうつむく。

　同時に護堂の袖そでをかすかに引き、小さな声でささやいた。

「い、今もふたりきり——ちょうど私たちだけですね」

「そう、だな」

「と、特に差し迫った事態は何もありませんが……」

「あとで何か疑われるくらいなら、な……」

　もともと密着していたので、肩に手をまわして抱きよせるのはかんたんだった。

　祐理の恥じらう顔を護堂はついのぞきこんでしまった。祐理も応こたえるようにそっと顔を上げ、唇くちびるをほんのすこし上向きにしてくれた。

　あとは護堂が唇を寄せるだけ——というときだった。



「草薙護堂！　万里谷祐理！　リリアナ・クラニチャール、只ただ今いまもどりました！　どちらにいらっしゃいますか!?」

　リリアナの凜り々りしい声が聞こえてくる。護堂と祐理は思わず顔を見合わせた。

「こういうときもあるんですね」

「早くリリアナのところに行った方がよさそうだな」

　うしろめたさから解放された安あん堵ど感かんを味わいながら、微苦笑をいっしょにこぼす。

　そして、ふたりは小屋の方にもどっていくのであった。

　午後遅くにリリアナが帰還してから、しばらくののち。

　陽ひが傾きつつあった。西の空はあかね色に染まり、夕暮れの刻限がはじまる。西日のなかで、護堂は偵てい察さつ帰りの騎士と向き合っていた。

　この小屋がある山は、コロニア・アグリッピナの北北西に位置しているらしい。

　ライン川から西に二十数キロの距離。つまり、ここはゲルマニア側。ライン河か畔はんのように街道が敷ふ設せつされていない。現代とちがって、電車も自動車も存在しない。

　半日で行き来できるのはリリアナだからこそだ。

「まず『魔女の目』で視覚をコロニア・アグリッピナ方面に飛ばして、付近の様子をうかがったあと、わたし自身もあちらへ飛んで、いろいろ見けん聞ぶんしてきました」

　樵小屋の外で、リリアナが報告してくれた。

　これを聞く護堂はまだ静養中の身。木の切り株に腰かけさせてもらっている。尚なお、祐理は小屋のなかで夕ゆう餉げの準備中だった。

　古代のかまどを使った調理は大変なはずだが、祐理は驚くほど苦にしていない。

　媛ひめ巫み女この修行中、ガス水道のない山中の庵いおりで自給自足の暮らしをしながら、俗世を離れていた時期があったという。そのとき、かまど等の使い方を覚えたらしい。

「やっぱり、空を飛べるって便利でいいよなあ」

　リリアナの『飛ぶ』を受けて、護堂はしみじみつぶやいた。自動車や電話がない不便にも慣れてきたが、やはり文明の利器があるに越したことはない。

「それで向こうはどうだった？」

「少々厄やっ介かいになっていますね。くわしくは万里谷祐理も交まじえて、夕食のときにでも。ただ、準備が終わるまで時間もかかるでしょうし――その間、診察をしましょうか」

「診察だって？」

「はい。救世の神刀に撃たれた傷を見せてください」

　いぶかしむ護堂の胸を、リリアナは指さした。

「カンピオーネの肉体はいつも想像以上に強きよう靭じんですが、ここまで傷の治りが遅いのは初めてですからね。念のため、確認してみます。脱いでいただけますか？」

「えっ？」

「傷の具合を診察するのですから、当然でしょう？」

　それもそうかとうなずいて、護堂はひととおり上着を脱いだ。

　上半身だけ裸になる。贅ぜい肉にくはすくなく、一見すると細身だが筋肉質。日常的に体を酷こく使しする生活の賜たま物ものだろう。健康診断でメタボ判定される未来はまだ遠いはずだ。

　一応、体の外側に傷はまったくない。例の雷は体の奥深くを傷つけたのだろうか。

　護堂はちょうど切り株にすわっていたので、病院に来たときのようだった。

　そして医者役のリリアナはなぜか頬ほおを赤らめて、護堂から目をそらしていて——。

「どうしたんだよ？　俺の怪我、診みるんじゃないのか？」

「は、はい。申し訳ありませんっ。あらためて間近で見せられると、急に恥ずかしくなってしまいました……。あと、あらぬ考えがいろいろと……」

「海水浴のときもいっしょだったのに、変なやつだなあ」

　護堂は軽く笑った。今まで生真面目もいいところだったのに、いきなり変になったリリアナがおかしかったのだ。小説や詩にも造ぞう詣けいが深い文系乙女おとめの言動は、体育会系男子の想像を超えるときがある。

　一方、リリアナは護堂の顔を正視しないまま、おずおずと手をのばし、胸筋のあたりに細く白い指先を這はわせた。

　そして、いにしえの世では医者代わりだったという魔女の目を細める。

「やはり……昨日から回復が進んでいませんね」

「えっ!?」

「この調子ですと、いつものように非常識な速さの自然治ち癒ゆは望めませんね。このまま一、二か月ほど静養していただくか、魔術による治療を行うか……」

「でも、ゆっくり休んでいる時間はないぞ」

「でしたら治療が必要になりますね。わかりました。すぐ処置に移ります」

「……えっ？」

「時間がないとおっしゃったのはあなたです、草薙護堂」

「そ、それはたしかにそうだけど」

　生真面目な表情にもどったリリアナから迫られて、護堂はあせった。

　魔術による治療。当然、いつもどおりの方法しか選択肢しはないはずだ。まあ、毎回のことなので、今さら尻しり込ごみするのもバカバカしい話かもしれない。

　しかし、護堂は腰が引けてしまった。

　昼間の祐理とのやりとりを思い出して、心がちくりとしたからだ。

「き、今日すぐにやらなくてもいいと思うんだっ。べつに明日以降でも……」

「今日できることを明日にまわしてもいいことはありません。早め早めに処置を重ねていくべきだと、わたしは考えます」

　理知的に反論してから、不意にリリアナは心細げに目を伏せた。

「そ、それとも……わたし以外の人間に治療をまかせたいとお考えですか？　で、でしたら、仕方ありません。あなたの騎士として、主あるじの御意見に従い——」

「バカを言うなよ。そんなこと、リリアナにさせられるわけないだろう」

　銀髪の少女が悄しよう然ぜんと申し出る内容を、護堂は途中でさえぎった。

　こんなことを最後まで言わせたら、この先ずっとリリアナに顔向けできない。そう思っての言葉だった。そして、直後に己おのれのうかつさを悟った。

　いつのまにか、リリアナがじっと護堂を見つめていたからだ。

　いつもの凜々しい騎士の瞳ひとみではない。おたがいのウソを知っている者同士、共犯者同士のまなざしで、熱っぽく。

「そう……おっしゃっていただけると本望です。あなたの騎士とし

て……」

「あ、ああ」

「わたしたちは王と騎士です。いずれ来きたる戦いのために最善を尽くす必要があります」

「そうかもしれないな……」

「そのためでしたら、わたしは何だってできると思います……」

　今までは立ったまま話をしていたリリアナ。

　なのに、いきなり腰をおろした。切り株にすわっていた護堂の膝ひざの上に。

　それは明らかに王と騎士の位置関係ではなく、公園のベンチなどでじゃれ合う恋人同士にふさわしい無む節せつ操そうさであった。しかし、ふたりはそのまま互いをじっと見つめ合う。

　銀髪の騎士がそっと目を閉じたとき、護堂のなかで逡しゅん巡じゅんがきれいに消えた。

「リリアナ……！」

「はい……！」

　膝の上の彼女を抱きよせて、きつく口づけする。

　リリアナが唇を開けて応えてくれたので、すかさず舌を差し込む。彼女の唇を存分に味わい、舌を絡からめ合う。護堂は徐々に自分を抑おさえきれなくなってきた。

　接せつ吻ぷんの対象を唇から首筋に移し、強く吸いあげたうえで舌を這わせてしまう。

「ん……ん、んんんんっ！」

　リリアナが急にたじろぐ。最近、実はここが弱いという事実に気づいたのだ。そんな護堂の狼ろう藉ぜきを涙目で堪こらえつつ、忠実な女騎士は訴える。

「そ、それはすこし待って……。術をかけますから……」

　そうだった。護堂はあらためて目的を思い出した。

　ふたたびリリアナの唇にキスをする。直後、妖よう精せいめいた東とう欧おう生まれの少女はとろんとした目つきのまま、不可解そうにつぶやく。ただし唇は離さない。

「だ、駄目です。治癒の術がかかりません……」

「そうか……。救世の神刀は魔王殺しの武器だもんな。そいつのなかの毒にやられたんだから、かんたんには解げ毒どくできないか……」

　リリアナと軽いキスを繰りかえしながら、護堂はうなずいた。

　考えてみれば、ありそうな話だった。一方、魔女であり騎士でもある少女は息をはあはあと荒らげながら、けなげに言ってくれた。

「ど、どうにかして、方法を考えてみます。あなたのためですから……」

「頼む」

　短く言って、リリアナの唇を強く吸う。

　リリアナも舌を護堂の口内に差しこんで応えてくれる。

　ふたりの行為がそのままエスカレートしそうになった瞬間、『がちゃり』と音がした。木造のドアがいきなり開いたのだ。

「みなさん、お食事の準備ができましたよ。どちらにいらっしゃるんですか？」

　樵きこり小ご屋やの扉を開けて、祐理が呼びかけているのだ。

　幸いにも護堂たちがいる場所は、扉からは見えない死角だった。リリアナは抱き合った体勢のまま接吻を中断し、毅き然ぜんたる声を張りあげた。

「今行く！　すこし待っていてくれ！」

「はい、お願いいたします」

　がちゃり。扉が閉まる音。祐理はなかにもどったようだ。

　ふぅぅぅぅぅ。護堂の膝にすわりながら、リリアナが安堵の吐息をつく。

　平然とごまかしたように見えて、内心ではひやひやだったようだ。それから、彼女は不意に顔を上げた。そして、またキスのやり直し。

　くちゅ——護堂の唇を強く吸い、名残なごり惜おしげに舌を絡からませ合う。

「そろそろもどりましょう。万里谷祐理が不審に思うといけません……」

　ようやく口を離したあとも、最後にもう一回だけ軽いキス。

　それだけ終えたあと、リリアナはいたずらっぽく微笑みながら進言してくれた。

3

　この日の夕ゆう餉げは豆と野菜とキノコを煮込んだスープ、チーズ、固いパン。リリアナが近くの村で買ってきた鹿肉のローストが、質素なメニューに彩いろどりを添えている。

　これらを木のテーブルにならべての食事だった。

　作ってくれた祐ゆ理りに感謝しつつも、護ご堂どうの気分は重い。リリアナと交かわした行為が原因だった。昼間は祐理とあのようになったというのに——。

「結局、あなたひとりに準備をまかせてしまったな。すまない」

「そんな。リリアナさんこそ、おひとりであちこち飛びまわって、ご苦労さまでした。今夜はゆっくり休んでくださいね」

　護堂の忸じく怩じたる思いも知らず、リリアナと祐理はなごやかに談笑している。

　もともと真ま面じ目めで家庭的などの共通点を持つ両名。行動のリズムが合うのか、ふだんもいっしょにいるときは多い。今夜も和気あいあいとしていた。

　しかし、そんな仲なか睦むつまじい様子も、護堂には軽いプレッシャーだった。

　前から自覚があったとはいえ、俺はやっぱりロクデナシなんだな……という自責の念がむくむくと首をもたげてくるのである。

「それで偵てい察さつの成果ですが」

　リリアナが報告をはじめたので、護堂はあわてて背筋をのばした。

「女神と『最後の王』がどこに行ったかはわかりません。ただ、コロニア・アグリッピナのすぐ近くで起きた小こ競ぜり合いを目撃できました」

「小競り合い？」

「はい。片方はフランク族と思われる風ふう体ていの戦士たち、もう片方は何らかの魔力で操られた熊たちでした。熊の軍勢はライン川の東——ゲルマニア方面からやってきたようです」

「アルティオはまだ健在ってことか……」

「それとサルバトーレ卿きようが行方ゆくえ不明になられたとかで、コロニア・アグリッピナ市内はひどく混乱していました。指導者不在の状態でしたね」

「あのバカが⁉」

「それと、おうかがいしていた場所を訪ねて、草くさ薙なぎ護堂——あなたの屋敷も見てきましたが、エリカも清せい秋しゆう院いん恵え那なも不在でした。使用人たちがいるだけで」

「あいつらもか……」

　護堂はため息をついた。そして、すぐさま言う。

「やっぱり、早くもどった方がいいな。明日は俺たち全員で向こう

へ行こう」

　リーダーとしての決定だった。リリアナも祐理もうなずいてくれた。

　それから食事も終わり、あとかたづけもすませて、三人は早々と就しゆう寝しんすることにした。

　簡素な樵小屋に仕切りなどない。テーブルを脇わきへ寄せて、床に毛布を三つならべる。三人で川の字になって寝るという、シンプルな寝ね床どこの完成だった。

　そして、寝る前に顔を洗うと言って、リリアナが外へ出ていったのだが。

「あの、護堂さん……。よろしいでしょうか？」

　真ん中の寝床であぐらをかいていた護堂のそばに、祐理がやってきた。

「どうかしたのか、万ま里り谷や？」

「はい。今日一日いっしょにいて感じたのですが……救世の神刀から受けた毒矢の傷、とても治りが遅いようにお見受けします」

　護堂はどきりとした。もしかして、と。

「明日からはまた、危険の多い旅になるはずです。やっぱり、早く治療を終わらせるべきかもしれませんね。私たちの手で……」

「た、たしかにそうではあるんだよな」

「はい。護堂さんなら、そうおっしゃると思っていました」

　護堂と同じ寝床にすわる祐理は、当たり前のように正座していた。

　そして、生きつ粋すいの大和やまと撫なでし子こらしく羞しゆう恥ちで顔をうつむかせてから、彼女はそっと目を閉ざし、つややかな桜色の唇くちびるでささやいてくれる。

「は、早くしないと、リリアナさんが帰ってきてしまいます……」

　あくまで護堂からの行動を待つところが、ひかえめな祐理らしい。

　そのしおらしさに駆り立てられて、護堂は「万里谷……！」と顔を近づけて、柔らかな唇を激しく奪った。

「あ……護堂さん――今、治療を……」

　やや乱暴な接せつ吻ぷんを受け止めながらの、媛ひめ巫み女このささやき。

　彼女の唇から吐と息いきと唾だ液えき、そして呪じゅ力りょくが送りこまれるのを護堂は感じた。二度目だからだろう。さっきよりも明めい瞭りょうに術の動きを把は握あくできる。

　祐理の使った術は護堂の喉のどを通って、たしかに体の隅々へ行き渡ったのだが。

　何も起きない。いや、より厳密にいうと、治ち癒ゆの術を受け取った瞬間、護堂の体はわずかに熱くなったのだが、それだけだった。

　乾き切った砂漠の砂にコップの水をかけて、一瞬だけ潤うるおったときのようだった。

「どういう……ことなのでしょう？」

　唇を離し、じっと護堂の胸を見つめながら、祐理がささやいた。

　今、体内で起きた出来事をどうやら霊視できたらしい。彼女は護堂の胸をやさしく撫なでてから、こう言ってくれた。

「何か他のやり方はないか考えてみます。お役に立てなくて申し訳ありません」

「そ、そんなふうに言わないでくれよ。俺の方こそ面めん目ぼくない。万里谷がせっかくここまでしてくれたのに」

「かまいません。あなたのためですから」

　くすっと微笑ほほえんでから祐理はつつましく頭を下げ、自分の寝床にもどっていった。

　タイミングのいいことに、リリアナが帰ってきたのはこのすぐあとだった。どきりとする護堂の内心も知らぬまま、

「お待たせしました。では、もう休みましょうか」

　銀髪の騎士は明かりを消した。

　小皿にそそいだオリーブ油に火をともし、照明器具としていたのである。

　ただし、窓から月明かりが入ってくるため、完全なる闇やみではない。

　唯ゆい一いつの男をまんなかにして、祐理が左、リリアナが右の位置でついに就寝となった。しかし、護堂はさっきの行為が原因なのか、胸がどきどきして眠れない。

　やがて、祐理の安らかな寝息が聞こえてきた。

　俺も早く寝なければ——ぎゅっと目を閉じた瞬間だった。

（草薙護堂、まだ起きていますか……？）

　横からのささやき声。リリアナが寝床に横たわったまま、こちらを向いていた。仰あお向むけではなく、体を半分だけ護堂の方に向けていたのだ。

　祐理を起こすといけないので、護堂もささやき声で返事する。

（ああ。どうかしたのか？）

（実は先ほどの治療中、すこし気になることがあったのです）

（へ、へえ）

（確認してみたいと思います。お邪じゃ魔ましてもよろしいですか？）

（!?）

　許可を願ったくせに、リリアナは返答も待たずにそばへ来た。

　寝転んだ姿勢のまま体を横すべりさせて、護堂と同じ寝床に横た

わる形にしたのだ。ふたりはたがいの吐息がかかる近さで向き合う。

　添い寝もしくは同どう衾きんしていると言われても、まったく反論できない状況だ。

（こういう行為は……すごく、どきどきします）

　己おのれの行動の問題点をしっかり自覚している少女のつぶやきだった。

　しかし、リリアナはそっと護堂に顔を寄せて、寝たままのキスを敢かん行こうする。二メートルも離れてない場所で祐理が寝ているというのに。

　護堂もリリアナもそのまま動かず、じっとしたまま接吻を続ける。

　あまり激しくはない。その代わりに唇と舌をねっとりと重ね、絡からませつづける。

　くちゅ、くちゅ、という音が静かな小屋のなかに響く。激しい動きはなくとも十分以上に濃厚なキスを味わったあと、ふたりはどちらともなく唇を離した。



（あなたの体は治癒の魔術を受けて、ほんの一瞬だけ活性化していましたね……。その理由を考える必要がありそうです）

（そ、そうか）

　リリアナのささやきに、護堂はうなずいた。

　実は就寝前に祐理の治療を受けたときと、まったく同じ感覚だった。そんな護堂にしっとりと微笑みかけてから、銀髪の少女は元の寝床に帰っていった。

　今度こそ本当の就寝か――。

　リリアナの静かな寝息を聞きながら、ふたたび護堂はぎゅと目をつぶるのであった。

　エリカ・ブランデッリと清秋院恵那。

　この両名は共同生活をはじめるにあたり、早々に『休戦協定』を締てい結けつした。公私にわたって互いをライバル視する同士だからこそ、競争の激化にともなう時間・労力の浪費を避けるべきだと判断したのだろう。

　しかし、リリアナと祐理の間にその種の競争心はない。

　護堂もふくめて三人でいるときの雰囲気は和なごやかであり、落ち着いている。

　どちらの女子が草薙護堂のそばにいるかで揉もめることはないし、ふたりとも相手を尊重し合い、よく助け合っている。実に心安まる関係だ。

　それゆえに、彼女たちは紳士ならぬ淑しゆく女じよ協定の必要性に思い至らないのでは？

　また、護堂自身もこの手の儀式のとき、前より歯止めが利きかなくなっているような……。

　尚なお、しみじみ考察する護堂だが、現在位置は例の樵小屋では

ない。

　今朝、リリアナの飛ひ翔しよう術じゆつで旅立ってから、すでに二時間。小屋から南に六〇キロ近く飛び、ゲルマニアの広野にいる。

　まばらに森が点在する以外は、真っ平らな草地ばかりであった。

　現在地はコロニア・アグリッピナからも近いらしい。旅の導き手であるリリアナは三〇分近くも目をつぶっていた。

　得意の魔術『魔女の目』で視覚を遠方に飛ばし、何か不穏な動きはないか偵察中なのだ。

「こういうときリリアナさんがいらっしゃると、すごく助かりますね」

「本当になあ」

　微笑む祐理の賛さん辞じに、護堂は大きくうなずいた。

　魔女術に長たけたリリアナがいると移動・探たん索さくが格段にスムーズになる。東シナ海で女神の島をさまよったときも、彼女の力があれば行程はもっと楽だったはずだ。

「少々……いえ、かなり厄やつ介かいなものを見つけました」

　リリアナがおもむろに目を開けて、報告してくれた。

「それほど遠くはない場所です。近くで見てみたいと思うのですが」

「わかった、頼む」

　護堂の了りよう承しようを受けて、銀髪の魔女はふたたび飛翔術を使う。

　青き飛翔の光が三人を包みこみ、飛び立つ。三〇分弱の飛行を経へて、降り立った場所は小高い岩山の上だった。高さ数十メートルというところだ。

　ライン川を越えていないので、まだゲルマニア領内のはずだ。

まわりは見晴らしのいい広野だった。ここは岩山の頂上付近にある高台なので、リリアナの言う〝厄介なもの〟をすぐに見つけることができた。

眼下の広野に五〇匹近い熊たちが集まっている。

いずれも体長四、五メートルはあろう大熊で、一軒家と見まごうほどの巨体だった。

護堂やフランク族とも戦った、アルティオの眷けん属ぞくである。しかも、この大熊集団は輪を作っていた。ひとりの人間をかこみ、彼の立ち姿に注目しているのだ。

そして、輪の中心にいる者は——

「さ、サルバトーレ卿きよう⁉」

愕がく然ぜんとして祐理がつぶやく。

大熊集団にかこまれているのは、サルバトーレ・ドニだった。

しかし今、ドニの顔には凜りんとした気品がみなぎり、内面からにじみ出る聡そう明めいさで光り輝いていた。〝顔の造りだけは美男子〟評に復ふく讐しゆうするかのように、能天気なバカっぽさはきれいに消え失うせている。

「そうなんだ。何度も人ちがいかと思って、自分の目を疑ったんだが……」

媛巫女の驚きにうなずくのは、発見者のリリアナだった。

「あの御方があんなに凜り々りしい表情をされるはずない、他人の空そら似にではないかと」

「リリアナ、言いたくなる気持ちはわかるけどな……」

「も、もうすこし遠回しにおっしゃった方がよろしいかと思います……」

イタリアの魔術関係者をさんざん悩ませてきた、神殺しの魔王。

見れば、服装が変わっていた。簡素な白い貫かん頭とう衣いの上

に、やはり白のマントを羽織る。やけにさわやかな印象の白ずくめだった。

　また、長大な刀を背負っていた。刃渡り一メートルはあろう剛刀だ。

「我わが眷属たちよ」

　ドニの唇がつむいだ声を聞いて、護堂はハッとした。

　女の声だった。しかも、これは女神アルティオのもの！

「十分な兵が集つどったのち、我われらは人間の都に攻め入り、蛮ばん夷いの民たみに神罰を下す。そして、かの者どもが崇あがめるのは忌いまわしき神殺し……」

　アルティオの声で朗ろう々ろうと語ってから、ドニは背中の刀を引き抜いた。

　さすが達人というべき、あざやかな手つきだった。その剛刀は白金プラチナ色の刃やいばを持ち、陽光を浴びて燦さん然ぜんと輝く。救世の神刀にまちがいない。

「この剣にかけて妾わらわは誓う。全ての神殺しを地上より掃そう討とうし、救世の大業を成なし遂とげてみせると。眷属どもよ、そのために身命を捧ささげるがいい！」

　女神の声に応こたえて大熊たちの軍団は口々に咆ほう哮こうをはじめる。

　Ａａａａａ――。Ｒｒｒｒｒ――。Ｔｏｏｏｏ――。Ｓｓｓｓｓ――。

　五〇頭近い熊たちの咆哮。どこか合唱にも似た響き。よく聞けば、名前を叫んでいるようにも感じられた。

　Artos。アルトス。『勇者』の意味を持つという名前か。

「卿の背後に黒い女の影が視みえるな。あれがアルティオなのか……」

「肉体を失った女神がサルバトーレ卿の御お体からだに憑ひよう依

いし、意のままに操っている……。私にはそのように感じられます……」

　霊視の啓けい示じを得たらしい。リリアナと祐理がうなずき合っている。

　三人は今、岩山の上から下げ界かいの騒ぎを見おろしている。もっと近くで観察していたら、神とカンピオーネ同士で互いの気配を察知して、戦闘状態となったことだろう。

　ここへ着陸したリリアナの好判断に助けられた。

　次はエリカと恵那を探すべきか。護堂は仲間たちにうなずきかけた。

4

　ふたたび青き光につつまれて、天あま翔かける。

　今の護ご堂どうにとって、飛ひ翔しよう術じゆつの存在は何よりもありがたい。馬での移動は疲労が激しく、手負いの体には大きな負ふ担たんになったはずだ。

　ドニ＝アルティオを目撃した土地から、飛行すること約三〇分。

　幹線道路を快走する自動車と同程度のスピードだった。ライン河か畔はんのローマ植民市、コロニア・アグリッピナが見えてきたところで、リリアナは飛翔の高度を下げた。

　ライン川の西岸に市街、東岸には元ローマ軍の駐ちゆう屯とん地ちがある。

　護堂たちはこの駐屯地の外に降り立った。

　大族長の失しつ踪そう後、ここに集まったフランク族戦士がどうしているかを確認するためだ。たしか数日前に集計したときは、約三千名いるという話だったが。

「街のうわさによると、サルバトーレ卿きようの失踪後、フランク族の間では意見が割れているそうです。このまま女神と戦うべきだ、いや故郷に帰るべきだというように」

「その方々には、いっそ完全に撤てつ収しゆうしていただく方がいいのかもしれませんね」

「まあ、神様との戦いに参加されても、犠ぎ牲せいが出るばっかりだもんな。でも、そういう流れにはたぶんならないんだろうなあ……」

　リリアナの報告、祐ゆ理りの感想を聞いて、護堂はつぶやいた。

　やけに冷え冷えとした春風を浴びながらの、予言めいた発言である。実はここに向かう途中から、いやな予感をひしひしと感じていたのだ。

　問題の駐屯地へ暗い視線を投げる。

　前にウルディンと戦った場所、アウグスタ・ラウリカの砦とりでと似たような外観だ。北・東・南側は城壁で、西側はライン川によって守られている。

　そして、駐屯地内部から聞こえてくるのは、だみ声の歓声。

　女子ふたりが「？」と首をかしげている。しかし、実際に見てもらう方が理解しやすいだろう。あえて何も説明せず、ふたりを連れて城門をくぐった。

　うおおおおおおおおおおおおお——っ！

　うおおおおおおおおおおおおおおおおおお——っ！

　うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお——っ！

　駐屯地中央の広場には群衆がひしめき、その全員が雄お叫たけびをあげていた。

　もちろん三千人のフランク族戦士だ。彼らの視線はひとりの女性に釘くぎ付づけだった。壇だん上じように立つ、白い外がい套とう姿のたおやかな美少女である。

「みなさん！　このたび、たくさんの方々に推すい薦せんされて、新族長に就任することが決まりましたあっ。見てのとおりの若じゃく輩はい者ものですが、よろしくお願いしまあす！」

　うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！

　彼女が言葉を発するときだけ、雄叫びは中断される。

　口をつぐめば再開。サイクルができあがっているようだった。

「前族長のドニさんとちがって、わたくしにはみなさんを守る力はありません。でも、戦いで傷ついた方々を癒いやして差し上げることはできますっ」

　うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！

「それにちょっとだけなら、神様たちも怖がっちゃう力を使えます。女神アルティオもわたくしを無視することはできないでしょう。――わたくし、彼女が攻めてきたら会談するつもりです。どうか、フランク族のみなさんを見逃してあげてくださいって」

　うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！

「大丈夫です。話し合えば、必ずわかり合えますからっ。ダメなときは仕方がないので、べつの方法でどうにかしますからっ♪」

　うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！

「わたくしを守るために死んだ草くさ薙なぎさんのためにも、精一杯がんばりますっ。あの方はきっと、お星様になって空から見守ってくれている――そう信じてます！」

　うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！

（……ええと。護堂さん、こちらにちゃんといらっしゃいますよね？）

（……たしかに。いつ亡くなられたんだろうな？）

（……基本的にノリと勢いの人なんだよ、ドニと気が合うくらいには。あと、結構おっちょこちょいで、勘かんちがいもしやすい感じ

だな）

　甘く可か憐れんな声によるスピーチ。むさ苦しくもみごとな歓声＆怒号。

　それらの最後方で護堂たちはささやき合う。祐理もリリアナも唖あ然ぜんとした顔で、壇上でスピーチ中のアイーシャ夫人を見つめている。

「あ、族長就任の演説はこれくらいなんですけど、まだお話しした方がいいですか？」

　うおおおおおおおおおおおおおおおおっ！

「じゃあ、そうですね……。わたくしの名前はアイーシャ。趣味は読書と旅行、刺し繍しゆうとお料理です。年齢――年齢はちょうど一七歳になりますっ」

「……おいおい。なんだか迷走しはじめたな」

　経歴詐さ称しようの問題発言を聞き流しながら、護堂は思う。

　エリカも恵那も市内に――つまり近くにいないという。お目め付つけ役やくがいない間に、アイーシャ夫人はまたしても『いつのまにか群衆の崇ア拝イ対ド象ル』をやってしまったのだ。

　……いや。もしかして〝また〟ではなく。

　混乱や戦乱の巷ちまたにいるとき、彼女は〝いつも〟このノリではないのか。

　魔ま性しようの魅力を振りまく魔王アイーシャに人は勝手に惹ひきつけられ、カリスマとして崇あがめ、救いを求める。彼女は親切心とノリのよさにまかせて安やす請うけ合いし、暴走……。

　いかにもありそうな話だった。

「やっぱり、あの人もカンピオーネなんだなあ……」

　護堂は近くにいたフランク族の肩に手を置いて、振り向かせる。アイーシャ夫人を呼んでくれと指示するためだった。

「まあ!?　生きてらしたのですね、草薙さん！」

「大事なことだから二回言いますけど、勝手に殺さないでくださいよ」

　アイーシャ夫人の第一声へ、護堂はすかさず反論した。

　族長就任のスピーチ後、ローマ軍の司令部だった建物での再会である。

「も、申し訳ありません。あの戦いのあと、行方ゆくえ不明になられたもので、つい……。そ、そうそう。ドニさんが女神の亡霊に取り憑つかれたりして、大変だったんですよっ」

「知ってます。それで、エリカと清せい秋しゆう院いんはどうなったんですか？」

　愛あい想そ笑いでごまかす夫人へ、護堂は訊たずねた。

　天あまの叢むら雲くもの剣つるぎは休眠状態から目覚めていないため、恵那とはまだ連絡を取れない。いちばんに確認したい事こと柄がらだった。

　万一のことをあやぶむ護堂の前で、アイーシャ夫人はにこりと微笑む。

「あ、はい。おふたりでしたら無事ですよ。わたくし、例の戦いのあとで目を回していたら、彼女たちに助けてもらいましたし」

「じゃあ、あいつらは今どこに？」

「それが二、三日前から姿が見えないんです。行方不明の草薙さんを探す旅に出られたのかと思っていました」

　夫人の推測はたしかに当たっていそうだった。しかし、どこへ行くとも告げずに去るような真ま似ね、あのふたり——特にエリカがするだろうか？

　考えこんでいた護堂の背後へ、不意にアイーシャ夫人が目を向けた。

「ところで、そちらのおふたりは？」

「ああ、いろいろあって現代から追いかけてきた俺の仲間で……」

「はじめまして。万里谷祐理と申します」

「草薙護堂の騎士、リリアナ・クラニチャールと申します。お見知りおきを」

　夫人から話を向けられて、はじめてふたりが言葉を発した。

　祐理はしとやかに頭を下げ、リリアナは目礼と共に凜り々りしくあいさつする。どれだけ気さくな人柄でも、王者たるカンピオーネへの礼を守ったのだろう。

　対して、女王と呼ばれる立場の人物は——

「こちらこそよろしくお願いしますね。……と、ところで、おふたりともやっぱり、草薙さんのあああ、愛人……ということでよろしいんですか？」

　あいさつの途中でいきなり声をひそめてしまった。

　意外すぎる言葉に、祐理とリリアナはそろって「「えっ？」」とつぶやく。

「アイーシャさん。誤解しないで欲しいんですけど、エリカも、清秋院も、このふたりも俺の仲間であって、そういう変な関係じゃ——」

「ま、また、そんなことおっしゃって！　わたくし、わかってますから！」

　口をはさんだ護堂へ、夫人は叫んだ。

「モテモテ王国代表の草薙さんのことです。このおふたりとも代わる代わる愛のアバンチュールを楽しんで、それだけでは飽あき足らず、市内に構えた後宮ハレムまがいのお屋敷ではあいかわらずの遊び人生活を謳おう歌かするつもりなんだって」

「ば、バカ言わないでくださいっ」

「じゃあ、アバンチュールされてないんですか？　彼女たちとは同居もなしとか？」

「…………」

「……やっぱり。あのお屋敷、また女の子が増えちゃいますね……」

「ま、待ってくださいよ。アイーシャさんもあそこの居い候そうろうなんですから、女性率が高い理由のひとつじゃないですか！」

　傍はたで聞きながら、リリアナと祐理が眉まゆをひそめている。

　プレッシャーを感じながら護堂が反論すると、夫人はぽんと手をたたいた。

「あ、そうでした。そのことでお話がありました。わたくし、新族長に就任が決まりましたので、あちらを出ることになります」

　女神の脅きよう威いが去るまで、駐屯地の近所で暮らすのだと夫人は語った。

　ここはフランク族の戦士やリーダー格が集つどう重要拠点。族長がその近くへ移るのは自然な配慮だろう。しかし、護堂は言った。

「族長の件ですけど、今からでも辞退した方がいいんじゃ……」

「何をおっしゃいます。フランク族のみなさんを神の気まぐれから守るために、誰かがやらなければいけないことです」

「いや、そっちは俺が戦いますから。権能の反転ってやつも中止してください」

　リリアナの飛翔術でコロニア・アグリッピナへ近づくにつれて――。

　護堂は気づいていた。空気が徐々に冷たくなっていると。春にもかかわらず、晩秋のような冷気だった。そして、同じ現象を体験済みだった。

　ウルディンとの決闘前、夫人が癒いやしの権能を反転させたときだ。

　春の女神ペルセポネより簒さん奪だつした力を反転すれば、『冬の権能』——周辺地域に冷害をもたらしかねない力になるという。

　そんなものを使わせるわけにはいかない。だから護堂は言ったのだが。

「いいえ。わたくし、草薙さんのあ、ぁぃ……といいますか親切に頼りっぱなしでしたけど、ここからは自分で戦います！」

　アイーシャ夫人は途中で口ごもりながらも、力強く宣言した。

　拳こぶしをぐっと握り、顔つきも『きりっ』とさせている。闘志のアピールなのだ。

「わたくしのために戦ったから、草薙さんはそんなお体になったんです！　そのお気持ちに応こたえるためにも、わたくし、精一杯がんばります！」

「そんな体って——」

「わたくしはこれでも癒やしの技の使い手。たとえ外見はいつもどおりでも、その方が負った傷のことはなんとなくわかります」

　アイーシャ夫人は敬けい虔けんな口調でささやいた。

　透とう視しでもするかのように護堂の胸をじっと見つめている。元気なふりをしていれば、傷のことはわかるまいと踏んでいたのだが——大誤算だったようだ。

「この前の戦いで内傷を負ったのですね……。わたくしの権能は同じ神殺しである御方には通じません。癒やして差し上げることはできませんが、代わりにわたくしが女神と会いにいきます。この件、わたくしの名にかけて、必ず解決してみせます！」

　アイーシャ夫人の真しん摯しかつ決意に満ちた言葉だった。

　それは女王の呼び名にふさわしい、威い厳げんに満ちた物言いでもあった。

第６章　騒乱の女王

1

　エリカ・ブランデッリと清せい秋しゅう院いん恵え那な。

　コロニア・アグリッピナより消息を絶った両名である。もちろん、訳わけもなく出ていったのではない。彼女たちには、そうしなければならない切実な理由があったのだ。

　あの『最後の王』が降こう臨りんした戦闘のあと――。

　失神したアイーシャ夫人を馬に乗せて、エリカと恵那はコロニア・アグリッピナの街にもどった。しかし、ドニの肉体はアルティオに奪われてしまった。

　何より、彼女たちの王・草くさ薙なぎ護ご堂どうは行方ゆくえ不明……。

「ただ、護堂のいる方向を感じ取ることはできるのよね」

　勇者降臨の翌日、〝草薙護堂の屋敷〟でエリカはつぶやいた。

　愛用の鎖くさり付つき懐中時計を手にしている。捜索したい人物の髪などがあれば、居場所を検知できる――。例の魔術を行使したのだ。

「ここから北……北東に五〇キロから一〇〇キロというあたりじゃないかしら」

「ずいぶん離れたところに行っちゃったんだねえ」

　捜索結果を聞いて、恵那はしみじみと言った。

「でも、さすが王様だよね。ちゃんと奇跡の生還を遂とげてたんだ！」

「奇跡の種明かしを早く訊ききたいものだけど、ちょっと距離がありすぎるわね」

　これが現代であれば、たいした距離ではない。

　しかし、この距離を徒歩や馬で行くなら幾日もかかる。また護堂がいるらしい一帯に、おそらくローマ帝国の街道網は行き届いていない。

　道なき道を進みながらの捜索となれば、さらに時間がかかる。

「わたしたちがすぐに向き合うべき問題は、やっぱりフランク族の方だわ」

「あのおっちゃんたち、意見もバラバラで血の気も多いし。厄やつ介かいだもんねえ」

　エリカが眉まゆをひそめて言えば、恵那も渋しぶ々しぶという顔つきでうなずいた。

　奇跡の生還を遂げたらしいとはいえ、草薙護堂が負傷している可能性もある。

　何より、愛する彼の顔を早く見たい。しかし、その衝動を抑おさえる必要があった。フランク族にはエリカの口から『サルバトーレ・ドニは戦闘中に行方知れずとなった。生死は不明』と伝えてある。

　結果、彼らはドニを戦死したものと認識し、大いに混乱していたのだ。

　そして勇者降臨の翌々日、エリカと恵那はふたたび会議を行った。

「サルバトーレ卿きようを大族長と慕したうフランク族にはね。卿以外にも四人の族長がいるのよ」

「ああ、将軍家の下に有力大名がいる感じなんだ」

「それってたしか、近世日本の支配体制？　まあ、封ほう建けん国家の君主に仕つかえる貴族みたいなものよ。そして、フランク族の四族長はサルバトーレ卿亡きあとの方針がみんなバラバラ」

　方針その一。ドニの遺志を継ついで、女神の軍と戦闘を続ける。

　方針その二。コロニア・アグリッピナを速すみやかに去り、故郷に帰る。

　方針その三。コロニア・アグリッピナの占領を維持。しかし、女神とは戦わない。

　方針その四。ここを拠点にしばらく略りやく奪だつ行為で近隣を蹂じゆう躙りんし、それから撤てつ退たい。

「略奪とか何もしないで、さっさと帰ってくれるのがいちばんだよねー」

「最も犠ぎ牲せいと混乱がすくない選択肢しでしょうね。ただ、故郷に帰ったところでアルティオの問題は解決していないから、女神の呪のろいにおびえる日々でしょうけど」

「でも、フランクの人たちがこの街に居すわること自体、おかしいんだし」

「そうね。必要のないエキストラ役にはご退場願うべきだわ。アルティオやサルバトーレ卿との対決がどうなるにせよ、その近辺にふつうの人間はいない方がいいでしょう」

　必要とあらば、策略を弄ろうすることも辞じさない両名。そして、こういうときに役立つ――否いな、絶対的な効果を生み出す能力の持ち主がいる。

　かくして、エリカと恵那はアイーシャ夫人の姿を探したのだが。

「わたくしはフランク族のみなさんと共に、女神に立ち向かおうと思います！」

　フランク族戦士三千名が集つどう、元ローマ軍駐ちゆう屯とん地ち。

こんなところにいたアイーシャ夫人は、ふたりと顔を合わすなり宣言した。

「ドニさんの遺志を継ぐという方たちに頼まれたんです。自分たちを助けて欲しいって。それにフランク族のみなさん、大族長がいなくなって混乱中で……。街の人たちに乱暴しようとしたりとか雰ふん囲い気きも悪いですし」

アイーシャ夫人は両手の拳こぶしをにぎり、闘志を露あらわにした。

「草薙さんもいないことですし、わたくしががんばりますっ。とりあえずフランク族の方々を連れて、ドニさんの体を乗っ取ったアルティオさんと会うつもりです」

「でもアイーシャさん。フランクのおっちゃんたちは意見バラバラなんでしょう？」

「大丈夫です。みなさんのところを訪ねて、おねがいして回りますから♪」

恵那の意見にあっけらかんと夫人は答えた。

女カンピオーネの絶対的魅了の権けん能のうでの『おねがい』。それは並みいる反対意見をことごとく覆くつがえし、フランク族を彼女の忠実な信奉者に変えてしまうだろう。

アイーシャ夫人は善良で心やさしい、たおやかな女性。

しかし、己おのれが持つ魔ま性しようのカリスマをはっきり自覚していないのだ……。

「ですが夫人。このコロニア・アグリッピナで女神と対面される場合、街の住民が大きな被害を受けるかもしれません。女神の呪いでフランク族が苦しむのはある意味で因いん果が応おう報ほうともいえますが、この街にはフランク族以外の民たみもおりましょう」

優美な口ぶりで言ごん上じようしたのは、もちろんエリカである。

アイーシャ夫人の慈じ悲ひ深さに訴えるつもりで、あえて『民』のことを口にした。魔王たるカンピオーネへの諫かん言げんとなる

が、それが必要な状況だった。

「いたずらに彼らを苦しめる必要はないかと存じます。どうか御再考を――」

「ふふっ、大丈夫ですよ。準備がある程度済んだら、わたくし、フランク族のみなさんを連れて、街を出るつもりですから。アルティオさんを探す旅に出ます」

「「…………」」

　それはそれで別種の騒乱を呼び込みそうな方針ではないか。

　エリカと恵那が目配せを交かわし、反対意見をさらに重ねようとしたとき。

「というわけでエリカさん、恵那さん。おふたりにも是非、手伝って欲しいんです！　いっしょにがんばりましょう？」

　その後、ふたりは半日ほどアイーシャ夫人といっしょに過ごした。

　夫人が駐屯地のフランク族戦士や女子供と談笑するのに付き添い、とある族長と面談する席にも同行した。エリカなどは『アイーシャ夫人こそが新たなる大族長にふさわしい』旨むねを多くのフランク族に語り聞かせたものだ。

　この夜、駐屯地に残るという夫人と別れたのち。

　主人不在の草薙護堂邸にもどってきたとき、玄関の前でエリカは唐突にハッとした。

　いっしょにいた恵那も不意に口ごもり、自みずからを省かえりみるように考えこんでから、

「……もしかしてさ。アイーシャさんの権能に恵那たちもやられちゃった？」

　と、つぶやいた。

　ふたりはここ数時間の行動を振り返り、愕がく然ぜんとした。

「すっかり、あの人の計画に協力するつもりになってたよ……」

「わたしもだわ。魅了されている自覚がないまま、すごく自然にアイーシャ夫人を盛り立てようとして……」

「だけど、何で今になって正気にもどれたんだろ？」

「ふつうの人よりもわたしたちは魔術に慣れているし、呪力も強いからだわ、たぶん……。だから、こうして我われに返ることができたのよ」

　エリカ・ブランデッリの抜きんでた聡そう明めいさに陰りが差す——。

　かつてない事態に衝撃を受けながら、エリカは必死に考えを巡らせた。

「こうなれたのは夫人と物理的に距離を置いたから、でしょうね。でも、夫人と顔を合わせれば、また魅了されるかもしれない……」

「ていうかさ。なんでだか無性にアイーシャさんと会いたくない？」

「まあ、恵那さんも？」

　魅了の権能のおそろしさを語り合うエリカと恵那。

　しかし、その間もアイーシャ夫人の〝ほんわか〟した笑顔を自然と思い出し、心やさしきカンピオーネを妙に慕したわしく感じてしまう——。

　その心の動きに気づいたとき、ふたりは口々に言った。

「大変だ！　アイーシャさんから隠れないと……ううん、逃げないとダメかも⁉」

「それもかなり遠くに行った方がよさそうだわ。彼女を慕う気持ちが落ち着くまで、かんたんには会えないくらいの場所へ」

　アイーシャ夫人の呪縛を和やわらげるのは、距離と時間ではないか。

　その予測にもとづいてのアイデアだった。そして、ここで即決するところがエリカ・ブランデッリと清秋院恵那の組み合わせである。

　ふたりは屋敷ですぐに荷物をまとめ、馬を厩うまやから出し、旅立ったのだ。

　夜にもかかわらず市門を抜けて、コロニア・アグリッピナの街を出る。ひとまずライン川沿いの街道を南に進んでいく。

「アイーシャさんが言ってたでしょう？　フランク族をひきいて、女神アルティオを探しにいくって。でも、向こうは向こうで例の熊たちを連れていそうだよね？」

「ふたつの軍勢が遭遇したら、そのまま戦闘になりそうな気がするわ……」

　アイーシャ夫人と三千名のフランク族戦士。

　そして、女神がひきいる熊の軍団。

　両軍がどこかの広野で遭遇でもしたら、そのまま野戦がはじまるのではないか？　その可能性を危き惧ぐしながら、ふたりは馬を走らせる。

「ああ、もう。天あまの叢むら雲くもが目を覚ましてくれれば、王様と連絡を取れるのに！」

「全てが最悪に転んだ場合を想定しないと駄目なようね。アイーシャ夫人とアルティオの双方を抑えられるように、準備しなくちゃ……！」

　それぞれ愛馬を御ぎょしながら神刀の不在を嘆なげき、または決意の表情でつぶやく。

　エリカはこのとき、腰帯につるした小さな革袋をさわっていた。なかには銅製のペンとインク、パピルス紙が収めてある……。

　ふたりのコロニア・アグリッピナ脱出は、『最後の王』降臨から二日後の夜。

　この三日後に護堂とリリアナ、祐ゆ理りの一行が同市に到着する

のである。

2

　コロニア・アグリッピナに帰還し、アイーシャ夫人と面談したあと。

　護ご堂どうは市内の屋敷にもどり、使用人の女性陣三〇名に出迎えられる形となった。

「「「「「おかえりなさいませ、御主人さま！」」」」」

　と、異い口く同音に声をかけてもらう。

　広い庭園付きの豪ごう奢しやな屋敷なので、玄関前に三〇人が勢ぞろいできるのだ。小間使いの少女たちはいつのまにか揃そろいの制服まであつらえていて、なかなか壮観だった。

　義理の甥おい・陸りく鷹よう化かが経営するメイド喫茶を彷ほう彿ふつとさせる。

　こういうのもちょっと新鮮だなと、思わず護堂は感心してしまった。

「なるほど。これがアイーシャ夫人の言われた後宮ハレムの実態ですか」

「護堂さんったら本当にもう……なんて仕方のない人なんでしょう……」

　一方、リリアナは皮肉っぽくつぶやき、祐ゆ理りも嘆なげかわしげにささやいていた。

　護堂が「……」と気まずさを噛かみしめていると、小間使いの少女が近づいてきた。前に市内の視察を手伝ってくれた、フランク貴族の娘である。

「御主人さま、エリカ奥様からご伝言がございます」

「エリカから!?」

「入れちがいになっても心配するな、必ずまた帰ってくる——とのおおせでした」

　エリカと恵え那なは三日前の夜、唐突に屋敷を出ていったのだという。ひどく急いでいる様子で、多くを語らぬまま、この伝言だけを残して去ったらしい。

　その夜——。

「こんな状況なのに行き先も言わないで出ていくなんて、あいつらしくないな」

「考えられるとすれば……」

　屋敷の主人用執務室で首をかしげる護堂に、リリアナが言った。

「追っ手がかかるのを恐れた。もしくは行き先が決まってないにもかかわらず、旅立つ必要がエリカたちにはあった。そのどちらかかもしれません」

「だとしたら、エリカさんも恵那さんもすごくあわてていらしたんですね……」

　祐理が心配そうに顔を曇くもらせる。

　今、この執務室には護堂たち三人だけしかいない。会議中なのだ。

「まあ無事ではあるようだし、あいつらのことだから何とか帳ちよう尻じりは合わせてくれるか」

「ええ。そのあたりの判断にまちがいのないふたりです。特にエリカは雌め狐ぎつねのように狡こう猾かつな女ですし、いたずらに心配せずともよいでしょう」

　エリカへの信頼と腐くされ縁を感じさせる物言いで、リリアナが状況をまとめた。

「やはり、今いちばんの懸けん案あんはアイーシャ夫人の出陣です」

　アイーシャ夫人は明日、コロニア・アグリッピナを出るという。

　数千のフランク族戦士をひきいて、女神アルティオと会談をするために。

　昼間、護堂たちが目撃した女神と熊たちの集会――。フランク族の斥せつ候こうもあれを発見し、アイーシャ夫人に報告したのだ。

　しかし、数千の軍団は夫人を心の底から崇すう拝はいしている。

「アイーシャさんを守るためなら命も惜しまないで戦うんだろうな、やっぱり。あの熊たちがもし話も聞かないで襲ってきたら……」

「遭遇する地形にもよるでしょうが、野戦になる可能性が大ですね」

「女神の方は戦う以外の選択肢しを考えてないようでしたし――心配でなりません」

　暗い未来しか思い浮かばず、ため息をつく三人だった。

「仕方ないから、俺もアイーシャさんにくっついていくよ。やらなきゃいけないことは多いもんな。フランク族の犠ぎ牲せい者しやをなるべく減らして、救世の神刀とアルティオの件をかたづけて、ドニを回収……この体でどこまでできるかはわからないけど」

　眉まゆをひそめてから、護堂はつぶやいた。

「せめて体の問題がなかったら、アイーシャさんを強引に足止めして、どこかに監禁する手もあったんだよな。あの人はたぶん強いから、今の俺じゃ無理だろうけど」

「「えっ？」」

　女子ふたりがそろって驚いたので、護堂は真ま面じ目めな顔で言った。

「いや、戦うところを見たわけじゃないし、勘かんなんだけどさ。アイーシャさんは見た目と性格の割に相当な強さだと思うんだ。……ああ、もしかしたら『強い』っていうより『厄やつ介かい』な感じなのかもな」

ここで思い出したのは、アレクサンドル・ガスコインである。

あの男も他のカンピオーネや勇壮な神々とは一線を画かくす、独特の手て強ごわさだった。

「戦いに関することですし、護堂さんのおっしゃるとおりかもしれませんね……」

祐理がうなずいてくれた。やはり、自身も霊妙な超感覚を持つ媛ひめ巫み女こ。カンピオーネが戦闘にまつわる事こと柄がらで見せる、異様な直感力を思い出したらしい。

すると、すかさずリリアナが言った。

「だとすれば……。救世の神刀とサルバトーレ卿きようの肉体を得た女神、そしてアイーシャ夫人に対処できるよう、草くさ薙なぎ護堂には早々に全快していただく必要がありますね」

このとき護堂は執務室の机に向かい、椅い子すにすわっていた。

なぜかリリアナがすっと護堂の隣に来た。さりげない動きだったので、特に不思議とも思わなかったのだが。

「お体の不調の原因を今日一日考えてみて、わかったような気がします。あとで魔女の秘薬を調合してみましょう。それで治るとよいのですが」

生き真ま面じ目めな口調で言いながら、リリアナはさっと手を動かす。

椅子にすわる護堂の膝ひざに、パピルス紙のメモが載のせられた。『今夜おうかがいします』としたためられている。ちょうど机がブラインドになって、同じ部屋にいる祐理からは見えないアクションだった。

本当は薬を使うのではなく、直じかに魔術をかけるつもりなのだ……。

護堂はぎくりとして、かたわらの騎士を見た。リリアナは凛り々りしい表情を崩さないまま、ほんのかすかに目配せを返してくれた。

その一瞬のまなざしがどきっとするほど艶つやっぽく、胸が高鳴る。

だが、『こういう行為はよくない』という思いもこみあげてくる。その衝動にまかせて護堂が口を開きかけたとき、不意に祐理がハッとした。

「あ、あの。実は私も護堂さんのお怪け我がについて、視みえたことがあります！」

ぎこちない、いささか唐突なアピール。

もしかしたら、祐理はたぐいまれな霊感でリリアナの〝抜け駆け〟を霊視したのかもしれない。護堂はとっさにメモを握りつぶした。

「もしリリアナさんの——お薬の方がよろしければ、私の出る幕ではありません。でも、もし護堂さんがお望みなら、わ、私も……」

「し、しかし、医療行為は古来、魔女の職分でもある」

ひかえめであるはずの大和やまと撫なでし子こに追つい随ずいされて、リリアナがたじろいでいた。

「やはり、わたしの方が適任であるように思うんだが……」

「そ、そうかもしれませんが、私にだってできることはあるかもしれませんし……」

穏おん当とうな態度と言いまわしを選びながら、ふたりが張り合っている。

この展開をさけるために、エリカと恵那は協定を結んだのだ。こうなった以上、リリアナと祐理の間に入るべきは——やはり草薙護堂だろう。

覚悟をかためて、護堂は口をはさんだ。

「とりあえずさ。俺の怪我の診察結果、ふたりに訊いてもいいか？」

「あ、はい。なんとなく感じたのですが……護堂さんのお体は今、

治ち癒ゆの術が効かないというよりも、もともとお持ちだった回復力を失っているように思えます」

　おずおずと祐理が答えたので、リリアナも張り合いを中断した。

「同感です。お気づきでしたか？　あなたの体が現在たくわえている呪じゅ力りょく――負傷前のおそらく七分の一以下です。呪力とは東洋医学や中国武術でいう『気』の概がい念ねんに近いもの、精神と肉体のエネルギーそのものだといえます」

　魔術の素人しろうとである日本人にも理解しやすいよう、あえて『気』という用語を使う。

　細やかな配慮を見せつつ、リリアナはさらに語る。

「救世の神刀により撃ち込まれた毒素はカンピオーネの肉体から呪力を奪い、その回復を遅らせるものだったのでしょう」

「じゃあ、どうすれば回復できると思う？」

　護堂がさらに訊たずねると、魔女と媛巫女はすこし考えてから答えてくれた。

「たとえば、清せい秋しゅう院いん恵那のように人里を離れた霊山などで身を清め、その土地の霊気をすこしずつ体に呼び込むとか。ただし、この方法は時間がかかります」

「私は術を使って、私のなかの呪力を護堂さんにお渡しするつもりでいました」

「わたしも同じ術を――い、いえ、同じ効果のある薬を調合するつもりでおりました。ただ、カンピオーネである草薙護堂の肉体は、わたしたちとは比較にならない量の膨ぼう大だいな呪力をふだんから蓄たくわえています」

「私たち程度の呪力をお分けしても効果があるか……。実はそこが不安だったんです」

　祐理が不安要素を口にすると、リリアナもうなずく。

　どうやら両名の診断結果と対処法、ほとんど同じだったようだ。そして、これを聞いて護堂は――気分が楽になった。ふたりに笑顔

を見せる。

「ありがとう、よくわかった。その程度の怪我だったのかって安心したよ」

「ご、護堂さん？」

「バカを言わないでください！　カンピオーネのお体がここまで負傷に苦しむことなど、今まで一度もなかったではありませんか⁉」

「いや、でもさ。どうせ俺たちの体はふつうじゃないし」

　完治まで何か月かかるだろうと憂ゆう慮りよしていた護堂は、晴れやかな気分で言った。

「命を懸かけた戦いとかになったら、体の奥の方から勝手に力とか呪力ってやつがみなぎってきて、どうとでもなりそうな気がするよ」

「「…………」」

　戦いのたびに幾度も経験してきたことだった。

　そして、自分で口にしてみて、ひどくしっくりきた。神殺しの獣けものであるカンピオーネの心身が、己おのれのいいかげんな発言を全ぜん肯こう定ていし、武む者しや震ぶるいしているようにすら感じる。

　祐理とリリアナもそう感じたのか、黙り込んでしまった。

「まあ、命いのち懸がけの修しゆ羅ら場ばでないと、そこまで盛りあがる気はしないから、アイーシャさんに変なちょっかい出すのはやめておくけど。これで安心して、あの人についていける」

「ですが草薙護堂、やはり治療は試しておくべきだと――」

「たぶん効かないんだろ？　なら、いいじゃないか」

　不満ありげな女子ふたりへ、やや口調を強めて護堂は言った。

「俺はそういう……そういうのをどちらかに頼むのは好きじゃない。もう今回はなしってことにしておこう。ほら、ふたりいっぺん

に頼むわけにもいかないだろ？」

「は――恥知らずなことをおっしゃらないでください！」

「そ、そうですよ護堂さんっ。そ、それはたしかに、今までだってそういうことがなかったとは言いませんが、そんな提案を護堂さんからされるだなんて……！」

　さすがに羞しゅう恥ちと怒りをあらわにしての抗議だった。そんなふたりに『冗談だよ』というように護堂は笑いかけて、話題を締めにかかった。

「まあ、そういう感じでいこうと思う。よろしく頼むな」

「「…………」」

　ふたりの少女は笑う護堂を不満げに見つめてから、おたがいの心情を探るように目配せを交かわし合った。それから、うつむいてしまう。

　張り合いを抑おさえることができて、ひとり護堂だけがほっとするのであった。

　そして翌日。アイーシャ夫人ひきいるフランク族の集団は、コロニア・アグリッピナ市を出て、ライン川の東――ゲルマニア内部へと移動をはじめた。

　約三千名いた戦士のうち、一千名は同市に残る。

　非戦闘要員の女子供と共に、拠点となる都市を確保するためだ。

　それでも二千名前後が夫人に同行し、長剣・長ちよう槍そう・斧おの・弓など思い思いの武器をたずさえ、いかにも荒くれ者といった雰囲気をまき散らしている。

　実態としては移動というより〝進軍〟であった。

　集団の先頭近くにアイーシャ夫人は加わり、そこそこ颯さつ爽そうと馬にまたがっていた。

　一方、負傷者あつかいの護堂は荷馬車が集まった最後尾のグループにまざり、祐理・リリアナと共に人間用の四輪馬車に乗せられていた。

「前にいた街のローマ軍の砦とりでででは、訓練とかも見られたんだけど」

　馬車のなかに臨時であつらえた、特製の寝台。

　その上であぐらをかきながら、護堂はアウグスタ・ラウリカ滞在時を思い出した。

「ローマ軍がやってた行軍とか野営の訓練に比べると、ここのフランク族はすごく……大おお雑ざつ把ぱだな。細かい決まり事とか、あんまりなさそうだ」

　ローマ軍の歩兵部隊はふだんから厳しい訓練を繰りかえしていた。

　その成果だろう。模も擬ぎ戦せんでは整然と陣形を組んで、一いつ糸し乱れぬ動きを披ひ露ろう。行軍時も所定の隊列で迅じん速そくに移動し、効率よく休息。野営地を設営するのも手慣れたものだった。

　一方、フランク族の荒くれ者たちは——

　なんとなく集まって、ばらばらの歩調で前を行く者のあとについていく。

　戦闘では我われ先さきにと敵へ挑み、勇ゆう猛もう果か敢かんに戦う。しかし、武装がバラバラなので陣形も上う手まく組めないうえに、そもそも積極的に組もうとしない。

「前にエリカが『一万のローマ軍が三万のゲルマン人に勝った』みたいに言ってたけど、たしかにそれくらいの番狂わせはあるのかもなあ……」

「三倍も差があったのに、ですか⁉」

「それはおそらく、ストラスブールの戦いですね」

　護堂がしみじみとつぶやき、祐理が驚く隣で、リリアナは苦笑を

見せた。

「わたしの見たところ、ここに集まったフランク族はかなり戦い慣れしているので、一〇対一〇の戦闘ならローマ軍の歩兵に圧勝すると思います。ただ、五〇対五〇だと逆にローマ歩兵の圧勝でしょうね」

「へえ」

「長槍・楯・金属製の鎧よろいで武装を統一し、すばやく陣形を組める歩兵部隊は、古代の戦場ではそれだけの優位を生み出せる要素なんです。何よりローマ軍は軍紀も厳しく、指揮系統も洗練されていて、戦場から戦場への集団移動が迅速でしたから」

　ストラスブール近郊に集まったゲルマン系アレマン二族の部族連合、総勢三万。

　彼らの漫然たる攻勢を一万のローマ軍は複数の戦列に分かれて迎え撃った。蛮ばん族ぞくの数にまかせた攻撃を第一戦列がしぶとく持ち堪こたえている間に、皇帝ユリアヌスひきいるローマ軍は予備部隊を適てき宜ぎ投入することで徐々に劣勢を挽ばん回かい。結局、最後は圧勝してしまった。

　勝つべくして勝ったのだと言うリリアナへ、護堂は訊ねた。

「それだけ強い軍隊があっても、最後に滅びるのはローマの方なんだな」

「西ローマ帝国の国力が急速に衰すい退たいし、逆に蛮族側は各地でどんどん力を増していきましたから。やはり、滅びるべくして滅びたといえますね」

「諸しよ行ぎよう無む常じようってやつだなあ」

　盛じよう者しや必ひつ衰すいの理ことわりにしんみりする護堂を乗せて、馬車はガタガタと揺れている。

　アイーシャ夫人に仕つかえるフランク族は、斥候が発見した女神アルティオの居所めざしてゲルマニアの広野を進んでいるのだ。ローマ軍的な規律とも迅速さとも縁のない、漫然たる進軍であったが。

　揺れる馬車の震動は、手負いの体にやさしいとは決して言えない。

　しかし、弱ったところを女子たちには見せまいと、護堂は次の話題を探した。

「今さらな疑問だけど、『最後の王』って呼び方はあだなみたいなものなんだろ？　本当の名前は何なんだろうな？」

「アレク王子が長年取り組んでいるというテーマですね」

「前にプリンセス・アリスとブルガリアへ旅したとき、うかがったことがあります」

　非友好的な同族の名と、高貴な割にノリが軽すぎる姫君の名前が出た。

　白き巫女姫の名を口にしてから、祐理は思し慮りよ深げにつぶやく。

「もう八年も『最後の王』を追いかけているのに、この英雄の素す性じようにまつわる霊視を得たことは一度もないと。その理由を、姫様はこう断言されていました」

「断言？」

「はい。『霊視の源みなもとである《虚空アカシアの記憶》から彼の名前を読み取れないよう、特別に処置されているからだ』と——。姫様はたぶん、幽世かくりよの〝プルタルコスの館やかた〟を訪ねたときにそのことを確認されたのでしょうね……」

「そういえば、あそこの御老人も『最後の王』の真ま名なを一度も言わなかったな」

　リリアナがうなずいている。護堂も思い出した。

　蒼あおき髪の英雄が顕けん現げんしたとき、アルティオはたしかに彼の名を呼んだ。しかし、雷鳴がとどろいて、その声をかき消した。はじめ『最後の王』の顔には影が差していて、素顔がなかなか見えなかった。

　あれらの不自然な現象や、真の名を霊視できないという神秘。

彼の『素性を明かしたくない』という意思が引きおこしているのかもしれない。

「さすが神様、デタラメだな……」

こんな話をしながら祐理・リリアナと共に馬車に揺られて、一日目は過ぎていった。

二日目も同じような具合だった。

そして三日目の午後、いよいよ変化が生じた。アイーシャ夫人およびフランク族の集団が進む先に、一五〇匹はいよう大型熊の群れが待ちかまえていたのである。

3

千人以上の仲間と共にライン川を渡り、ゲルマニアの内地を往ゆく――。

旅慣れていることが自慢のアイーシャだが、この手の民族移動めいた集団での旅にも慣れていた。あちこち旅していると、いつのまにか大勢の人にかこまれ、彼らはアイーシャの行く先々についてくる……。たびたび起きる現象だった。

「でも、今回はすこし気をつけなくっちゃ」

小さな拳こぶしをきゅっと握りしめ、アイーシャはつぶやいた。

「フランクのみなさんを皆殺しにしようとしている女神と会うわけだし。わたくしもすこしは怖いところを見せないと、舐なめられてケンカをふっかけられちゃうわ」

万一にそなえて『癒いやしの権けん能のう』を反転させる準備は済んでいた。

今、アイーシャたちの周囲を吹く風は異様に冷たい。

春だというのに、真冬さながらの冷風だった。気温も下がってお

り、雪が降ってきてもおかしくない寒さである。

　ここまで冷たくなっていれば、いつでも反転できる。

　アイーシャはうなずいた。『癒やしの権能』は春の女神ペルセポネから簒さん奪だつした。この女神、実は冬の季節と死を司つかさどる冥めい府ふの女王でもあった。

　力の行使を余儀なくされたとき、心ならずも役立ってくれる権能なのだ。

「草くさ薙なぎさんはいつもわたくしを頼りない妹みたいにあつかうけど、本当はわたくしの方が〝おねえさん〟だって、見せてあげなきゃ！」

　気合い十分のアイーシャを乗せて、小こ柄がらな愛馬はパカパカと進んでいく。

　ちなみに、彼女のまわりではフランク族の族長四名、その直属の部下たち二〇〇名ほどがやはり馬で同行している。

　この先頭集団の左右や後方では、徒歩の戦士たちがわらわらと歩を進めている。

　そして、最後尾に食糧などの物資を積んだ荷馬車の一群。

　フランク族二千名の行進はかなり漫然としていて、規律に欠けるものだった。

　もっとも、たとえ蛮ばん族ぞくの出身でも合理的な軍の運営をローマ帝国から学んだ者、あるいは自みずからの工夫で身につけた者はすくなくない。この時代に活躍した覇は王おうアッティラはフン族、西ゴート王アラリックはゲルマン系のゴート族である。

　だが、ここに集まった人々はその手の合理性を持たないようだった。

　そういえば、今は荷馬車の隊にまざっている草薙護ご堂どうがそのあたりを見て、

『やっぱりドニと気が合う連中なんだな……』

と、しみじみ述じゅつ懐かいしていた。

そして、この漫然たる移動開始から三日目に報告があった。斥せっ候こうとして先行させていた小部隊が『熊どもが集まっている場所を見つけた』と報しらせてきたのである。

そこはほとんど遮しや蔽へい物ぶつのない広野だった。

いくつか小高い丘や岩山がある程度で、だだっぴろい草地が数キロ四方に渡って広がっている。アイーシャひきいるフランク族二千名も問題なく突き進める。

しかし、その一隅には獣けものの集団が先に居すわっていた。

獣たちは全てが熊で、しかも体長は四、五メートルもあり、家かと見まごうほどの巨体ぞろいだった。おまけに一五〇頭近くいる。

大型熊の軍団はもちろんフランク族の接近に気づいていた。

一五〇頭全てが低くうなったり、顔を険けわしくして威い嚇かくしたりと好戦的だ。

まあ、フランク族二千名も武器を抜いたり、大声をあげて威嚇したりと、どっちもどっちの荒っぽい態度なのだが。

一五〇頭の大型熊とフランク族の間には、数百メートルの距離が横たわる。

しかし、両陣営は一触即発。きっかけが何かあれば、即座に戦闘状態となるだろう。

このとき、アイーシャはフランク族のいちばん先頭にいたのだが。

「あ、あの……みなさん、すこし落ち着いてもらえますか？」

馬上で後方を振り返って、小首をかしげつつ訴えた。

とても二千名全てに伝わるほどの声量ではないのに、後方のフランク族はぴたりと沈黙し、行儀よく待機の姿勢を見せる。

　彼らの聞き分けのよさに、アイーシャは思わず微笑した。

　すこし荒っぽくてケンカ好きではあっても、本当は心やさしい人々なのだ。

「ふふふふっ。クマさんたちも静かにしてね♪」

　数百メートル向こうにいる巨獣たちへの〝おねがい〟。

　だが、これも効いた。三み桁けたを数える大型熊の群れはいずれも不服そうに『ぐるるる』と低くうなってはいるが、今までよりトーンダウンしている。

　熊たちは獰どう猛もうさを失ってはいないが、アイーシャへ好奇の視線も向けていた。

「やっぱり、真心は通じるんだわ……！」

　凶暴な神の眷けん属ぞくとはいえ、やはり〝ふわふわもこもこ〟森のクマさん。

　あの子たちとも仲よくなれたと、アイーシャはうなずいた。もちろん『魅了の権けん能のう』に助けられているのだろうが、それもこちらの真心があればこそなのだ。

　アイーシャはひとり馬を進めて、熊の群れに近づいていく。

　気分が乗ってきたのだ。ついてこようとするフランク族は手振りで抑おさえた。すると、大型熊の間から、ひとりの青年が前に出てきた――。

　さわやかな白しろ装しよう束ぞくに身をつつみ、長大な神刀を背負っている。

　彼はサルバトーレ・ドニと同じ顔の持ち主だった。

　フランク族の間から「大族長！」と落ち着きのない呼びかけも出てくる。

「みなさん、お静かに！　ドニさんの体は女神に乗っ取られているのです！　わたくしが奪い返しますから、心配しないでくださいね！」

　動揺が見える後方の戦士たちへ告げる。

　彼らはすぐに沈黙してくれた。フランク族からの信頼を感じて、アイーシャの胸がじんと熱くなる。そのときドニが口を開いた。

「いつかも会おうたな、三人目の神殺しよ。我わが眷属どもを手なずけたか」

　やはり、女神アルティオの声だった。

「風変わりな真ま似ねをする。その技で眷属を妾わらわにぶつけ、勝利せんと願うか？」

「いいえっ」

　持ち前の凶暴さがうすれたとはいえ、依い然ぜんとして大型熊たちと二千名のフランク族はにらみ合っている。

　その間でドニ＝アルティオと対たい峙じする形となり、アイーシャは叫んだ。

　まつろわぬ女神に託たくされた怨えん恨こんを晴らす。そのための秘策を実行するときだった。

「わたくし、あなたとお友達になりにきました！」

「ほう」

「不幸な行きちがいがたくさんあったことはわかります。でも、わたくしたちはそれを乗り越えて話し合い、おたがいの気持ちをわかり合うべきだと思うんですっ」

「ふむ」

「むずかしいことはわかります。わたくしは人間であなたは神、ふたりの生まれも育ちも全然ちがうから尚なお更さらです。だとしても、それは心のつながりが生まれない理由にはなりません。だって、愛情とやさしさは人間にも神にも等しくあるものじゃありませんか⁉」

「なるほど、よくわかった」

「まあ、アルティオさん！」

「そなた、妾と剣を交まじえることで、心も通わせようというのじゃな。勇士と勇士がたがいに死力を尽くして戦うなかで、敵手への敬意が生まれるのはたしかに必然。ただ憎悪にまかせて死闘するのではなく、戦場にかような交わりを求めるか……」

「えっ」

「よかろう。妾も『熊』の名を持つ女神じゃ。そなたの気き概がい、しかと受け止めた。地上の民たみが末代まで語り継ぐほど熱く、心ゆくまで剣を交えようではないか！」

「あ、いえっ。そういう拳と拳で語り合っちゃうノリじゃなくてですね！」

　アイーシャはあわてて否定しようとした。

　しかし、アルティオはドニの顔で微笑ほほえみながらも救世の神刀を突きつける。猛たけ々だけしい闘争心を全身にみなぎらせながら！

「神殺しの女よ、存分に切り結ぼうぞ！」

「は、話を聞いてください～！」

　ドニ＝アルティオの持つ救世の神刀が輝きを放つ。

　それはかつて地上の空に顕あらわれた光球と同じ、まばゆい白金プラチナ色の光だった。

　今度は刀身だけが光り輝いている。暴走させてしまった前回とちがい、神刀のあつかいにも慣れ、力をセーブできるようになったのだろう。それがいいか悪いかはともかく。

　この瞬間、アイーシャはふと唱えた。

「ええと……麗うるわしの乙女おとめよ、恐るべき秘教の門を開け給たまえ……」

　言こと霊だまだった。反転を実行させるための。

　なかば無意識のつぶやき。これをしなければ自分は死ぬ。生存本能の警告がアイーシャの唇くちびるを勝手に動かしたのだ。そして、さっと馬から飛びおりる。

「早く向こうへ行って！」

　声をかけた途端、小柄な愛馬は駆け出していく。魅了の権能のおかげもあってか、アイーシャの意思は即座に伝わってくれた。

　アイーシャ自身もドニ＝アルティオに背を向けて、走り出す。

「救世の剣よ、稲妻を解き放て！」

「ひぃぃぃぃぃぃぃんっ！」

　サルバトーレ・ドニの口が女神の声をつむぐと、右腕の神刀は電光をほとばしらせた。光と熱と衝撃に打ちのめされて、アイーシャは大きく吹き飛ばされる。

　ゴロンゴロンと丸太のように地面を転がっていく。

「あ、あれえええええええ～」

　しかし、無傷。修正力の恩恵だった。

『妖よう精せいの通つう廊ろう』を開く彼女の権能は、歴史の修正力もある程度なら操作できる。

　たとえば、今いる時代にアイーシャをつなぎとめるため、多少の手傷なら〝なかったこと〟にするケースも多い。フン族の神殺しウルディンに矢を射いられたときも、今回も、この修正力が守ってくれたのだ。

　地面を転がるアイーシャは目を回しながら、考えた。

（や、やっぱり、この程度しか威力が出ないのね……）

　アルティオは《鋼はがね》ではない。あくまで大だい地ち母ぼ神しんである。

　その彼女が肉体を失った代わりに、救世の神刀で戦おうとしている。だが、もともと管かん轄かつ外がいの力、上う手まく使いこな

せるはずがなかった。

　むしろ前回のように、暴走させるくらいの方が格段に脅きよう威いとなるはず。

　しかし、ドニ＝アルティオは神刀の力をセーブして、意のままに操ろうとしている。これでは威力が弱まって、むしろ逆効果だった。雑でもいいから、とにかく敵を殺せればいいと開き直るべきなのだ。

「ドニさんや草薙さんが健在なら、絶対この隙すきに付け込んで大反撃するわ……」

　つぶやいてから、アイーシャはハッとした。

　ようやく回転が止まったところだった。すぐさま起きあがり、叫ぶ。

「あ、アルティオさん！　危ないから逃げて～！」

「なに？」

　北風が吹いてきた。凍いてつくように冷たい、雪せつ片ぺんまじりの風だ。

「氷ひよう雪せつの――冬の女神の力か!?」

　驚くドニ＝アルティオの体を凍りつかせるべく、吹きつける北からの風。これが轟ごう々ごうと唸うなりをあげ、どんどん勢いを増していく。

　ゲルマニアの広野に冬の冷気をもたらす、聖なる北風だった。

　さらに天はどんよりと曇くもり、白く細かな雪が降りはじめている。

「ああ……またやっちゃった……」

　アイーシャはがっくりと肩を落とした。

　春の女神であるペルセポネは心やさしい乙女おとめ。冥府神ハーデスに力ずくで捕らえられ、彼の妻として泣く泣く地の底の冥界に

やってきた。

　だが、冬が来ると一転して冥界の無む慈じ悲ひな女王となり、世界に冷気をもたらす。

　そして癒やしの力を反転させたとき、『冬の権能』はしばしばアイーシャがふと思いついた戦略を躊ちゆう躇ちよなく、無慈悲に実行するのだ。

　まるで、アイーシャ自身の信条や気質まで反転したかのように――。

「妾に逃げよとまで宣告する一撃……受けて立たねば、女神の名に瑕きずがつくのう！」

「そ、そういう意味じゃありませ～んっ！」

　今、ドニ＝アルティオは凍こごえる北風に神刀をかざし、カンピオーネの肉体に呪じゆ力りよくをみなぎらせて権能に抗あらがおうとしている。

　しかし、神刀を持つカンピオーネの足あし下もとがいきなり裂けた。

　大地震さながらに――数十メートルもの亀き裂れつが地面に生じたのである。

「く……っ！」

　神刀の担にない手はそのまま、地の底に落ちていく。

　女王ペルセポネが支配する冥界は地の底に存在する。ならば極ごつ寒かんの冷気だけでなく、地底に引きずり込む力もまた女王の権能だった。

「これでしばらく、このあたりは真冬の世界になっちゃうわ……」

　ドニ＝アルティオを呑のみこんだ裂け目からは、強烈な冷気が湧わき出ている。

　アイーシャ自身に不都合はないものの、ふつうの人間がこの周辺に長時間いると、骨の髄ずいまで凍えてしまう。下へ手たをすると

凍死しかねないほどだ。

　しかし今回、大地の裂け目から出てくるのは冷気だけではなかった。

『神殺しの女よ、実にみごとじゃ』

　地底より響く女神の声に、アイーシャはどきりとした。

『神々といえども冥界の軛くびきにつながれれば、容易には抜け出せぬ。そのまま死を迎える神も多かろう。しかし、妾も大地を司る女王のはしくれ……』

　アルティオの声には怒りも憎悪もなく、むしろ愛いとしげでさえあった。

『暫しばし待つがよい。予期せぬ里帰りはすぐに終わらせて、地上へもどろうぞ。それまで我が眷属どもの相手で無ぶ聊りようをまぎらわせるのじゃ！』

「うううっ、やっぱり～！」

　地の底へ引きずり込む秘術はきわめて強力である。

　状況によっては一撃必滅の威力を発揮する。しかし、アルティオのような大地母神はたいてい『冥界の女神』でもあるため、それほど有効打にはならないのだ。また、『一度は死にながらも奇跡の復活を遂とげる』エピソードを持つ神格にも効きにくい。

　しかも、アルティオの一声によって――

　今までおとなしかった大型熊の群れがにわかに騒がしくなった。

　約一五〇頭がふたたび獰どう猛もうに唸りはじめ、アイーシャやフランク族に剣けん呑のんな目つきや表情を向け、こちらにのしのしと歩き出す。

「みんな、おとなしくして！　おねがい！」

　アイーシャは両手を組んで熊たちに祈った。

　しかし通じない。凶暴さを取りもどした野獣の群れは歩みを止め

ず、数百メートル離れたアイーシャおよびフランク族二千名めがけて接近中だ。

　熊たちはもともと女神の眷属で、しかも今日はじめて会ったばかり。

　魅了の権能といえども、ささやかな〝おねがい〟以上の影響力を発揮できないのだ。

「ひぃぃぃぃぃぃぃんっ！」

『ふふふふ。これだけを返礼と思うてくれるなよ！』

　涙目になったところへ、女神の哄こう笑しようが追い打ちをかけてきた。

　次の瞬間、アイーシャの足下が白金プラチナ色に輝く。いや、足下だけでなく周囲の地面が全て輝きを放っていた。それは地の底から放たれた救世の雷にほかならなかった。

　さっき〝なかったこと〟にした雷とは、段ちがいの威力である。

　今回は精密にコントロールしようとはせず、暴走させてもいいくらいのつもりで撃ち放ったのだろう。

　足下で炸さく裂れつした閃せん光こうに呑みこまれて、アイーシャの体は消滅していった。

4

　ドニ＝アルティオひきいる熊軍団とフランク族の戦士二千名。

　ついに遭遇を果たした両軍。しかし、いきなり戦闘にはならず、数百メートルを隔へだてて対たい峙じ。その中間地点で両陣営のトップ会談が行われたのだが。

　アイーシャ夫人の権けん能のうがドニ＝アルティオを地中に引きずり込んでしまった。

「うすうす予想はしてたけど、やっぱり制せい御ぎょできない系の力だったか……」

　護ご堂どうはつぶやいた。フランク族にまじって会談を見守っていたのだ。

　万一にそなえて、最前列近くにいた。護堂をここまで連れてきてくれた両名、祐ゆ理りとリリアナもいきなりすぎる展開に唖あ然ぜんとしていた。

「ご、ご本人に戦うつもりがなくても、権能が勝手にはたらいてしまうのですね」

「アイーシャ夫人の権能には、どこかしらご本人の意思で制御できないところが必ずあるのかもしれないな……」

「戦うそぶりを毛ほども見せないくせに、いきなり不意打ちだもんなあ」

　ある意味、ふだんの行動や存在自体が戦闘時のフェイントになっている。アイーシャ夫人の恐ろしさを目まの当たりにして、護堂は眉まゆをひそめた。

「ドニが言ってたとおり、たしかにえげつないぞ……」

　だが、戦闘はここで終わりではなかった。

　女神アルティオの声が地中より響いて熊軍団を凶暴化させ、アイーシャ夫人は地下から放たれた雷撃を受けて——消し飛んでしまったのだ。

「アイーシャさん⁉」

　護堂は己おのれの目を疑った。まさか、あの人が……と。

　そして、一五〇頭はいよう大型熊たちが前進をはじめた。

　後ろ肢あしだけで立てば一軒家かと見まごう、体長四、五メートルの巨体ぞろい。しかも、全ての熊が凶暴にいきり立ち、牙きばをむき出しにして闘志をあらわにしている。

　この軍団が巨体を誇こ示じしながらフランク族へ殺到する。

　がああああああああああああああああ――っ！

　がああああああああああああああああああああああ――っ！

　があああああああああああああああああああああああああ
――っ！

　熊たちが次々と咆ほう哮こうするため、天地が大いに震える。

　津波のごとく押しよせる巨獣の群れに直面するフランク族二千名。彼らはアイーシャ夫人の消滅を目撃して、明らかに動揺していた。

　口々に「大族長～！」と叫んだり、おいおい男泣きする者ばかりだったのだ。

　しかし、誰かが叫んだ。

「おまえたちぃっ！　大族長の仇かたきを討たなくてもいいのかあっ!?」

　効果はてきめんだった。いきなり男たちは目の色を変えた。

　うおおおおおおおおおおおおおおおおお――っ！

　うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお――っ！

　うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお――っ！

　人間側も雄お叫たけびをあげながら、突撃をはじめたのである。

　もちろん、一五〇頭の大型熊という大津波に向かって。剣・槍やり・斧おの・弓など思い思いの武器を手に、闘志と復ふく讐しゆう心しんで身も心も燃えあがらせながら。

　そのまま遮しや蔽へい物ぶつのないゲルマニアの平原で、両軍は激突――。

　乱戦のはじまりだった。

　当然、大型熊一頭とフランク戦士一名では、熊の方が圧倒的に強い。

しかし、熊たちは一五〇頭。人間側は二千名。単純計算すれば、一〇人がかりで大型熊一頭に挑んでもまだ余裕がある。

大型熊がその長大な前まえ肢あしを振りまわす。フランク族の戦士が倒れる。

その凶悪な口と牙で噛かみつく。絶叫と流血とフランク族の犠ぎ牲せい者しやが発生する。

そうした無惨なサイクルは戦場のあちこちで散見できた。

だが、熊たちの猛威を機き敏びんな動きや楯たてでまぬがれる——。そういう戦士も強つわ者ものぞろいのフランク族にはすくなからずいた。そして、獣けものらしい獰猛な攻撃で隙すきを見せた大型熊へ、自前の武器をたたき込む猛も者さはもっと大勢いた。

結果、獣と人間の屍が等しくゲルマニアの広野に倒れていく。

「五ご分ぶの戦況でも、このままでは死傷者の数がとんでもないことになるぞ！」

「せ、せめて癒いやしの権能をお持ちだというアイーシャ夫人がいらっしゃれば——」

「まあ、あの人のことだから、かんたんには死んでないと思うけど……」

口々に言う護堂たちは、乱戦から離れた位置にいた。

さっきフランク族が一斉に突撃したとき、立ち止まっていたため取り残されたのだ。戦場の狂騒に巻きこまれまいとしての判断だった。

ここで、リリアナが背負っていた弓を左手で構えた。

騎馬民族が使うタイプの複ふく合ごう弓きゆう——素材に木だけでなく動物の腱けんや骨を使い、小振りでも射程距離の長い弓だった。腰の矢筒から右手で矢を抜き、つがえる。

すぐさま射いる。狙ねらいは数十メートル先にいた大型熊だった。

　ちょうどフランク族相手に大暴れしていたのだ。リリアナの矢はあやまたず熊の右目に突き刺さる。ついで二射目。今度は左目を抉えぐった。

　二本の矢は眼球を貫つらぬいただけでなく、その奥の脳へも突き刺さったのだろう。

　大型熊はたったの二撃で絶命し、倒れこんでいく。まわりで戦っていたフランク族がリリアナの弓きゅう技ぎに「うおおおおおおっ！」と興奮する。

　しかし、妙技を見せた銀髪の騎士はかぶりを振った。

「このままでは埒らちがあきません。わたしひとりで敵を全滅させることもできませんし……！」

「俺もまだ戦える体じゃないしな……」

　せめて、ウルスラグナの化け身しんを何か使えれば。

　護堂は歯噛みした。全身が重いというだけでなく、呪じゅ力りょくが十分に高まっていない。そのせいだろう。戦闘がはじまっているのに、使える化身が何も思い浮かばなかった。

　そんな護堂を案じるように、祐理がそっと寄りそってくれる。

　彼女の気き遣づかいに感謝しつつも、護堂は考えを巡らせた。リリアナの言うとおり、このままでは埒があかない。ならば、無茶を承知でリスクを冒おかすしかない——！

　そして、大バクチをはじめようとしたときだった。

「……竜？」

　ふとリリアナが顔を上げて、南の空を見た。

　護堂も目を凝こらす。黒い点しか判別できなかったのはすこしの間だけで、南方より飛来するものの正体はすぐにわかった。

　体長は四メートルほど。敏びん捷しょうな獣じゅう脚きゃく類るいの肉食恐竜に酷こく似じした姿形。

ただし、小さな前肢の代わりに両肩からは翼が生え、風に乗って天あま翔かける。

逞たくましい後ろ肢のつま先には、大きな爪つめがある。それは『恐ろしい爪デイノニクス』と呼ぶにふさわしい鋭さで、飛び翔しようする魔獣が生まれながらに持つ武器であった。

まちがいない。神殺しウルディンが操る翼よく竜りゆうだった。

そして、背中の鞍くらにまたがる乗り手は華麗なる金髪の美少女で——。

「エリカ！」

護堂は思わず、彼女の名を叫んだ。

「どうかしたの、恵え那なさん？」

「空耳かな？　誰かがエリカさんの名前を呼んでたような……」

媛ひめ巫み女こが怪け訝げんそうにしていたので、エリカは問いかけてみた。

下では、異様に大おお柄がらな熊たちとフランク族が乱戦を繰りひろげている。

その上空十数メートルを翼竜は軽やかに駆け抜けていく。鞍にまたがり手た綱づなをにぎるのはエリカ・ブランデッリ。そのうしろに清せい秋しゆう院いん恵那がすわっている。

「もしかして王様が下にいるのかも!?　恵那たちに気づいてくれたとか！」

「そうだとうれしいわね。あの人のことだから、いちばんの大騒動が起きるタイミングで帰ってきても全然不思議じゃないし」

「王様ってほんと、戦いとか揉もめごとに縁があるもんねえ」

ウルディンから借りた翼竜は、ふたりの体重も苦にせず飛翔する。

エリカの首には、竜の牙に紐ひもを通してペンダントにしたものが下がっている。これもウルディンから授かった品だ。

これがあれば、数日の間なら彼の竜を手なずけていられるらしい。

恵那が竜を借りなかったのは騎乗技術の問題だ。基本、馬に乗るのと同じ感覚で乗りこなせる。しかし、その道の初心者である媛巫女には無理だったのだ。

「わたしたちも間に合ってよかったわ。ただアイーシャ夫人も、サルバトーレ卿きように憑ひよう依いした女神も見当たらないようだけど」

「まあ、でも、はじめちゃっていいんじゃないかな」

快活に笑いながら、太た刀ちの媛巫女が手をのばす。

彼女は鞍にかけてある矢筒から、一本の矢を引き抜いてエリカに差し出した。

「あの熊たちをかたづけなきゃいけないのは変わらないんだし」

「それもそうね。じゃあ、さっそく取りかかりましょう！」

エリカの方は鞍から鋼鉄造りの弓をはずした。

桁けたはずれの飛距離と威力を矢にあたえるための、鉄てつ弓きゅう。屈強の大男であっても、引くのは至難の業わざである。しかし、エリカの膂りょ力りょくは魔術で増強してある。

恵那から受け取った矢をつがえ、悠ゆう々ゆうと引く。

翼竜にまたがっての騎き射しゃ。鞍にかけられた鐙あぶみがエリカの両足を支えている。



その恩恵を受けながら、まず一射目――。

ひゅううっ！

豪快な風鳴りの音を立てながら、矢は眼下の戦場へ飛んでいく。

エリカは全ての矢に錬れん鉄てつ術じゆつをかけていた。貫通力を増す術だ。これに鉄弓の威力が加わった結果、矢は一軒家と見まごうほど大きな熊の胴体もやすやすと貫く。

矢の勢いは止まらず、そのまま地面に突き刺さった。

標的となった大型熊はどうと倒れ、そのまま動かなくなる。即死だった。

動きまわる獣の眼球を射い貫ぬくように精妙な弓術もいい。しかし、一撃必殺の威力さえあれば動きのすくない胴体――それも心臓を狙うのがいちばん効率的なのだ。

この豪放なる狙そ撃げきを上空から、さらに一〇回繰りかえす。

一〇本の矢は近くにいた大型熊を次々と貫き、一〇個の屍しかばねを生み出した。

熊たちのまわりで死力を尽くしていたフランク族たちは、空からの援護者を呆ぼう然ぜんと見あげていた。しかし、かまっている暇ひまはない。

「熊たちが多いあたりに行って。恵那が降りるから！」

「わかったわ！」

広い平原なので、人と熊が密集している場所とそうでない場所がある。

ふたりは翼竜の機動力を活いかし、新たな激戦区の上空へと迅じん速そくに移動を果たした。すかさず恵那が飛びおりる。そう、翼竜の上から！

身軽な媛巫女は猫か猿のようにひらりと着地、戦場に降り立った。

　その手がいつも持つのは神刀・天あまの叢むら雲くもの劍つるぎ。しかし、今はその辺で調達した鞘さやにおさめた、幅広の長剣——。日本刀ではなく、西洋式の両刃剣である。

「クオレ・ディ・レオーネ！　今は恵那さんを助けなさい！」

　清秋院恵那の手で魔剣は主あるじの求めに応こたえ、銀色の刃やいばをほのかに輝かせた。

　ふだんは細身の剣に変形させているクオレ・ディ・レオーネ。今日は本来の形である長剣にもどし、神刀に代わる得え物ものとして貸し出したのだ。

「いやあああああああっ！」

　獅し子しの魔剣を八はつ相そうに構えて、恵那が走る。

　両手で力強く振りまわせるように、クオレ・ディ・レオーネの柄つかは長い。そのおかげで日本刀と同じ要領であつかうことが可能だった。

　これを手に恵那がめざしたのは、もちろん大型熊の一匹。

　フランク族の戦士六人が取りかこんでいたが、恵那は彼らの間を疾しつ風ぷうの速さで駆け抜け、猿ましらの身軽さで跳ちよう躍やくする。

　後ろ肢で直立していた大型熊の頭は、地上五メートルほどの高さにあった。

　それも苦にせず恵那は高々と跳とび、八相からの斬ざん撃げきを熊の短い頸けい部ぶに打ち込もうとする。相手もちょうど長大な前肢を振るい、媛巫女のちっぽけな体を引き裂こうとしていた。

　だが、恵那とクオレ・ディ・レオーネは動きを止めない。

　獅子の魔剣はまず熊の前肢を肘ひじのあたりで斬きり飛ばしてから、そのまま熊の頸部まで流れるように断ち切ってみせた。

　天叢雲劍を振るうときに勝るとも劣らぬ鋭さ、威力である。

「次！」

　一匹目を屠ほふった恵那はすぐさま身を翻ひるがえし、手近にいた二匹目に向かう。

　やはりフランク族の戦士たちに包囲されていたが、そこに割り込んで斬撃を大型熊の胴体にたたき込む。これで存分に腹を薙ないだところへ、肋ろつ骨こつの下あたりにクオレ・ディ・レオーネの切っ先を突き入れる。肝かん臓ぞうを深々と抉えぐり、二匹目もあっさりと斃たおした。

「さすがにみごとなものね！」

　ライバルを称賛しながら、エリカも手を止めない。

　矢筒が空からになったので手を一振りして、召しよう喚かんの魔術を使う。十数本の矢が一瞬にして顕あらわれ、ふたたび射撃が可能になった。

　翼竜を駆りながら、空からの狙撃をエリカは立てつづけに繰り出した。

　一矢につき大型熊の死体をひとつ、量産していく。こうして恵那と共に大型熊の掃そう討とうを続け、近くに敵がいなくなったところでエリカは竜の高度を落とした。

　ちょうど真下にフランク族が数人いた。

　すぐ頭の上に降りてきた翼竜を見て、彼らは慌あわてふためく。

　そこに駆けよってきた恵那があざやかに跳躍。みごとエリカのうしろに飛び乗る。ふたりを乗せて、翼竜は力強く高度を上げる。

　エリカと恵那は、すでに大型熊を二〇頭近くも倒している。

　しかし、敵はまだまだ数多い。次の獲え物ものを求めて、エリカは翼竜を飛翔させた。

「こういう手て際ぎわのよさは、やっぱりとんでもないな……」

　エリカと恵那の活躍を遠目に眺めて、護堂はつぶやいた。

　三、四〇〇メートルは離れているので、もちろん細かな動きはわからない。しかし、翼竜を使って飛びまわっているため、どのあたりで勝利を重ねているかはわかるのだ。

　彼女たちには、まず何より〝個の強さ〟がある。

　しかも、その強さを活かすために翼という機動力を最大限に利用し、精力的に転戦を重ねて、自分たちを単なる〝戦場の力自慢〟におとしめない。

　強さと明めい晰せきな頭脳を併あわせ持つ、彼女たちならではの活躍だった。

　一方、草くさ薙なぎ護堂のそばにはリリアナがいる。祐理もいる。銀髪の騎士は言うにおよばず、媛巫女もまた尋じん常じようでない能力の持ち主だ。前に精神感かん応のうの霊力を駆使して、女神キルケーから守ってくれたこともある。

　護堂を守るため、そばにいてくれる両名。

　ここは乱戦の中心地から離れているものの、それでも獲物を求めて大型熊がときどきやってくるのだ。そのたび、リリアナが弓矢で射殺していたのだが。

「頼む、ふたりとも」

　大型熊がまた一匹、こちらへのそのそとやってくる。護堂はすぐにつぶやいた。

「俺を――守るな。俺のことは放っておいていい」

　言うと同時に大型熊めがけて歩きだす。

　祐理が「護堂さん……!?」とあわてて追いかけようとするが、彼女の肩にリリアナが手を置き、かぶりを振ってみせる。すると媛巫女は『為なすべきこと』を思い出したのだろう。すぐに足を止め、心配そうなまなざしで護堂を見送ってくれた。

「草薙護堂……」

　リリアナも憂ゆう慮りよで凛り々りしい美び貌ぼうを引きしめながら、見守っている。

　その間にも護堂は歩く。いまだ手負いの身、足取りはふらついていた。それでもどうにか前進を続け、ついに大型熊と一対一での対峙となった。

　があああああああああっ！

　体長四メートルとおぼしき熊は盛大に吠ほえ、後ろ肢だけで立ちあがった。体を大きく見せての威い嚇かくである。

　そのまま左の前肢を振りおろし、大きな掌てのひらと爪で護堂をひっぱたこうとする。

　護堂はふらつく体を必死に動かし、後ろへ跳んだ。ぎりぎりで回避成功。しかし、熊爪の先端でわずかに胸をひっかかれた。熱い痛みが胸板に走り、血も飛び散る。

「く——っ!?」

　苦痛を堪こらえながら、護堂は精神を集中する。

　今の自分にはとにかく呪力とやらが必要なのだ。このまま闘志をたぎらせ、戦うための力を体の奥底から呼び起こさねば——。

　しかし、力がこみあげてくる感触もその前兆もない。護堂はぎくりとした。

　そこに大型熊が飛びかかってくる。護堂の体におおいかぶさり、凶悪な顎あごと牙で噛み殺すつもりなのだ。この巨体でのしかかられるだけでも容易に圧死できる。

　おまけに、図ずう体たいの割に大型熊はすばやい。

　右・左・後方のどちらへ避けても間に合うまい。護堂はとっさに〝前〟へ避よけた。前転の要領でごろごろと地面を転がり、飛びかかってきた大型熊の真下をすり抜けたのである。

　ぐるるるるるるるるるっ！

　二度の失敗で大型熊は不快そうにうめき、護堂を険しくにらむ。

　一方、護堂はあせっていた。こうして戦闘を——それも今のコンディションでは絶対に勝ち目がなさそうな相手に挑んでいるのに、

一向に力がわいてこない。

　呪力も回復しないまま。そういえばリリアナは呪力を『気』と呼んでいた。

　何か気き功こう法ほう的なアプローチが必要なのか？　特別な呼吸とか瞑めい想そうとか……否いな。そんなこと、今まで一度だってしたことはない。

　つまり、今の草薙護堂に必要な行動は——

「いつものようにやれってことか」

　つぶやいて、足を止める。仁に王おう立だちの構えだった。

　もちろん大型熊が威い勢せいよく襲ってくる。ふたたび前肢で殴なぐりつけてきた。しかし、今度は避けない。代わりに——拳こぶしを握る。

「だああああああっ！」

　こちらへ迫る大型熊へ逆に突っ込み、雄叫びと共に殴りかかった。

　所しょ詮せん、逃げ続けるだけでは戦いと言えない。お互いに攻め合ってこそ戦闘は成立する。何より草薙護堂は——どんなに防戦一方でも、攻撃の意志を捨てたことはない！

　とはいえ、愚ぐ行こうである。

　いかなる権能も使えない体で、己の倍以上は巨大な熊に殴りかかるのだから。

　しかし、それゆえに緊張がみなぎり、喉のどはからからに渇かわく。興奮とアドレナリンのおかげか気だるさが消え、ずっと重かった体は数日ぶりに俊しゅん敏びんな動きを見せる。そして、死に直面した恐怖と共に『必ず目の前の敵をつぶす！』という殺傷本能が首をもたげて——

　もともと護堂は動体視力がずばぬけていい。

　加えて、戦闘中のカンピオーネが発揮する集中力。

　敵が野性のスピードで繰り出す攻撃も、異様なほど明めい瞭りように見切れてしまう。大型熊がハンマーのようにたたきつけてきた前肢をぎりぎりでかわしながら、護堂は巨獣のふところに飛び込んだ。そして、力まかせに殴る。

　——ぎゅあああああああああああっ!?

　大型熊が情けない鳴き声を発した。

　その巨体を両手でつかむ。高々と頭上へ持ちあげる。身長一八〇センチの人間風ふ情ぜいにバーベルのようにあつかわれて、大型熊は困こん惑わくの表情を浮かべた。

　護堂はかまわず、遠投のボールよろしく片手で熊を放り投げる。

　弧こを描きながら一〇〇メートル以上は飛んで、ちょうど何もない平地に落ちた。

　そのまま大型熊はぴくりとも動かない。これだけの荒技、いつもの護堂にはもちろん無理な芸当だ。敵が人間を凌りよう駕がする剛力の持ち主ならば使用できる——『雄お牛うし』の化身を行使した結果であった。

　ふぅぅぅぅぅぅぅぅ。大きく深呼吸。

　攻撃的に研ぎ澄まされた意思と、膨ぼう大だいな呪力が護堂のなかで猛たけっている。

　それにしても、予想どおりの回復だったとはいえ、その予想を実行するのは本当にゾッとするバクチであった……。だが、一息ついている暇はこれ以上ない。

　二キロほど離れたところに大きな裂け目がある。

　ドニ＝アルティオを呑のみこんだ、地底への入り口だ。ここから巨大な獣がのそのそ這はい出てきたのである。

　全長三〇メートル前後。ミミズクと熊を掛けあわせたようなフォルム。

　以前、護堂も遭遇した神獣だった。地の底に落ちたアルティオの魂たましいが地上に遣つかわしたのだろう。しかも、今回は三体も

いる！

「鋭く近寄り難がたき者よ、契約を破りし罪科に鉄てつ槌ついを下せ！」

　護堂はすぐさま言こと霊だまを唱えた。

「あれは神獣!?　女神アルティオの眷けん属ぞくね！」

　翼竜を駆って、華麗に天あま翔かけるエリカ。

　当然、地上を誰よりもよく見渡せる。平原に傷きず痕あとのごとく穿うがたれた裂け目から、巨大なミミズク熊が這い出てきた。しかも、つづけざまに三体も――。

　いきなり戦場に顕れた神獣。

　そのうえ、大型熊もまだ五〇頭ほど残っている。

　明らかな劣勢にエリカは眉をひそめ、地上のフランク族たちはついに闘争心を失った。巨大なミミズク熊の出現で、わあわあ騒ぎながら逃走を開始する。

　しかし、次いで顕けん現げんしたのは黒き大おお猪いのしし――。

　翼竜を駆って飛翔しながら、エリカは不敵に微笑した。

　地上でクオレ・ディ・レオーネを振るっていた恵那も気づいた。戦場のどこにいたとしても、巨大な『猪』が見えないはずはないのだ。

　さらにいえば、太刀の媛巫女は〝相棒〟が復活した気配も察していた。

「天あまの叢むら雲くも……！　我わが背せの君きみの腕より来きたれ！」

　右手にクオレ・ディ・レオーネを持っていたので、漆しつ黒こくの神刀は左手に顕れた。恵那はさらに天あまの叢むら雲くもの劍つ

るぎの神気を我が身に呼び込みながら、上空へ叫んだ。

「エリカさん！」

「ええ。もどりなさい、クオレ・ディ・レオーネ！」

　恵那の手から魔剣が消え、エリカの右手に顕れる。召喚の魔術だった。

「須ス佐サ之ノ男オノ命ミコト、国を取らんと軍いくさを起こし、一千の剣を城じよう郭かくとして楯たて篭こもり給たまふ」

　すかさず言霊。太刀の媛巫女は神刀を御ぎよすために口ずさむ。

「一千の剣、小蛇さばえと成なりて失うせぬ。しかして命みこと、大蛇おろちの尾より一剣を得たり。是これ所いわ謂ゆる、天あまの叢むら雲くもの劍つるぎ也なり。ちはやぶる千せん釼けん破はの鋼はがねなり！」

　取りもどしたばかりの天叢雲劍を、天高く放り投げる。

　奇跡の力を宿す神刀はブーメランのように回転しながら飛び、エリカの翼竜よりもさらに上空へと到達。その瞬間、粉々に砕け散った。

　天叢雲劍の破片は流りゆう星せい雨うのように地上へ降りそそぐ。

　ただし、闇やみ雲くもにではない。神刀のかけらは全て、生き残っていた大型熊に降りかかったのである。面積二〇〇平方キロはあろう戦場のあちこちで猛たける数十頭に。

　熊たちは一斉にバタバタと斃たおれていった。

　しかし、敗走をはじめていたフランク族に誰ひとり犠ぎ牲せい者しやはない。

　敵だけを選別して、一瞬で貫く――。恵那と天叢雲劍が示した絶技であった。

「七人の祭司、各おの々おの角つの笛ぶえを吹き鳴らし、甲かつ冑ちゆうのいくさ人びとはこれに先立ちて進軍す！」

一方、エリカは聖せい絶ぜつの言霊を唱える。

クオレ・ディ・レオーネが長剣から突ラ撃ン槍スへと変形を遂とげる。

騎兵が用いる逆さか棘とげ状じようの長ちよう槍そうだ。そして、天翔ける竜騎士を紅あかき光——『聖なる殲せん滅めつ者しやの特権』が包みこんだ瞬間、エリカは翼竜の脇わき腹ばらを軽く蹴けった。

「ヨシュアは告げたり。主しゆはこの邑まちを汝なんじらに賜たまわれりと。兵どもは生者の悉ことごとくを刃やいばにかけ滅ぼし、牛うし羊ひつじ驢ろ馬ばに至るまで殺あやめけり！」

槍の穂先を前に突き出しながら、翼竜に全速力で飛翔させる。

めざすは地中から出てきたばかりのミミズク熊だった。ビルのように巨大な神獣、その一匹目の喉笛めがけて、竜とエリカは突撃した。

ミミズク熊は巨大な口から、緑色の火か焔えんを吐き出して迎え撃つ。

しかし、この焔ほのおを『聖なる殲滅者の特権』ではじき飛ばして、竜騎士は敵の喉元に飛び込んで、突ラ撃ン槍スの穂先で深々と抉る。

ぐおわああああああああああああああああああああああああっ!?

大気を震わす、重低音の絶叫。エリカが一匹目の神獣に痛つう打だをあたえた瞬間だった。

第７章　ありうべからざる戦い

1

　オオオオォォォォォォォオオオオオオンンンンンンンッ！

　戦場に『猪いのしし』の咆ほう哮こうがこだまする。

　エリカは聖せい絶ぜつの言こと霊だまで己おのれと騎竜を強化し、聖なる竜騎士となって突撃を開始。恵え那なの方も天あまの叢むら雲くもの劍つるぎを呼び出し、神刀の使い手として復活を果たした。

　敵はミミズク熊の神獣が三体——。しかし、主あるじのアルティオはそばにいない。

　自分たちの方が有利だ。護ご堂どうは大きくうなずいた。

「護堂さん、ついに回復されたのですね!?」

「わたしたちも行きましょう。エリカと清せい秋しゅう院いん恵那に加勢しなくては！」

　駆けよってきたのは、もちろん祐ゆ理りとリリアナだった。

　銀髪の騎士が細長い布の包みを持っていることに、護堂は気づいた。サイズとしては横三〇センチ、縦たて二〇センチというところで、ずしりと重そうだ。

「それは？」

「一度だけなら使ってもよいと許可をいただいた――切り札です。神獣や神々が相手の戦いでも、必ず役に立つでしょう」

　リリアナの答えに好奇心を刺激されたが、話が長くなるといけない。

　そこにはあえてつっこまず、代わりに護堂は言った。

「じゃあ、そいつはまだしまっておいてくれ。向こうはあいつらだけでも十分勝てる。俺たちは他のことをやろう」

「もちろん、お手伝いいたしますが……何をすればいいのでしょう？」

「ふたりに頼みたいんだけど、俺にアルティオのことを教えてくれ。もうすぐもどってくるはずだから必要になる。あと、もうひとつ」

　祐理の問いを受けて、護堂はおだやかに言った。

「まだ体が重いから、魔法で治して欲しい。いつもみたいに」

「「…………」」

「万まり里や谷やにもリリアナにも、いつも面倒をかけさせて悪いとは思ってるんだ。今度も勝手なお願いをして、本当に申し訳ない。でも、もうすぐ戦わなくちゃいけないからな」

　まもなくドニ＝アルティオとの戦いがはじまるだろう。

　これに勝まさる重要事項などない。戦闘準備を迅じん速そくに済ませなくては。その思いから真しん摯しに言葉をつむぎ、護堂は頭を下げた。

「このとおり、俺を助けてくれないか」

「く、草くさ薙なぎ護堂。お助けすること自体はまったくかまわないのですが」

「そ、それを私たち――『ふたりに頼む』というのは、い、一体……？」

「言葉どおりの意味なんだけど、伝わりにくかったかな？　ふたりで俺に術とか魔法をいろいろかけてくれってことだよ」

　動転している少女ふたりを、護堂はまっすぐに見つめた。

「俺はどちらか一方だけってのはイヤなんだ。ふたりそろっている場所でこういうことを頼むのなら……俺はふたりに頼みたい」

「ま、まじめな顔をして、なんてことをおっしゃるんですか⁉」

「そ、そうですよ護堂さんっ。はしたないです！」

「でも、今までだって、そういうことは何度かあったじゃないか」

　斉せい天てん大たい聖せい、そして軍神ランスロットとの戦闘前。エリカや恵那も交まじえて『いつもの儀式』に臨のぞんだことは、もちろん鮮烈に覚えている。

　祐理とリリアナもそうなのだろう。ふたりともさっと顔を赤らめた。

「どちらも護堂さんが正気ではなかったときじゃありませんか⁉」

「そ、そのとおりですっ。まさか今も——体を無理に回復させた影響で、心の方がおかしくなってしまわれたとか⁉」

　少女たちが口々に言う。しかし、護堂はかぶりを振った。

「いや、むしろ逆かもしれないな」

「「逆⁉」」

「今の俺は初心に返った気分というか、原点に立ち返ったというか、俺が俺である大切さを思い知ったというか……とにかく、そんな感じなんだ」

　大型熊との戦闘で、あえて〝いつもどおり〟を強く意識した影響だろう。

　そして今、護堂のなかを駆け巡っている大量の呪じゅ力りょく。ついに取りもどした力の源泉。これが心と体と——思考を活性化させ、最大限に研ぎ澄まさせていた。

昂たかぶるというのとは、すこしちがう。

「余計な不純物がなくなって、〝素すの自分〟がいつも以上に研ぎ澄まされている——。今の俺はそういう状態なんだろうと思う。実際ほら、ふつうにいつもどおりだろ？」

「た、たしかに、平常心を失っているようには見えませんが……」

ランスロットの呪じゆ縛ばくで暴走したときよりも、『少年』の化け身しんで一切の迷いが消えて明めい鏡きよう止し水すいの境地へ至ったときに近かった。

たじろぐリリアナの横で、祐理が大きくため息をついた。

「……もちろん承知してはいましたけど、それが護堂さんの偽いつわりない本性だとしたら、本当にどうしようもない方です。鬼おに畜ちく生しようも同然の心根だと思います」

「悪い。その辺は本当に万里谷の言うとおりだ。まったく反論できない」

「それを承知で開き直るのが、護堂さんの救いようのないところです」

凜りん然ぜんとささやきながら、祐理がそばに来てくれた。

そして、恥ずかしげにうつむき、消え入りそうな声でつぶやく。

「で、でも、そんな御方にどこまでもついていくと、私もお約束しましたから……」

草薙護堂のまちがった部分を強く諫いさめながらも、全てを受け入れてくれる。

それが万里谷祐理という少女だった。

護堂は彼女を思わず抱きよせた。その不作法を受け入れつつも、たおやかな大和やまと撫なでし子こはすこしだけ腕に力を込め、完全には密着しないようにする。

「だ、駄目です、護堂さんっ。ふ……ふたりに頼むとおっしゃったじゃありませんか」

「万里谷祐理！　あなたはまさか、草薙護堂の提案を受け入れるつもりなのか!?」

「だって、仕方のないことですし……」

　護堂の腕のなかで、媛ひめ巫み女こがひっそりとため息をつく。

「リリアナさんもご存じじゃありませんか。火がついたら止まらないうえに、自分勝手な理屈を通すためなら神々とさえ戦う方だと……」

「すまないな、万里谷。こんな男につきあわせて」

「ま、まだ早いですっ。護堂さん、まだ、まだ——」

　護堂は愛いとおしさにまかせて祐理に顔を寄せ、唇くちびるをふさいでしまった。

　その抱ほう擁ように逆らうため、彼女はまだ腕に力を込めて、護堂を突き放そうとしている。しかし、唇の方は不作法者の口づけを柔らかく受け止めていた。

　護堂が差し込んだ舌したを、祐理の舌が『ちゅっ』と吸ってくれる。

　そんな彼女に「万里谷……」とささやきかける。祐理はとろんとした目でうなずいて、

「こういうときまで、そんなふうに……。前に申し上げたじゃありませんか……」

「万里——祐理……」

「はい……」

　下の名前を呼ぶと、幸せそうなささやき声と陶とう然ぜんとした吐と息いきが応こたえる。

　それから、護堂と祐理はそろって銀髪の騎士へ目を向けた。

　いつも生き真ま面じ目めなリリアナ・クラニチャールは困り顔で視線を受け止め、そして、意味ありげに見つめ返してきた。

「ま、万里谷祐理だけでなく、わたしも必要なのですよね？　女神との戦いのために」

「当たり前だろう？　俺にはおまえが必要なんだ」

「私だけで護堂さんをお助けするのは、やはりむずかしいでしょうし……」

　三人の間に、都合のよい言い訳を共有する空気が生まれた。

　リリアナもふらふらとした足取りで、ふたりのそばにやってくる。そして、いきなりの熱烈な口づけ。ひしと抱きつくなり護堂の首にしがみつき、キスしてきたのである。

　妖よう精せいめいた美び貌ぼうの唇が護堂の唇をくちゅくちゅとついばむ。

　さらにリリアナは舌でなまめかしく護堂の唇を舐なめつづけてから、その舌を口のなかに差し入れて、護堂の舌を探す。つかまえるなり、大胆に絡からめてくる。

　数十秒の出遅れを取りもどそうとするかのような、勢いと激しさだった。

「ど、どこまでもお供いたします。あなたの騎士として……あなたの女として、どんなに理り不ふ尽じんな求めにも応えてみせます。だから、わたしも――」

「リリアナ……」

「わ、私もごいっしょいたします。ですから三人で――」

　祐理もそっと顔を寄せてきたので、リリアナとの行為をいったん取りやめて、護堂は媛巫女の唇を吸う。そのまま長めの接せつ吻ぷん。唾だ液えきが混じり合い、粘ねん膜まく同士の接触で睦むつみ合う。

　息継つぎが必要になったところで護堂が口を離すと、今度はリリアナが来た。

　騎士の唇が主あるじの唇に吸いつき、感触を愉たのしむように蠢うごめく。

「こういう発言は不適切だと承知していますが……どきどきします」

　リリアナの小声でのささやき。

　それから騎士らしい力強さで護堂の唇を激しくむさぼって、口を離す。

　ふぅぅとリリアナが満足そうに吐息を洩もらしていると、今度は祐理が顔を近づけてきて、護堂からの口づけをひたむきに受け止めた。

　すると、リリアナは護堂の耳たぶをついばむようにキスしてくれた。

　それで護堂も悪戯いたずら心ごころを起こし、祐理のあごの下に顔を埋めて、媛巫女の白く細い首筋に唇と舌を這はわせた。

「ん……んんっ」

　びくん、と祐理が体を震わせ、切なそうに吐息をこぼす。

　そして三人はあらためて顔を向き合わせ、祐理とリリアナは交互に唇を捧ささげてくれる。それどころか、ふたりでいっしょに護堂の唇を吸い、舐め取り、愛おしんでくれさえした。

　気づけば、幾日も護堂にまとわりついていた脱力感が消えていた。

　ふたりが治ち癒ゆの術をかけてくれたのだ。

　ついに全快した。うなずく護堂へ、銀髪の騎士が口づけと共に言う。

「アルティオという女神についての伝承は、現代ではほぼ失われていますが……」

「それでも、おまえたちなら何かしら視みえているんじゃないのか？」

「まあ。いけません、護堂さん。そんなふうに霊視の力を当てにされては」

　こちらは口づけと共にたしなめる、祐理の言葉だった。

「いつも都合よく視えるとは限らないのですから。今回は運よく、サルバトーレ卿きように憑ひよう依いした女神を拝見して、感じたことがいくつかありましたが……」

「わたしの方もどうにか視えたものがあります。お役立てください……」

　ふたりで交互に、あるいは同時に護堂の口をついばんでいる。

　その行為と並行して、膨ぼう大だいな量の情報が草薙護堂のなかに流れ込んでくる。熊の名前を持つ女神と、彼女の息子について。

　剣の言霊ができあがったことを感じて、護堂はぐっと拳こぶしを握りしめた。

　直後、神獣の咆哮が高らかにとどろいた。

　オオオオォォォォォォォォオオオオオオンンンンンンンッ！

　黒き大猪の吠ほえ声だった。見れば、三体いたミミズク熊の神獣が全て大地に横たわり、粉状にさらさら崩れて、砂となっていくところだった。

　やはり『猪』とエリカ・恵那の前には敵ではなかったのだ。

　赫かつ々かくたる勝利を得て、任務を果たした『猪』は咆哮しながら消滅していく。

　そして、天より降下してくるのはウルディンの翼よく竜りゆう。エリカが手た綱づなを握り、そのうしろに恵那が乗っていた。

「やっぱり来ていたのね、護堂！」

「王様！　ずっと会いたかったよ！」

　着地した翼竜から降りるなり、エリカと恵那は駆けよってきて——仰ぎよう天てんした。

　迎える草薙護堂のそばには現代に残ったはずの祐理・リリアナがいて、しかも、ふたりが只ただならぬ雰ふん囲い気きで護堂に密着

していたからだろう。

　そして、ついに恵那が困こん惑わくしきった口調でつぶやいた。

「ええと、祐理とリリアナさんが何でここに？　っていうか、三人で何してたのっていうか……。あ、うん、何て言ったらいいんだろ、こういうとき？」

「え、恵那さん!?　ここここ、これはもちろん、いつもの儀式といいますか！」

「エリカ……その、わたしたちは草薙護堂をお助けするために来たのだから、為なすべきことをしていただけであって――！」

　まわりで三人の少女が動転するなか、その中心で護堂ひとりが悠ゆう然ぜんとしている。

　エリカは深々とため息をつき、こちらにつかつかと歩みよってきた。

「護堂。あなたはいつだって、わたしの予想を超える人だけど、今回はきわめつけね。いるはずのないリリィと祐理を呼びよせて、お楽しみだったなんて」

「まあ、俺たちの方もいろいろあったんだ」

「しかも、ずいぶんと落ち着いているじゃない？　また、何かの呪のろいでおかしくなった……いいえ。開き直って、自分の心に素直になったというところかしら」

「わかるのか？」

「わかるわ。わたしは常にあなたの右側に寄りそうべき女だもの。そのわたしに断りもなく、こんな狼ろう藉ぜきをして――本当に許しがたいわ！　ただ……」

　強く言い切ってから、エリカが口ごもった。

　祐理とリリアナにはさまれる格好だった護堂だが、手をさしのべる。金髪の少女は眉まゆをひそめてから、それでもその手を取って、さらに歩みよってくる。

　結局、護堂と真正面で向き合いながら、エリカは気まずそうにつぶやいた。

「わたしと恵那さんもこの半月ばかり、ずっと護堂といっしょだったわけだから……あまり強く主張できないのよね」

「そうか」

「もしかして、そのあたりも計算ずくだったのかしら？」

「まさか。そんなことができる器用さ、俺にあるものかよ」

「それもそうね。いつだって好き放題やりながら、わたしたちをいいようにあつかうのが草薙護堂という人間だものね。本当に許しがたい人。それで、あなたはどんな術を必要としているのかしら？　やっぱり、アルティオの知識？」

「それもあるし、体の調子もあまりよくないんだよな」

「まあ」

　いつのまにか、祐理とリリアナよりもエリカが近い。

　話している間にすこし距離を詰め、護堂の目と鼻の先にまで来ていたからだ。エリカは護堂の頬ほおをやさしく撫なでてから、ため息まじりに言った。

「そんな話を聞かされたら、協力すべきかも……なんて思えてくるわね」

「おまえがそうしてくれるなら、本当に心強いよ――痛っ」

　軽く護堂の頬をつねりながらも、エリカは誘うような上うわ目め遣づかいでささやく。

「我慢しなさい。このくらいの意地悪、甘かん受じゆして然しかるべきよ。それに護堂、そういうことはわたし以外の子にも伝えるべきでしょう？」

「そりゃあ、もちろん」

　エリカがちらりと視線で教えてくれたので、護堂はすぐに彼女の

方を見る。すると、ひとり出遅れていた恵那がハッとして、駆けよってきた。

「え、恵那も王様をお助けするためだったら、何だってできるよ！」

　エリカのすぐ隣に来て、太た刀ちの媛ひめ巫み女こも上目遣いで護堂を見あげる。

　一八〇センチある護堂の方が長身なので、どうしてもこうなってしまうのだ。

　真正面にならぶ彼女たちへうなずきかけると、エリカと恵那はそろって背伸びして、顔を近づけようとする。護堂も腰を落として、彼女たちに応えた。

「あなたが心置きなく戦えるようにしてあげなくちゃね……」

「それが恵那たちのお役目だもんね……」

　エリカとキスした直後に恵那ともキスを交かわす。

　それからはふたりの唇を交互に吸い、舐め、味わう。エリカと恵那も護堂の唇を受け止め、吸い返し、大胆な舌の動きで応える。ときどき三人の唇と舌が濃密に交まじわり合い、この唾液が誰のものか、わからなくなることも珍しくなかった。

　以前、コロニア・アグリッピナで再会した夜。

　あのときも三人で行為におよんだが、途中で我われに返って中断してしまった。

　しかし今、あのとき歯止めをかけた自分たちの心にふたたび火をつけるようにして、護堂とエリカと恵那は夢中になって、むさぼり合った。

　その合間に、ふたりは治療の魔術を細やかにかけてくれた。

　実を言えば護堂の体調不良、とっくに回復していたのだが――。

　そして、この突然の展開に祐理とリリアナは呆然と絶句していたのだが。不意に銀髪の騎士がハッと我に返り、いきなり言った。

「く、草薙護堂の第一の騎士はわたしだ。あなたたちばかりにお役目をまかせるわけにはいかない……！　万里谷祐理、あなたにはまだ早いから、ここはわたしが――」

「何をおっしゃるんですか⁉　わ、私だって、護堂さんのお力になってみせます！」

　リリアナが護堂の左腕に、祐理は右腕にしがみついてくる。

　彼女たちの差し出してくれた唇とも護堂は代わる代わるキスを交わし、儀式はついに四人がかりで行うものとなるのであった。

2

　かくして、暴走と倒とう錯さくの果てに儀式は終わり――。

　我われに返った五人は、これ以上ないほどのばつの悪さを噛かみしめていた。中心には護ご堂どうがいて、すぐ隣にエリカ、それから祐ゆ理り、リリアナ、恵え那なが居心地悪そうにしている。

　ひさしぶりに五人そろったというのに、誰も口を開かない。

　さすがに自分たちがやりすぎたことを自覚しており、さらに『魔術や権けん能のうのせいで錯さく乱らんしていた』と言い訳できないことも承知していたせいだった。

　しかし、ついにリリアナがつぶやいた。

「わたしとしたことが何という失態を……。ただエリカもエリカだ。何もあそこで、あんなふうに割り込んでこなくても。あなたのことだから、あれ以上の術は必要ないと、本当はわかっていたんじゃないのか？」

「な、何を言うの、リリィ。それは言いがかりというものよ！」

「そういえば、さっき気になったのですが。エリカさんと恵那さん、以前よりもすごく息が合うようになった印象も……」

「それはほらっ。この時代に来てから、ずっといっしょに苦労してきたわけだし。特にきっかけとかはなかったんだよ、うんっ。本当に！」

「と、とにかく、今はドニやアルティオのことが問題だよな！」

　いちばんの戦犯である護堂だが、そこはあえて棚たな上あげして言う。

　ついさっきまでが『高速運転』だとすれば、今はすっかり『通常運転』である。さまざまな意味で〝研ぎ澄まされた〟状態をずっと続けるのは、さすがに無理だったのだ。

「そうだエリカ。よくウルディンから竜を借りられたな？」

　エリカと恵那が旅立ったのは一週間前。

　しかし、フン族の神殺しが住む森まで、馬を使っても一ひと月つき近くかかるという。

　船でも無理だ。上流から下流へ向かった往おう路ろとちがい、ライン川を遡さかのぼる形になるので、それなりの日数がかかるはずだった。

「ルスカとクロティルドに魔術で手紙を送って、向こうから来てもらったのよ。ウルディンの竜なら、このあたりまで半日もかからないで飛んでこられるもの」

　エリカは語る。アイーシャ夫人に魅了されることを恐れてコロニア・アグリッピナを脱出したあと、適当な街に落ち着いたところで手紙を書いたのだと。それを『投とう函かん』の魔術で送った先は、ウルディンの砦とりでだった。

「……ああ。あったな、そんな魔法！」

　封書などのごく軽い物を、特定の場所に瞬間移動させる魔術。

　護堂は思い出した。たしかにエリカも何度か使っていた。

「まあ、ルスカとクロティルドの口添えがあったとはいえ、ウルディンを動かすのにはちょっと苦労したけど。最後はこちらの情報が物を言ったわ」

「情報？」

「ええ。上う手まくいけば、コロニア・アグリッピナを労せずして陥おとせること。そして、三人の神殺しを殲せん滅めつさせかねない勇者——魔王殺しの神が顕けん現げんしたこと。この二点を近くでたしかめてみたらと持ちかけたの」

　同盟の縁えん故こを恃たのむだけでなく、ウルディンの欲と好奇心を刺激する。

　エリカらしい工夫だった。フン族の神殺しは現在、コロニア・アグリッピナ近郊で竜たちと妻ふたりをひきつれ、状況を静観中だという。

　もしかしたら、この戦場の様子もどこからか眺めているのかもしれない。

「護堂がここで戦死して、アイーシャ夫人だけがもどったりしたら、ウルディンはよろこび勇んでコロニア・アグリッピナに攻め込むでしょうね。それで夫人はどうされたの？」

　今度は護堂たちの方が事情を語る番だった。

　ひととおり説明できたところで、『うおおおおおっ！』という歓声を聞いた。

　ミミズクと熊の融ゆう合ごう体たいめいた神獣が三匹も顕あらわれ、とどめに護堂の『猪いのしし』まで暴れまくったせいで、さすがのフランク族もすっかり怖おじ気けづいていた。

　しかも翼竜を駆る女騎士と、黒い妖よう刀とうを振りまわす女剣士までいた。

　はじめ、フランク族は得え体たいの知れない連中から思い思いに逃げまわっていたのだが、巨獣たちの戦いが激化するにともない、一いつ箇か所しよに集まるようになった。

　巨獣——特に『猪』の咆ほう哮こうで天は震え、超音波の余波で空気がびりびり鳴めい動どうする。

疾しつ走そうするたび地面も激しく揺れ、大地震さながら。

そんな状況に恐怖がつのったうえに、素そ朴ぼくな信仰心を刺激されたのだ。嗚あ呼あ、これは世界に終末をもたらす神々の戦いとやらにちがいあるまい、と……。

戦闘に参加したフランク族は約二千名。

その一割ほどが死傷し、戦闘不能になっていた。動ける者はどうにか逃走する仲間についていったが、戦場に置き去りにされた者もすくなくない。

いつしかフランク族は恐怖と苦痛に打ちひしがれて、逃亡を中断したのである。

しかし、彼らの前でミミズク熊の神獣は三体とも撃破された。

『猪』と竜使い、妖刀の剣士も去っていった。フランク族は歓喜し、生きのびた――という解放感を味わったのだが。

それもつかのま、戦場に穿うがたれた亀き裂れつから、ひとりの男が浮きあがってきた。

かつて大族長と崇あがめた戦士に瓜うりふたつだが、彼はすでに死んだ。その亡なき骸がらをフランク族に仇あだなす女神が奪い、操っているのだ。

「ふふふふ。さて、勝負の続きと参ろうかのう」

事実、彼の口から洩もれ出る声は若い女のものだった。

そして、戦士は長大な刀を引き抜き、天にかざす。上空に無数の火花が顕れた。それは夜空をいろどる大きな花火がバチバチときらめく様子に似ていた。

ただし、この花火は一向に消えず、フランク族の頭上はよく晴れた青空だったが――。

「さて、野や卑ひにして蛮ばん夷いなる民たみよ……。そなたらを守護する神殺しはどこに行った？　おらぬのであれば是非もない。まずはそなたらに神罰をもたらそう」

　地の底より生還した戦士がフランク族に近づいてくる。

　上空では無数の火花がきらめきつづけていた。あの輝きの一部が落ちてくるだけで、フランクの戦士たちは全滅しかねない。

　このとき、誰かが「アイーシャさま！」と呼んだ。

　それが皮切りとなった。戦士たちは口々に叫びはじめる。アイーシャさま、聖女さま、どうかお救いください、われらに慈じ悲ひの手を、聖女アイーシャ、聖女アイーシャ、聖女アイーシャ、聖女アイーシャ、聖女アイーシャ、聖女アイーシャ、聖女アイーシャ、聖女アイーシャ、聖女アイーシャ、聖女アイーシャ、聖女アイーシャ――と。

「われらをどうか救い給たまえ、聖女よ！」

　死の淵ふちに追い詰められた窮きゆう境きようと、魅了の権能による呪じゆ縛ばくが生んだ狂騒だった。

　そして、この直後。

　空から――雲の間から、人間の形をした虹にじ色いろのきらめきが降ってきた。

　それはゆっくりと大地に舞い降りてきて、着地した瞬間、白い外がい套とうをまとった美少女に変化したのである。

　うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！

　怒号と雄お叫たけびと興奮がゲルマニアの平原にこだました。

　まあ、アイーシャは救世の雷に呑のみこまれたわけだが。

　端的に言えば、死んでいなかった。二度あることは三度――などと格言にあるとおり、幸運の加護が『妖よう精せいの通つう廊ろう』をまた開いてくれたのだ。

　はじめに救世の神刀を受けたときと、まったく同じ避難方法だった。

　しかし、これをやるとアイーシャはへろへろに疲れてしまう。おなかもぺこぺこだ。

　そのうえ帰還した戦場にはドニ＝アルティオが神刀と共に復活しており、上空には救世の雷らしき火花が散っている。そして、聖女の名前を歓かん呼こするフランクの民——。

「あらまあ」

　アイーシャはちょうど、ドニ＝アルティオとフランク族の間に降り立っていた。

　両者の狭間はざまでコホンとせき払い。なるべく凛り々りしく見えるよう『きりっ』としてから、フランク族の方に顔を向ける。見み栄えを張ったのだ。

　うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！

　驚喜と歓声が返ってくる。うれしくなって、アイーシャは手を振った。歓声のボリュームはさらにヒートアップする。

　うずうずと心が浮き立ってくるのを、アイーシャは自覚した。

　神刀を手にドニ＝アルティオが近づいてきたので、今度はそちらへ顔を向ける。

「そなたもよみがえったか、神殺しの女よ。ならば、そこな蛮族どもと共に今度こそ葬ほうむってくれよう。ふふ、次はいかなる奇手で妾わらわを迎え撃つ？」

「そんな……戦いは憎悪と悲しみの連れん鎖さしか生まないというのに……」

　あくまで決闘を迫るドニ＝アルティオ。

　彼女の猛たけ々だけしい言葉が、浮き立つアイーシャの心にも悲しみをもたらす。

　アルティオは愛を忘れた悲しい女神なのだ。できれば救ってあげたい。しかし、我わが身とフランクの人々にも絶体絶命の危険が迫っている。どうしよう？

「聖女さまあ！」「どうかお助けを、アイーシャさま！」「ご慈じ悲ひを、聖女よ！」「われらに救済の手を賜たまわりくだされ！」「聖女さまあっ！」「聖女よ！」「聖女さま！」「聖女！」「聖女さま！」「聖女！」「聖女さま！」「聖女！」

　アイーシャの背中に民の声が次々とぶつけられる。

　みんな、守って欲しいと願っているのだ。神々にさえ立ち向かってくれる救世主の出現を待ち望んでいるのだ。そして、それができるのは自分しかいないのだ！

　ふぅ。深呼吸を一回。ノリと勢いにまかせて、アイーシャは決意した。

「今のわたくしには、ほとんど力は残されていません……」

　通廊への緊急避難で、すでに疲労困こん憊ぱい。

　冬の女王の権能は切り札『冥めい府ふ落とし』を使ったせいで打ち止め。癒いやしの権能にもどっている。しかも、反転したあとはしばらく治ち癒ゆ力りよくが低下する。

　もうアイーシャには、力と呼べるほどのものはたいして残っていなかった。

「それでも、わたくしはみんなのことを守りたい！　いいえ、守ってみせます！」

　民衆の歓呼の声を吸収して、アイーシャのなかで権能が目覚める。

　どんなに元気なときでも、民衆の支持がなくては使えない。逆に彼らの支持――庇ひ護ごを求める声さえあれば、どれだけ消しよう耗もうしていても、アイーシャに『みんなを守るための力』を授けてくれる権能なのだ！

「目覚めよ、鋼はがねの魂たましい！　剣つるぎの無情を世に示せ！」

「む――!?」

　かつて、心ならずも竜殺しの英雄より簒さん奪だつした神力。

　賢人議会がひそかに『不思議の国の剣ジヤバウオツク・スレイヤー』と命名したらしい権能の発動を前にして、ドニ＝アルティオが大きく目をみはった。

　救世の神刀が呼んだ上空の火花に、聖女を礼らい賛さんする大歓声。

　ドニ＝アルティオとアイーシャ夫人の復活を悟り、護堂一行はフランク族が固まっているあたりにやってきた。リリアナに飛ひ翔しよう術じゆつを使ってもらったのだ。

　そして、新たに顕現した怪物を見て、愕がく然ぜんとした。

「また新しいバケモノかよ！」

「もしかして、アルティオが新しい眷けん属ぞくを呼んだのかしら!?」

「い、いえ……」

　護堂とエリカが驚く横で、祐理が震え声でささやく。

　媛ひめ巫み女この見つめる先には、白き外套をまとう褐かつ色しよくの美少女がいる。霊視の天てん恵けいを得たらしく、祐理はおごそかに託たく宣せんを告げた。

「あれを呼び出したのは、アイーシャ夫人であるはずです……！」

「あ、あんなに危険そうなやつをあのアイーシャさんが!?」

「そういえば賢人議会のレポートにも載のっていたな。夫人には正体不明の武器を呼び出す権能がおありらしいと……」

　唖あ然ぜんとする恵那。思い出してつぶやくリリアナ。

　騒乱の中心地に駆けつけた護堂たち五人。すぐ先ではドニ＝アルティオとアイーシャ夫人が対たい峙じしている。その上空で、無数の火花がきらめいている。

　そして、鋼鉄造りの怪物も空中に浮いていた。

その上半身は甲かつ冑ちゆうの戦士である。ただし、ずんぐりむっくりとしていて、やけにユーモラスな体型だった。全身が鋼の装甲でくまなく守られていて、素肌はまったく見えない。

頭から腰までで一〇メートル以上の身の丈たけである。

下半身はなんと『煙』だった。

腰のあたりから、黒い煙をもうもうと吐き出しているのだ。

また甲冑の各部位をつなぐ継つぎ目から、石炭のような黒い岩が次々と吹き出してくる。これらの岩は黒い弾丸となって地上に降りそそぐ。人間の頭くらいの大きさから、家をひとつ丸ごと押しつぶしそうな巨岩まで、さまざまなサイズがあった。

しかし、いずれの岩が当たっても、ふつうの人間には大惨事だろう。

大岩の雨はフランク族がいるあたりにも落ちていて、彼らは必死に逃げ惑まどっていた。それでも大族長の戦いを見守ろうとしていたのだが――。

「みなさーん！」

アイーシャ夫人が大声で訴える。

「ここにいると危ないから、全力で逃げまわってくださいねえ！　あと、絶対死なないように気をつけて！　怪け我がだけだったら、あとで治してあげますからあ！」

身もフタもない勧告を聞き、フランク族は一斉に逃走をはじめる。二千名弱の人々が思い思いの方向に、バラバラに散開していった。

うわあああっ、うわあああっと大声でわめき散らして。

その間に黒い岩の噴出はようやく終わり、甲冑の魔神が吐くのは煙だけとなった。



「救世の雷よ、神殺しめの顕けん身しんを吹き飛ばせ！」

　ドニ＝アルティオが命じると、上空の火花に変化が起きた。

　ばちばちと点滅していた無数の火花が長々とした大だい蛇じやの形状となり、『雷光の蛇へび』と化して襲いかかったのである。もちろん、煙噴く甲冑の魔神めがけて。

　その巨大な顎あごは、魔神の同じほど大きな左腕の籠こ手てが受け止めた。

　しのいだ魔神が右手を開くと、そこに鋼鉄の長剣が顕れる。だが、その瞬間、左腕に噛かみついたままの『蛇』が全身から電撃を放った。

　当然、密着していた魔神は激しく打ちのめされる。

　甲冑の継ぎ目から大量の蒸気と、そして無数の火の玉が勢いよく吹き出した。

　火の玉は正確に言うと、炎上する石のかたまりだった。地面に落ちると平原の草に火がうつり、めらめらと燃えはじめる。下へ手たをすると大火事になるところだ。

　ダメージを受けた途端に火の玉噴出――。

　人間でいうところの出血なのだろう。しかし、魔神はその痛手を乗り越えて、召しよう喚かんしたばかりの長剣を『蛇』に突き立てる。蛇の形が崩れて、火花となって吹き飛んだ。

　魔神の剣は、電光の集合体にダメージをあたえ返したのだ。

　しかし、四散した火花は十数秒もするともどってきて、ふたたび『蛇』となる。

　今度は長い蛇体で魔神の甲冑にからみつく。そして、放電――。雷による第二撃を全身に受けて、魔神は動きを止めた。

　甲冑の継ぎ目という継ぎ目から、蒸気と火の玉がまたも激しく噴出した。

　このとき地上に落ちていった火の玉は、二〇〇個以上あったかもしれない。しかし、剣を持たない魔神の左手――その五指の先から鋭い刃がシュッと出てきた。

　魔神は『蛇』にこの手をのばし、喉のど元もとあたりをつかみ、五つの刃を突き立てる！

『蛇』は無数の火花となって散り散りになり、二度目の崩壊。だが、すぐに大蛇の形を立て直すと、やや距離を置いて甲冑の魔神と真正面から向き合う。

　そして、両者ふたたび剣と雷で攻撃を繰り出す。

　たがいにダメージを受ける。結果、魔神は大量の火の玉をばらまき、『蛇』は十数秒の形状崩壊を起こす。これを何度も繰りかえしていく。

　一進一退の攻防であり、不ふ毛もうな打撃戦でもあった。

「アイーシャさん！　何なんですか、あれは!?」

「まあ草くさ薙なぎさん、お体の方はもうよろしいんですね！　よかった！」

　四人の少女と共に駆けつけると、ほんわかした笑顔が迎えてくれた。

　一目で護堂の完全回復を見抜くあたり、アイーシャ夫人の眼がん力りきはさすがである。

　しかし、その間にも甲冑の魔神は攻防を繰りかえし、ダメージを受けるたび流血代わりの火の玉を地上にバラバラと散さん布ぷ中……。

　これがかなり遠くまで飛んでいく。数百メートル先、数キロ先まで。

　散り散りになって逃げまどうフランク族はだいぶ戦場から遠ざかっていたのだが、彼らのところにまで余裕で届いてしまう。

　もちろん当たれば只ただでは済まない。彼らの逃げ足に拍はく車しやがかかる。

　火の玉は基本的に放物線を描いて、遠くへ飛んでいく。

　魔神のすぐ真下にいる護堂たちやアイーシャ夫人の方がかえって安全だった。まあ、近くに落ちる火の玉もなかにはあったし、間近で行われている激闘に巻きこまれる危険がたっぷりあるわけだが。

「あの鎧よろいのバケモノ、やっぱりアイーシャさんの？」

「はい。みんなを――フランク族のみなさんを守るために呼んだ、わたくしの顕身です」

「守るどころか、めいっぱい脅おびやかしているじゃないですか」

「そこは仕方のないところといいますか。みんなを守るための力といえども所しょ詮せんは武力、戦うための道具ですし……。武器を持つ者、武器に頼る者は結局のところ、武器によって滅びてしまう。魔神の権能はいつもその理ことわりを教えてくれます……」

「いや、あんなのを呼んどいて、そんな高こう尚しようっぽいことを言われても」

　アイーシャ夫人は胸元で祈るように両手を組み、目をつぶっている。

　いかに『人を守る』という大たい義ぎ名めい分ぶんがあろうと武力は武力。

　少年少女向けバトル漫画などで「誰かを傷つける力なんて要いらない、大切な人を守る力が欲しい」と悲壮感たっぷりに叫びつつ、殺傷力の高そうな武器・必殺技を濫らん用ようする主人公たちに聞かせてやりたい金きん言げんである。

　とはいえ、それを唱える人物が『みんなを守るために』武力行使するのも……。

　不毛なツッコミになりそうなので、護堂は気持ちを切りかえた。

「とりあえず、アイーシャさんはあの鎧を維い持じするので手一杯ですか？」

「あ、はい。大体そのような感じです」

「わかりました。あとは俺が何とかします」

　仲間の少女たちに目配せする。必要になったら援護してくれと。

　それから護堂は走り出した。迎え撃つためだった。悠ゆう々ゆうとした足取りで近づいてくるサルバトーレ・ドニの肉体と、女神アルティオの魂を。

　ゆったりとした足取りは、余裕の表れではないはずだ。

　ドニの右腕に持たせた救世の神刀をコントロールするため、アルティオの魂は集中力の大半をそちらに割かねばならないのだ。

　雷鳴とどろき、火の玉がひっきりなしに降ってくる戦場――。

　その一隅で、護堂はついにドニ＝アルティオと一対一になったのである。

3

「我われは最強にして、全ての勝利を掴つかむ者なり――」

　言こと霊だまを唱えて、護ご堂どうは新たな化け身しんを行使した。

　女神アルティオの神性を切り裂く刃やいばの使い手、『戦士』である。

「もう余よ程ほどのことがない限り、あんたの負けは決まったようなものだけど……全力でいかせてもらうよ」

　護堂の周囲に光の玉が一〇〇個ほど顕あらわれ、銀河の星雲にも似た輝きを放つ。

　もちろん、剣の言霊だった。これに対して、ドニ＝アルティオは手にした神刀をまっすぐに突き出し、切っ先を護堂に向ける。

「言うではないか。妾わらわの手には魔王殺しの剣があるのだぞ？」

「その剣は結局、あんたのための武器じゃない。しかもドニとの戦いで死にかけて、『最後の王』ってやつに命のほとんどをくれてやった。あんたはとっくにボロボロだ」

　対たい峙じする敵を深く理解するのも『戦士』の能力。

　アルティオが満まん身しん創そう痍いを通り越して、とっくに消滅していてもおかしくない状態だと護堂は見抜いていた。

「早く地上から去って、大霊界みたいなところに隠居して欲しいんだけどな……」

「などという助言に妾が乗ると思うか、神殺し！」

　ドニ＝アルティオが鋭い太た刀ち筋すじで斬きり込んでくる。

　剣を振りまわす程度の余力はあるらしい。みごとな太刀筋だった。しかし、護堂は余裕を持ってかわす。『戦士』の洞察力が斬ざん撃げきのタイミングを教えてくれたおかげだ。

　こうなった以上、仕方がない。全力で迎え撃たねば。

　可能であれば女神を消滅させず、もうすこし穏おん当とうな方法で無力化させたい。しかし、まずは勝利をもぎとるのが先決！

「アルティオ！　あんたの名前の意味『熊』は、ケルト人の文化では戦士の象徴だ」

　言霊の剣を操るため、護堂はつぶやいた。

「あんたを崇あがめたケルトの民たみはヘルヴェチカ族。彼らは俺がスイスの名前で知っている土地で暮らしていた部族だ。女神アルティオは彼らが崇める大地の女王。戦士階級にも信仰される、勇猛な戦いの女神でもあった……」

　護堂のまわりに浮いていた光球の群れ――剣の言霊。

　これらが詠えい唱しように合わせて、ドニ＝アルティオへと一斉に飛んでいく。どんな剣士でも防ぎようがない、機銃の連射にも似た斬撃だったのだが。

「邪じや竜りゆうファーブニルの血よ、我に不死の運命を授け

よ……」

　サルバトーレ・ドニの唇くちびるが言霊をつむぐ。男の声だった。

　その瞬間、北ほく欧おうのルーン文字が一〇〇以上もドニの体を取り巻く。そこに突っ込んでいった剣の言霊は全てはじかれ、そのまま消滅していった。

　かつて護堂を苦しめた権能——使い手をなかば不死とする『鋼鉄の加護』だ。

「どういうつもりだよ、サルバトーレ・ドニ？」

「いや、女神の力がだいぶ弱っていたからさ」

　予想外の横やりに眉まゆをひそめる護堂へ、やはり男の声が答える。にたっという能天気な笑みがドニ＝アルティオの顔に浮かんでいた。

「すこしくらいなら体を取り返せるんじゃないかと思って、試してみたんだ」

「それでどうして、俺の邪魔をするんだよ⁉」

　怒鳴った瞬間、ドニのバカっぽい顔に気品と知性がもどった。

「妾の支配をすり抜けるとは小こ賢ざかしいな、神殺し。だが、今しばらくの間、妾の手足として役立ってもらうぞ」

「まあ、体を全部奪い返すのはたしかにむずかしそうだねえ」

　どちらもサルバトーレ・ドニの口から出た言葉。

　しかし、はじめは女神アルティオの声。次はドニ本来の声だった。それに合わせて顔つきも知的になったり能天気になったりといそがしい。

　奇妙な二に人にん羽ば織おりに護堂が目をみはる間も、両者のやりとりは続く。

「そこで提案だ。さっきみたいに加勢してあげるから、僕の体は僕

に操らせてよ。それだと君は神刀ってやつに専念できるし、僕は護堂と決闘できる」

「なんだと？」

「おたがいに利益があって、いいアイデアだと思うんだけどなあ」

「あいかわらず狂気じみたことを言う男じゃな……」

「いやいや、僕はいたってまともだよ。僕と草くさ薙なぎ護堂は宿命のライバルでありながら親友でもある、複雑な関係でね。こういう機会がないと、本気の勝負ができないんだ。護堂は体てい裁さいにこだわる男だから、特別な理由を欲しがるんだよね」

「ふむ。奇き矯きようだが、悪くない提案じゃ……」

　なんと一人二役の会話はまとまる方向で進みつつあった。

　そうはさせるかと、護堂は剣の言霊を新たに一〇〇個ほど呼び出す。その瞬間、ドニ＝アルティオの背中から黒い靄もやが出てきて、さっと地面のなかにもぐってしまう。

　そして、今まで女神に取り憑つかれていた男は軽やかに笑った。

　地中海の太陽を思わせるバカっぽい笑顔、まちがいなく彼本来の表情だった。

「さあ！　アルティオをどうにかしたいなら、まず僕を倒すことだ！」

　サルバトーレ・ドニの手はあいかわらず救世の神刀を持っている。

　しかし、今までとは構えがちがう。だらりと下げた右腕で神刀を握るだけ。攻撃する気も防御する気もなさそうな、自じ堕だ落らくな立ち姿だった。

　この構えこそ、ドニの無む想そう剣けんを生み出す礎いしずえ。護堂は息を呑のんだ。

「アルティオの魂たましいは出ていったんだろ！　バカもいいかげんにしろ！」

「それがそうでもないのさ。女神の魂はまだすこし僕のなかに残っていてね。あっちがその気になれば、すぐにもどってこられるんだ。さすが幽霊だよねー」

「だからって、俺の邪魔をするヤツがあるか！」

　へらへら笑うサルバトーレ・ドニに、護堂は怒りをぶつける。

　その間にも仲間が集まってくる。エリカ、祐ゆ理り、リリアナ、恵え那なである。余計な口と手を出さず、一触即発の護堂とドニを見守っている。カンピオーネ同士の対決に下へ手たな介入をすべきでないという配慮だろう。

　上空では、魔神と『蛇へび』が戦いつづけている。

　しかし、いつのまにか甲かつ冑ちゆうの魔神が有利になっていた。大だい蛇じやは一方的に攻め立てられ、魔神の剣を幾度も受けていた。そのたびに『蛇』のサイズがすこしずつ小さくなっていく。

　護堂は眉をひそめた。

　アルティオの魂は魔神との対決に専念するため、ドニと同盟したのではないのか？

「ふふふ。余計な考えごとは危険だよ。きちんと僕だけを見て欲しいなあ」

「うるさい。俺の頭なんだから、好きなことを考えさせろ」

　文句をつけてから、護堂は不可解な謎なぞを棚たな上あげした。

　あらためてドニをにらむ。きわめて不本意だが、この男の言うとおりだった。

「くそっ。歴史の改変なんて厄やつ介かい事ごとを、さらにややこしくしやがって！」

「まあまあ。これも僕らの運命だったんだよ。いにしえの世でこうして向き合い、世界の行く末を懸かけて決闘する——」

「こんなバカげた運命、あってたまるか。全部おまえが原因の人災

だ！」

「いやあ、三割くらいは君が原因だと思うなあ」

「やっぱり自覚があるんじゃないか。あと、俺はせいぜい二割程度だっ」

　同じ穴の狢むじなめいた失言を口走りつつ、護堂は宣告する。

「仕方ない。勝負に乗ってやるから約束しろよ。もし俺が勝ったら、現代に帰るまで俺の言うとおりにして、おとなしくしてるって」

「もちろんいいとも。ま、ここで僕が勝てばいいだけの話だしね！」

「言ってろ。すぐ返り討ちにしてやるよ」

　一見、のんびりと言葉を投げ合うカンピオーネふたり。

　しかし、護堂は気づいていた。ドニが目と耳を最大限に研ぎ澄まして、攻め入る〝機〟をうかがっていることに。

　草薙護堂の動き・表情・目配り・足さばき・筋肉の緊張・重心を目で見る。

　草薙護堂の声・胸の鼓こ動どう・血管が脈打つ音・足音・息づかいを耳で聞く。

　サルバトーレ・ドニは今、全身全霊を懸けて草薙護堂の全てを把握しようとしていた。そして、『じりっ』と半歩――否いな、足の指ひとつ分の距離を摺すり足で詰める。

　ふたりの間に横たわる距離はせいぜい五、六メートル。

　大きく踏み込んで剣を繰り出せば、刃やいばは一瞬にして護堂まで届く。

　にもかかわらず、欧おう州しゆう最高の剣士はそうしない。護堂の一いつ挙きよ手しゆ一いつ投とう足そくを目と耳で最大限に探りながら、じりじりと間合いを詰めてくる。

　護堂が息を吸う。ドニがじりっと摺り足で歩を進める。

　護堂が息を吸う。ドニがじりっと摺り足で歩を進める。

　なるほど――。護堂はうなずいた。『戦士』の化身には、対峙する敵を深く理解できる洞察力がある。その力が教えてくれる。

　ドニは待っているのだ。護堂に隙すきができる瞬間を。

　といっても、それはふつうの戦いであれば〝隙〟とは呼ばれないはずだ。

　たとえば護堂の方が先に痺しびれを切らして、ドニを殴なぐってやろうと一歩踏み出す――否、踏み出そうとした瞬間、ドニは加速するはずだった。

　水が高きから低きへ流れるように『ぬっ』と護堂に接近し、一ひと太た刀ち。

　虚ともいえないような虚を突かれた護堂には、ドニがいきなり目の前に現れたようにも見えるはず――。そうだった。いつだってドニはこの玄げん妙みような歩法で、友人宅へ上がりこむようにして護堂との間合いを詰め、容よう赦しやなく剣を繰り出してきたのだ。

「あんまり素人しろうと相手に妙な真ま似ねするなよ……」

「そういう反応をする時点で、素人を名乗る資格はないと思うけどなあ」

　ぼやきに苦笑を返されて、護堂はフンと鼻を鳴らした。

　以前は明確にわからなかったドニの仕掛けが理解できる。『戦士』の掌しょう握あくが前より進んだのと、数々の修しゅ羅ら場ばをくぐり抜けた経験ゆえだろう。

　本当に不本意ながら、草薙護堂はカンピオーネとして成長してしまったのだ。

　だから、わかる。

　前の決闘のときより、ドニは遥はるかに細心だ。正しよう真しん

正しよう銘めい、文字通りの意味で一刀両断を狙ねらっている。二の太刀、三の太刀を繰り出すことはまったく考えていない。うかつに間合いを詰めない理由は、まちがいなくそれだった。

　はじめに繰り出す初しよ太だ刀ちで、草薙護堂を一刀両断——。

　それだけをドニは狙っている。下手なダメージを護堂にあたえれば、『駱駝らくだ』の化身で報復されると承知しているからだろう。

　逆に護堂も、いきなり『猪いのしし』をけしかけるような奇襲は使えない。

「いつかもシエナで言ったけど、おたがいの手の内はわかっているもんねえ。ふふふふ、やりづらくもあり、面白くもある……」

　ドニの微笑にいつもの軽薄さはない。

　これは戦士の顔だった。暗い闘争の愉ゆ悦えつを心の底から愉たのしむ者の——。

　対して、護堂はそれどころではなかった。ドニからの攻撃をいまだ一発も受けず、こちらもまったく攻撃していない。だというのに、ふたりの間では闘気と殺気が激しく渦うずを巻き、駆け引きが繰りかえされているのである。

　今まで経験してきた激闘とは、まったく異種の展開だった。

　もしかしたら、これが『武の達人』の戦いなのかもしれない。剣を振りまわすよりも先に敵手の気を読み、隙を盗み、息づかいを見切る。玄妙に間合いを詰め、あるいは間合いを外すことで巧たくみに駆け引きする。

　剣と剣、拳こぶしと拳をぶつけ合うのは、本当に最終局面——。

　最初の一撃をたたき込むときは、すなわち一撃必殺を成じよう就じゆさせる瞬間——。

　ドニはだらりと下げた右手で神刀を持っている。その無想の構えから、また『じりっ』とかすかに間合いを詰めてきた。護堂との間にはいまだ四メートル以上の距離が隔へだたっているというのに、なんと短く感じられることか……。

　そのときだった。

　視界の隅にリリアナが見えた。

　いつのまにかドニの背後にまわっていたのだ。その手には、すこし前に見せてくれた細長い包み——ずしりと重そうな『切り札』があった。

　しかし、銀髪の騎士はさっと手を振り、魔術で包みを消してしまった。

　まあ、背後にまわったところで、ドニは冗談じみた奥おう義ぎ・心しん眼がんとやらを会え得とくしている。察知されている可能性が高い。不意打ちは無理という判断、実は妥だ当とうだ。

　だが、リリアナの行為は草薙護堂の闘志に火をつけた。

　つまり、忠実なる騎士はこう伝えたのだ。意地でも一対一で勝ってみせろと。

　そのメッセージに、当たり前だと即座にうなずく。そして、心配するなという意味もふくめて護堂は獰どう猛もうに唇をゆがめ、微笑した。

　草薙護堂がサルバトーレ・ドニとの一対一で敗北する——。

　それは絶対に許されないことだ。他の誰でもない、自分で自分を許せない！

「いくぞ、天あまの叢むら雲くも……」

　斬り合いをする気などないが、相棒の黒き神刀を右手に呼び出す。

　それを見て、ドニは「へえ」とつぶやいた。

「まさか、君がつきあいよく剣を抜いてくれるなんてねえ」

「勝つためだからな。ただ、チャンバラにつきあう気はないぞ。どうせ勝ち目はないし」

「うんうん。そう言ってこそ僕の護堂だよ。ああ、そういえば——

この間の嵐を起こすヤツはちょっとヤだなあ。あれだと『剣の勝負！』って感じにならないから」

「よく言うよ。嵐が起きる前に斬りかかってくるだろ、あんたは」

　もっとも、同じ理由で護堂はドニ第四の権能を恐れていない。

　狂気と酒を司つかさどる神デュオニュソスより簒さん奪だつした、呪じゆ術じゆつや神力を暴走させる権能。あれは発動するまでにすこし時間がかかる。この状況では役に立たないはずだ。

　そこまで考えて、護堂は苦笑した。

　手の内を知っている同士というのは本当にやりづらくて——面白い！

「ふふふっ。それを承知でその剣を呼ぶ君が愛いとおしいよ」

「うるさいっ。そういう世よ迷まよい言ごとはいいかげんにしろ」

「おいおい。この間、同盟したときはいいって言ったじゃないか」

「あんなのはとっくに破は棄きされているだろうが」

　不毛な舌ぜつ戦せんとは裏腹に、最終局面は間近だった。

　護堂とドニの周囲で、轟ごう々ごうと風が渦うずを巻きはじめている。

　アテナより託たくされた秘法『黒の剣つるぎ』、その発動の前ぶれであった。サルバトーレ・ドニがいかに達人であろうと、草薙護堂はまったくそうではない。ならば、己おのれにふさわしい方法で勝負を仕掛けるのみ——。その意思表示でもあった。

「僕に斬れないものはこの世に存在しない。もちろん君も例外じゃない！」

「できるものなら、やってみろ！」

　ドニが『ぬうっ』と踏み込みざま、下段から逆ぎやく袈げ裟さの斬撃を繰り出してきた。

　同時に、護堂も天あまの叢むら雲くもの劍つるぎを振っていた。

かつては毎日バットを振っていた両手で、あの頃と同じ持ち方で神刀を握り込んでいる。

　狙いはドニが振るう至高の秘剣——救世の神刀。

　ウルスラグナの化身『戦士』の能力がドニの太刀筋を悟らせてくれた。だらりと下げた右腕で持つ剣を左ななめ上に跳ねあげる、逆袈裟の一刀だった。

　これを護堂は、外角低めを打ち抜く要領で迎え撃ったのである。

　天性の動体視力、カンピオーネの集中力、『戦士』の洞察力、元強打者のスイング。

　それらが相乗した結果、はじめて護堂は成功した。サルバトーレ・ドニの斬撃を途中で止めることに。

　——ギィィィィィィィン！

　救世の神刀と天叢雲剣の激突によって、鈍にぶい金属音が響く。

　だが、このときドニの右腕は銀色に輝いていた。魔剣の権能『斬り裂く銀の腕』を行使していたのだ。能天気なカンピオーネが振るう武器は棒きれであれ駄剣であれ、この世の全てを切り裂く刃となる……！

　天叢雲剣の刀身は三尺三寸五分。一メートル以上もある物もの干ほし竿ざおだ。

　その切っ先から二〇センチほど下がドニの魔剣と激突し、天叢雲剣はそこから断ち切られてしまった。

　そしてドニの剣は勢いを止めず、護堂の体を一刀両断する——はずだった。

「なんだって!?」

　しかし、驚きよう愕がくするのはドニの方だった。

　精妙に精妙を重ねた一太刀はそれ以上進まなかった。救世の神刀は天叢雲剣に貼りついていたのだ。鉄が磁じ石しゃくに貼りつくように。『黒の剣』が宿す超重力ゆえだった。

重力嵐を起こし、全てを吸いこむほどの威力を発動させるのには時間がかかる。

しかし、剣一本を吸いつける程度のパワーでいいのなら、話はべつ——。だが、護堂の策がきまった瞬間、ドニは言霊を唱えた。

「バッカスの巫み女こよ、神の酒に酔え！」

呪力・神力をコントロール不能にする、暴走の権能だった。

ドニは瞬時に護堂と同じことをやってのけたのだ。行使に時間がかかる能力でも、わずかな効果でいいからと短時間で発動させる——。

結果、一瞬だけ超重力による吸引がゆるみ、救世の神刀は天叢雲劍から外れた。

ドニはその神刀をまっすぐ護堂の喉のどへと突き出す。

必殺の突きだった。護堂はとっさに右へ動くことで、ぎりぎり避けた。しかし、左肩を深々と抉えぐられてしまった。肩と左腕の感覚がなくなった。

深傷ふかでである。大量の鮮血が飛び散る。だが、死は免まぬかれた！

「だあああああっ！」

負傷とひきかえに護堂は『駱駝らくだ』を使う。そして上段の回し蹴げり！

右足一いつ閃せん。ドニのこめかみをあざやかにハイキックで抉った。しかし、足の甲から伝わってくる感触は鋼鉄を蹴りつけたようで——。ドニもぎりぎりで鋼はがねの肉体となったのだ。

ならばと、護堂は足先に呪力を送りこんだ。

こめかみと足の接点で爆発が起きる。ドニの頭と体が衝撃で揺さぶられる。

すこし前に『最後の王』との戦闘で学んだ一手だった。

　そして、爆発の衝撃が鋼の内部に浸しん透とうしたのだろう。脳を揺さぶられたらしく、無傷だというのにドニの体が倒れていく。脳のう震しん盪とうを起こしたのだ。

　この瞬間、護堂とドニの視線がぶつかった。

　互いの手て強ごわさとしぶとさをあらためて確認することになり、護堂は仏ぶつ頂ちよう面づら、ドニはにやりと不敵に笑い——そのままダウン。これが第二戦目の決着だった。

　終わってみれば、ふたりとも攻撃を二回繰り出しただけ。

　しかし、たった二度の攻防がどれだけ密度の濃いものであったか！

　大きく息を吐き出して、我わが身の無事に安あん堵どする。そして、ついに得た宿敵からの勝利。右の拳と天叢雲劍を思わず突きあげて、歓喜をあらわにする護堂であった。

4

　草くさ薙なぎ護ご堂どう、サルバトーレ・ドニに勝利。

　同じ頃、上空では甲かつ冑ちゆうの魔神が『雷の蛇へび』を長剣で貫つらぬいていた。これによって、電光の集合体はついに完全消滅。アイーシャ夫人の眷けん属ぞくないし分身が勝利したのだ。

「なんとか上う手まくいきましたあ……」

　夫人がへなへなと腰くだけになり、尻しり餅もちをつく。

　すると、空中に浮いていた魔神の姿はうすれていき、消えてしまった。

「おなかもぺこぺこだし、しばらく動けません～～～～」

「やったわね、護堂！」

「サルバトーレの王様、また取り憑つかれないようにしないとね

え」

　向こうでアイーシャ夫人がひとりでぐったりしている。

　一方、護堂のまわりはにぎやかだった。エリカと恵え那なが満面の笑顔で駆けよってくる。祐ゆ理りとリリアナもすこし離れたところから微笑ほほえみかけてくれる。

　護堂は仲間の女子たちにうなずきかけた。すると、エリカが意地悪く言う。

「ところで、今の勝利は本当にすばらしかったけど。歓喜の表現はもうすこし抑おさえた方がいいと思うわよ。あなたは一応、自称平和主義者なのだし」

「い、一応と自称は余計だ！」

　護堂の右手は、さっき突きあげた天あまの叢むら雲くもの劍つるぎを持ったままだった。

　神刀は切っ先から二〇センチほどが切断されている。ドニに抉えぐられた護堂の左肩とあわせて、名誉の負傷というところか。当分、左腕は動かせそうにない。

　しかし——戦いは終わっていなかった。

「救世の神刀が!?」

　やにわにリリアナが叫ぶ。すぐそばで昏こん倒とうするドニを見つめながら。

　赤ん坊のような寝顔をさらすカンピオーネの手から、救世の神刀が消えている。いつのまにか十数メートル先の地面に突き刺さっていた。

　しかも、神刀のまわりには黒い靄もやがまとわりついている。

「女神アルティオ……いえ、アルティオの神霊です！」

　喝かつ破ぱしたのは祐理だった。霊視の力で見抜いたのだろう。

　直後、護堂たちの周囲が輝きはじめる。戦場となった平原——こ

のあたり一帯の地面がいきなり黄金の光を放ちだしたのである。

「これは……大地の精気か？」

　輝く大地を見わたして、リリアナが畏おそれもあらわにつぶやいた。

　さらに、救世の神刀にまとわりつく靄がしゃべり出す。

『礼を言うぞ、剣の神殺しよ。そなたが稼かせいでくれた時を活いかして、わずかだが大地の精を集めることができた……』

　やはり女神アルティオの声だった。

『ふふ。この地は百ひやく年とせほど枯かれ果て、死せる不ふ毛もうの荒野となろうが……致いたし方かたなし。この精気と我わが魂たましいを以もつて、復活の血の代わりとしてくれよう……』

　護堂はハッとした。そういえば、救世の神刀と『最後の王』を甦よみがえらせたのは、女神アルティオの命ではなかったかと。

『怠たい惰だなる勇者よ、ふたたび降こう臨りんするがいい――』

　この言葉を最後に、女神の霊である靄は消えた。ついに完全消滅したのだ。

　そして、地面より放たれる黄金の光も収まる。しかし、護堂は慄りつ然ぜんとした。光が消えたあと、景色が一変していたのである。

　簡潔に言えば、ここは死の大地であった。

　見晴らしのいい平原をおおっていた緑の草は、今の一瞬で枯れ尽くした。

　見わたすかぎり、地面が白い。乾いた土がむき出しなのだ。また水気もほとんどないらしく、風に乗って白い砂がもうもうと舞いあがる。

　かつては旅人に木こ陰かげを恵んでくれたであろう、まばらに生える木々。

　それらもことごとく枯れていた。葉という葉、実という実が全て消滅。幹も枝も養分の全てを吸い取られたかのように痩やせ細り、カラカラに干ひ涸からびている。

　しかも、この地を吹き抜ける風は異様に寒々しい。

　アイーシャ夫人が冬の権けん能のうを使った影響だろう。真冬同然の気温であり、寒風だった。そのせいで、荒廃した印象がさらに強まっている。

「な、なんだか、とんでもないことになっちゃいましたね……」

　自責の念に駆られたのか、アイーシャ夫人が身をすくめた。しかし、彼女にかまっている余裕はない。護堂はとっさに叫んだ。

「みんな、ここから早く離れろ！　アイーシャさんと、仕方ないからドニのバカも連れて、できるだけ遠くへ行ってくれ！」

　もうすぐここで起きるであろう出来事。

　仲間の少女たちはすでに予測していたのだろう。最も腕力のあるエリカがドニの細身だが逞たくましい体を肩にかつぎ、恵那がアイーシャ夫人をうながして、足早に離れていく。

　祐理とリリアナは去り際ぎわのかすかなうなずきで、短く激励してくれた。

　そして、護堂は十数メートル先を鋭くにらみつけた。

　救世の神刀のそばには、ひとりの貴公子がたたずんでいた。

　麗うるわしき美び貌ぼうをふちどる、錆さびのごとき精せい悍かんさ。疲れにも似た憂うれいの陰。それでいて涼やかであり、端たん然ぜんとした男ぶり——。

　もちろん『最後の王』だった。だが、色がない。

　蒼そう白はくであるはずの髪も、白はく皙せきの美貌も、衣服も、全てがうすい灰色である。例外は、彼のそばに突き刺さる神刀のみだった。

　灰色の貴公子は、白金プラチナ色に輝く愛刀をあざやかに引き抜

いた。

「これほど早く再会できるとは思わなかったが……また会えたな、草薙護堂」

「ああ。ただ、あんたはとても体調万全には見えないけどな」

　神刀を持つ勇者の立ち姿はあいかわらず雄お々おしく、神こう々ごうしい。

　しかし、護堂の——カンピオーネの目にはどうにも不安定に見えた。軽く蹴けりでも入れれば、あっさり吹き飛びそうな気さえする。

「仕方がない……と言うべきだろうな」

　灰色の英雄は気品ある声で認めた。

「我がかりそめの母は尽きる寸前の命で大地の精をかきあつめ、僕に捧ささげてくれた。だが、この程度の精気では——とても足りない。この剣を一振りする程度の時間しか、僕は地上にとどまれないだろう。とはいえ」

　自らの不利を告白してから、『最後の王』は淡々と言った。

「君たち三人の神殺しを殲せん滅めつするには、十分すぎる時間だと思う。今の僕は——盟約の大だい法ほうを使えるのだから……」

「なんだって!?」

「我が義母は魔王殲滅の盟約を批ひ准じゆんしていた。盟約に名を連ねる神が魔王の暴ぼう虐ぎやくで命を落としたとき、僕は報復の一撃を行わなければならない。古き盟約の執行者として……」

　つぶやくなり、『最後の王』は神刀を天にかざした。

　錆のごとき疲れをたたえた瞳ひとみで護堂を見つめながら、彼は言う。

「草薙護堂。君と去っていった神殺したちを滅ぼすため、僕はこれから一刀を繰り出す。しのげれば、この決戦は君たちの勝ちだ」

　天を示す神刀の切っ先——。

　その上空に白金プラチナ色の光球が出現した。直径は百数十メートル。小型の太陽という風ふ情ぜいであり、ばちばちと白く放電している。

「だが、無理だったらすまない。此こ度たびは僕の勝利となる」

　今までも幾度か直面した、救世の光の発動。

　しかし今回、『最後の王』の全身にはすさまじい呪じゆ力りよくがみなぎっていた。

　従属神二体と融ゆう合ごうした斉せい天てん大たい聖せい——あの猿えん王おうが宿した呪力に勝るとも劣らない。あの呪力で救世の一撃を放たれたら、たとえ『黒の剣つるぎ』でも打ち負ける！

　確信した瞬間、護堂はささやきかけていた。

「いけるか、天あまの叢むら雲くも……!?」

『応おう！』

　先端を切断された相棒の力強い応答。

　護堂自身もドニの剣で左肩を抉られ、深傷ふかでの身だが——それでも即断し、天叢雲劍を片手に駆け出した。『最後の王』めざして。

　撃ち合いをしても勝機はない。神刀の使い手をどうにかしなくては！

　瞬時に決めて、疾しつ走そう開始。『最後の王』はそんな護堂をおだやかに見つめていた。幾度も神殺しと戦ってきた彼は、この行動を予測済みだったのだろう。

「やはり、そう来たか」

　うなずいた瞬間、上空の光球より無数の雷が降りはじめる。

　まるで突然の豪雨だった。ただし、電撃の雨だ。わずか数十秒の間に幾百、幾千の電光が死の荒野と化した大地に降りそそいでいっ

た。

　これを回避しつつ『最後の王』に迫るには、『鳳おおとり』以外に手はない！

　護堂はウルスラグナ第七の化け身しんを行使し、神しん速そくの領域に足を踏み入れた。

　おかげでこの一帯を蹂じゆう躙りんする悲運がスローモーションのごとく見て取れる。救世の雷がひっきりなしに落ちてきて、熱と衝撃と爆裂によって大地を次々と抉る。しかも、この蹂躙は数キロ四方に渡って、爆撃のように展開されている。

　雷電の雨を右に左に避よけながら、護堂は『最後の王』めざして走る。

　今まで苦痛に強い『駱駝』を使っていたおかげで、左肩の痛みはそれほどではなかった。だが、『鳳』に切りかえたせいで一歩走るごとに激痛が体をさいなむ。左腕はちぎれかかっているので、感覚はすでにない。

　それでも歯を食いしばり、『最後の王』に一撃加えようとしたのだが。

　護堂と勇者の間に立ちはだかる者が現れた。

　全身に布を巻きつけ、紅あかき仮面で顔を隠した軍神。手には長大な刀を持つ。何より護堂と同じ神速の使い手である。

　彼ないし彼女もまた電撃の雨を避けながら、神速でここに馳はせ参さんじたのである。

　この局面で二対一！　護堂が歯ぎしりをした瞬間だった。

『王よ――』

　右手一本で持っていた天叢雲剣がささやく。

　護堂は覚悟を決めた。仮面の軍神が立ちはだかる横をすり抜けて、『最後の王』のもとへ到達すべく神速を全開にする。

　そのコースに割り込んできた仮面の軍神もまた、神速であった。

　正体不明の神は草薙護堂を斬きり捨てようと、手にした大刀を振りおろす！

　草薙護堂から『離れろ！』と指示されて――。

　彼に仕つかえる少女たちは即座に言うとおりにした。ふたりのカンピオーネを連れて、リリアナが飛ひ翔しよう術じゆつを使用。騒乱の中心から三、四キロ離れた場所に降り立った。

　ちょうど死の荒野と化したエリアと、ふつうの平原の境目あたりだった。

　そこでは一千人以上のフランク族が体を休めていた。さっき魔神の火の玉から逃れるために逃亡した人々だった。

　彼らを見て、アイーシャ夫人がぱっと目を輝かせる。

　しかし、すぐに〝とある現象〟に気づいて、そちらを指さす。

「み、みなさん！　大変です、あれ！」

　夫人が指さすのは、ゲルマニアの平原を突き進む竜巻だった。

　死の荒野へと進入していく。そちらの上空には巨大な光球が顕けん現げんしており、まちがいなく救世の神刀が覚醒中だった。

　竜巻がめざすのは、白き光球の方角だった。

「疾はやきこと風の如ごとし……悪魔殺しの英雄のひとり――護堂さん⁉」

　霊視を得た祐理がおごそかにささやいてから、不意に心配そうに叫ぶ。

　それを聞くなりハッとしたのは、やはり聡そう明めいなエリカだった。

「『最後の王』の仲間だわ！　護堂とサルバトーレ卿きようの前に立ちはだかった！」

「それじゃあ二対一で、王様がすごく不利だよ！」

「リリアナさん！」

　恵那が愕がく然ぜんとし、祐理は銀髪の騎士を見つめる。

　媛ひめ巫み女この視線にうながされるまでもなく、リリアナはすでに準備していた。ついさっき草薙護堂に見せた『切り札』を召しよう喚かんしたのである。

　細長い布の包み。これをほどくと、鋼はがね色いろの武具が出てきた。

『時の旅路につく君たちへ、ひとつだけ餞せん別べつを渡しておこう』

『といっても、使い方によっては一軍を滅ぼすことさえ容易な武器だ。使用を許すのは只ただ一度だけとさせてもらおう。心して使い途みちを決め給たまえ』

『では、さらばだ。幸さいわいの運が君たちと共にあらんことを』

　別れ際に仮面の英雄が授けてくれた、とびきりの餞別。

　その姿を見て、エリカが大きく目をみはった。

「リリィ、それは!?」

「ジョン・プルートー・スミスさまの銃じゅう……時の通つう廊ろうを越えて、あの方から魔弾の権能を預かるための道具だ！」

　叫ぶと同時に、リリアナは大だい口こう径けいリボルバーの引き金をひいた。



今、時の彼方かなたでスミスが何をしているのか、リリアナは知らない。プルタルコスの館やかたで待機しているのかもしれないし、本拠地のロサンゼルスにもどっているのかもしれない。

だが、たしかに届いた。

撃げき鉄てつを起こし、引き金をひいた直後、銃に強大な神力が宿るのをリリアナは感じた。

電光が荒れ狂う死の荒野に向けた銃口。そこから蒼あお白じろい閃せん光こうが放たれ、光の竜さながらに力強く飛翔していく。

狙ねらいなどつけなかった。鋼色の魔銃にそんなものは必要ないのだ。

蒼白き閃光はリリアナが思い描いた標的——風の軍神めがけて、勝手に飛んでいく。それも通常の高速を通り越した神速で。

ジョン・プルートー・スミスの魔弾は、神速に到達することすら可能なのだ！

「天あまの叢むら雲くも、王様に伝えて！　風の神様はリリアナさんがどうにかしてくれるからって！」

遥はるか遠方にいる相棒へ、恵那が必死に呼びかけていた。

風の軍神がいきなり現れ、護堂の前に立ちはだかる。

しかし、天あまの叢むら雲くもの劍つるぎが経けい由ゆした恵那からのメッセージを聞き、仲間を信じることに決めた護堂は『鳳』の神速で走りつづけて——。

そして目撃した。突とつ如じょ飛んできた蒼白き閃光を。

それは仮面の神殺しが愛用する魔弾によく似ており、自動追尾と神速到達という通常の銃弾では持ちえない神力を宿していた。

魔弾はみごとな精密さで、仮面の軍神の脇わき腹ばらを抉る。

不死身の鋼だという軍神は無傷。しかし、衝撃で大きくふっとん

だ。

　もう障害物はない。天叢雲剣を介して、恵那が教えてくれたとおりだった。リリアナが持っていた『切り札』の正体、これだったのだ！

　仲間の助すけ太だ刀ちに感謝しつつ、ついに護堂は『最後の王』のもとに到達した。

　灰色の英雄は、膨ぼう大だいな呪力を天にかざした愛刀へ注ぎこんでいた。上空の白き光球から放たれる雷電は、ますます勢いが激しくなる。

　そこに神速で駆け込んだ護堂は、天あまの叢むら雲くもの剣つるぎで斬りかかる。

　といっても狙うのは『最後の王』の肉体ではなく、彼が天にかざす救世の神刀だった。

　ふたつの聖せい鋼こうが激突した瞬間、護堂は言こと霊だまを唱えた。

「不死の太陽よ、輝ける駿しゅん馬めを遣つかわし給たまえ！」

　ウルスラグナ第三の化身『白はく馬ば』。フランク族をさんざん苛さいなんだ英雄は皮肉にも〝民衆の敵〟となり、光の鉄てつ槌ついの標的たりうると認定されたのだ。

　このとき、護堂は天叢雲剣に『白馬』の力を吸収させた。

　黒き倭わ国こくの神刀は黄金の輝きを宿し、剣の形をした〝太陽のかけら〟となる。その絶大な威力を全て受け止めて、救世の神刀からもまばゆい光が激しくほとばしる。

　白き秘刀と黒き剣つるぎの鍔つば迫ぜり合いは十数秒にもおよんだ。

　そして、護堂の頭上から不意に白き光球が消えた。雷の豪雨もやむ。太陽のかけらをぶつけられて、救世の神刀のダメージはやはり甚じん大だいだったのだろう。

　ふたたび『最後の王』も消滅する。今の一太刀で力を使い切った

のだ。

　主あるじを失った救世の神刀は落下し、切っ先が下となり、がっと地面に突き刺さる。

　ただし、護堂の方もボロボロだった。左腕はちぎれかけている。『鳳』と『白馬』を同時使用した負担のせいで、頭が割れるように痛い。『鳳』使用にともなう体の硬直も、今回はキャンセルする形にならなかったため、もうすぐはじまる……。

　その果てに得た勝利であった。

　しかし、護堂はにらんだ。地面に突き刺さる、救世の神刀を。

　英雄の剣は白金プラチナ色の光を宿し、まばゆく輝いたまま。確信を込めて護堂は言った。

「あんた、まだ生きてるんだろう？」

『まあ、そうとも言えるな。だとしても、君の勝利に変わりはない。みごとだった』

　救世の神刀は、貴公子の涼やかな声で答える。

　やはり——。護堂はうなずいた。肉体は滅びても、この剣がある限り『最後の王』は滅びていない。きっと何度でも甦よみがえるのだろう。

「鋼の英雄は不死身のやつが多いんだっけか？　それがあんたの不死身か……」

『正解だ。救世の刃やいばが健在であるならば、僕は幾度となく地上に復活する。たとえ刃が錆さびつき、朽くち果てても、然しかるべき手順を踏めば再臨できる。今回、我がかりそめの母アルティオが執とりおこなったように——』

　これが『最後の王』の不死性の表れなのだ。護堂はつぶやいた。

「とんでもなく厄やつ介かいな力だよ、それ……」

『すまないな。だから、君ともいずれ再会するときが必ず来る。願わくば、その折には君との間に何らかの逆ぎやく縁えんが生まれる

とよいのだが』

「何でだよ？」

『怒りも憎しみもない相手と殺し合うのは……あまりに悲しいではないか』

　そう言いのこして、救世の神刀は消え失せた。

　おそらく世界のどこかへ旅立ったのだ。五世紀初頭という古代世界のどこかで眠りにつき、次なる復活の時を待つために。

　流る浪ろうの英雄の行く末に思いを馳せ、ため息をつく護堂であった。

終章

　護ご堂どうたちの決戦は終わり、世界に平穏が訪れた——わけではない。

　五世紀初頭のヨーロッパはもともと戦乱の時代なのだ。騒動と争乱の火種はそこかしこでくすぶっている。または、すでに勢いよく炎上をはじめている。

　現代のカンピオーネがこの時代にとどまり続けることは、明らかに危険だった。

「みんな、ひとりで軍を壊滅させたり、国を興おこしたりできる人たちだもんねえ」

「おまけに護堂、サルバトーレ卿きよう、アイーシャ夫人……三人とも世をはかなんで隠いん棲せいするとか、絶対にできないでしょうし」

「やはり、早々に退去していただく必要があるな」

「あ、あの、みなさん。そういうことをあまり大きな声で言われるのは……」

　決戦のあと、恵え那な・エリカ・リリアナはうなずき合ったものだ。尚なお、祐ゆ理りはひかえめに意見していたが、ことさらに誰かの弁護もしなかった。

　とはいえ、すぐに現代へ帰還できるわけではない。

　アイーシャ夫人の通つう廊ろうが開くのは、満月の夜だけなのだ。そして、『最後の王』が消えた日の夜は新月。あと半月経たた

ないと、満月にはならない。

　事情を聞いて、ある男は能天気にへらへら笑ったものだ。

「来たときと同じやりかたをすれば大丈夫だよ。僕があの通廊を暴走させれば、勝手に入り口が開いて、僕たちを吸いこんでくれるんじゃない？」

「あのときと同じ展開になるかもわからないんだから、絶対にやめろ！」

「いや、でもさ。半月も待つのは退屈だし」

「退屈でも堅実に行くべき場面なんだよっ！」

　護堂はもちろん即座に却きやつ下かして、愚ぐ直ちよくに『待つ』路線を選んだ。

　もっとも、その間もやるべきことはあった。コロニア・アグリッピナに帰り、ドニとアイーシャ夫人を大族長とするフランク族連合の解体に取りかかったのだ。

　これが意外と面倒だった。

　アイーシャ夫人が魅了の権けん能のうを使えば、かんたんに片づくと護堂は考えたのだが。

「わ、わたくし、一度は引退を表明しましたが、みなさんの熱意に突き動かされて、帰って参りました！」

　と、復帰宣言する女性や、退屈しのぎに『サルバトーレ・ドニ二世』として新族長に返り咲こうとした不ふ埒らち者ものが元げん凶きようだった。

　それらの事件を収しゆう拾しゆうしている間に、草薙護堂を街の実力者として慕したう者が増えた。

　彼らは護堂を事実上のコロニア・アグリッピナの支配者と見なすようになり、屋敷につとめる使用人（女性）がなぜか倍増。近隣の有力者は美しい女性をともなって、ひんぱんに『ご機き嫌げんうかがい』しに来るなど、奇妙な事態になったりもした。

その間、エリカ・祐理・リリアナ・恵那との間にささやかな揉めごとも起きたのだが、そういった日々をどうにかやりすごし――。

いつのまにか、満月の夜が近づいていた。

通廊がある場所は、なつかしいウルディンの森。

その日の夜、護堂たちが『旅立つ』ことはすでにフン族の神殺しに伝えてある。

リリアナさえいれば、旅に時間はかからない。当日の昼間、現代からの旅行者全員で森の砦とりでを訪ねると、豪放なウルディンは宴うたげの準備をして、待っていてくれた。

「まあ、あちこちできなくさい動きがあるんでな。下流の街をどうするかは今しばらく考えてみるつもりだ」

水を飲む護堂相手に酒杯を重ねながら、ウルディンは言った。

フン族の魔王が本拠地とする森もライン河か畔はんにあり、アウグスタ・ラウリカやコロニア・アグリッピナなど多くのローマ植民市がその下流に位置している。

ウルディンはまぎれもなく、ライン川流域における最強の実力者であった。

「兄弟がこの地を去るのであれば仕方ない。いっそ同族連中のところを渡り歩いて、オレの名みよう代だいにふさわしい男を捜すのもいいな。見どころのある子供を育てるのもいいかもしれん」

もしかしたら――話を聞きながら護堂は想像する。

そうして目をかけた人物がいずれ『フン族の大王アッティラ』となり、魔王ウルディンの庇ひ護ごを受けながら、歴史に名を残すのかもしれないと。

「そうだ。妙な刀を持つ軍神と兄弟の戦い、見ていたぞ」

「やっぱりか」

　あの戦闘の折、ウルディンはコロニア・アグリッピナ付近に来ていたという。

　ならば、足ならぬ竜の翼をのばして、フランク族や『全ての神殺しを殲せん滅めつする英雄』を偵てい察さつしていてもおかしくはない。護堂はうなずいた。

「たしかに得え体たいの知れない強さではあったな。ただ……ふれこみの割にあっさりと退場したのが奇妙でもあった」

「あいつは刀だけになっても、また甦よみがえるらしいんだよ」

　いずれ『最後の王』と戦うのは、この時代の神殺したち。草くさ薙なぎ護堂ではない。

　護堂はウルディンへの餞せん別べつ代わりに忠告した。

「だから、あんたもそのうちヤツと遭あうかもしれない」

「承知した。そのときにはよく気をつけることにしよう。いっしょにあの軍神を見たルスカが妙な託たく宣せんをしていたしな」

　ウルディンの妻ルスカはきわめて強力な霊視力者。

　彼女の忠告は祐理の予言と同じく、無視するべきではないはずだった。

「ルスカが言っていたぞ。あの軍神は流る浪ろうを重ねるうちに強さを増す、と。あれは魔王殺しの旅を続ける英雄なのだとな」

　魔王を倒すために旅立ち、流浪の間に強さを増して、使命を果たす。

　まるでロールプレイングゲームのような話だと、護堂は思った。そして考え直す。これはたぶん逆なのだろう。そうした『伝説の勇者譚たん』の原型となった神話こそが、『最後の王』の物語ではないのか――。

　ふと、空を見る。さっきまで紅あかい夕焼け空だった。

　しかし、すでに陽ひは暮れつつあり、だいぶ暗くなっている。

東の空から昇ってくるのは、冴さえ冴ざえとした白い満月だ。旅立ちの時が近い。それにしても、いつものんびりと旅を楽しめないことが悩みの種だったというのに。

「今回は二か月近くもこっちにいたもんなあ」

しみじみと護堂はつぶやいた。

長すぎる夏休みを一足先に経験したかのような、不思議な気分だった。

そして、時は現代である。

標高一九一二メートルの頂いただきに少女はたたずんでいた。

古代ギリシアを偲しのばせる白い衣ころもに身をつつむ。肩口のあたりまでのびる銀髪は、月の滴しずくを溶かしたかのように淡い輝きを放つ。

幼いながらも美び麗れいな容よう貌ぼうをいろどるのは、闇やみ色いろの瞳ひとみ——。

山頂は今、夜であった。漆しつ黒こくの夜闇にふさわしい静せい謐ひつな美を、少女はそなえていた。

ただし、山頂周辺を吹く風はすさまじいほどに騒々しい。南方の地中海へ駆けおりる強風が轟ごう々ごうたる風鳴りを起こすからだ。

人間たちがプロヴァンスと呼ぶ地にそびえる孤こ峰ほう、モン・ヴァントゥの頂である。

この土地では地中海に向かって、冷たい山やま颪おろしが吹く。しかも、季節は冬。ことさらに寒々しい風が山頂付近を駆け抜けていく。

尚、モン・ヴァントゥの山名には『風』の意味がある……。

しかし、すさまじき冷風も少女の静謐を乱すことはできない。白き衣も銀の髪も風になびくことはなく、彼女は雪で真っ白な頂に悠

ゆう然ぜんとたたずんでいた。

　無論、只ただ人びとの登山家などではなく、少女は超自然の存在であった。

「来たか、風の王よ」

　にやりと笑い、少女はつぶやく。

　山上にまたたく星の間より、一陣の旋せん風ぷうが駆けおりてきたからだ。

　星々の狭間はざまより来きたる風は、彼女の前で姿を変える。全身に布を巻きつけ、紅あかき仮面で顔を隠した軍神へと変化してみせた。

「ふふ。先代の魔女王とやらが槍やりの軍神を騎士としたのであれば、妾わらわにも同等の介かい添ぞえが必要であろう。風の王よ、我わが招しよう聘へいによく応こたえてくれた」

　少女が仕つかえるべきは英雄『最後の王』。

　風の王はその股こ肱こうというべき軍神である。従属神などではない。かつてのランスロット・デュ・ラックと同様、一いつ箇この神として彼に仕える戦友だった。武勇においてもあの白き軍神に勝るとも劣らない。最上級の戦士にして英雄なのだ。

　一ひと月つきかけて風の王招聘の儀を成功させた少女は、女王の威い厳げんと共に微笑する。

「ならば、次に求めるべきは怠たい惰だなる英雄王か……」

　東方の空を見つめながら、少女はつぶやいた。

「あるいは、まだ見ぬ逆ぎやく縁えんの相手か。ふふふ、悩みどころではあるな」

　少女は知らない。この数時間後、古代ガリアより三人の神殺しが帰還することを。そのなかに草薙護堂なる少年がいることを。

　彼女がまぶたの裏に思い描く逆縁の相手は、彼と瓜うり二つであることを——。

やがて来きたる終末のはじまり。

その時はすこしずつ近づきつつあった。


あとがき!!
15巻 お買い上げいただき
ありがとうございます!
しろ
担当編集のM様
長らくお疲れ様でした!
特別出演：平たい胸族の皆さん

著者紹介

丈月　城（たけづき　じょう）

埼玉県出身。

２００８年スーパーダッシュ文庫「カンピオーネ！」にてデビュー。

同作は好評を博し、シリーズ化され代表作となっている。

シコルスキー

ライトノベルの挿絵を中心に活動中のイラストレーター。

集英社ｅスーパーダッシュ文庫

カンピオーネ！

XV　女神の息子

著者　丈月　城

２０１３年11月30日発行

この電子書籍は、集英社スーパーダッシュ文庫「カンピオーネ！

XV　女神の息子」

２０１３年５月29日発行の第１刷を底本としています。

発行者　鈴木晴彦

発行所　株式会社　集英社

東京都千代田区一ツ橋２丁目５番10号

〒１０１－８０５０

［電話］

０３－３２３０－６０８０（読者係）

制作所　株式会社デジタルディレクターズ